
IS インフィニット・ストラトス 輝きの翼 ~ 科学と魔術が交差する刻 ~

虚空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 輝きの翼 科学と魔術
が交差する刻

【Nコード】

N33780

【作者名】

虚空

【あらすじ】

戦いと血の記憶が脳裏を掠め、今の俺に苦しみを与える続ける……

近未来。

女性にしか使えない飛行パワードスーツ『インフィニット・ストラトス』。

その存在は『別世界』でも知られていた。

『波紋』をもたらすものして……

これは、ISの世界に送り込まれた血の記憶に惑う青年とISの世界にて、特異例として見いだされた織村一夏が織り成す物語。

IS学園での出会いは……彼らに何をもたらす？

苦難であるか、優しき居場所か……それは、何者にも知ること
はできない

感想、意見、随時受けたくわります。

P / 1話 始まりの時(前書き)

虚空「最新作！！飛び立つぜえええ！！」

作中、スタードライバーで流れたモノクロームを聴きながら見たら面白いかもよ？

P / 1話 始まりの時

???

計器や天井から伸びるケーブルに繋がれた『白銀のモノ』がその空間にあった。

モノと言うよりもそれには、腕もあり、足もある。そして、人が乗り込める部分がある。

鎧のようなものと言われても領けないかもしれないがとにかく似たものが『それ』は其処にあった。

俺は、これをよく知っている。

これは、この世界で現主力『兵器』とされている飛行パワードスーツ、『IS』。
正式名称『インフィニット・ストラトス』、宇宙空間での活動を想定されたスーツだ。

実際には、『制作者』の意図とは別方向への開発ベクトルを辿っているわけだが……

このISは、特殊な特性……と言うよりも致命的な欠陥と言ってもいい特性を持ち合わせている。

それは……『女性』にしか反応しない事、つまりは『女性』にしか扱えないものである。

そのISの登場により、世界の軍事、社会基盤のバランスを根底から崩してしまう。

そして今では、各国は率先して女性優遇制度を儲けるようになっていく。

つまり、『女性≠偉い』の構図の完成だ。

女性にしか扱えないと言った時点で、俺と同期入隊の同僚がこの『任務』に着く俺をうらやましいがった事を今でも覚えている。

(一部では軽蔑されていた事もあった)

が………実際は、どうでもいい事だ。

女性であっても強い人は強く、男性は、違った一面、………例えば誰かを思う事での強さを見せればいい。

そう思う理由は、俺の両親の親友が特にそれに当たっていたからだ。

『……最終起動試験に移るぞ。いいか、カケル?』

不意に物思いに耽る俺、櫻井翔は耳につけたインカムから流れる声で回想の入り交じった中から現実へと引き戻された。

俺は、すぐにそれに応じる。

「ああ、聞こえているよ。『父さん』」

『よし、……緊張して何も喋れないかと思ったぞ』

そう返してくる人物は、白銀のモノの『開発者』であり、俺と共に二年前からこの世界に『潜入』した人でもあり、カケルにとっての父親である人なのである。

「緊張……って、父さん、俺に何度も武装トライアル用の訓練機に乗せてたくせに……」

『一応、訓練も含めてだ。だが、『今回』は違うだろ？』

「……そりゃ、この機体が俺専用機になるのはわかるけどさ。別の意味で考えれば、国の方で『男』である俺の搭乗データ取りもしたいんだろ？」

そう、カケルは『男』でISが扱える。

世界では、すでに1人の男がISを扱えると言っことでえらい大騒ぎとなってるが探せばまだまだ、この世界で『要素』を持つ男がいるんじゃないかとカケルは思っている。

なぜ動かせるのか、詳しくはまだ解析できていない部分もあるのだが、カケル達の『世界』での解析によると『ある要素』がISを動かせる切っ掛けである事が解っている。

ただ、今まで特にセッティングを施さなくとも自分の機体として扱える訓練機を扱ってきたため、実際に世に出す試作機（白銀のモノ）であっても自分だけの専用機を扱うのは初めてであったため、カケ

ルは、強がりと言ったものの少しばかり力が入っていた。

この結果次第で……すべてが変わる。

首回りまであるウェットスーツのような服、対弾性がすぐれたIS専用スーツ、ISスーツに身を包んでいる俺は、自分を向かい入れる『白銀のモノ』に手を触れた。

すると意識の中に直接、情報が流れ込んでくる。

訓練機を最初に扱った時のように、様々なこのISに関する大量の情報に呑まれなかったものの特性、活動可能時間、センサー精度、出力限界、e t c ISに関する情報が一気に流れ込む。それを行いながらISは、背中をISに……いや座る感じのように身を預けた俺を向かい入れるために『動き出す』。

ケーブルが外れ、動き出したISは、一部を肌の上に直接、また別の部分をスーツの上に、装甲を俺の体に合わせて閉じていく。

少しして、一体感がこの身に生まれる。

視界も解像度を上げたかのようにクリアな感覚となり、ISの特
殊なセンサー、『ハイパーセンサー』が360°の視界を俺に伝えてくる。

網膜上に映る各種パラメーター値もあらかじめ計算された予想数値

以内に収まっている。

『どうだ？』

「各数値、駆動系共に問題なし……武装展開」

右手に実体剣、左手にレーザーライフルの形をイメージすると粒子が集まり、形となって両手に重みを感じさせる。

ISは、武装をデータとして変換できるため、このようにできるのだ。

「展開を確認、最適化完了まで400秒」
フォーマット

『よし、テストフィールドに出てみる。その後、ハイパーセンサー上に仮想ターゲットを出す』

「了解」

少し移動して、テストフィールドに出るため、射出されるカタパルトレーンに接続される。

「カタパルト接続」

『了解、射出タイミングはそっちに譲渡する。ところで、『名前』はどうする？』

「……名前？」

父さんからの質問に疑問で返していた。

『ああ、一応、そいつには形式JQE35X-01ってってるが、生憎、愛称ニックネームが決まっていな……扱うのはお前だ。お前が

決めてくれ』

視界の端に小さく映るこの機体名が未だ形式である事に俺は、ようやく気づいた。

その言葉に俺は、少し考えて……決めた。

夜空を流れ落ちる流れ星が、もとは星屑のような大きさのものである。

そんな星が今輝く時を迎えるのであるなら……

「スターダスト」

『スターダストか、確かにその機体にはピッタリだな……了解。登録名を『星屑、スターダスト』へ変更』

スターダスト

機体名が形式からStar Dustへと変更されたのをカケルは確認する。

『そんなじゃ、改めて……』スターダスト』、射出を承認』

「了解、櫻井翔。『スターダスト』、出る!!」

アクティブスラスタ

一対の大型可変推進機から吐き出されるエネルギーの放出は、宇宙を駆ける彗星から流れ出る『星屑』のように輝く。

カタパルトから射出されたスターダストは、太陽の光により輝きを増す。

彼だけの物語がここから始まる。

誰の手にもゆだねることができない彼の手で……

P / 1 話 始まりの時（後書き）

虚空「行くぜ!!」

感想、意見、お待ちしています!!

第2話 転入、騒ぎの予感？（前書き）

第二話目に突入です。

トタバタのギャクです（笑）

第2話 転入、騒ぎの予感？

日本

IS学園

ここは、国が管理運営している特殊国立高等学校『IS学園』。

ISの操縦者育成を目的とした教育機関である。

ISの開発下かいはつもとが日本の、ある女性によって開発されたものであるためこのような学園が日本に作られた。

正確に言えば『コア』と呼ばれるISの中枢パーツがISの開発に直結している。

その『コア』は、他の誰かが構造解析できないよう完全なブラックボックス化が成されており、その女性にしか作れないのだ。

そして、その女性は、ある時期を境に『コア』の製作を拒否しているため、新造されたものは今現在、1つも無い。

現在あるコアは、467基。

467基を各国、企業、機関ではそれぞれ割り振られたコアを使用してISの研究、開発、訓練へと回している。

その『コア』を製作したのが『日本』であった事、さらには、ISを世に知らしめることに大きく関与した『白騎士事件』において現行兵器を凌駕する性能を見せ付けたため、世界に混乱を招いてしま

った。

それらの事により、このような教育機関が生まれた。

なお、この学校には、ISを扱う各国の国籍を持つ者に門戸を開き、日本での生活を保証する、当機関で得られた技術等は公開する義務がある。

つまりは、『ISの操縦者育成の場と公の技術公開の場』を日本が責任なんだから作れと各国に求められた（と言うより、押しつけられた）。

ただ、その高校はISが女性にしか扱えない事から完全な『女子校』である。

が、1人だけ例外がいた。

世界初のISを扱える『男性』、おりむらいちか織斑一夏がそれにあたる。

Side 一夏

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機であるがISを使用しての授業となる。各人気を引き締めるように……」

鬼？のクラス担任であり、俺の姉であり、元日本代表IS操縦者であった黒髪のスーツ姿の女性、織斑千冬の言葉を俺達は黙って聞く。

正確には、俺とクラスの『彼女ら』がだ。

そうしなければ出席簿が殺人兵器？に切り変わり襲ってくるからだ。

「……………まあ下着で構わんだろう」

いや構うだろ！！

ISに搭乗時に着るISスーツの話へと移った時、千冬姉が言った言葉に俺だけではなく絶対多くの女子は心の中で突っ込んだよ、その発言。

第一、男の俺がいるんだし、下着姿は不味いだろ！！

と俺が心の中で叫んぶ。

ようやく学園の環境に慣れてきたものの、女子だけの環境に男が1人だけ……………どんなギャルゲーの世界だよと思う事が時折ある。

そんな事を頭の片隅で考えているうちに話は進み……………

「では、山田先生、HRを」

「は、はい」

連絡事項を言い終えた千冬姉は、副担任である黄緑色の髪眼鏡をかけた女性、山田摩耶先生にバトンタッチする。

ワタワタと動くその姿は、まるで子犬だ。

だが……………彼女から発せられた言葉は、珍しくクラスを騒然とさせた。

「え、えとですね。今日は転校生を3名紹介します」

・

・

・

・

「えっ!!」

「「エエエッ!!」」

自分達の情報網を掻い潜っていきなり転校生が現れたことにいきり立つクラス。

「じゃあ、入ってきてください」

山田先生の言葉で引き戸が開く。

（てか、いきなり3人かよ。普通分散させるのがすじだ……）

ろつと心の中で俺が思った時である。

「失礼します」

「失礼する」

「……」

クラスに入ってきた3人を見て、クラスのざわめきと思考が停止した。

なぜなら……

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不馴れなことが多いかもしれませんが、皆さんよろしくお願ひします」

1人目の転校生、シャルルがにやかな顔でそう告げて一礼する。

「櫻井翔。聞いても見ての通り、日本人だ。よろしく頼む」

2人目の転校生、櫻井翔があまり表情を見せないまま一礼する。

俺達は、その2人……ここに来た以上ISを使えるであろう『男性』達の挨拶に呆気にとられていた。

S i d e o u t

S i d e 翔

……ここも比率が悪いところなるか

俺は、そう思いながらクラスの反応を見て、少し呆れていた。

女性にしか扱えないISが使える男の存在は、世界を激震させたものの、こう言ったようなまだ未熟な女の子だけの場所であるなら驚きだけとなってしまふのだろう。

翔自身がこの学園に入学した理由は、下心ではなく『上』から命令された『任務』。

しかも元々、翔自身、こっちに来る以前に女性比率が高い職場にもいたため今さら女性の視線に動じないだけの気力も持ち合わせている。

それにしても

俺は、俺と共に転入してきたシャルルともう1人、左眼にどこぞの鬼教官よろしく眼帯を付けた銀髪の女子生徒をチラリと横目で見る。

シャルルは、中性的な男性・・・だと思うが・・・ちょっとした仕事草が、何故かぎこちなく何かがありありそうだ。

一方、廊下で待ってる間でもシャルルのように名を告げず、ラフな会話もなく、ただ黙っていた最後の転校生は、俺自身と同じような空気を纏っている。

「おっ、『男』？」

ようやく再起動を果たしたクラスの女子の誰かが確認するようにそう呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいるときいて転入を・・・

」

シャルルが人懐っこそうな顔で答えた。

礼儀正しい立ち振舞いと中性的に整った顔立ち。

体は男性としては華奢に思えるくらいスマートだ。

髪は金髪で首の後ろで丁寧に束ねている。

印象は、『貴公子』といった感じで嫌みのない笑顔が眩しい……

・自分の母親のように……

……ああ、やったな

次に来るのが何であるかを俺は、すでに予想していた。

何故なら、母さんが男性を振り向かせるなら男で、こんなにも女性比率が高いのであれば……

「きゃ……」

「はい？」

3、2、1……はい

「きゃああああ……!!!」

耳を塞ぐ暇もなく、ソニックブームならぬ歓喜の嵐が巻き起こる。

「男子!しかも2人!!!」

「金髪で美形!!!母性本能がくすぐられる!!!」

「櫻井くんはワイルドな感じがするよ！……！」

「どつちかに落とされたいや！……！」

……俺に来るなよ

これがHR中だったからまだしも……休み時間だったら全学年の女子が一気に騒ぎだして校舎が崩壊するんじゃないか？

と第一波の余韻が耳に残る俺は、思う。

「騒ぐな、静かにしてろ」

クラス担任の織斑千冬先生（以下、千冬先生）は面倒くさそうにぼやいている。

教員の皆さんも大変だな

俺は、つくづく思う。

「み、皆さん静かに……！まだ自己紹介が終わってませんから……！」

副担任の山田先生がようやく最後の1人にへと自己紹介を回す。

とは言え、当の本人は、口も開かずに腕組みしたまま、クラスの女子達を下らなそうに見ている。

とここで千冬先生からの指示が飛ぶ。

「……挨拶を、ラウラ」

「……………はい、『教官』」

上官に呼ばれたように佇まいを上官と接するような形に変え、千冬先生に応じる最後の転校生、ラウラ。

やっぱり、軍関連か……………

クラスの一同が唾然とする中で1人納得する俺。

「ここではそう呼ぶな、お前もここでは一般生徒だろう」

「……………了解しました」

ラウラは、そう答えると自己紹介へと移る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その一言だけで、後は馴れ合うつもりもないらしく口を閉じた。

……………ヤレヤレ

内心、呆れ果ててしまう。

元が現役かは知らないが、そんなお堅いと長く続かないだろうにと俺は、思ってしまう。

「それだけ……………」

「それだけだ」

山田先生がラウラに問いかけるが無慈悲な返答が戻り、泣き出しそうになっている。

可愛そう………!?

俺は、飛び出すように軽く前にステップを踏む。

原因は、ラウラの行動にあった。

S i d e o u t

S i d e 一 夏

千冬姉を教官って呼んでたからドイツの軍人さんか何かか？

千冬姉、ああ見えても教導官として色んな国に行ってた時期があったからな………って、こらこら山田先生をいじめるんじゃないの、見る今にも泣き出しそうな顔をしてるじゃないか

俺がそう思ったのがいけなかったのか、ラウラと目があった。

と目があった途端………

「！ 貴様が」

つつつかと俺の方にやって来て、腕を横に………

ガシッ！

「………そのまま」

「・・・・・・・・!？」

「へっ？」

ラウラが動かした腕を掴み上げた相手を睨み付ける。

その視線に動じずに教室に入ってきてから表情を一切変えない転入生の櫻井翔が、いつの間にか俺のすぐ側まで来ていて、片手で腕を押さえ込んでいた。

「貴様、離せ」

「離さないさ。離れたら君、こいつ、織斑一夏を『殴る』んだろ？」

もしかして・・・・・・・・俺、平手打ちを喰らいそうになってたの？

櫻井の言葉にようやく合点がいく俺・・・・・・・・へっ、平手打ちを？

「貴様には関係ない事だ」

「ああ、関係ない。『関係ない』が、いきなり本人に説明もないまま受けさせるのも酷だと思ったからな・・・・・・・・だから止めた」

あのちよっと？

殴られそうになった当の俺は、置き去りとされている。

「どうする？ このまま俺と第2ラウンドに突入するか？」

「クッ！」

冷たい目で挑発ともとれる言葉にラウラは、翔の腕を振り払い、改めて俺を睨み付けて言葉を吐き捨てる。

「私は、認めない。貴様が『あの人』の弟であるなど、認めるものか」

はい!?

俺は、全く話が見えてこなかった。

ほらほらクラスのみんながこっちに注目してるじゃないか……
って、今こいつ!!

突然の言いくさに俺は、怒りを覚えた。

「なんだといきなり!!」

「ふん……」

俺の怒鳴り声を相手にせず空いている席へと着くラウラ。

うわ、なんだよこいつ。

無視された。無視されたぜ?

コミュニケーションの文化がない世界から来たんじゃないか?

俺がそう思っていると目の前の櫻井にいきなり肩を掴まれ、ちよつと身を屈め口を耳元に持ってきた。

おお、そう言えば、こいつには礼を言わなきゃ……

「……気を付けるよ。織斑、あの娘、どんな手を使ってでもお前を『殺したい』って目をしていた」

……へっ?

「……………次も上手くいくとは限らない。気を抜くな」

そう警告じみた言葉を残すと彼も席についた。

優しいんだか、優しくないんだかわかんねえ警告だな……

同時に、そんな軍人ポイのがIS学園に来るとなったら腕前の差が明らかである。

冷静に考えが俺の怒りを鎮め、一気に怒りが落ち着いていくのがわかったが、まだまだ腑に落ちずにだっている。

だが……………すぐにそう言ってもいられなくなった。

「あー、ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合するように！！今日はISでの模擬戦闘を行う。解散！！」

千冬姉が行動を促したからだ。

なんせ、このままクラスにいと女子と着替える羽目になる。

……………今日は確か、第2アリーナの更衣室が空いてたよな

俺が駆け出そうとすると……………

「織斑、デユノアと櫻井の面倒を見てやれ」

おっとそうだった。

俺は、2人に呼び掛けた。

Side out

Side 翔

「お前ら、行くぞ」

織斑からの指示を受けて俺とシャルルは、席から立ち上がった。

「了解、先導してくれ織斑」

「一夏でいいさ。それよりも……」

「OKだ」

「君が織斑君？初めまして僕は……」

挨拶の前に俺は、シャルルの手を取って先に教室を出た一夏の後に続く。

「あつ、え？」

「理解が早くて助かる。櫻井……」

「翔だ。そっちで呼んでくれ」

「わかった」

「あの、えつと……一体？」

シャルルが理解できないまま俺に引つ張られながら後に続く。

「教室では、女子が着替えなんだ。で、俺ら男子は、アリーナ更衣室で着替え。これから実習のたんびにこの移動だ。……慣れてくれ」

最後の方は、何かトラウマがありそうな言い方だな一夏……
その姿を見た俺は、同じようなトラウマなら味わったことがあるよ
うな気がしていた。

一夏の速度に合わせるため俺達は、今、『走っている』。

「わかった」

「う、うん……」

俺はすぐに返事を返すが、シャルルが落ち着かなそうな返事を返した。

シャルル……まさか

……俺は、ある直感が働い……

「ああっ！！転校生発見！！」

「織斑君も一緒よ！！」

と考える暇がないか

「『敵集団』と遭遇。隊長、ここは突破でありますか？」

「ああ！！ってか、悪のりするだろうが！！」

一階のへ降りる階段に差し掛かったところで、後ろから敵集団……
……と言つよりHRが終わった各学年各クラスの女子が情報収集の
ために俺達に追撃を仕掛けてきた。

シャルレを混ぜた俺の言葉に一夏は、噛みつく。

・・・捕まったら終わりだな

捕まったら質問攻めで揉みくちやとなり、講義に遅刻、さらには今朝の教室の具合からあの元日本代表の『先生』から・・・キツイお仕置きを受ける事が予想される。

お仕置きを回避するためにも、捕まるわけにはいかない。

「織斑君の黒髪もいいけど、金髪って言うのもいいわね!!」

「あら、あの黒髪の男の子、綺麗なルビーね!!」

前からも数人、後ろからは大多数。

キヤーキヤーと黄色い声をあげながらこちらを追いかけてくる。

「な、なに?なんでみんなさわいで?」

シャルルがまだ状況を飲み込めないのか、シャルルは困惑顔を浮かべている。

「そりゃ・・・」

「男子が俺達だけだからだ」

「?」

俺の言葉にシャルルは不思議そうな顔をした。

やっぱりかよ・・・確認1

俺は、自分の直感を呪いたくなった。

「いや、普通に珍しいってか、男でIS、動かせんのもって今のところ俺たちだけなんだろう？」

「あつ！ああ、うん」

ようやく自分の現状に気づくシャルル。

こんなところでいきなりボロだすなど『たぶん、俺と同じ立場』のシャルルに言いたくなるのを我慢して俺は、シャルルの手を離さずに走り続ける。

「ま、何にしてもよろしくな。俺は、織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「ああ、わかった。デュノアは何て呼べばいい？」

「うん。僕のことシャルルでいいよ。一夏、翔」

「わかった」

「了解だ。よろしく、シャルル」

「よろしく一夏、翔」

自己紹介を改めてしつつも俺達は、なんとか包囲網を突破し、校舎の外へと出ていた。

Side Out

Side 一夏

第2アリーナ 更衣室

ここは、IS同士が実際に戦うフィールドと言ってもところだが、今日、一夏達が用があるのは更衣室だけだ。

「わあっ!?!」

「?」

「・・・・・・・・」

なんだ?

俺は、とにかく急いでいたので制服の上を脱ぎ、投げ捨てると一呼吸でTシャツも脱ぎ捨てた時である。

シャルルが騒いだ。

翔はその様子を少しだけ目を向けるが、すぐに背を向けて俺達から離れたところで着替えを進めている。

「荷物でも忘れたのか? って、なんで着替ええないんだ? 早く着替えないと遅れるぞ・・・・・・・・遅れたらそりゃ恐ろしいことに・・・・・・・・」

千冬姉なら殺りかねない。

俺は、少しだけ身を震わせる。

「う、うん。着替えるよ? でもその・・・・・・・・あっち向いてて・・・・・・・・ね?」

「???? まあ、別にジロジロ見る気はって・・・・・・・・シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない! 別に見てないよ!?!」

顔を床に向けて両手を突き出しながら必死に否定するシャルル。

変な奴だな？

Side Out

Side 翔

「とにかく、急げよ。初日から遅刻とかシャレにならない……
てっか、あの人はシャレにしてくれないぞ」

一夏が身震いしながらそう口にする。

それを横目で見つつも俺は、着なれたISスーツを着終えると手首
回りの感覚を確認しつつも左手の白銀のグローブに手をやる。

よしと………やるか『スターダスト』

待機形態の『スターダスト』を軽く一回だけ叩く。

俺が持ったスターダストは、専用機と呼ばれるISの中でも試作
特別な機体として扱われ、使用していないときにはこのようにアク
セサリとしての形態で待機形態をとるのだ。

物言わぬ『もうひとつ』の相棒だが、こうやる事でこいつと繋がりが
持てるんじゃないかと起動前にはそうしている。

と誰かの視線を感じる。

その振り返った先には……

「シャルル？」

「な、何かな!？」

シャルルは、こっちにちよつと向けていた顔を慌てて壁にやって俺と同じくウェットスーツタイプのISスーツのジッパーをあげた。

慌てたら変に疑われる

俺は、そんなシャルルを見て少しだけ呆れてしまう。

まあ、今日は日が悪かったと思うしかないだろ

同時にシャルルに降りかかった『ある種の不運』にやや同情の意を覚えた。

「うわ、お前ら着替えるの早え。なんかコツでもあんのか？」

ISスーツを着るために裸となってISスーツを腰まで通したところで止まっている一夏がシャルルを見てそう言った。

「い、いや、別に……って一夏まだ着てないの？」

そんな一夏を見たシャルルが口を開いた。

その返答が……

「これ、着るときに裸ってというのがなんか着づらいんだよなあ。引つかかって」

「ひ、引つかかって？」

「おっ」

「……………」

一夏の言葉にシャルルが顔を赤くした。

……………確認2

+このアホが!!

さすがにこれ以上、シャルルを見ているに忍びなかったので……

・俺は、お下劣な発言をした一夏に強襲のフリッカーを喰らわす。

ビシュー!!

「イツ!いきなりにする!!」

後頭部を強打された一夏は、後頭部を押さえる。

「一夏、その辺にしとけ。下品な言葉を良いとこ育ちに教えたらろくなことにならないだろ」

「ハッ?」

「……………行こうぜ、シャルル」

「えっ、あっ、うん」

俺は、シャルルの手を取って更衣室を後にする。

「あっ、おい待てよ!!」

更衣室から完全に置いてきぼりにされた一夏の声が聞こえるが無視して、更衣室の外へと出てすぐ側のベンチに座った。

S i d e o u t

S i d e シヤルル

「あつ、あのさ。翔？」

「うん？」

僕は、隣で足を組ながら一夏が更衣室から出てくるのを待つ翔に話しかけた。

「どうして、僕を？」

「ああ、その件か。慣れてないと思ったからだ」

「慣れてないって……やっぱり……」

「……あんな下品な言葉は聞かせたくない」

「えっ……？」

僕の言葉を不自然に遮るように翔は口を開いた。

「俺だつて、同じ男であんな事は、言いたかないさ……何よ
り『聞き耳』たてられているかもしれないのに口にしたらそれこそ
終わりだ」

僕の事に気づいていない？

僕は、翔の表情を伺うが……

あまり露骨に表情を表さずに黙って前だけ見ている。

と……

「まあ、聞き耳をたててるなら……俺は、探しに行かずに『出てくる』まで待っているつもりだ」
僕からの視線に気が付いたのか翔は、口許を緩めた優しい笑みで僕を見てきた。

表情をあまり変えない翔がなぜ笑みを浮かべているのだと気付いた理由は、彼からの眼差しが優しいものとなっているからだ。

えっ、翔、もしかして……

「かけ……」

その言葉に僕は、驚きを隠さないまま翔に問いかけようとするが・

「ふう、とお前ら？」

「ようやく来たか……じゃあ、行くか？」

「たく、結局は、俺待ちだったのかよ……って時間がヤベエ

!!急ぐぞ!!」

「あっ、まって!」

問いかける前に一夏達は、駆け出した。

鬼からのお仕置きを受けないために……

第2話 転入、騒ぎの予感? (後書き)

一夏のハーレムは抹殺だオー!!

一夏「ちよつと待て!!いきなりなんだよその全力で叩きのめしますよフラグは!?!」

翔「仕方がないでしょうに、何せ作者、ハーレムが嫌いだからな。まあ、この作品では三角か、せいぜい三人までだな……ちなみに俺は、篝さんのサポーターか」

一夏「(。口。;?つてだったら何でこの作品を選んだんだよ!!」
翔「冬のアニメ化で色づいているからな。それも含めて色々やりたみたいだ」

一夏「色々つてなんだよ!?!」

翔「さあな、と感想と意見を待つてるよ!?!」

一夏「俺は無視か!?!」

第3話初陣のスターダスト（前書き）

第3話目です。

翔のIS スターダストが真の姿を現します。

第3話初陣のスターダスト

IS学園

グラウンド

Side 一夏

結局、俺達は、進路上に新たに出現した人並みに遭遇し、遅れてしまつて……………

千冬姉から凶器と化した出席簿で殴られた。

……………ご指導ありがとうございます

頭部に強烈な痛みを抱えながら俺達は1組整列の一番端に加わつた。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

と隣の女子何の因果かわからないが金髪の女子、イギリス代表候補のセシリア・オルコットであった。

ちなみに代表候補とは、千冬姉が日本代表だったように国家代表IS操縦者、その候補生として選出されるエリート的事を指す。

主に試作機の試験運用の任に就くことが多い立場でもある。

そう言った事から代表候補には、専用機が与えられている場合が多い。

専用機とはIS自体が国家、または企業によって管理されるものであるため、それらに所属する人間にしか与えられない、特別なISの事を指す。

また、代表候補以外でも国家や企業にスカウトされ、それらの運用試験を任される場合もある。

セシリアとは、4月にやったクラス代表決定戦以降やたらと俺を構ってくる。

……俺が何かしたのか？

俺は、その事をちらりと思い出しては頭の中で疑問として考える。

「スーツを着るだけでどうして時間がかかるのかしら？」

セシリアが呆れた様子で俺を見た。

ちなみにISスーツは、本来女性専用で、女性用では見た目は新体操等によく見るレオタードに近い。

俺達のが着ているウェットスーツタイプのように一切肌の露出がないわけではなく逆に部分的に肌が露出している。

動きやすさを考慮されての事らしい。

実際のところ、ISの防御機構、シールドバリアーはほぼオートで働くものであり、しかも乗員には一切ダメージを与えないと言った優れ物であるため、スーツ面積が少なくとも問題ないらしい。

……言っておくが男性の目の保養（中学の男子が釘付けになったのは言わなくともわかるだろう）と言ってしまえばある種の保養となるが実際に口すれば、色んな意味で確実な『死』が待っているからご注意……

「道が込んでいたんだよ」

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

そして、一瞬の間を置くと……

「まったく、一夏さんは、さぞかし女性の方との縁が多いようですから、今回は未遂に終わりましたけど、はたかれるんですのよ?」

ぐは、嫌みを言われた!!

嫌味を言われた事から気落ちするが、冷静な部分で改めて教室での事を考えるとムカムカが再沸騰してくる。

「また、アンタなんかやらかしたの?」

と後ろから声がかけられる。

俺は、振り返らずとも喋っている相手がわかる。

ああ、はいはい。

後ろは二組の列だからな……って言うか鈴か

後ろにいる二組、その最前列に髪をツインテールにした俺のセカンド幼馴染み、ファン・リンイン鳳鈴音がいた。

彼女とは、中2の終わりまで一緒の中学であった。

それが帰国して1年近く会わない間に今では、中国の代表候補だ。

活発前向き娘と言ってしまえばすぐに考えは済むが……改め
て時は恐ろしいものだ俺は感じてしまうところがある。

彼女もセシリアと同じように俺につかってくる。
なんでだ？

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかかれかけました
の」
「はあ！？一夏、アンタ今度はなにバカ……」
「黙っていたほ
うが身のためだ」

鈴の言葉を遮った2人目の転校生、翔が後ろを振り返らずにセシリアと鈴に警告らしき言葉を送った。

なんのこつちゃ……！？

俺は、言葉だけでは気付かなかったものの、鈴達の後ろに立つ人影により理由に気がついた。

「はぁ？このバカ新入り、人の話に何勝手に
「安心しろ、『バカ』は私の目の前にいる」

真後ろから投げ掛けられた言葉に軋むような音をたてながら首を動かすセシリアと鈴。

その首を動かしたその先には……

鬼教官がこん棒ならぬ出席簿を振り上げ、的確に脳天目がけ降り下ろしていた。

次の瞬間には響きがよい音が辺りに広がった。

S i d e o u t

S i d e 翔

イギリスと中国の代表候補なの……か？……随分と『普通』だな

叩かれて涙目となっている2人を見て、俺は少し呆れた。

代表候補生は、ISへの適応性を示すISランクや適正検査後の訓練成績等において好成绩を修めた者にだけ資格が与えられる。

さらに言えばそのエリートの中のエリートが専用機の運用を任せられるのだが……セシリアと鈴に対してはその代表候補としての意志が小さく見えたからだ。

ちなみに彼女らがなぜ代表候補であることがわかったその理由は、片耳にインカムのように展開したISのパーツよって起動させているハイパーセンサーによる解析結果だ。

「今日は、戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだ………凰、オルコット!!」
「なぜ、私^{わたくし}まで!?!」

自分まで呼ばれたことに不満を隠さないセシリア。

鈴も不満そうな顔で抗議しようとしている。

呼ばれた理由は、専用機持ちという事ですぐに始められると言つこととでらしい。

未だに納得しきっていない2人に千冬先生が何かを吹き込んでやると、途端にやる気を見せた。

俺は、2人に距離が近い分、千冬先生が言った言葉をしっかり聞いていた。

……アイツにいいところを見せられるぞ？

千冬先生、アンタ……一番手っ取り早いとはいえ、誰かをぼた餅にするのは流石に不味いだろう、色々な意味で……

俺は、その言葉に脱帽しそうになる。

一方、勝手に出汁にされたらしい一夏は不思議そうに彼女らを見ている。

「それで、お相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞よ。返り討ちにしてやるわ」

そして、ヤル気満々の2人は、既にISの展開を終えている。

ハイパーセンサーからの情報で2人のISの詳細スペックが視界の片隅に表示、表示を見ながら改めて彼女らの姿を見た。

鮮やかな青色の機体、そして外見上は、フィン・アーマーのように装備があるがこの機体の名前にもなっている特徴的な武装で、オーレンジ攻撃可能な特殊誘導兵器『ブルー・ティアーズ』を搭載しているのがセシリアのIS、『ブルー・ティアーズ』だ。

一方、肩の横に浮いた棘付き装甲……衝撃波を撃ち出す衝撃砲『龍砲』が特徴的な朱色の機体、その機体が鈴のIS、『甲龍^{シエンロン}』

である。

2人の機体は、それぞれ特殊兵装を装備した第三世代に分類されるISだ。

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

キイイイン

「ん？」

俺は、聞き慣れた空気を裂く音を聞いた。

この音……ラファールTypeのISか？

俺がそう思った次の瞬間……

「わ、わ、わ！！ど、退いてください！！……」

「！？」

コントロールに失敗したのか、何かがこちらに突っ込んでくる。

俺は、前に転がって突っ込んできた者を回避したものの……

「のあ！！……」

すぐ側にいた一夏が突っ込んで来た『何か』にぶつかり、地面を転がった。

「一夏！？……ん？」

俺は、一夏に呼び掛けたが、よくよく見て、少し目を見張ってしまった。

一夏は、咄嗟に自分のIS、翼のような一对の大型スラスタと白い装甲が特徴的な『白式』を展開して、自分の身を守ったらしい。

だが……俺が見ているのはそんなものではなく、突っ込んで転がったせいだろうかちょうど一夏に押し倒されているISの『搭乗者』を見ていた。

Side out

Side 一夏

イツツ、白式の展開が間に合ったのはよかった……あんまり痛い事にはなんなかつたけどなんだったんだ？

「……一夏」

「ん？翔どつし……」

・
何やら呆れ果てている翔の呼び声に応じようと身を擦ったら……

ムニユ

「ひゃっつー……」

「うっ?」

手のひらに何か『柔らかい』ものが……プリンか?

「あ、あのう、織斑君……ひゃん!!」

いきなりの声に驚いた俺は、さらに何かを強く握ってしまい、変な叫びを挙げさせてしまう。

おわ、プリンが喋った!! ってそんなわけあるか!!

俺は、恐る恐る自分の先に視線をやる。

「そ、そのですね。困ります……私と織斑君は仮にも教師と生徒です。……ああでも、このまま行けば織斑先生がお義姉さんねえってことで、それはとても魅力的な……」

変な妄想が始まっているが山田先生だった……山田先生はプリン……

(一夏、一回死んどくか?)

突如頭に声が響く。

声色で翔からの個人間秘匿通信プライベート・チャンネルだとすぐに理解した。

自分にはちょっとイメージが掴みきれないISの機能である。

その通信に顔をあげるといつまでも女性の『それ』に『触るな』と

言いたげに少し眉を潜めた翔がいた。

わかってるよ、わかってるよ翔……けどよ体が動かないんだよ。いや、ホントにそりゃ、いつもはサイズが全くあつてない服着ているからわからなかったけど……

今のISスーツ姿……大きめに胸元が開いたものでたわわな胸の膨らみが隠すことなく現してるからな……たぶん、大抵の男なら落ちるんじゃないか？

と俺の手は金縛りにあつたかのように山田先生の乳房に触れていて、しかも今も驚掴み中である。

(……あつー夏、逃げる!!
えっ

……ピュロリン!!
「はっ!?!」

翔の警告と身の危険を感じて硬直を抜け出した俺は、即座に山田先生から体を離す。

刹那、一秒前まで俺の頭が存在していた場所をレーザーが貫いていた。

「ホホホホ……残念です。はずしてしまいましたわ……」

ブルーティアーズの武装の1つである特殊レーザーライフル《スターライトmk》を構えたセシリア(大逆鱗ver) がこちらに狙

いをつけている。

こえー!!

とさらに何かを組み合わせる音が……もしかしてアレって鈴の甲龍の武器、青竜刀《双天牙月》を連結した音じゃ……

連結したそれは、両刃式の薙刀として使えるだけでなく投てき可能な武器としても機能する。

S i d e o u t

S i d e 翔

『嫉妬深すぎる』……と言つよりも……2人とも変な風に武装を使
うな

俺の突っ込みが届くわけもなく鈴が双天牙月を連結し、投擲するべく振りかぶって投げた。

「うおおお!!」

ためらいなく一夏の首を跳ねるように投げつけている。

それを慌てて回避する一夏。

ためらいなく一夏の首を跳ねるように投げつけている。

それを慌てて回避する一夏。

なかなかいいコースではあるが……

俺は、ただ黙って少し呆れながらも面白くそれを見たが……
回転して戻ってくるそれと、セシリアが第2射を放とうとしていた
のでそろそろ止めに入ることにした。

スターダスト……

俺の呼び掛けに応じるように腰辺りに大型スラスターユニットと一緒に
なった白銀のサイドアーマーと腰回りを守るアーマーが装着さ
れ、両足にも装甲が付き、脚部を形成する。

下半身だけISを展開させると同時に武装展開を命じる。

右手に光が収束し、主兵装の1つが展開された。

長い片刃剣が黒い鞘に収まっているような形が印象的である。

ただし、よく見ると柄の一部に拳銃のトリガーが設けられており、
鞘の先端にも銃口らしき物がある。

この武装、多目的全領域対応試作兵装『流星』ミステリアは扱いがやや難しい
武装であるが性能がフルに活用できれば単独で多くの敵と戦う事が
できるのだ。

俺は、『流星ノ雷』いかづちより『鞘』を取り除くと右手で鞘を双天牙月に

投げつけ、抜き身の『流星ノ雷』を左手に逆手で構え、瞬間的な加速である瞬間加速とまではいかないもののスラスタイグニッション・ブーストの推力によって第2射を放つために狙いを定めていたセシリアの背後に素早く回り流星を突き付けた。

S i d e o u t

S i d e 一夏

間一髪仰向けに倒れることで双天牙月を回避することに成功した俺であったが……回転しながら双天牙月が戻ってきた。

まずっ！よけらんねえ！！

俺がそう冷や汗をかきながら思ったときである。

「ハア！」

ドン、ドン

ヒュン、ヒュン、ヒュン……

発砲音が2つと何かが回転しながらとんで行く。

2発の弾丸と何かが双天牙月の両端と持ち手を的確に叩いて、軌道を大幅に変え地面に落下させた。

空のシエルが地面に落ちる音を聞いた俺は、その撃ち込んだ張本人を見た。

山田先生だ。

まだ、倒れたままであるもののちよつと身を起こし、その両手で銃口から煙が出た実弾タイプのアサルトライフルをしっかりと保持していた。

いつもは慌てた感じが印象的な山田先生であるが……今の山田先生は落ち着いていた目をしている。

その姿に呆気をとられる鈴とその他生徒一同って……あれ？

こんなの見せられて真っ先に噛みつきそうなセシリアの反応がない？

俺は、少しだけ頭を動かしてセシリアの姿を探してみると……目を見張った。

なぜなら……

「な、なんですか、あなた!？」

「流石にやりすぎと……思ったからな」

右手でセシリアのライフルを押さえ込んで、左手に逆手に握っているブレードらしき物を彼女の首に突き付けている下半身だけISの装甲を展開している翔の姿を見たからだ。

「や、や、山田先生？」

「あれ?……!? 櫻井君!」

両極端に2人の行動に唾然とし、驚きを隠せない俺も含めた一同、と……

「山田先生はああ見えて元『代表候補生』だからな。今くらいの射撃は造作もない」

驚きも見せない千冬姉が淡々に口を開く。

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

パツと秀囲気がいつもの山田先生に戻り、起き上がると肩部武装コンテナに銃を預けていつものようにずれた眼鏡を戻した。

千冬姉が言った言葉にちよっと照れているらしく頬を染めている。

「それから……櫻井、そろそろ離してやれ」

「……」

翔は無言のまま頷くとセシリアからブレードを退かせる。

そして、翔の左手に光が収束し、黒い鞘のようなものが現れた。

「ほお、『的確』に投げた物をわざわざ再展開するか」

えっ、もしかしてアレってさっき凶器を叩き落とした……？

「ええ、この兵装『流星』は鞘も構成パーツの1つですから……
・それに戦う以外に剣を『抜く』つもりありませんよ。今回のように嫉妬だけで武器を振るう人を諷める以外にね」

「ふっ」

翔が鞘に兵装『流星』を収めながら言い放った言葉に千冬姉が不敵に笑みを浮かべている。

あの、お2人さん、2人の世界に入ったから山田先生が頬膨らませているよ！

まあ、アレもアレでかわいいような……って違うだろ！！

「さて、小娘どもいつまでも惚けていないでさっさとはじめろ」

手を叩きながら千冬姉が空気を変えるようにセシリアと鈴に促す。

「えっ？2対1で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ『負ける』」

カチン！

な、なんだ、負けると言われたのが気にさわったのか？

セシリアと鈴の瞳に再び闘志をたぎらせている。

さっきにも増して力がみなぎっていた。

「では……始め！」

Side out

Side 翔

「手加減はしませんわ……！」

「今度こそ本気だよ……！」

「い、行きますー!!」

号令と同時に飛翔した彼女らの勝負が始まった。

先制攻撃を仕掛けたのはセシリア鈴チームだったがそれは簡単に回避される。

……ダメだな

頭の方だけを除いてISの展開を解き、俺はIS達が舞う空を見つめてそう思った。

『現』代表候補生の2人は、射撃の狙いや自機に搭載された武装をうまく用いている事は、良いのだが……

連携に慣れていないのか、動きが『单调すぎていた』。

セシリアは、手持ちのライフル以外にもブルー・ティアーズ（以降ビット）を展開して複数の方向から狙おうしているが、山田先生は距離を開けるように後退しながらアサルトライフルの射程ギリギリから攻撃を続けている。

ビット兵器は確かに近距離で展開、オールレンジからの攻撃をされた時には厄介すぎるものの、逆に『並んでいない時』はただの複数の浮遊砲台だ。

しかもただでさえエネルギー消費が激しいビットを一気に全機展開するなんて馬鹿の一つ覚えに近い。

鈴の機体、甲龍は燃料消費率と安定性に重点に置いている機体であり、なかなかいい機体だと思うが、先ほどから主兵装の衝撃砲ばかりを使っている。

衝撃砲自体は、空間にエネルギー的な圧力を掛け、指向性がある衝撃波を一方に撃ち出す武装で砲身が見えない、衝撃波なので弾道が捉えにくいと言った利点を持つ優秀な武装であるが、データをみると空間に圧力をかけるせいなのか反動が大きい。

出力調整によってある程度は反動を緩和できるのかもしれないが、鈴はそのつもりはなく大出力で撃ち続けている。

その為、鈴は先程から動かずに砲撃を中心に攻撃を加しているが、ビット兵器によって射線上に追い込みができていないため撃つてもユニットの動きからどの方向に次は放たれるか予想されてしまい、山田先生に易々と回避されている。

連携不足もあるが、あの2人の場合、自身の技能だけ過信しているせいもあるのだろう

「山田先生、かなりの腕前ホットドガーですね」
「ん、わかるのか？」

千冬先生が歩み寄った俺の言葉に空を見上げたまま口を開く。

「はい。冷静に相手を見た上で特性が違う2機の攻撃を距離と相手の可動式ユニットが向いている方向から見事にいなしてますから、それに……あと『1分』程で勝負が着くと思います」

「ふむ……あと『3分』は保つと思つたのだがな、仕方がない……そうだな。ちょうどいい、デュノア、山田先生が使っているISを解説してみろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルが翔の隣に立っている説明を始めた。

概要だけを拾い上げるなら以下の通りだ。

山田先生が今使用している、四枚の多方向加速推進翼が特徴的なシユルエットであるネイビーカラーのISは、デュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』。

この機体は第2世代開発最後期の機体だが、安定した性能と豊富な後付け武装による高い汎用性、さらには操縦性の簡易性で操縦者を選ばない、そして操縦性の個性に合わせた多様性役割切り替えが可能である機体だ。

「ああ、いったんそこまででいい。『終わるぞ』」

説明に聞き入っていた一夏が戦闘に目を戻したところを横目で見たとき、勝負が決まった。

セシリア鈴チームはエネルギー切れ間際で特徴的な武装がほぼ使用不可能となった。

その時、山田先生の射撃がセシリアを誘導、最後のエネルギーで衝撃砲を放とうとした鈴とぶつけ、動けなくなつた2人にグレネードを投擲。

爆発が起こり、2人が地面に落下したところで戦闘終了。

落下し地面にクレータを作つた後、いがみ合いを始める2人。

……代表候補なのが疑われるような試合だな……

と、俺が2人にそう感想を抱いた時……

「……櫻井、お前も行け」

「えっ？」

俺は、千冬先生の言葉に思わず間抜けな声を出してしまう。

S i d e o u t

S i d e シャルル

えっ？

織斑先生の言葉に僕は頭の中で疑問を洩らしていた。

なんで、カケルなの？

代表候補でもないのにと僕がそう思った時、織斑先生が理由を言っ

た。

「確かに、これで山田先生の實力は判っただろう。このまま訓練に移るのもいいだろうが……實力を見抜いたお前の『今の實力』も見てみたいと思つてな」

「あつ……俺なんか大した事な……」

「それにあの『目』を何とかしろ！」

「あの目つ……!?……」

織斑先生からの言葉でカケルがある方向を向いた。

その先にいたのは、好奇心の目でカケルと僕を見るクラスの娘達の姿だ。

その目が鬱陶しいのだろうか、カケルに模擬戦を要求する織斑先生が目で何とかしろと睨んでいた。

「……1人ででもいいですか？」

「ほお、同じ男のデュノアと組まないのか？」

カケルの返答に織村先生がそう返すが……

「1人で、やりあつてみたいんですよ。『真の代表候補』と」

カケルは、最初面倒な事になったと言いたげな顔をしていたが、突然、何か吹っ切れように織斑先生に希望した。

それに対しての織斑先生の解答は……

「…………判った。好きにしる」

そう言うと降りてくる途中の山田先生に通信を送り、待機させ戦闘の準備が整う。

「さあ、『大口叩いた』その実力見せてみる」

「了解…………いくぞ『スターダスト』」

カケルがグローブをはめた左手を胸に当てた瞬間、ISの展開が開
始された。

先ほどは下半身だけの展開だったが、今回は違う。

両手、両肩に装備される鋭角状に近い形のアーマーと先程の展開で
見た脚部の装甲と腰辺りに大型スラスターユニットと一緒に
白銀のサイドアーマーと腰回りを守るアーマーが装着される。

そして最も目を引くのは背中に装着された一対の大型スラスターで
ある。

機械的な印象をつけるデザインと少しばかり『天使の翼』を思わせ
る白銀に輝く翼。

その翼の大きさから推進力は、かなりのものだろうと僕は思った。

白銀に輝くその機体『スターダスト』は、騎士の鎧を纏った『天使』
そのもののようにも見える。

展開が終わると同時に両手武器の展開も終わっていた。

右手には、先程見た鞘付きの『流星』が握られている。

左手には、右手の『流星』よりも小振りな『流星』のようなものが握られている。

「展開完了。『スターダスト』、飛翔する」

スターダストの全スラスタが稼動し、飛翔した。

スターダストが巻き起こした風は強烈なものであったが、僕は見た・
・太陽の光を反射して白銀に輝くスターダストとスラスタから吐き出したエネルギーの残子が『星屑』のように散る様を・
・

Side out

Side 翔

初起動の訓練時に第1移行が終えたこの機体は、完全に俺の専用機となっている。

その武装やスペックも俺が使いやすいように最適化されているだけでなく、常に手を加え続けている。

山田先生が待つ高度までスラスタも噴射させ一気にあがる。

「すみません。山田先生、お待たせしてしまって」

「い、いえ」

？山田先生の様子が……『変だ』

俺は、様子がおかしい事に気づく。

先程までは、少しだけ慌てた様子を醸していたが……戦闘の『意識』だけはまったく切らしていなかったのだが、今は何やら戸惑って、ちよつと此方がチョコカイ出しただけで自滅しそうな様子だ。

何か……あるのか……

「山田先生」

「は、はい……」

なるべく強弱をつけないように呼び掛けたつもりだが、山田先生はビクツと反応する。

何かあるか

その反応に少しだけ考えるとすぐに口を開いた。

「少しだけ、調整やらせていただけませんか」

「は、はあ？」

「昨日やるうと思っていた調整作業がまだやっていなくて」

俺がそう言つと山田先生は「か、構いません」と言ってくれた。

「ありがとうございます」

俺は、調整用のパラメーター表を呼び出すのと同時に一夏にプライベート・チャンネルを送る。

(一夏、山田先生つていつもはどんな感じだ？

パラメーター表を書き換えるような仕草をしつつハイパーセンサーでは地上の一夏の姿を捉える。

ハイパーセンサーで拡大表示された一夏は、俺をジッと見ている。

(もしかして、プライベート・チャンネルが使えないのか？

続く言葉に一夏は頷く。

(仕方がない……簡単に俺の外見をイメージして見てくれ、強くじゃないゆっくりと……)

プライベート・チャンネルのイメージは人それぞれ違うが、大体共通しているイメージは『通話相手を意識』する事。

俺は、そう言う風に言って数秒後には……

(……淡麗でツツコミ要員、表情が見えない

(……一夏、後で話そうか

相手が考えているイメージがちょっとだけ漏れだして、一夏との相互プライベート・チャンネルが繋がった。

(おお、すげ！これがプライベート・チャンネルか！？

(ああ、そうだ。そのまま、頭の片隅では相手の印象を意識し続ける……それで、一夏 さっきの質問だが

センサー上の一夏は、笑顔となっているが今は構っている暇はない

(あつ、ああ。山田先生だろ？うーん、いつもサイズの合わない服着ていて、アフアフしているって感じだな

それは今朝、会った時点から感じている事だ。

(あとは？

(あとは……あつ、入学試験の時に俺と戦ったんだけど、何故だか自滅しちゃったんだよな

(なに？

俺は、一瞬、理解できなかった。

あれほどの腕を持っていて初心者、相手に自滅？……確か、一夏は入試でだった……
もしかして

俺は、ある推測に考えが及んだ。

(わかった。ありがとう

(なんだか知らないけど、頑張れよ

(ああ

一夏からの激励に短く返すと大して弄っていないパラメーター表を消す。

そして……

ハイパーセンサー『明』より、『与一』へ

そう指示を下す。

すると光が頭を覆い、形をなす。

角錐状のヘルメットを被ったように見えるそれは、高速戦闘、狙撃専用超感度ハイパーセンサー『与一』である。

普段は、エネルギーを喰いやすい等の理由からISの武器が格納される量子変換領域に残されるパーツである。

だが、額に搭載された新開発のクリスタルハイパーセンサーは、その気になれば『ストラトス（成層圏）』まで見渡せる程の精度と解析度を持つ、さらには本来の目を覆うように設置されているのが近中距離高機動戦時に使われるスリットセンサーである。

1つの物に複数の機能を持たせたがる父さんの設計はこの機体の武装や一部機能にも色濃く現れている。

エネルギー喰いのこいつだが……これで『顔は見え』ない

「えっ？ いったい何を」

「これなら直接的に顔が見えませんかよ」

「な、何のこ……」

「胸がない『女性』とでも思って戦ってください……そうした方が貴女にも負担にならないと思ったので」

「!？」

山田先生が目を見開いて驚く姿が見える。

そして少しして……

「あ、ありがとう……」

と小さな声で礼を述べていた。

「礼を言われるまでの事はしてませんよ……その代わり、しっかりと相手してください」

表情を引き締めた俺は、右手の『流星ノ雷』をライフルモードにして静かに山田先生に向ける。

それに対しての山田先生の返答は……

「はい！」

落ち着いた目でこちらにライフルを向けてきた。

「よし……行きます!!」

俺は、ライフルを撃ち放ちつつ強者への『挑戦者』として立ち向かっていった。

Side out

Side 一夏

空中で翔がライフルからレーザーらしき輝きを放ちつつ、山田先生に向かっていく。

だが、それらは山田先生に当たること避けられ、反撃の砲口が翔に向かっていく。

だが、翔もそれらに当たることなく、移動しながら1射、2射とライフルを放つ。

それからは撃ち合いである。

お互いに得物を撃ち放ちつつ、螺旋状に空を翔上がったと思ったら、次の瞬間にはバレルロールを行いながらお互いに撃ち合いつつも突っ込んで行く。

回避しきれなかった弾によってISの防衛機構であるシールドが働くが、2人はまったく引く気配を見せない。

危ないと俺が思ったのもつかぬ間、2人は、交差し、先に反転した翔が左手に握った得物から細かなレーザーを山田先生に放ちながらスラスターを吹かし、一気に降下する。

それを山田先生が後ろから追撃に入るが……翔は、突如、足を振り払うのと同時に脚部スラスターを吹かし、回転しながら上昇に転じ山田先生にいつの間にか抜き身にしていた右手の剣を振り上げた。

決まった

俺は、そう思ったが……

山田先生が咄嗟に展開した手持ちナイフで受け止めたらしく、一瞬だけ2人が止まる。

まさに一瞬、翔がそのまま剣を振るい山田先生を吹き飛ばす……

が、山田先生は背中のスラスタを巧みに使い姿勢を安定させたままナイフを投擲、さらにはライフルによる射撃を翔に加える。

ナイフを右手の剣で弾く翔であったが、続けざまの射撃に対しては背中的大型スラスタと腰のスラスタをデタラメな方向に吹かすことで複雑な機動をとって回避する。

複雑な機動に自然と体勢を崩した翔に山田先生は、さらに撃ち込もうとするが……

翔の左手の得物から放たれるレーザーの雨に後退を余儀なくされる。

それから体勢をたて直した翔が山田先生に向かっていき、再び激しい空中戦が繰り広げられる。

「櫻井君……すっ、すごい」

「セシリアさん達に簡単に勝っちゃった山……山田先生とあんなに」

クラスの誰かが呟いた言葉が俺の耳に届くが……俺の目は、空中での戦いに引き寄せられている。

「あ、あの方……」

「なんなのよ、アレ」

先程負けたセシリアと鈴の呆然とした声を漏らしている。

うん、俺も聞きたいところだ

「……骨のある奴だな」

あの千冬姉、目が何やら黒い笑みを浮かべてるよ

千冬姉が面白そうに戦いを眺めながらそう呟いている。

「翔・・・・・・・・」

心配そうに見てますなシャルル

って何あれチート!?

と俺も口にしたくなつたが・・・・・・・・その前に決着が着いてしまつた。

Side out

Side 翔

強い・・・・・・・・

数度の攻防で俺は、山田先生の強さを知った。

最初は、俺が生徒だと言うことで少しの手加減が含まれていたが・・・・・・・・今は、表情自体も『戦士』としてのものとなっている。

このままだところちが『喰われ』る・・・・・・・・なら!!

俺は、一気に勝負に出た。

左手の流星、『流星/疾風』レーザーマシンガンモードから連続し

てレーザーを放ちながら瞬間的な大加速であるイグニション・ブリストを起動、一気に距離を詰めようとする。

だが、山田先生もイグニション・ブリストを起動し、俺との『速度』と同期した上でグレネードを投擲してきた。

自分の加速と山田先生が加速した上で投擲したグレネードは、恐ろしい速度で俺への直撃コース入る。

ちっ！

俺は、この試合では使わないと考えていた『流星』の能力を『解放』させ剣を振るう。

投擲したグレネードは、剣と接触し、爆発を起こすが……刀身が『蒼白く輝いた』流星がその爆発を『喰らう』。

そして刀身から力強い力が溢れ出す。

山田先生がその光景に目が見開かせて動きを止めた。俺は、その隙を見逃さず、山田先生に肉薄する。

山田先生は咄嗟に距離をおこうとするが……

「逃がさん!!」

両肩のアーマーが展開され、『隠し腕』が山田先生の腕を掴んだ。

「!?!」

「はぁ!!!!!!」

右腕の流星を振るう。

だが……

「この！！」

「なっ！？」

なんと山田先生は上半身をそらして避けたのである。

ただ、完全には避けられなかったらしく俺の手には何かを斬った感触が残った。

確実に決まったと思っていた一撃を避けられ、啞然となった俺を山田先生は見逃さず……に

グレネードを展開して爆破した。

「クッ！」

「ノア！！」

グレネードは、俺寄りで炸裂したため装甲がない部分にも被害が及ぶ。

その被害にISの搭乗者を守る機能であり、そしてシールドエネルギーが大幅に奪われる防御機構、IS側の判断で『絶対防御』が発動する。

それと同時にシールドエネルギーが尽きる。

ISバトルではシールドエネルギーが付きた時点で勝敗が決まる。
つまり、このISバトルは俺の敗北だ。

俺の体は重力に引かれ、地面へと落下していく。
地面スレスレのところまで体勢を建て直し、地に足を降ろす。
その様子にクラスの方からは落胆したような声が漏れ出す。

いい試合だったが・・・初日からこれは不味かったかな？

俺がそう思っていると一夏とシャルルが駆け寄ってきた。

「翔……！」

「おつ、シャルル、一夏・・・ごめん、負けちゃったよ」

「そんな事をよりスゲエなお前……！」

「うん。カケルは、凄いよ」

「そう言われると……照れ臭い」

俺は、2人の言葉に頬を掻きながら少し照れ臭くなってしまった。

そついや・・・さつき『何か』を斬ったんだが……なんだった
んだ……掠めた程度だからシールドは働かなかった……

そう考えている間に山田先生が千冬先生の隣へ着地する。

「ふいっ」

「山田先生、ご苦労様です」

「あっ、いえ……つい本気になっちゃいましたから少し大人げないです……私」

「アレぐらいが丁度いい。それに『やり易かった』んじゃないか？
櫻井の気配りで」

「は、はい」

ISの展開を解き、千冬先生の言葉に反応し……その豊かな『胸』を揺らした時である。

……ピッ

短く何かか斬れた音が山田先生から聴こえて……そして……

……

「……山田先生」「は……い！」

「あっ」

「えっ」

「……」

アレを斬っていたのか……

俺は、それを見て、頭を抱えなくなった。

千冬先生の言葉に自分の姿を見た山田先生は絶句した。

何故ならISスーツの胸の部分が裂けてしまい豊かな乳房を一部だけだが『生』で見せてしまっている。

「い、イヤアアアアア」

山田先生の悲鳴がグラウンドに木霊し、生徒達が顔を真っ赤にした。

第3話初陣のスターダスト（後書き）

セシリア「不潔！」

鈴「この変態！！」

虚空「ギヤアアア！！」

一夏「ああ、派手にやられてんな」

翔「仕方がないだろ、山田先生をあしちゃったんだから」

山田先生「グスン！！私の役はアレだけですか！！」

感想、ご意見待っています。

第4話訓練、それは伝説？（前書き）

第四話目です。

一夏「やけにかかってたけどどうしたんだ？」

翔「たぶん、他の作品にも手を焼いてたんだろ？」

虚空「プラス修正も加えてたんで……では第4話、楽しんでください！！」

第4話訓練、それは伝説？

ちよとしたトラブルを引き起こした翔と山田先生との模擬戦が終了して、数分後……

Side 一夏

「……では、これより8人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが行うこと、わかったな。では分かれる」

千冬姉の言葉が終わるや否か、俺と最終的に山田先生を泣かせてしまった責任から千冬姉からの指導を3発ほど『喰らわされた』翔、そしてシャルルに一気に2クラスの女子が詰め寄ってきた。

「櫻井君！！優しくしてね」

「わかんないところ教えてくれる？」

「デュノア君のテクニク見てみたいなあ」

等々、俺と翔の班（先程の件と俺がISに触れはじめてまだ2ヶ月程度しかたっていないことからこの班編成となった）とシャルルの班は、かなりの繁盛ぶりであった。

実際、俺もシャルルもどうしていいのかわからず立ち尽くしてしまっていた。

ただ、翔だけは「千冬先生が許可してくれれば」とポツリと言っていた。

この状況に見かねたのか、千冬姉が面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声で……『脅迫』した。

「バカ者どもめが……出席番号順に1人ずつ各グループには入れ！もたつくなら今日はISを背負ってグラウンドに百周させるぞ！……！」

それが『鶴の一声』と言うやつだったのか、わらわらと群がっていた女子達は蜘蛛の子を散らすように移動してグループにそれぞれ別れた。

「最初からそうしている。馬鹿娘どもが」

ふうつとため息を漏らす千冬姉はある意味疲れた顔をしている。

「ご苦労様です……千冬姉」

「……やったあ。織斑君たちと同じ班だ」

「鳳さん、よろしくね」

「……」

とそんな千冬姉を見ていないらしい女子達がそれぞれグループリーダーとなった人物達に感想を述べているが一ヶ所だけ感想が上がってこない。

それは、例のドイツ転校生ラウラが指導する班であった。

張り積めた雰囲気、人とのコミュニケーションを拒むオーラを醸し出しているラウラは、完全な絶壁である。

しかも当の本人は、女子達を『軽視の冷たい眼差し』で見ている。

「……ラウラ班が可愛いそうだな」

「そう……だよな」

その様子を見た翔の呟きに俺は小さな声で同意の意を示す。

「……すまないな、一夏。こんな形で無理矢理、組ませてもらって

翔が少しだけ詫びるような表情となる。

ただ、一言付け加えると彼の見せる表情の変化はそれほど碎けたものではなく、目や口許が若干変化するようなものである。

「気にすんなよ。俺も助かってんだから。それに千冬姉からの指示もあつたんだ……逆に逆らったら殺される」

あの千冬姉なら確実にやられる。

それに……トラブルが起こったあと翔に向けられた視線は、『称賛、嫉妬』等もあつたが一部女子生徒からは女性の衣服をひんむいたと思われたのか『完全な嫌悪』を向けられてしまったのだ。

だから1人だと色々と問題になりそうだったので千冬姉の指示もあり、このような班編成になったのである。

「……すまない」

「だから気にすんなよ。……あつ、そういや、お前のISかなり変

わってるな。専用機なのか？」

俺は、話の空気を変えるためにも素朴な疑問を翔に投げ掛けた。

翔のISは今まで見たことがないと言うより、自分のIS白式よりもスペックが高いをじゃないかと思えるほどだ。

「ああ、専用機だ。ただ、俺は代表候補じゃないからその点だけは間違えないでくれ」

「代表候補じゃないってことは……俺と同じみたいなもんか？」

ちなみに俺も言っておくが代表候補ではない、何でもIS管理運用制限に関わる世界条約『アラスカ条約』に引つ掛かるの引つ掛からないのとあやふや状態であり、今も審議中との事だ。

つまり、俺に与えられた専用機『白式』は男である俺のデータ取りの為に与えられている意味合いが強い。

翔もそうした背景があるのだろうと俺は思った。

「ああ、そんなもんだ」

「そうか。あと……あつ、山田先生にグレネード投げられた時、何で無事だったんだ？」

「ああその事か、あれは『流星』の持つ能力だ」

「『流星』？ああ、あの刀」

「刀？ああ『日本刀』の事か……正確に言えばブレードなんだが……まあ、いい『流星』は俺の父さんが作った特殊兵装だ」

Side out

Side 翔

「特殊兵装？セシリアや鈴のISみたいなか？」

「ああそつだ、第三世代の基準条件としている特殊兵装が積み重なっていると考えてくれればいい」

「えつ、何？」

「一夏、何を話しているのだ」

俺達の話に班の女子生徒が聞きに入った。

「あつ、えつと……」

「ちようどいい。今から俺のスターダストの兵装を説明するよ」

俺は、実際に大型ブレード『流星ノ雷』、小型ブレード『流星ノ疾風』を鞘ごと展開して、ともに肩に預ける形で構えた。

「刀……ではないのだな」

ポニーテールの髪の子が流星を見て少し残念そうな呟きを漏らした。

「ああ、そつだ。この流星は、鞘もついているが、実際には複合武器の一種だ。構成は、レーザーライフルの機構等が内蔵された鞘と特殊ブレードと言う構成だ」

「特殊ブレードって？」

女子の1人が俺が口にしたワードに首をかしげた。

その疑問を解消すべく俺は、簡単に応じた。

「正式な原理は、父さんに聞かなければ答えられないが、コイツ（流星）の特殊ブレードは、俺が機能するように命じれば『爆発、高エネルギー兵器、あるいはフィールド系からエネルギーを喰らって、自分のエネルギー』する」

その言葉に一同が目を見張り、流星に視線が集まる。

「えっとつまり、シールドエネルギーも……」

1人の女子がそう口を開く。

俺はその言葉を凶悪な意味で肯定した。

「ああ、流星は『喰らう』」

今度こそ一同に戦慄が走る。

確かにシールドエネルギーを無条件に喰らって、自分のエネルギーとしてしまうこの装備は、それだけISバトルで恐ろしい存在となり凶悪なものであるだろう……だが

「……相手のシールドエネルギーを喰らう事もできるが、使い方を間違えれば、自分のシールドエネルギーを喰われる。それに受け止められるエネルギー総量も無限じゃない」

そう欠点は、『それら』だ。

父さんは、設計段階で『様々な戦況でも効力を持つ武器』として多目的全領域対応試作兵装『流星^{ミューティア}』を作り出した。

だが、携帯性も考慮して光学兵器も並装してしまったため戦闘を行う上での基準はクリアしているが、エネルギーを喰いやすい構造となってしまうている。

そのエネルギー不足を解消の為、考えられたのが流星の特殊ブレード『サンクチュアリ』である。

『聖域』と名付けられたこの機能を発動させた刀身は、爆発系、エネルギー系、フィールド発生系のどんな『エネルギー』でも『喰らい』、自分のエネルギーとする事が出来るのだ。

だが、この『サンクチュアリ』は、喰らう際に自身のシールドに接触させないようにしないと自分のシールドエネルギーを喰らう事になる。(この点は、デメリットであり、メリットと翔は考えている)

また、特質上、刀身で攻撃を受ける、または当てる必要があるため、使える状況にも限られること、『サンクチュアリ』は貯められるエネルギー総量も決められている。

もし容量限界を越えてしまったら最低でエネルギー強制解放で難を逃れるか最悪で自壊と言う結果になる。

「ふえ、そうなの？」

「ああ、そうだ。……と、そろそろ実習も始まる」

俺は、少しだけ柔らかくしていた口元を引き締め流星の展開を解いた。

「えええ、戦い方とか教えてくれないの!？」
「俺は、攻略法まで教えるお人好しじゃない。自分で考える事が大切だ」

不満を漏らした女子にそう切り捨てると俺は、一步先に歩き出した。

Side Out

Side 一夏

おおっ、見事に女の子の『攻撃』を切り捨てるな

俺は、今回、訓練のために貸し出されるISを取りに歩き去る翔の背を同じく取りに行くために歩きながらそう思った。

少しして……

「皆さんいいですか、これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄^{うちかね}』が3機、『リヴァイヴ』が2機です。各班、好きな方を選んでください……あっ、早い者勝ちですよ」

白いコートを着た山田先生がいつもの三倍しつかりした声でみんなに呼び掛けている。

結果はどうあれ、さっきの2回の模擬戦でいつも、女子生徒からの

親しみのからかきを受けていた部分を打ち破り、自信を取り戻したのだから？

その姿は堂々したるものである。

ちなみにISスーツが裂けてしまった山田先生が着ている白いコートは、翔が貸している翔の親父さんが作った『ISスーツ用特殊コート』だ。

コートの外見は、普通のコートにしか見えないのだが、コート自体をISの機能と直結させる事でシールドを展開可能さらには、保温性やIS搭乗前のバイタルチェックをしてくれるらしい。

ちなみに翔から聞いた話によると何より、元戦闘機のパイロットであった親父さんが年頃の娘のISスーツの露出にイラついた為、あくタイプな防護服として製作したらしい。

翔の親父さんどんな人だか知らないが……いい人だな……男性や年頃の娘への羞恥心を考えてる

俺は、山田先生の姿を見て改めてそう思った。

ただ、ISスーツの上から着込むのを前提としているため山田先生の胸の膨らみはくつきりと出てしまっている。

山田先生が眼鏡の位置を直す、その動作だけでも十代の乙女にはない胸の果実は揺れる。

当然、全うな青少年である俺は、それに見とれて……

ギユム!!

「いたあああ！な、なんだ!？」

誰かに足を踏まれた。

しかもかかとで。

思わず痛みあまり声をあげてしまったほどだ。

いてえ……誰だこんなことをするのは……

「……………何をとジロジロ見ている」

「ほ、箒……………」

ポニーテールの髪形……凛とした目付きの女子、俺のファースト幼馴染み、篠ノ之箒だ。

どうやら彼女が踏んづけたらしい。

「何をしてんだ一夏……話は替わるが打鉄とリヴァイヴどっちにする」

呆れ混じりの翔の呼び掛けに考えから意識を戻した。

ちなみに受け取りに来た班では俺達の班が一番で、次がシャルルの班だ。

「ん？ああ、打鉄がいいんじゃないか？うちの班は、日本人だけだ」
打鉄は、純国産機体で安定した性能を持つ防御型の機体である。

安定した性能なため、IS学園でも初心者向けの訓練機として使われている。

「そうだな。歩行訓練だけなら感覚が掴みやすい打鉄Typeのほうがいい」

翔がそう呟きながら頷くと山田先生に向かっていった。

つて……………

「山田先生。織斑、櫻井班は打鉄をお願いします」
「はひ、さ、櫻井君！！」

俺の予想通り、あわてふためく山田先生……………てか、翔の奴なにも戸惑いを見せないなタフガイだな……………

2人の様子を見た俺は、少し啞然とした。

「……………先ほど失礼しました」

山田先生の様子に流石の翔もすまなそうな顔な表情で謝りに入る。

「い、いえ……………そこまで気にしなくてもいいです。私もあんな事になるとは思いませんでしたし……………それに櫻井君には気を使わせちゃ

いましたから」

山田先生は、手をモジモジと組ながら視線を泳がせている。

……………気を使わせた？

山田先生の言葉に疑問が浮かぶ俺。

と、そんな俺を尻目に翔はと言うつと……………

「気にしないでください。俺は、貴女の『本気』が見たく、あのようにした只是因为ですから」

「でも……………」

「……………今後、お…私や織斑のように男が出てくる可能性がありません。……………ですから貴女が抱えている恐れを打ち砕く『覚悟』があるなら手助けは出来るつもりです」

「!?!」

翔の言葉に驚いた表情になる山田先生。

な、何を話しているんだ？

ますます持って俺は理解ができなくなつた。

「……………今すぐには言いません。覚悟がついたなら……………」
「……………わかりました」

翔がそう言つと山田先生は静かに頷いた。

うん、何がなんだか？

俺は、首をかしげる……だが俺なんかよりも女子の方が展開が早かった。

「今のは……」

「告白……?」

「「「「「キヤアアア!」「」「」

途端に黄色い声をあげ始める。

Side out

Side 翔

何、騒ぎ出してんだ?

突如騒ぎ出した女子の一団に目を白黒させる俺。

と……

「あ、あの皆さん?」

「もう、ヤマヤマ、そこは照れなきゃ!」

「えっ、な、なんでですか!」

そこで女子達から爆弾発言を投下される。

「だって、先生。今、告白されたんですよ!」

ハッあ!?

流石の展開に俺は、一瞬だけ表情を崩した。

「えええ、え！何ですかあ！！！！！」

当然、パニックに陥る山田先生。

「だって、『覚悟』って『アレ』の事で・す・よ・ね」

『アレ』……って、勘違いにも程がある

隠語での会話となったが、俺は、仕事柄知ってしまった事から言葉の意味を知っている。

それは……自分の口からも言うことを憚れるもの……

「えええと……ッ！」

山田先生も意味を理解したらしく顔を真っ赤に染めた。

「どうなのヤマヤマ？」

「答えは……！」

「あ、うえっあ………」

山田先生は、アタフタとし始める。

企業のテストチームもそうであったが、女性の展開予想は何故、ここまで暴走するものだろうか。

とは言え、流石に……転入初日で変な噂と山田先生にも変な探り

を入れられて欲しくない……ここは……

「どうするんだよ、翔」

「……………どうするぞ」

俺は、流星ノ雷を鞘ごと展開して……………そして……………

山田先生と女子達の間一気に振り下ろした。

地面に流星が食い込み、わずかに地面にヒビを乗じさせる。

「!?!?!?!?」

「ちよつな!!」

明らかに自分達を狙った一撃に驚きの表情を浮かべる一同を尻目に俺は、僅かに殺気を出しつつ、口を開いた。

「いい加減にしろ」

「さ、櫻井君?」

「好きなの嫌いなのと訓練前にゴチャゴチャと……………訓練を受ける身で何を騒いでる」

「えっ、でも」

「さ、櫻井君……………言い過ぎじゃ」

「止めないで頂きたい山田先生。だいたい、あなたがしっかりしないからこうするしかないんですよ!?!」

「!?!?!」

俺の言葉に山田先生が凍りつく。

俺は、続けざまに言葉をぶつけつつ山田先生にプライベート・チャ

ンネルを開く。

「第一、先生が生徒に賞められてどうするんですか」

（山田先生、すいません。……変な噂をたてられなくなかったので……このあとも話を合わせてください

）は、ハア？

「まったく、俺らは未熟な身であり、今も学びに徹しなければなら
ないのに、教師が未熟では……学べるものも学べない」

睨む形で山田先生を見る。

「そんな、わ、私は……」

「少なくとも今回の少しは印象は変わると思いますが……！！今の
ままではまだまだです。もっと気を引き締めて事に当たってください
さい」

（山田先生、あなただけは千冬先生のようにならないくださいよ。
からかわれながらも生徒から慕われる先生のままが貴女らしいと思
います

）……はい……

（では、後程、さっきの解答を聞かせてください……あなた自身の
ためにも……生徒さんのためにも

一瞬だけ笑みを見せ、直ぐ様、睨み付ける表情へと戻した俺は、最
後の言葉を投げつけた。

「でなければ、訓練中に『死人』が出るかもしれませんよ」

S i d e o u t

S i d e 一夏

おいおい、山田先生に彼処まで言いきるなんてアレは確実に泣かせたんじゃないか？

俺は、翔の言葉に対してそう思う。

「酷いでしょ、櫻井君……」

「あそこまで言わなくても」

俺の後ろで小声でヒソヒソ話をする女子達。

と、山田先生がようやく口を開いた。

「確かにそうなのかもしれませんが……ですが私は、私が代表候補になるまでに学んできたことを……私なりに伝えていくつもりです」

「ほお……」

表情を変えないまま翔は、山田先生の言葉に理解を示す。

「例え、あなたのような意見を持つ、生徒でも教えを説いていくつもりです」

や、山田先生が……なんだかいつもよりもしっかりしている！？
何があつた！！

俺は、いつもの山田先生じゃないことに驚きを隠せない。

「……」
「……」

翔と山田先生との間に重い空気が流れる。

だが、少しして……

「わかりました。今はそうしておきます」

流星を光に還しながら翔は、表情を戻す。

えっ、もう決着？

「……はい ええっと、織斑君達は、打鉄でしたね」
「はい」

って、えっ？

突如、2人の間で話が終わったらしく空気が変わった。

「はい、打鉄です」

「ありがとうございます。行くぞ、一夏、みんな」

えっ、おいちよっ、お前ら……

俺や一同は突発的に終わった話に首をかしげるばかりだ。

「どう言うことなのだ、一夏？」

「さあ、俺も聞きたいぐらいだ」

算の問いかけに俺は、的確な解答を出せなかった。

ちなみに当の本人はと言うと……

「待たせたな、シャルル。やっぱりお前の班は、リヴァイヴにするつもりか？」

「うん、そっちの方が慣れてるから」

「そうか、なら安心だなそっちの班は」

次に待っていたシャルル班、班長シャルルと少しの会話をしていた。

Side out

Side 翔

訓練機、打鉄を受けとった俺達は、訓練を開始した。

だが、その直後から……

「櫻井君！！操縦法教えて」「ねえねえ、織斑君、櫻井君、専用機つていいよね！どんな感じなの！？」

「訓練は2人ツーマンセル一組だよね……織斑君、組も」

等々、早速俺らは班の女子達に囲まれてしまう。

やれやれ、さっきあんだけの事しても慕って来るなんて……

女性ってほんと、不思議なもんだ

俺は、表情を変えないまま心の中でそう思っていた。

「よろしく願います！」

1人の女子が腰を折って深く礼をする。

だが、そのあとそのまま右手を出した瞬間から俺は、眉を潜めたくなった。

「ずるい!!!!」

「私も私も!!」

「初めてあったときから決めていました」

俺が考えた通り、他の女子達も一列にならび握手を求めてくる。

「あ、あの………な?どういう………」

一夏が何の事だか理解出来ないまま困惑している。

『完全』にこいつ、鈍感な奴だな

そんな一夏の姿を見て俺は、心の片隅でそう思った。

「願います!!!!」

その声に振り返ると後ろのシャルル班でも同じことが起こっているらしく、シャルルに御辞儀&amp;握手待ちの手がきれいに並べられている。

「えっと……………」

シャルルも状況が飲み込んでいないらしい。

そこまでして仲良くなりたいかって…………ご愁傷さまだ

シャルル班から一瞬だけ目を背けた瞬間、スパーンと甲高い音がした。

「いったあああ!!」

その原因は、俺が内心、呆れている最中に…………修羅が降臨したからだ。

修羅「千冬先生が一行に並んでいたシャルル班の女子達を綺麗にぶっ叩く。」

「ほお、やる気があって関心だな。どれ、私が直接見てやるっ」「ヒツイイイイ」

これ以上はカオスになるので見るのをやめとこう。

シャルル班の惨状を見た織斑 & amp; 櫻井班の女子達も飛び火を恐れ、列を解散させた。

懸命な判断だな

俺は、少しばかり苦笑しつつも女子達を見ていると一夏を面白く見えていない女子の姿に気がついた。

先程から一夏とちよくちよく話しているポニーテールの子だ。

ISスーツを着た彼女のプロポーションは中々いい感じで、何かスポーツをやっているんじゃないかと俺に思わせる。

(なあ、一夏？)

(ン？なんだ、こっちも囲まれて大変なんだ)

(お前、ポニーテールの娘に睨み付けられている)

(えっ？)

俺からのプライベート・チャンネルに一夏は、目を左右に配らせ、俺が指摘した人物を探し当てた。

(箒の事か？)

(箒……？知り合いなのか？)

(知り合いもなにも、俺のファースト幼馴染みだ)

(ファースト幼馴染み？)

最初の幼馴染み？

って事は、何人かいるのか？

俺は、女子達の追求を捌きつつも首をかしげた。

(ああ、小4まで一緒にいたのが箒、篠ノ之箒。で、入れ替わりで幼馴染みになったのが凰鈴音なんだ)

(篠ノ之……1つ聞くが彼女は篠ノ之束の妹か？)

(ああ、そうだけど？けど、あいつの前でその事、言つなよ？機嫌悪くすつから

(……わかった)

いい『カード』なのかはわからないが、一応、こちらの『搜索目標』である篠ノ之束へと繋がる手に入れられた。少しだけ、『報告すべき事』が出来たなと思いつながら別の怪しまれないよう話題を流す。

(……鳳鈴音って、さっきの代表候補か？)

(ああ……なんと言うかアイツは活動的だからな……なるほど)

俺は、何となく納得した。

(……わかるような気がするなって、箒さん、かなり不機嫌そうな顔でお前のこと睨んでるぞ、何かしたのか？)

俺は、見たありのままを一夏に伝えた。

S i d e o u t

S i d e 一夏

翔からのプライベート・チャンネルに俺は、箒をよく見た。

すると明らかに不機嫌そうな顔がそこにあった。

ゲツ、なんだか知らないけどかなりご立腹の様子だ

彼女は、このIS学園で6年ぶりに再会したのだが、昔と変わらず

剣道を行っていて、凜としているといった感じだ。

ただし時々、俺と接する際に妙な咳払いや敬語を使うようになっていた。

なぜだろうか？

彼女とは色々とあり、なんかの手違いで約1ヶ月半以上同室になった事もあったが、いざ解放されるとちゃんと話す機会に恵まれなくなってきたている。

そんなこんなでここまでやってきてしまっているから大変だ。

なんとか関係修復に勤めなくては……

俺は、筭に声をかけようとするが……班の女子達に囲まれて
いるせいもあり、中々近づけない。

(何をやったんだ？)

(………思い当たる事がたくさん有りすぎて、わかるような、わからないような気が……)

俺は、翔からのプライベート・チャンネルにそう返すしかなかった。

少しして、少し呆れたような溜め息を付く翔。

って、俺がなんかやったか？

と自問する俺に翔から再びプライベート・チャンネルが流れる。

(はあ……………4、5分、時間を稼ぐからその間に何とかしろ
(ハア？

何の事だ？

「あーん。私、はしより重いもの持ったことない！」

「だったらいい機会だ、ISで鍛えたらどうだい」

「ええええー!!」

「そんなー!!」

「酷いよ、櫻井君！」

「頑張りな……………一番頑張った娘には、あとで昼食奢るから」

翔のその言葉に女子達が目の色を変える。

「ホントに!!」

「ああ、なんならデザートも付ける」

翔は、少しだけ表情を和らげたままそう告げた。

「ヨシッ！頑張ろう!!」

「まずは、私から!!」

(今だ、一夏

(……………すまん

身を犠牲にした翔に群がる女子達を尻目に俺は、箒に歩み寄った。

Side out

何をデレデレしてるアイツは!!

私は、女子達に囲まれた一夏の姿にイラつきを覚えていた。

見た目こそは、冷静を装っていたが……心中は、怒り狂っていた。

彼女も恋する乙女、好きな男があの様に女子おなこに囲まれれば怒りたくもなる……特に自分に向けられた思いに気づかぬ鈍感な奴ならば……

さつきはさつきで山田先生ばかり見よおって……こいつは!

さらに怒りを募らせつつも一夏を睨み付けた。

と、少しして女子達が男の転校生の方へと集まり……そのイラつきを覚えていた一夏が、自分の方へと来るではないか!!

……な、なぜ!?あの包圍網を突破して私の方へ向かってくる!?

突然の事に私は、内心、戸惑いを露にする。

「……よ、よお。篇」

「……ああ」

一夏に声をかけられた私は、少しの返事しか返せなかった。

そして2人の間に微妙な空気が流れる。

「えーとだな……………俺、何かしたのか？」

「……………あつ、えあ」

ある意味凶星の事をすぐに返事を返せない。

「……………あ、安心しろお前は、悪くはない」

「俺は？」

「つう！いいから気にするな！！」

私は、自分が墓穴を掘った事を恥じて、つい一夏の耳元で怒鳴り付けてしまう。

「うお、イテエ……………いきなり耳元で怒鳴んなよ」

流石の一夏も耳を押さえて痛がっている。

「あつ……………す、すま……………」

「ねえ、コクピットに……………」

「……………やっちまった」

私の言葉を遮るように訓練を行っている転校生達の方が騒がしくなった。

「……………何かあったようだな」

「ああ、行ってみるか」

私と一夏は、彼らに歩み寄った。

S i d e o u t

S i d e 翔

1人目を乗せ、今回の訓練項目でもあった起動、歩行までの訓練手順を終わらせたまではよかった。

が、2人目に移った時点で問題が発生した。

俺は、1人目が降りた訓練機を見た瞬間、ミスに気がついていた。

それは……立ったままISから降りてしまったことだ。

翔や一夏、専用機持ちは、あまり関係ない事だが訓練機で乗り降りをする際には、必ずしゃがんで降りなければならない。

立ったままだとISは、その体勢のまま固定されてしまうのである。

「翔、どうしたんだ？」

「……やらかした」

「やらかしたって……ああ、成る程な」

少し早めに戻ってきた一夏は、訓練機を見て俺の言いたいことがわかったらしい。

どうするかな……俺やテストチームの連中は、登って乗り込んだけど……お嬢さん方にはキツそうだ……

「どうしましたか？」

俺が思考を巡らしているとコートを着た山田先生が現れた。

「山田先生」

「えーと、ISをしゃがませるのを忘れてしまって……」
俺の代わりに一夏が状況を山田先生に伝えた。

すると眼鏡の位置を直しながら山田先生がある種、俺の代わりに一夏が状況を山田先生に伝えた。

すると眼鏡の位置を直しながら山田先生がある種、率直な解決策を述べてくれた。

「あー、コクピットが高い位置で固定されてしまったんですね……それじゃあ、仕方がないので織斑君か櫻井君が乗せてあげてください」

「……えっ？」

「……」

「な、なに？」

「やった、ラッキー!!!」

上から一夏、俺、篝さん、二番目の女子が声をあげた。

その手があった……が、それはそれで問題にならないか？

山田先生の言葉にヤバさを覚えた。

山田先生が乗せてくださいって言うのは、ISを使ってと言うこと
だろう……それはつまり……

俺と一夏は、山田先生の指示どおりにISを呼び出し、身に纏う。

そして……

「じゃあ、岸里を抱っこしてください」

やっぱりか……

「えっ？あの、それはまず……」

「な、何故ですか！！！！？」

一夏が、ようやくヤバさに気づいたらしく山田先生に声をかけよう
とするが、その前に、やっぱり篝さんが噛みついた。

確かに健全な男子が、まだ花盛りの十代の乙女へのボディータッチ
はあまりしたくないのは当たり前だ。

篝さんの方は、さらに当たり前前だなと直観的に俺は思う。

ちなみに俺は、これくらいのボディータッチぐらいは、企業にいた頃、しょっちゅう合ったため、問題はない。

そんな事を考えつつも俺は、山田先生の話聞いた。

「ISは、飛べますからね。安全にコクピットまで人を運ぶのに向いていますし」

「そんな事をしなくても踏み台になればいいでしょうに」

「……却下だ。安全とは言えないだろう」

「!?!?おま……」

「それに『こうすれば』、君の問題は解決するだろ?……ちょっとごめんよ」

「えっあ櫻……、ひゃっあ!」

俺は、篝さんの反論を遮り、二番目の女子、岸里さんをさっきの話通り『抱きかか』えた。

変な声を出されたのは聞き流しておこう。

「さ、櫻井君!??」

「なっ!??」

「お、お前……?」

「/ / / /」

俺の行動に山田先生、一夏、篝さんが反応し、そして俺の腕の中にある岸里さんが顔を赤く染めた。

「一夏、お前の言いたいことはわかるが……場所が場所だ、諦めろ」
「……わかった」

「あと山田先生……俺も好きでやってるわけではありません。……他に手段がなかったんですから」

「はひひひ!?」

俺が女子を『お姫様』抱っこした姿を見てようやく自分の言った言葉のヤバさに気づいたらしい山田先生は頬を真っ赤に染めた。

「さてと、岸里さん、しつかり捕まっけてくれ」

「う、うん」

そんな山田先生を横目で見つつ俺は、抱きかかえている岸里さんに注意を促し、俺の腕に捕まったのを確認してからゆっくり上昇する。上昇すると言っても高さは一メートル弱なのでたいしたことではない。

ただ、展開状態のISを装着する場合、背中を預けるように乗り込むので一メートル弱の高さは結構危ない。

「背中からゆっくり入り込んで……ゆっくり、あと肩の装甲に手かけた方がやりやすい」

「だ、大丈夫」

体を離さずにひどく密着して、しかもまだ男子の俺に触られているのが気になるのだろう、岸里さんは落ち着かなそうさだ。

彼女の心拍数の上昇やあたふたさは手に取るようにわかる。

「離すから気を付けろよ」

「えっ！？ええと……」

「名残惜しいのはわかるけど、いつまでもこうしていると君、あとで大変な目に遭うよ」

「／／／／／はひ！！」

図星をつかれ一気に赤くなる岸里さん。

「それとも織斑がよかったのかな」

「／／／あつ、え！？」

「……冗談だよ。それじゃ、起動してくれ。急がないと『修羅』が来る」

慌てふためく岸里さんにそう促す。

あまりからかい過ぎるのも不味いからな……それに

そんな冗談混じりのやり取りをしていたからか周囲の班から羨ましそうな視線や声が上がっている。

「あつ、うん」

俺に促されて落ち着気を取り戻した岸里さんは、起動シークエンスをはじめ、打鉄の姿勢を直した。

「よし、次は……………」

Side out

Side 篇

転校生の行動に内心、驚いていた。

なぜなら私が面白くないと感じていたと言うより、必死に阻止したかった事を簡単に回避してくれたのだ。

ありがたいが……………あやつ、何の目的で？

そうこう考えている内に2人目が終了した、だが……………

「あつ、えつとこれは……………」

「気にしないでくれ、一応、理解はしているから」

「／／／ありがとう」

2人目も立ったままISを降りてしまった。

それを転校生は、怒る気配を見せずに静かに頷いた。

ちなみに他の班の女子は、羨ましそうな表情で親鳥に餌を貰うのを待つ雛鳥である。

「あの、さ、櫻井君……………すみません……………わ、私」

「山田先生……………なにをしているんですか」

何か言葉を投げ掛けようとした山田先生を遮るように織斑先生が疲れたような声で止めた。

「織斑先生、あといえ、これは……」

「釈明はあとで聞こう。それよりもボーデヴィツヒ班が遅れている。サポートに行ってください」

「はっ、はい!!」

織斑先生の言葉にあわてて走り去ろうとする山田先生……と

「織斑先生、ボーデヴィツヒ班には俺が行きます」

転校生が織斑先生そう伝えた。

「お前がか……今朝の件のようなのは勘弁だが？」

「やり合うつもりはサラサラありませんよ。訓練なんですし、それに受けている娘達こたちが不憫に思えたんでね」

「ふむ……よしわかった。ただし、騒ぎだけは起こすな。わかったな」

「わかりました」

織斑先生は、そう言うとそのくさと離れて行った。

「そう言うことだから、一夏。残りを頼む」

「……………ああ」

転校生の言葉に覚悟を決めたらしい一夏が返事を返した。

「櫻井君!! お昼の約束は!!」

「また今度、奢ってやる」

そう言って、転校生は班から去ろうとしている。

と私の脇を通り過ぎようとしていた時、転校生が耳元で囁いた。

……頑張り

「えっ？」

思わず私は、後ろ姿を追った。

すると彼の後ろ姿は、何故だか笑っているように見えた。

な、なにを

私が去っていく彼にそう思った時である。

「あー、俺が運ばなきゃいけないか。えっと、次は誰だ？」

一夏が困ったように言いながら周囲を見渡す。

次は……私か！？

何故、彼が笑っていたのかようやく理解できた。

私は、心の中で気持ちを整えるなるべく平静を装って告げる。

「私だ」

「お、おう」

ギクツとした顔をする一夏に少しの引つ掛かりと緊張感を持ってしまふ。

そこは剣術を修める者として私は、顔色を変えずに前に出た。

だが、その内心では、色々と荒れ狂っていた。

さっきの抱きかかえられた女子の姿を見てしまっているのだ。

あれが伝説の『お姫様だっこ』とかいうやつか・・・！なんというか、・・・！！いかんいかん男女があのように密着するなどは、けしからん事であるう！！しかし・・・安全面を考慮すれば仕方がないことだ、うむ、仕方がない！！

「じゃあ、いくぞ。よっ、と」

「えっちょ……キャツ……ゴホンゴホン……」

いきなり自分の腰に手を回され、抱き抱えられたことで心臓は激しく鼓動を刻みつつある。

つい反射的に声が出てしまったために強く咳払いをする。

いきなり抱えるやつがあるか！！びっ、びくりするではないか

「どっした？」

「な、なんでもない！！」

思っていたよりも顔と顔との距離が近かった事から慌てて顔を背け

た。

しかしISスーツは、肌に張り付くような形なので一夏の体を直接触っているような感じだ……。その体に触れた私は、胸をさらに高鳴らせる。

ち、直接肌を触っているような……。ツウ！何を考えている私は！ええい、静まれ鼓動よ！！

そうこうしている内に……。私を抱えた一夏が浮かび上がり打鉄のコクピットに近づいた。

「箒、ISに移れないのか？ならもつと近づいた方がいいのか？」

「こ、これ以上、近づかれると……。わ、私も平常心を」

「？」

ハッあ！

「な、なんでもないとにかく大丈夫だ！！」

口に出した言葉を思い出した私は、まぎらわしながら一夏の体から手を離し、打鉄へと乗り込む。

「大丈夫……。だな。よし、じゃあ、起動と歩行を」

「一夏」

「ん？」

「た、たまには……。昼食をい、一緒に取らないか？」

「？なんだいきなり？」

「ふ、ふ、深い、い、意味はない！どうなのだ？」

私は、頑張つて平静を装つてはいたが……思わぬチャンス到来と断られるのではないかと思う不安感から自然と顔が強ばってしまった。

Side out

Side 一夏

？なんだつてんだ筈のは？

けど、昼飯は、1人で食うより『みんな』で食った方がいいか。

俺は、筈からの提案をそう解釈して筈に返答した。

「ああ、いいぜ」

その言葉に筈の目が嬉しそうに輝いたのは見間違いだろうか？

その後、歩行訓練まで終わらずが……

「って、なんでISを立つたまま降りる!？」

また、苦悩しなきゃならんだろうに!!

結構きつかったんだからな幼馴染みであっても!!!!

俺は、筈に批判の言葉を投げながらも頭を抱えた。

……果たしてこの鈍感が誰かの思いに気づくことがあるのか？

第4話訓練、それは伝説？（後書き）

虚空「第4話終了、あとはラウラ班に行った翔を描いて……」
セシリア「お待ちなさい！！」

鈴「納得いかない！！」

篝「／／／／／」

セシリア「どうして篝さんや山田先生に焦点をあててるんですか！？」

鈴「そうよ！！可愛くてビューティーな私達の活躍はなんでないのよイカれ作者！！」

虚空「仕方がないだろ、原作第二巻じゃ、とくにイベントないわけだし……それに最近の読んでいたら篝かシャルルになるんじゃないかとおも……」

セシリア& amp; 鈴「死ねええええ！！」

虚空「ギャアアア！！」

翔「ああ、毎度のごとくかって、少しは作者を敬った方がいいぞ……感想、意見待ってます」

第5話始める事、そして疑惑（前書き）

虚空「第5話目、打ち出します!!」

シャルル「どんな話だろ？」

翔「まあ、今回は、色々とフラグを入れてるらしいから楽しめると
思う」

一夏「そうなのか？」

第5話始める事、そして疑惑

Side 翔

一夏達の班から離れた俺は、1人、ラウラ班へと向かう。

俺がラウラ班に向かう理由は、今朝の感じから山田先生が相手をするのはかなり厳しいと感じたからだ。

それにさっき程言った通り、ラウラ班の女子が不憫だと事とラウラがなぜ今朝のような事をした理由を少なからず知りたかったからだ。

お節介な奴と思われるかもしれないが……今朝の件が切っ掛けとなり、変に『探り』を入れられる前にあの手のタイプには嫌われておいた方がいい。

そう考えつつも歩いている内にラウラ班にたどり着く。

……なんだ、この重たい空間は

ラウラ班にたどり着いた俺の第一印象はこれだった。

「……貴様、今まであの人の下で何を学んでいた」

「えっ、なんで……」

「歩行訓練（この程度）の事も満足に出来ないのか……!」

「フイ!」

班全体がラウラの気迫に呑まれて、ギクシヤクしている。

そんな中でも懸命にやろうとして訓練機を動かそうとする女子だが、今回の訓練で達すべきハードルをラウラが変に高くしているため、すぐに罵倒されている。

「……………!!」

「イッター!」

さらに何かが気に入らなかったのか、平手打ちまで飛ぶ。

……………今の段階でこれは、やり過ぎだ

ラウラの『やり方』にそう感じた俺は、二度目の平手打ちに『割つて』入った。

「やり過ぎだ」

「へっ…：櫻井君!」

「!?!? 貴様は、今朝の」

俺の姿を認めたラウラが怒りを露にした。

「なぜこの場にいる!!」

「理由はない、ただ班の女子達が訓練を受けられていないようだったからな、サポートしに来た」

「サポートだと？はんっ！」

眼帯のない右目が俺を嘲笑う。

「笑わせる、なぜ貴様が……」

「言っておくが、『千冬』先生からは許可を得ている」

「!」

俺が『わざ』と千冬先生の名を出した途端、その目に憎悪が宿った。

喰いついたか、やっぱり憧れを抱いている奴には、憧れている人の『名』を出すのが効く

俺は、内心そう思いつつ邪悪な笑みを浮かべ、ラウラの反応を待つ。

その反応は……

「軽々しく……『あの人』の名を口にするな!!」

叫びと共にISのパーツだろうか？

右肩に大型レールカノンが展開され、ほぼ至近距離で『俺』に放たれた。

「きゃー！」

「櫻井君!!」

Side out

S i d e ラウラ

あの人の名をよくも軽々と!!

「軽々と……『あの人』の名を口にするな!!」

私は、自分のIS『シュヴァルツェア・レーゲン』の大型レールカノンを展開、最大出力で放つ。

弾頭は、模擬戦用の弱衝撃弾頭。

だが、相手との距離は、せいぜい2m弱。

この距離で電磁レールによって撃ち出され秒速に達する弾を受ければ例えISのシールドバリアで守られても着弾の衝撃で打撲位のケガをするだろう。

『あの人』を愚弄した報いを受ける!!

私が放った弾丸は、余すことなく奴の顔に直撃……

チューーン!

「……ツウ」

「なっ!」

奴は、ISの展開をせずにた少し顔を傾けただけで秒速の弾丸を

『避け』たのである。

ただ、完全には避けきらなかったらしく右頬に一筋の傷が浅く残っている。

こちらが驚愕している合間に奴が接近、私の首を手で掴み、親指で喉を押さえられた。

「グッ！」

掴まれたと同時に奴を睨み付けようとするが……その前に奴の赤い目が私を見ていた。

静かな怒れる力を宿した赤い目……

「……一夏に何の恨みがあるかはあえて聞かないが……そうやってイラツキを周りに吐き出す事はするな」

イラつきだと……何も知らない奴がふざけるな！！

「な、何を……グッ」

私が僅かな反論をするだけで親指の力を強める。

「……何かあるなら、関係のない人間を巻き込むな、力を見せつけるような戦いをするな……そうした上で一夏と戦え」

奴は、それだけ言うと乱暴に首から手を離した。

「ゲホ、ケホ……」

かなりの強さで握られていたため、首が締めりかけていた。

肺に空気を送り込む為に私は、咳を漏らした。

咳が収まるのと同時に私に対して殺せたのに『手を抜いた』、屈辱を与えた奴を睨む。

睨みに動じず、奴は私を『くだらない』と哀れむような目で見ると言葉を発した。

「……もし、お前が下らない八つ当たりで引き金を引くなら、今度は『手を抜く気』はない」

何を!!

私は、すぐに奴に噛みつこうと……

「……何をしている貴様らは」

「!?!? 教官!!」

織斑千冬がすぐ側まで来ていた。

「櫻井……私が言ったことは覚えているな」

「……はい」

「よろしい……ならば」

パシーン！！

出席簿が奴の頭を叩いた。

「さつさと班を回して訓練を行え！！」

「……了解です」

織斑千冬の指示で奴は、私達のやり取りを見ていた小娘共の方へ行き訓練を促す。

あのような奴に遅れを取るとは……

「貴様もだ、ラウラ！！」

考える間もなく私も出席簿で叩かれた。

Side Out

Side 翔

あの後、なんとかラウラ班は、時間内に午前の訓練を終えた。

昼休みに入ると俺は一夏達に誘われて一緒に昼食を取り、その後、午後の整備訓練も無事に終えた。

そして放課後になると俺は、先に寮の部屋に戻ると言うシャルルを除いた一夏達に誘われ、訓練場として生徒達に解放されているISの為のフィールド、『アリーナ』で個人訓練を行っている。

第2アリーナ

ターゲット射出、コース設定7 - 1から6 - 20 - 6

ISと連動させた訓練システムにより、フィールドの片隅から移動型仮想ターゲットが2つ射出。

複雑な機動を描きながら俺から離れていく。

俺は、スターダストのスラスターを出力し、追いかけていく。

複雑な機動を描き、高速で飛び交う2体のターゲットを目で機動を追いかけてながらスターダストを動かす。

流星ノ疾風、ショートレンジモード

流星ノ雷の鞘を鞘に納められたままの流星ノ疾風の先端に接続し、ポンプアクションタイプの銃のように一度、接続した鞘を手前に引いた。

今！！

機動戦を行いつつ左手で保持した流星／疾風ショートレンジモードの引き金を絞る。

するとレーザーが散弾のように銃口から吐き出され、一面密度でターゲット達に襲いかかる。

一体は、もろに弾の網の中に飛び込みその身を爆散させた。

残る一体は、うまくその網から抜け出した……が、右手に握っている流星／雷を振るい、両断。

次、攻撃型ターゲット2機、移動型ターゲット3機

撃破と同時に次のターゲット射出の指示を出す。

今度は、積極的に攻撃を仕掛けてくる攻撃型も一緒だ。

攻撃型からのレーザーをスラスターの微細な噴射で避けつつ、刀身を鞘に収め、ライフルモードにした流星／雷を放つ。

中距離にいたターゲットを撃ち抜く、さらに距離が離れた移動型ターゲットを狙うが、当たらなかつた。

やっぱり、慣れない……

『警告、ロックオンされています』

考える間もなく、ISからの警告を聞いた俺は、スターダストの腰部、脚部のスラスターを出力し、はね上がるように跳んだ。

その直後、俺がいた空間をレーザーが焼く。

こいつは、後だ

先に移動型を叩く

先程、レーザーを撃ち込んできた攻撃型に左手の流星/疾風レーザーマシンガンモードを弾幕のように撃ち込み、牽制すると背部スラスターを最大出力で出力し、飛び交う移動型達に肉薄する。

一体目、交差する直前、鞘から抜き放ち、逆手で構えた流星/疾風で両断。

二体目、一体目を両断した直後に隠し腕で保有していた流星/疾風の鞘を投擲。

鞘自体のレーザー発生機構が短いレーザーの刃を発生させながら飛び、ターゲットに突き刺さる。

三体目、三体の内、一番距離があつたため、流星ノ雷ライフルモードを3発連射する。

1発目がターゲットを掠め、2発目は完全に外し、3発目がターゲットを撃破する。

ラスト

イグニション・ブーストを起動、高速で攻撃型と交差し、2本のブレードで切り裂いた。

「…………ふう」

…………終了

俺は、2本の流星の展開を解くと、そのまま着地する。

「お疲れさん、翔」

「ああ、一夏」

着地すると同時にちょうど模擬戦の待ち休息なのだろうか、ISを展開したままの一夏がこちらに声をかけてきた。

「休息中か？」

「そんなところ…………かな？」

「そんなところ？」

一夏の曖昧な返答に俺は首を傾げる。

「……俺への教え方で揉めたセシリアと鈴がな」

ああ、成る程

さっきから上空でやりあっているのはあの2人だったのか

俺が訓練メニューをこなしている最中、時おり、流れ弾が俺を含めたアリーナ利用者に飛び火してきたのである。

流れ弾も回避訓練に丁度よかったので何も言わなかったが………

好きな男にいいところ見せたいのはわかるが、周りに迷惑をかけるな……

内心、呆れ果てながら一夏を見る。

……この筋金入りの朴念仁には、こうでもしないとダメだと言っことはわかるが……な

俺がそう思った理由は、昼食の時だ。

昼食の時、『幕』に誘われたと言っていたのだが……それは一夏、お前だけだ。

それをセシリアや鈴、あるつことか俺やシャルルを誘って昼食会に仕立てあげてしまった。

……幕が少し落胆したようにも見えだが……恐らく一夏のせいだろう。

「やっぱり午前中もそうだったけど、すげえな。動作が流れるって言うか無駄がないってか」

一夏が、俺の気も知らずに俺の動きに対しての感想を述べてくる。

確かに他人が見れば俺の動きは、無駄のない動きであるかもしれないが……

「……まだまだだ」

S i d e o u t

S i d e 一夏

「まだまだって……アレでか？」

ISでの戦闘経験がまだまだ足りていない俺から見ても翔は、かなりの腕前だと思えるのに……何でまだまだなんだ？

俺は、首をかしげていりと翔が口を開いた。

「距離が離れる事に射撃の精度が悪い。それに射撃時のスラスト
―機動も直線以外や中距離まではいいが遠距離での奴に対しては回避だけで体勢が崩れる」

「射撃が？ ……もしかして翔って元々、近距離戦主体なのか？」

翔の愚痴に近い話を聞いて俺は、思った事を口にしていた。

「ああ、そつだ。射撃戦は、あくまで剣が届かないアウトレンジの対策だ。……父さんが戦闘機乗りだったからな射撃はそつちから使える程度には習った」

なるほど……

俺は、納得した。

それと同時に羨ましいと思った部分もあった。

俺のIS、白式はどんな気遣いだろうか、格闘兵装の刀『雪片式型』
だけしか装備されていない。

おまけに追加武装である後付武装の処理容量も使っているらしく、

射撃系の兵装が追加できないのである。

だが、この雪片式型は、シールドエネルギーを転化する事で相手のシールド、レーザー等のエネルギー系を断ち切る『刀』と化す。

この能力は、『零落白夜』と呼ばれ、活用すれば、一撃で相手を倒せる白式だけの最強の武装。

……だが俺自身が使いきれていないのか、エネルギー切れで戦闘不能となる事が多い。

自分の腑甲斐なさを褒めるわけではないが、せめて1つぐらい射撃兵装があればと思いたくもなってくる。

「そうなのか……ああ、俺の白式にも射撃があればな」

「？ 一夏、お前のISには射撃兵装が積まれてないのか？」

俺の呟きに翔が不思議そうに首をかしげた。

「ああ」

俺は、雪片式型を展開し、翔へと見せながら説明する。

「この雪片自体がシールドエネルギーを転化する事で相手のシールドを無力化して一撃叩き込む事ができるんだが……その処理に後付

用の容量を使っているせいで射撃兵装の追加ができないんだ」
「…………灰汁が強い兵装だな」

流石の翔も理解できないと言った感じで言葉を返してくる。

「まあ、千冬姉からお前は、一極を極めるのが向いているって言われた事もあって基本的にセシリアと鈴からは動作の指導を受けてるんだ」

「なるほどな…………」

それだけ聞いて少し考え込むような仕草をとる翔。

と数舜後に口を開いた。

「なら、俺と模擬戦やってみるか？」

「えっ？」

いきなりの提案に俺は、間抜けな声を漏らした。

「模擬戦ってより、近接戦時の細かい動作の指南みたいな事をするだけだ」

それなら有り難いのだが…………

「だけだよ…………俺だと確実にフルボッコされて終わる気が」

午前中の動きを見たら速攻でやられるような気がする。

「フルボッコ……安心しろ、午前中にも言ったが俺は、ただイラつきなんかの一時の感情で力を振るう奴だけ『斬る』。それだけだ」
それだけ言うと翔は、長刀のブレードだけ右手に呼び出し、宙に浮かぶ。

「……大丈夫だよな」

一抹のやな予感を抱きながら俺も翔のあとを追う。

S i d e o u t

S i d e ? ? ?

一夏と翔の模擬戦を見つめる人影がいた。

へえ、あの子。なかなかの腕前じゃない

視線の先には、彼らが高速で交わるように交差、もしくは剣と刀でつばぜり合いを行っている姿がある。

だが、次第に翔が一夏を圧倒し始める。

一夏が刀を振るった瞬間に脚部スラスターと翼のスラスターを微細に吹かし、刀が触れる間もなく軽やかに避けたり、一気に高度をあ

げて上段から降下しながら斬りかかったしている。

マニュアル制御の感覚も微細で……高度をあげて上段から斬りかかることで剣自体の重みも攻撃力へ変えてるか……

私は、笑みを讃えたまま見ている。

と……

『会長、まだ観察中なの〜』

私に向けられたオープン・チャンネルからのほほんとした声が伝わる。

それを少し笑みを残したまま答える。

「相手をよく見るのも1つの策よ、本音」

『でもでも〜、噂に〜なるほど〜強いみたいですよ〜』

「ええ、今も見ているけど『おもしろい』よ、彼は」

私は、改めて笑みを浮かべながら彼らの動きを追う。

やがて、模擬戦が終わったらしく彼らは、下に降りてきた。

「そろそろ、いく。記録を頼むよ」

『りょうかい〜』

オープン・チャンネルでの通信を終えると私は、わざわざ『借りた訓練機、打鉄を起動し、彼らのもとに歩み寄る。』

彼女の目的……それは、過去2年以降がデタラメな経歴を持つ、『櫻井翔』を探るためだ。

Side out

Side 翔

数度の斬り合いとつばぜり合いを交えた模擬戦を終え、俺達は、地面に着地した。

「つうくまだ、手が痺れてら」

後半から防戦一方になった一夏が右手を左手でおさえている。

無理もないと俺は、思った。

途中、振り抜いて来た彼からの一撃をマニュアル制御を使って避けてみせたり、踏ん張りが無い空中での『戦い方』を実践してやったのだ。

IS自体、『PIC』と呼ばれる慣性コントロールシステムによって空中での加速や停止が行えるが、やはり体全体を軸にするもしくは足や腰に力を入れる必要がある剣などの格闘兵装の威力が地上と比べカが入れにくい分、弱くなる傾向がある。

先ほどの模擬戦でもイグニション・ブーストを使っていない時の一夏からの斬撃が少しばかり弱い感覚があったが、恐らくそれが原因だろう。

この問題を解決する要素は2つほどある。

1つは、『速度』。

これ自体は、車を想像してもらえれば分かりやすいかもしれない。

ある程度の質量を持つ物が速度を持つとその分だけ力を得る。

実際の衝突事故を見ると普段、人間が叩いたぐらいでは軽いへコミぐらいしかつかない車が、『簡単』に粉々となる程の威力を速度は生み出すのだ。

この事自体は、基本的なISの格闘戦術にも盛り込まれているため誰にも使える。

実を言ってもう1つ方がさらに威力をあげる事に直結するのである。

もう1つの要素とは、『高さ』である。

我々、人間は、高い所から落ちると大抵の場合、体表面から体内にかけて破壊され、死が訪れる。

言い換えれば、高さ自体が一種のエネルギーを持ち合わせており、それが物を動かすエネルギーへと変換した場合、かなりの力が生まれ、それが『人体を破壊』するのである。

さらに質量があり、あらかじめ落下方向への『速度』があった場合、その破壊力は、倍増する。

つまり、IS自体もある程度の高度から急加速による降下しながら斬りかかれればかなりの威力を持つ事に至るのである。

純粋な打撃兵装や斬る事を目的としていない武装ならそれだけでもかなりの破壊力をもたらす。

そして、俺達のように武装が刀やブレードの場合なら刀身を水平にして垂直落下するか斜め上から斜め下に斬りかかるようにしなければ断ち斬る事が出来ないが、もし完全にそうした場合、『断てぬ』ものはない。

ただし、高さの場合、避けられたりすると『高さ』と言うアドバンテージを失う、高度によつては地面に激突と言うデメリットが発生、さらには高さ自体を武器にすることは、『自身にもダメージ』を伴う事なので短期決戦にしか使えないと言ったりスクを伴う技でもある。

そんな技を押されたとはいえ、受け止めた一夏は、『素質』のようなものがあると俺は、思う。

とは言え、流石にゆっくり教えていけばいいものを一夏に叩き込むようにやってしまった事は気まづかった。

「……すまない」

「気にすんなって、なんて言うかシツクリきた模擬戦だったぜ。やっぱり、同じタイプだからか、俺達は？」

一夏が首を傾げている。

「そうかもしれないな。あと、お前に教えないといけない事が見えた」

「俺に教える事？」

「ああ。一夏、お前の場合は、マニュアルでの制御が出来ていない部分と斬撃の威力が若干悪い」

「マニュアルと踏み込み？」

「そうだ。マニュアル制御の方は、機体制御の方だがこれまで以上に細かい動きが出来るようになる。まあ、これは高機動射撃戦闘で一番重要になってくるから格闘オンリーの一夏には必要ないと思っただら、コーチの彼女達は」

「へえ〜そんなテクニクがあるのか」

「……あると言うより、慣れが必要だ。一夏、この制御は簡単に言えば『片手でフライパンを火にかけ』ながら『もう片手で爆弾解体』をやっているものだ」

「……ハイッ？」

例えに目を白黒させる一夏。

一夏、あんな例えを出したが……慣れるまではそんな『地獄』は当たり前前だ

そう思うのも実際、俺も訓練機に慣れ始めた頃に父さんが外部から機体制御を勝手にマニュアルにされた時である。

その都度、コントロールミスで墜落、攻撃タイミングがズレたり、中でも酷かったのは機体挙動に振り回されて生傷が絶えなかったことだ。

それぐらいの『地獄』がマニュアル制御で当たり前となっていた。

だが、慣れてくれば戦略幅もオート制御時よりも増やす事ができた。感謝している部分もあるがあの頃の事を思い出すとトラウマしか蘇らない……ような気がする。

「……そう言った制御に慣れておけば戦略的にも、咄嗟の回避行動にも使えるから習得しておいた方がいい」

そのトラウマの欠片に振れかけたのを振り払うように俺は、一夏に提案する。

「なんか大変そうだが、わかった」

納得したのか、納得していないのかわからないが一夏は、首を縦に振る。

「よし、まず……?」

俺は、誰かの視線を感じて言葉を切る。

「どうした翔？」

「いや……あつ、お前のコーチ達が」

「さあ、一夏さん、私が指導しますから行きましょう」

「ブウ……あと一息のところを」

一夏の下にようやくどっちが今日のコーチをするか、決着をつけたセシリア達が来ていた。

「今日の訓練はむりだが、後でお前の部屋に寄る。詳しい話はそっちで」

「わかった」

そう言って一夏は、セシリア達の方に向かう。

その後ろ姿を見送り、感じ取った視線に振り返る。

振り返った先には、訓練機、打鉄を纏った女子生徒がいた。

ただ顔は、訓練時に頭を物理的に守る訓練用バイザー付きヘルメットでよく見えない。

なお、右手に保有している兵装は槍だ。

なんだ、こいつ？

しかもあまり使用しない訓練用ヘッドパーツを使用して……もしかして顔を見られたくないのか？

俺は、見た瞬間から内心、疑問に思ってしまう。

訓練用のヘルメットは、実際のところ特殊な環境での頭部への外傷保護の名目で使われる。

そんなものを使うとなると俺が一夏に顔を見られたくないか、もしくは何か事情があると考えられた。

「邪魔しちゃったかな？」

バイザーで表情が窺えない女子生徒がそう言葉を紡いだ。

「いや、丁度、話が終わったところ」です」

返答にあえて最後を丁寧な言い方にしたのは、歳上の可能性があったからだ。

「そう、ならお姉さん、転校生さんに頼みたい事があるんだけどな」

とやはり歳上らしい女子生徒が僅かに笑みを感じる口調で俺に頼み事をしてきた。

何かの探りか？

……面白い

突拍子にしかもストレートに問い掛けともとれる言葉に俺は、警戒しつつも受ける事を決意する。

「……何が御希望です？ 例えば、『模擬戦』ですか？」

そう俺が言葉を返すとその女子生徒が笑ったように見えた。

「おや、わかってしまったかね。 実を言うと君に興味があってね、だからお姉さん、一度、戦ってみようと思って」

最後の方は、演技も混ぜているのではないかと思うほど無邪気に答ええている。

「わかりました。……ですが転入して初日に手の内をすべて明かしたくはないので、機体に3回攻撃を『当て』たら勝ちと言うことで宜しいでしょうか？」

「うん、持ちかけたのは私だからね、それくらいは認めないかね。

「いいよ」

また、笑ったように見えた。

「では……」

そんな彼女を尻目に俺は、距離を置くと鞘に入れたままの流星／雷を展開し、両手で構える。

相手は、構えなど一切とらずにただ右手に槍を持っているだけである。

嘗めてる……わけないか………なら俺は、ただ斬るのみ

その姿に一瞬だけ思考を巡らせると俺は、スラスターを使わない『自足歩行』で彼女に迫り、ブレードを振り降ろす。

グッ！

完全に振り降ろさないうちに、俺は流星／疾風の鞘を流星／雷から離れた左手に呼び出していた。

まさに咄嗟の判断であり、一瞬の勝負であった。

俺が降り降ろした流星／雷を彼女は、構えない状態から『片手だけで持った槍』で流星／雷の鏢を弾くように叩いて剣撃の機動をそらしながら俺の手から流星を離さる。

そのまま槍は、左手も槍に添えられ、槍の大半を占める柄を振るってくる。

それを流星／疾風の鞘で流すが、回転がぶれないまま一回転してきた刃が付いた先端部が左肩部装甲を叩く。

一撃目

さらに返す刃で俺の左手を叩き、流星／疾風の鞘を落とさせる。

二撃目

チィ！！

最後の一撃が入る直前に俺は、痺れが残る左手を拳に変える。

三撃目

彼女が僅かに距離をおいた直後、顔への容赦ない神速の突きが放たれる。

勝負ありだね

最後まで口元の笑みを崩さなかった彼女がそう言っているように見えた。

まだだ！！

それを俺は、左手の裏拳で槍柄の腹を殴り付けて弾くと……

「雷いかづち！！」

弾かれ、手を離れた時から展開を解いていた流星ノ雷を再展開、下段から斜め上に斬り上げる。

それは、彼女の左腕を叩いたが……

「グガア……ッ」

その直後、彼女からいつの間にか空いた右手からの掌打をモロに喰らい、吹っ飛ばされた。

S i d e o u t

S i d e ? ? ?

最初の攻撃を防がれたのと槍を殴って刺らしたのには驚いちゃったけど、最後のは予想できてなかったようだね

私は、笑みを絶やさないまま彼を見る。

吹っ飛ばされた彼は、脚部のスラスターを使ってうまく着地したらしく、体勢を崩さないままこちらを見ている。

やっぱ、できる子かな？

「……ありがとうございます」

「いえいえ、お姉さんの方も付き合ってくれて感謝、感激」

私は、洒落を混ぜて礼を述べてきた彼の言葉をはぐらかすが……次の言葉には、笑みが固まった。

「……今度は、お互いに本気」で戦える機会があれば、また」

「……それは、どう言う意味かしら？」

固まった笑みのまま彼に言葉の意味を問う。

「……『先輩』ならもっと早く動けると思った事と、槍が防ぎに入る時、叩きつけると言うよりも『縁』に沿って弾くような動作だった……つまり、貴女の本場の『機体』は、もっと『軽量』で槍の部類で広がりを見せる『ランス』が主要武器何じゃないかと推測いたしました」

わお、バツチリ当りだね

翔の洞察力に私は、舌を巻く。

確かに私の『専用機』は、翔が言うように軽量で主兵装がランスだ。

ここまで見抜かれちゃうとは……お主やりおるな

と冗談じみた事を考えながら私は、口を開く。

「……そうだね。今度、会った時には全力でお相手しよう」

「……ありがとうございます。ただ……」

「ただ？」

彼の返答に今度こそ笑みを崩した。

「左腕に受けた『打撃』を治してからにしてください」

「……!?!?!」

「……では、失礼します」

バイザー越しで表情がわからなかったらしく、そのまま翔は、立ち去る。

……ちよちつと過小評価、してたかしらね

そう思いながら左腕を押さえるのは、彼が繰り出した最初で最後の
一撃は、ISを纏っていても痛かったからだ。

まあ、何にせよ。悪い子じゃないみたいね……次を楽しみにして
いるよ、櫻井翔……いや、『謎の翔君』

最初とは違う意味の笑みを浮かべながらヘルメットを脱ぐと私もI
Sスーツから制服に着替えるため、カタパルトも併設されているピ
ットへと向かう。

その姿を見た周りの女子生徒達は、口々に『学園最強』の称号を持
つ彼女の名を囁いた。

その最強の名は……

S i d e o u t

S i d e 翔

1年生寄宿舍寮

夜になり、少し早めの夕食を食堂済ませた俺は、割り当てられた部
屋の前に立っていた。

……と、この部屋だな

俺は、番号を確認しながら鍵穴に渡された鍵を通すと鍵を開ける。

開い……………一応しておくか

扉を開く前に短く二回、ノックをする。

流石にあり得ないと思うが、もしルームメイトが女子だった場合…
…世にも恐ろしい事が待っている……

企業での『トラウマ』を思い出しながらそう覚悟しながら少し待つ
と……

『誰?』

「シャルルか、翔だ」

『あつ、うん。開けるね』

ルームメイトになったシャルルが扉を開け、俺を向かい入れた。

「さっきの鍵、開けた音って翔だったんだ」

「ああ、そうだな。これから1年よろしくな」

「うん、よろしく」

俺達は、話ながら部屋の半まで足を運ぶ。

「翔は、座つてて、いま食後の休息に紅茶を淹れるところだったから」

「わかった」

俺は、シャルルの言葉に頷くと椅子に座る。

少ししてシャルルが俺の分と自分の分を持って机に付いた。

「はい、どうぞ」

「Thanks」

俺は、受け皿に手をやりながら紅茶が入ったカップを引き寄せると軽く一口、口に含む。

美味しい

仄かな甘味が口の中に広がる。

「口にあつたかな？」

「ああ、旨い」

「よかった」

そこで2人共々、少し笑う。

それから同じ転入生が同室になった特権が、少しクラスの印象や一夏が鈍感で会った等話し合ったりと雑談を交わした。

その中で……

「そう言えば、シャルルのファミリーネームの『デュノア』ってあの？」

「あっ、う……うん」

俺の言葉にシャルルの表情が少し曇りを指したことを見逃さなかったが、俺は、気付かないふりをして『彼』の話聞く。

「僕の実家で、父が社長をしているんだ」

やはりか……なら目的は……

デュノア社は、フランスのIS関連の技術企業であり、今日の訓練で山田先生が使用した第2世代機『リヴァイヴ』もデュノア社で製作された量産機。

そして、量産機のシェア世界第三位の位置付けとなっている。

だが……

俺は、日本の企業に一応、属しているから知っている。

今現在のデュノア社が置かれている状況を……

「ならシャルルは……」

「！」

俺が不自然に言葉を区切るとシャルルの表情が強張る。

そう固くなるな、大丈夫。今は、問わない……『君』がどんな存在
だろうとな

「デュノア社では、テストパイ（テストパイロット）をやったの
か？」

「……えっ？」

俺の言葉にシャルルの表情が愕然としたへと変わる。

「だってそうだろ？シャルルは、男で最近まで出てこなかったんだ
からな。どうせ、一夏のような奴が現れたらそれに便乗して世に
出す気だったんだろ」

俺は、その姿に少し苦笑しながらわざと呆れた表情でシャルルに応じる。

「あ、うん」

「よかった。俺もテスパイやってたんだ……………ただし、女装して」

「エエッ!？」

俺の暴露話にシャルルが声をあげた。

悪いがこれはマジな話だ。

『この世界』に来てから2年間は、中学に通いながらうまく日本の企業に潜り込んだ父さんの職場に足を運んで暫くは『女性』パイロットとして活動していた。

俺の世界では、すでに起動に必要な要素を解明しているものの、それによる世界観への影響が悪い方へ傾けられると考えられたため『女』として活動していた。

そして、初の『男でISが使える』織斑一夏の登場により、俺は正体を明かし、当初の予定通り専用機持ちとなったのだ。

「色々あるからな……………いい経験でもあったが……………神経を使った」……………」

シャルルから冷たい目で少し見られている。

正直痛い……父さんどうすればいいんだよ……

俺がそう思った瞬間であった……

「……クス」

「ん？どうした」

シャルルが小さく笑う。

「だって、翔の表情、完全に困ったような表情になったから」

「えっ？」

「翔……今日、君を見てて思ったんだけど、言葉は楽しんだり、おちよくったような話をするけど、そんな表情を露にして困らせたようにしたのは初めてだよ」

「……そうなのか？」

「翔？」

俺は、不思議がるシャルルを他所に軽く額に手を添える。

露にしたのか……今、俺は……

喜ばしい、事ですなマスター

頭に急に『声』が響く。

ISのプライベート・チャンネルとは明らかに違う、機械によって合成された声が俺だけに響く。

……そうでもないさ『アストレイア』、父さん達が望んでいる形までまだ遠い……

もう一つの『相棒』に俺は、そう返した。

「翔……？」

「ああ、すまない。ちょっとした考え事だ」

「……あつ、その……ご、ゴメン」

「いいや……まあ、何にせよ。……これからよろしくなシャルル」

「……あつ、うん。よろしく」

俺の言葉にシャルルが柔らかく笑みを浮かべる。

この先いろんな事があるかもしれないだが、俺が知らない事を『形作る』ためにも……『楽しむか』

そう思いながら残りの紅茶を啜り、明日からの生活に備える。

第5話始める事、そして疑惑（後書き）

セシリア「私達をまた！」

鈴「除け者にして！！」

虚空「グバア！！」

翔「やれやれ……あんま、虐めすぎると蓄えているネタで死ぬ事になるぜ」

シャルル「例えば？」

翔「えつとな……ネタ参照にしているのはTY E-R、装

甲悪 村正、COD、マ ラブ、ユニコー なんかな」

一夏「いろんな作品があるな」

翔「だが、覚悟しとけ……いません出した作品は、人がある種、ヤバイことになるからな」

一夏、シャルル「えっ？（汗）」

オリジナル機設定（4月19日追加）

形式 JQE35X-01

名称 Star Dust

スターダスト

日本語表記 星屑

開発系列 純国産次世代型試作IS

開発者名 開発者本人の要望により記載せず

担当試験運用者名 櫻井翔

本機体スターダストは、白式と同時期に開発が進められた機体。

ただし、要求性能に達しなかった事。

さらには具体的な特殊兵装プランが浮上しなかった事から開発が一時凍結されていた。

それが翔の父親が開発チームと合流したことにより開発が再開、完成した本機は今現在、実戦データ会得のため、2人目の特例個体、櫻井翔の専用機として試験運用中。

本機体の特徴は、すでに開発されていた機体フレームに欠陥試作品と烙印されていた試作パーツ類を新技術によって改良し、組み込んだことである。（この点からも愛称が星屑、スターダストとなった

由来である)

特背部の試作高推進可変大型スラスタは、装甲のスライドと展開度によって推進力の調整、独立した慣性サポートシステムとして稼働、さらに更なる高出力化をする事ができる。

(この一部の技術は、後に第四世代に使われる)

両肩のユニットもアーマーとしての機能を持たせているだけではなく、咄嗟の管制移行が必要なものの隠し腕として機能するようにしてある。

なお、機体の形式は

Japan (日本で生産された)

Queen (女王のため)(女性の)

Extended (拡張された)

generation 3.5 (第3.5世代) X-01 (試作1号

機)

の略である。

機体イメージ

ガダム試作三号機ステインメンとACERアルファートを足して割ったような形。

初期兵装

多目的全領域対応試作兵装『流星』ミステリア

この武装は、鞘ユニットとブレードユニットから成る。

鞘ユニットとブレードユニットの組み合わせにより、様々な攻撃機能を発揮する。

だが、兵装自体の処理容量が本来、後付武装イラコザの処理に使われるはずの容量も使っているため後付武装が装備不能。
(ただし、スターダストに割り当てられたコアはその気になれば他の武装を取り込みたいらしい)

さらに取り回しと携帯性も考慮し、信頼性がやや欠けるものの小型がしやすい光学兵器も並装。

その結果、戦闘を行う上での基準はクリアしているもののエネルギーを喰いやすい構造となっている。

特殊兵装

特殊刀身『サンクチュアリ』
戦闘中にありうるエネルギー不足を解消する為、考えられたのが流星の刀身、特殊刀身『サンクチュアリ』である。

機能を発動させた刀身は、爆発系、エネルギー系、フィールド発生系のどんな『エネルギー』でも『喰らい』、自分のエネルギーとする事が出来る。

また、吸収したエネルギーを射撃ガンモードから放出、もしくはブレードから放出する事で、一撃の攻撃力を高める。

だが、『サンクチュアリ』は、喰らう際に自身のシールドに接触させないようしないと自分のシールドエネルギーを喰らう事になる。

さらにはエネルギー容量の限度、放出時の刀身へのダメージ、そし

て特質上、刀身で攻撃を受ける、もしくは当てる必要があるため、使える状況に限りがある。

なお、翔自身が剣を使った近接戦を好んでいるため、射撃戦よりも近接重視のセッティングが成されている。

基本形態

鞘をつけた状態と抜き身状態に別けられ、両状態でも使用可能。

大型ブレード『流星/雷』いかづち

大型直刀タイプのブレード。

射撃モードガン

鞘を付けることでレーザーライフルモードへ移行、収束率が高い、一撃を放つ。

翔は、主に抜き身での使用が多い。

小型ブレード『流星/疾風』

小直刀タイプのブレード。

射撃モードガン

鞘を付けることでレーザーサブマシンガンモードに移行、バラまきや連続的な攻撃を行うことが可能となる。

翔は、牽制にも使えるサブマシンガンモードでの使用が多い。

合体形態

2ユニット合体

ブレード+同鞘ユニット

ブレードの柄尻部分に鞘ユニットを連結する事でエネルギー吸収効率をあげ、実体剣の両刃薙刀での使用が可能となる。

雷なら薙刀、疾風なら投擲可能なブーメランとなる。

ブレード+別種鞘ユニット

上記と同じくエネルギー吸収効率をあげるためにもあるが、組み合わせにより薙刀、実体剣とレーザーブレードの両刃薙刀とすることができる。

疾風+雷、鞘ユニット

薙刀

雷+疾風、鞘ユニット

実体、レーザーからなる両刃式薙刀

3ユニット合体

3ユニット合体は、鞘ユニット2つとブレードユニット或いは、ブレードユニット2つと鞘ユニットからなる。

鞘ユニット2つとブレード。

ユニットとの合体では、銃系統。

ブレードユニット2つと鞘ユニットでは、近接でのサンクチュアリ、エネルギー吸収能力を特化させるモードであるが……範囲が

。 広すぎるため、自身のシールドを削りかねないのが欠点である。

最終形態

すべてのパーツを使ったユニット合体である。

二種類ある形態から翔は、『剣』を選択している。

流星ノ終乃型 『死兆星』

(ミーンティア ファイナルモード『アルコール』)

流星をすべて連結させた大型ブレード形態。

この形態では、吸収したエネルギーを最大限に開放させることができ、吸収容量も最大のモノとなる。

また、重量自体もかなりのものとなるため、『サンクチュアリ』を発動していない場合でも重力落下による攻撃の威力があがる。

ただし、現段階で露見しているような欠点を同時に持ち合わせているため、『一撃必殺の特攻仕様』とも

揶揄されることも。

欠点

1. パーツ連結時、無防備になりやすい。
2. 最大開放時の装備自体のダメージは各形態時よりも高く、下手すれば大破する。

形式 JQ2 Type01C

名 打鉄壱式

開発系列 純国産IS改良型試作機

本機、打鉄壱式はすでに日本の防空戦力として配備されている打鉄を少ないコストにて第3世代並みの性能へとするプラン『アマテラスの輝き』構想によって生み出された試作機。

開発元はスターダストを設計した研究室であるものの白式が開発された研究室にて製作中の打鉄壱式とは姉妹機関係の系列機として位置づけられている。

本機の特徴は打鉄のフレームをベースに増設、改良が加えられている点である。

打鉄の特徴であったスカートアーマーを形状を流線形のスリットスラスタ^{スラスタ}内蔵のアーマーへと変更。

胸部には追加装甲、両肩部にバックスラスタ^{エネルギーバック}、背部に大型増槽内蔵のスラスタが増設。機動力強化と稼働時間延長、IS機同士のドッグファイト能力強化が行われている。

また、増加した装備重量と機体強度強化の為、各間接部が強化されている。

現在、日本自衛軍 第八テストチームにてテスト運用がなされ、フロンティア事件の際には特命として
実戦投入がなされている。

主人公設定（3月9日追加）（前書き）

虚空「遅れ馳せながら追加で主人公設定を投稿します」

一夏「ひっぱり過ぎじゃねえ？」

翔（女装）「また遅れてんだろ？本編ので……」

一夏「つて、その格好……」

翔（女装）「とある感想板でやられた……」

シャルル「あはは……」

鈴「キャハハハアアアア（笑）（^ ^）」

主人公設定（3月9日追加）

櫻井翔

（さくらいかける）

アイカラー 真紅

ヘアカラー 黒

Age（年齢） 15（？）

（外見ベース、TOF主人公
アスベル）

所属 IS関連企業試験運用者 IS学園 1年1組

部活

IS学園生徒会所属

同じ生徒会所属の本音よりも仕事ができるので本音の分も仕事を押し付けられる。

本作、オリジナル主人公であり、別世界の出身。

性格は、冷たいものを感じさせる部分があるが話し掛けてればそうではない温かさを持ち合わせている。

ただし、彼は表情の変化が乏しいため誤解や冷たい奴と思われることもしばしば（これでも5年前よりかはましと、彼を昔から人物達
は言う）

なお、『カケル』と名付けられたのは当時、両親が所属していた部隊に保護されてからである。

未確認情報

保護直後は、女性の裸を見ても罪悪感も感じなかった。

また、保護されてから部隊長であったあだ名『豆狸』と呼ばれた人物より様々な『常識』を教えて貰ったらしい。(ただし、日常や正しい常識は両親から)

特に苦手なものは無いが、本気でキレた、両親とカケルの戦闘技術を教え込んだ1人『白い魔王』が恐ろしいらしい。

また日本由来のオバケが苦手。(ただし、霊のようなものは普通に接する)

能力

企業に属していた事もあり、IS関連の知識は豊富、今現在も自分の専用機整備のため整備学科に出向いて知識を会得中。

一般科目においても数学や科学関連及び英語も得意の部類に入る。

一方で古典や日本史等に対しては出身世界の感覚から苦手としている。

(それでも日本の文化圏に順応しているのは両親のおかげ)

倫理に対しても無宗教に近いもののある1つの宗教に属していることとなっているため、普通に受け入れている。

料理や家事関連も一通り行えるようになっている。

戦闘スタイル

基本的にどこかで学んだ二刀流の構えと父親や知り合いに稽古を付けてもらった格闘戦術の2つを主体とした近中高速機動戦。

近接戦以外の距離に対しては父親の指導で会得した射撃で対応する。

使用武装と持ち合わせている技能からオールマイティーともとられがちだが、実際は近中の機動戦が得意であり、遠距離や濃い弾幕を張ってくる相手をやや苦手に、防御特化の敵に対しても苦手意識がある。(ただし、流星の特性によってエネルギータイプは強い)

また、彼の身体には秘密があるらしく金色に染まる眼と肉体の『修復』フリッシュ・アップ・メモリーには、本人の意識において苦しめている素となっている甦る血の記憶^{フリッシュ・アップ・メモリー}……これらが指し示すものとは一体……

主人公設定（3月9日追加）（後書き）

言い訳という疑問解答

（名前について）

一夏「なんか……櫻井つながりのような気が……」

篤「うむ……しかも主人公が読み方が違うとは言え……日本……」

シャルル「何でこうなっちゃったの作者さん？」

虚空「……バカやつちゃったんだよ（汗）」

ラウラ「バカやつた？」

虚空「ああ……主人公名決める時、『カケル』って決まってたんだが……偽名でもあるファミリネームをどうしようって考えた時、綴りや響きのいい感じだったから『櫻井』にしたんだ……」

セシリア「……カケルさんの名で検索をかけたら同時に引っかけたのですのね」

虚空「ああ……さらにこの設定作る時に外見ベースが合った方がいいと思つて、一番イメージに近かったアスベルをベースにしたんだが……」

鈴「……それも声優さんでぶちあたっちゃったわけね」

虚空「ああ……情けなさすぎだ」

千冬「まったく情けない」

一夜「そうですね」

山田「はははは……」

こんなダメ作者ですが、
今後も宜しくお願いします

第6話 OverHeat 怒り心頭

1年生寄宿寮

Side シャルル

カーテンの隙間から朝日が漏れだしている。

朝が来たのだ。

僕は、カーテンの隙間から漏れだした光で目が覚める。

「……………う、うん！」

ベットから抜け出すと軽く背伸びをして体を慣らす。
慣らし終わると僕は、隣のベットを見る。

えっと、カケルは……………まだ、寝ているよね……………うん、よしっと

僕は、カケルを起こさないよう、細心の注意をはらいながら着替える始めた。

部屋着としていたジャージを脱いでから再び『色々』と身に付けて、制服に袖を通す。

これでよしと……………カケルは……………どうかな？

着替え終わった僕は、静かにカケルの枕元に近づいた。

カケルの寝顔は、同室になってから一週間近くで何度か見てるが、いつも少しいか表情の変化を見せない彼の寝顔は柔らかいものを見せる。

カケルには、もうわかっちゃっているのかな？

僕の『正体』が……

カケルのその寝顔を静かに見ていた僕は、つい思ってしまった。

自分の秘密、それは知られて欲しくはない………が、カケルは、一夏が一緒に着替えようと言いつけてくるのを適当に理由をつけて僕と別々に着替えるようにしてくれている。

それに部屋でも一度、上半身の裸で浴室から出てきた際、僕が抗議してからはそんな格好で出てこなくなってくれた。

それに僕がこうやって着替え終わった直後に……

「……………うっ」

カケルが身を振り、薄く目を開きはじめる。

「ッウ！ お、おはよう……………」

「朝か。……………おはよう、シャルル」

完全に目を開いたカケルがベットから体を起こしながら挨拶してき
た。

そんな彼にいつもどきまぎさせられる。

何故なら……自分の着替えている姿を見て、着替え終わったのを見
計らっているんじゃないかと思えるタイミングでいつも彼は、目覚
めるのだ。

本当のところ、どうなのかと聞いてみたい気分にも囚われるが今は聞
けない……それは、自分から『秘密』を明かすことだからだ。

S i d e o u t

S i d e 翔

毎朝、大変だなシャルル

毎朝、シャルルが先に起きて、何をしているのかを俺は、すでに『
知っている』。

何故ならシャルルが起きる頃には、俺も目が覚めているからだ。

だが、シャルルなりの事情が存在するだろうと考え、俺は問い詰め
ない。

むしろ、シャルルの方からいつか話してくれる事を信じていたからだ。

「少し待っていてくれ、すぐに支度する」

「う、うん」

シャルルが顔を洗うだけでないであろう、洗面所へと消えたのを確認すると寝間着を脱ぎ出す。

気を使いますね。マスター

制服へ着替えを進めていると、頭に『声』が響く。

仕方ないだろ。アストレイア、『あの子』はもしかしたら『スパイ紛い』な事をさせられているのかもしれないんだ、下手にバレているっていったら何しでかすかわからないだろう……無論、暴き立てる気もない

それは、あなた自身の『過去』の経験からですか？

その言葉に少しだけベット脇に置いてある相棒達を見つめた。

1つは、物言わぬ待機状態のスターダスト。

そして4年前、父さんが造り上げ、渡された最初の相棒、『アストレイア』である。

外見は、表面に十字架のようなマークを描く蒼いスリットスクリーンがあらわれた白が基本色の中折れ式携帯電話だ。

だが、それは仮初めの姿であり、機能を最大限に発揮させれば俺を手助けしてくれる『ツール』でもある。

さあな………何か『上からは』から言ってきたか？

いいえ、何も

そうか、なら今後も頼む

Yes sir

着替えが終わるとベット脇に置いてあるスターダストを左手に嵌め、アストレイアをポケットへと忍ばせる。

そして、軽く手で髪を整えるとシャルルに呼び掛ける。

「よしとシャルル、食堂に行くか」

「うん、わかった」

俺の呼び掛けにシャルルが洗面所から出てきた。

俺達は、そのまま部屋を出て食堂へと向かう。

食堂

朝、しかも始業前という事もあってか制服を着た女子生徒達で食堂は溢れかえっていた。

俺とシャルルは、それぞれ日替わり焼き魚定食と洋風朝食セットのトレイを受け取り、席を探している。

と……

「あっ、一夏達だ」

「ああ。ちょうど2人分、席が空いてるな。彼処にするか？」

「そうだね」

席の空きを見つけた俺達は、一夏達の方へと歩み寄る。

「一夏」

「ん？ああ、翔とシャルルか」

「うん。おはよう、一夏、オルコットさん、シノノさん」

「おはようございます、櫻井さん、シャルルさん」

「……おはよう」

一夏と同席していたセシリアと篤が挨拶を返す。

「その席、いいか？」
「いいぞ」

俺達は、一夏の隣に座る

「……いただきます」
「いただきます」

食事でありつける感謝を込め俺は手を組みながら、シャルルは、手を合わせながら礼を捧げ、食事を始めた。

食事をしながら俺達は、一夏達と雑談やこの先の訓練についての話をしていく。

だが、ここで筈とセシリアがどっちがコーチをやるかで揉め始めた。

「……一夏さんは、まだターン機動が甘いですから……」
「そんな事よりも格闘戦だ。こやつはこの3年で弛んでいる。徹底的に叩き直す」

「今の一夏さんに必要なのは、確実に相手を自分の間合いに入れるようにする事……ですから筈さんの訓練は後回しです」
「なんだと……！」

そんな光景を見て俺は、ポツリと言葉を漏らす。

「両手に花……だな、一夏」

「……!?」

「？、何のことだ？」

一夏……お前、斬り殺されても知らないぞ

俺の一言に筭とセシリアは、目敏く反応したが当の一夏はと言いつとポケットとした表情で首をかしげている。

「な、な、何の事で、ですか。櫻井さん」

「う、う、うむ！何が花などと……」

「じゃあ、僕らが一夏と『付き合っちゃって』いいんだね」

「……！！」

ナイス援護、シャルル

このシャルルの応変さには思わず少し笑みを出してしまう面白さだ。

「な、な、な、な……」

「男同士で……は、は、は、破廉恥ですわ……！！」

当然、意味を履き違えたセシリア達は、声を荒げた。

そこに俺からの『追撃』が入る。

「何を勘違いしてる」

「えっ？」

「はい？」

「俺達が付き合って言うのは『訓練』に対してだ」

「……ッ！！」

俺の言葉に地雷を『踏んだ』、箒とセシリアが顔を赤く染める。

「? 2人とも風邪か？」

「... な、なんでもない（ありませんわ）」

..... どうやら箒達が『一夏』を落とすには部屋に強襲かけて『ア
レ』を..... 捧げるしかないのか？

そう思う片隅には、仕事柄や母達の話が思い浮かんだからだ。

『チビ狸』と揶揄される母さんの幼馴染みがよく先に結婚して夫持ちとなった母さんや母さんが変わる切っ掛けをくれた幼馴染み達に
対してよくそれだからかっていた姿を覚えている。

俺は、ほんの5年ぐらい前はまったく理解できなかったが、暫くして言葉の意味を知った。

以来、『家での禁句』用語に追加したぐらいだ。

そんな事を考えながら俺は、朝食を取り終え午前中の授業に備え、
移動を開始した。

S i d e o u t

I S 学園

1年1組教室

S i d e 一夏

土曜日とあるうともIS学園には、授業がある。

ゆとり教育がいけなかった、週休2日制の廃止等ではなく『完全に土曜日があるのだ。』

この野郎、何で週休2日じゃないんだ!!

せめて第二週目と第四週目の土曜日は休みにしろって言いたくもなってくるが……IS関連のカルキュラムをすべて消化するにはこうする以外、手段はないらしく午前中は講義に割り当てられている。

ちなみに土曜日の俺達、一年生は午前中、理論学習となっている。

「……によって稼働しています。なおこの機関稼働時に発生する力場が重力と干渉し、内制力場と呼ばれるフィールドを形成……いわゆるPICの機能に寄与し、ISの飛行能力、機体慣性に作用等の効果に關与しています」

「はい。櫻井君、そこまででいいです。座ってください」

今さっきの設問は、ISの機関動作についてのものであった……が翔は、省いているところもあるものの、スラスラと答えていた。

……と言うより『マニア』レベルの解答だろ!!

教科書にもかかれていない事をスラスラとしかも今回の講義担当である山田先生が『正しいよ』っていいだけに頷く仕草を少なくても

5回ぐらい見せていたほど内容が濃かったのだ。

翔は、日本の企業に属していたから知っているのもあるのか？

だが、パイロットの枠を遥かに越えた説明であったと俺は、思う。

「ええっと……ここまでで、質問はありますか？」

山田先生の言葉にクラスの中で1人手が上がった。

それは……

「は、はい。櫻井君、どうぞ」

先ほど完全な解答を述べていた翔であった。

「……これらISの技術をもし、『コア』以外の物、例えば小型ジエネレータ等の動力源によって『起動』させる事は可能ですか？」

？ つまりどう言う事だ？

俺は首をかしげるもののセシリアが呆れたような表情で口を挟んだ。

「……不可能とは言いきれませんが、ISのシールド機能を応用したアリーナを囲うエネルギーシールドは、学内に設けられた大型ジエネレータ施設によって稼働させていると聞きます。ですが、私達が使用しているISサイズまでのダウンスケール化は、現在の技術では『不可能』と言われていますわ」

成る程、ISの機能応用の事か

セシリアの説明に俺は、納得しかけていたが、翔からセシリアに何故だか知らないがセシリアよりも『呆れ果てた』ような視線が送られていた事が俺を最後まで納得させなかった。

セシリアがそのまま座ろうとした時、翔が口を開いた。

「……それはわかっているが、俺が言いたいのとは完全な『IS化』じゃない、それに近い『モドキ』の存在だ」

「『モドキ』？」

俺は、思わずそのフレーズを口に出していた。

クラス内でもそのフレーズが色々と言われ始める。

とここで……

「えっ、ええと……」

「櫻井。それは、お前が属する企業秘密にも関わらないのか？」

補助講師としてこの場にいた鬼教官こと、千冬姉が解答に悩んでいた山田先生に代わり、口を開いた。

企業秘密に関わるってどう言うことだ？

そうまた首をかしげていると翔が口を開いた。

「確かにそうですが、ISが登場する以前からISに『近いもの』の開発は進められていたと……私は思っていたのですが？」

「ふむ……」

2人の間に無言が流れる。

おいおい、……元日本代表の千冬姉にも考え込ませるまでの難儀な質問なのかよ……

不気味に思える2人のやり取りにやな汗が流れ出す。（ラウラは、嫉妬の籠った目で翔を見ている）

「まあ、いい。その話はまた今度聞く事とする……いいな、櫻井」
「わかりました」

そう言うと翔は、大人しく引き下がって席へと着いた。

一体なんのやり取りだったんだ？

俺達は、疑問が付きないが……千冬姉の言葉に疑問を止めさせられた。

「……今のお前達には理解できない事だ。そんな事よりも今は、基礎理論を形だけでもいい。言えるようにするよに覚えておけ……
……どうしても気になるなら後で『相手』にしてやる」

千冬姉は、最後の方をなんと云うか日本代表中に見せた『対戦相手を狩る』ような目付きとなってこちらを睨み付けてきた。

やべえ、キレてる！

その視線に堪えきれなくなった俺達は、その疑問を頭から追い出して、講義に集中する。

後に俺は、この時、翔が口にした言葉は『1つの未来』を表していたのではないか……と置いていられなくなってしまった。

Side out

午後

第4アリーナ

Side セシリア

私は、機体の後付兵装である特殊ライフル、スターライトmk-1わたくし——で目標を狙い撃ちにするが、目標である翔のスターダストは、野を飛び跳ねる兔のように跳ね上がり、回避し続けている。

クッ！

内心、少しのイラツキを覚えながらも冷静にライフルを放ち続けた。

ライフルから放たれるレーザーは、彼の移動先に『置かれ』、必ず

当たるはずだったがスターダストは、微細な噴かしや背中中の可動式大型スラスターの噴射で濡れることなく駆け抜けている。

ッ、それなら！！

私は、4基の自律砲台型ビットを展開、ライフル射撃に加え、オー
ルレンジ攻撃を仕掛ける。

多角直進を繰り返しながらビットが飛び、それらに設けられた砲が
スターダストにレーザーを撃ち込みはじめる。

それを翔とスターダストは、手足を振りながら各スラスターを噴射
体全体で踊るように致命傷になるレーザーだけを避ける。

まるでライトを浴びるのを嫌う役者のようだ。

身を擦つても躲しきれない残りのレーザーは、短い鞘と連結させた
長いブレードで弾きにかかっている。

ただ、すべてを捌く事はできないらしく、捌ききれなかったレーザ
ーがスターダストに当たるたびシールドの輝きが瞬く。

その行動を繰り返しつつも翔のスターダストは、自由落下をするよ
うにどんどん降下していく。

もらいまし……あつ！

体制を崩したと思える翔を畳み掛けようと私は、ライフルを放ちながらもビットに追わせるが、突如現れた人の波に阻まれてしまう。

なぜです……しまった！？

私は、なぜ人波が出来たのかがすぐに思い当たった。

土曜日は、午前中は講義があるものの午後は完全な自由時間となっているのとISを心置きなく稼働できるアリーナの解放日でもある。しかも、今月末に行われる学年別トーナメントに向けて特訓をする者そして何よりも学園内で3人しかいない男子生徒、一夏、シャルル、翔の姿を一目見ようと多くの生徒がこのアリーナに殺到。

その結果、かなりの過密状態を生んでいるのだ。

模擬戦を行っているセシリア達も他の利用者とぶつかったり、流れ弾の直撃を受けそうになったりした。

その為、翔が頼んできた模擬戦ではアリーナの高度限界ギリギリで行っていたのだが、いつの間にか高度を下げながら人の密度が高いところに降りてきてしまったらしい。

どこですの!?

ハイパーセンサー上の反応を頼りに人波の中に紛れた翔の姿を探すが見当たらない……と

『警告。6時方向、距離30に敵機『上昇』』

……後ろ!?

振り返った瞬間には、翔が目の前にまで迫っていた。

クッ!?

ビットを呼び戻す暇はない!!

私は、咄嗟に『6基』ある特殊兵装ブルー・ティアーズのウエストアーマーに装備された2つの実弾系ビット、弾道ビットを展開しようとするが一瞬先、ウエストアーマーの一部が翔の右手に握られた長いブレードで斬られた。

実際のISバトルではないので破損はないものの、機体管制がウエストアーマーへのダメージ判定を認識、ウエストアーマーの装備が使用不可能となる。

ま、まだ!!

右手のスターライトmk-111を至近距離で発射しようと翔に向けるが、向ける前に翔の左手に握られた短いブレードで銃身を弾かれ、懐が完全に空きとなる。

そのまま、懐に向け、短い鞘を連結させ、薙刀状態にした長い直刀の柄頭から光刃こうじんが伸び、私のシールドを削り……

ダメージ判定、戦闘不能

LOSE

敗北に追い込んだ。

負けましたの……私が

私は、勝つもりでいたため、少しショックを受ける。

「いい勝負だった……ありがとう」

「い、いいえ。こちらこそありがとうございました」

ショックを顔に出さないように翔の礼に応え、礼を返すが気分は晴れない。

そもそも今回の翔から誘ってきた模擬戦を引き受けた理由自体、翔の実力が知れたかった事と自分の圧倒的な自分の実力を見せつけたかったからだ。

一夏は自分にとって特別で、シャルルも対した障害にはならない……だが、翔だけは初日で見せた山田先生との模擬戦を見てから代表

候補としてのプライドが大きく燻られていた。

だから模擬戦を行ったのだが……その結果は、すべての手を封じられた上で惨敗と言う酷いものであった。

「はあ………」

「ビットの扱い方をもっと細かく扱えるようになった方がいい」

「……えっ？」

その言葉に私は、翔を見る。

「ビット兵器の特性は、IS本体から離れたところから色々な角度に撃てる、言わば自律砲台的なところにある……が自分の指や腕で操作しない分、扱いにくいところがある……違わないか？」

「ウツ！」

なぜそれを！？

私は、痛いところを着かれてしまう。

確かにこのブルー・ティアーズは、動かすのに必要な各種コントロールが非常に難しかったため、ビットを操作しながらライフルとの同時発射はなかなか出来ないのが今の私の悩みどころである。

それを以前、一夏にも見破られ、少しばかり焦ってしまった時もあった。

それを悟らせない為、そして相手を近づけさせないため、4基のビットを同時に使用し、攪乱仕切ったところでスターライトでトドメを指す。それが自分の基本戦術だ。

「君の場合は、確かに狙撃スナイプは恐ろしいレベルだけど懐に入り込まれたら一貫の終わり……今回の模擬戦でもわかっているはずだ」
「お言葉ですが、ブルー・ティアーズにはあと2つ、弾道ビットがあります……それらを至近距離で展開すれば……」
「自滅覚悟ならいい手だが、装甲やシールドで『耐え』られたらどうする」
「……ウツ」

「またもや痛いところをつかれる。」

「それにその手を実戦で使って見る……一夏が慌てるほどの大怪我になる」

「えっ！」

一夏の名前を出された瞬間、自分の顔が赤くなるのを感じた。

「なっ、なっ、何を言っ……！」

（なら一夏を箒や鈴にとられてもいいのか？

）……！ それもダメですわ……！

いきなりプライベートチャンネルに切り替わったのは、翔なりにセシリア達の心中を知っているの配慮だろうか？

私は、そう考えを巡らせながら翔とのプライベートチャンネルに感じる。

（そう思っなら無茶しない事だ

）……ですが……

（命をかける必要の無いところで命を賭けるのは危険だ……）

人は、誰だつて何時、どこで死に逝くかわからない……それが愛する者の腕の中か、暗闇の中かどうかもな

そう伝える翔の表情は、暗い過去に思いを馳せるような表情だった。

その表情に何も言い返せなくなる。

(と……すまない、感傷に浸っていた

(い、いえ……

(何にせよ……君が怪我とかすれば一夏や他のみんなも心配したり、勇気と無謀を履き違えた甲合戦に走ったりする……だから無茶しない……『約束』できるな

(ええ

私は、翔の言葉に静かに頷いた。

同時に翔は、表情の変化をあまり見せない人物だが、一夏と同じように人を『思ってくれる』人物であると私は知った。

「よしつと……そろそろ一夏達のところに降りるか」

「そうですね」

私達は、高度を下げ、一夏達のところへ降りて行く。

Side Out

Side 一夏

「ええとね、一夏がオルコットさん達に勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

「そうなのか？ 一応、みんなの動きを見て武器の特徴はわかって
いるつもりだったんだが……」

シャルルとの手合わせをもらった後、いつものようにお復習と
反省会を兼ねたIS戦闘に関するレクチャーを俺は、受けていた。

「うーんとね、原理や攻撃方法を知識として知っているだけって感
じかな？ 例えば、僕と戦った時もダメージ覚悟で無理やり間合いを
詰めようとしていたよね？」

「ウグツ……そうだったな。」

イグニッション・ブースト
瞬間加速の軌道も読まれてたし……

「うん、それは……」

「一夏の場合、完全な格闘オンリー機……本来ならもつと慎重に間
合いを詰めなければならない。だが武器特性上、一撃必殺を狙わざ
るおえない……つまりは、焦り過ぎているからだ」

と厳しいコメントを寄越してきたのは、セシリアとの模擬戦を終え
たらしい翔だ。

「焦りすぎてるって……そうでもねえ……」

「言い換えれば焦りすぎてってよりもワンオフ・アビリティイーであ
る『零落白夜』使用に必要なシールドエネルギーを削られたくない
から最短で動こうとする。だから動きが直線的になっている。要
は単純だ」

……グハア！！ たった数回、動きを見ただけでそれかよ

的確に思い当たる点を突かれた俺は、泣きたい気分になる。

「うん、カケルの言う通り一夏のイグニション・ブーストは、急ぎすぎて分直進的だね……あつ、でもイグニション・ブースト中に無闇に軌道を変えない方がいいよ。空気抵抗や応力なんかの関係上、機体の方にも負担がかかって最悪、骨折する事もあるから」
「なるほど」

「デメリットはあるが、イグニション・ブーストは、その爆発的な加速が大きなメリットだ。一夏、お前の場合、一度に相手との距離を詰めずに短い距離で数回の短距離瞬間加速ショートイグニション・ブーストを使った方がいい。そうすれば直線から多角にもなるし、フェイントにもなる」

だが……翔やシャルルのレクチャーは、わかりやすい

俺は、しみじみそう思いながら彼らの話をしっかり聞く。

何せ、今までの俺専属コーチを自称していた筈達のありがたい言葉達を一言で表すと……

筈『効果音付きの説明』

鈴『自分の感覚（鈴自身の）こそ正しい、反論したら殺す』

セシリア『理論的説明。この際、細かく角度等を要求』

てな感じで……ぶっちゃけ言うと言葉よりも実際にやって見せてくれと言いたいような説明だらけだったのだ。

こうして色んな意味で息詰まっていた俺の前に現れた同じ男のシャルルと翔は、まさに救世主だった。

それに……

女性用ISスーツは、露出が多すぎだ……

たぶん、IS関連に携わる男性陣は、かなり苦惱しているであろう。実際の勝負のような集中力が養えない訓練では……色んなところに目が行ってしまっただけでやりづらいつたらありやしないしねえよ！

さらに言えば『おっ建て』たら完全に死が訪れる。

「私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「私の理路整然とした説明の何が不満でしたのかしら」

……その光景に自称俺専属コーチ達がぶつくさと愚痴を漏らしている。

その声に気がついた翔が少し呆れた様子で口を開く。

彼は、前日にコーチ達の発言を聞いているため、コーチ達に教え方のアドバイスするつもりなのだろう。

「箒は、実際に動きながらやればわかりやすいが、細かい動きや高度な動きはわかりづらい」

「……うむ」

「セシリアは、俺やシャルルのように細かいオーダー慣れていればわかりやすいけど一夏みたいにISに慣れていない奴には理論よりも実際に動きを教えた方がいい」

「はあ、ですが……」

「もう少しレベルアップしたらわかってくると思うが、しばらくは実際に動いて教えた方がいい」

「……はい」

「鈴音は……完全にダメだ」

「何だよ!？」

「感覚ばかりで動作を教えるのは最悪だ」

「だからって、何よ!?!」

「さらに言えば感覚だけでは、簡単に読まれ……」

「くたばれえ!?!?!」

他の二人よりも遙かに不遇な言われ方に鈴は、翔に向かって衝撃砲を放つ。

それを当然ながら特殊能力を発揮した長直刀で受け止める翔。

「いきなり何を……」

「うるさい!! よくも下品に言ってくれたわね!」

そう叫びながら鈴は、翔に追い討ちをかける。

さすがの翔もこれには、参るようで徐々に戦闘機動を織り混ぜながら空へと飛び上がる。

「逃がさないわよ!?!」

その後を鈴が追う。

……翔、その状態になった鈴は、容易には逃げられないぜ

飛び去った友に死ぬなよとエールを送るような思いで俺は、見送った。

「カケルなら大丈夫だと思うよ?」

えっ?

「そう言えば一夏の白式にも後付武装イコライザがないんだよね?」

小さな呟きの後、シャルル『先生』が問いかけてくる。

おっといけね。今の同じ男で理解がやすい先生を得た俺は、水を吸うスポンジ状態なのだ。

「ああ、何回かメンテの時や翔にも見てもらったんだけど、武装用の拡張領域が空いていないから武装追加は無理だって」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーに要領が割かれているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……」

「言葉の通りだよ。唯一仕様の特殊才能ワンオフアビリティー……各ISが搭乗者と最高状態の相性になった時に発現する能力のこと」

こう言った説明がすぐに出てくる……そういった点からでもシャルルが優秀である事がわかる。

「普通なら第2移行……つまり、ISの成長が次の段階に移行してから発現するんだけど……それでも発現しない機体の方が多い。だからそれ以外の『特殊能力』をイメージどおりに使えるようにしたのが第三世代のISが装備している、オルコットさんのブルー・ティアーズミューティアやカケルの流星があたるよ」

「なるほどな……じゃあ、白式の唯一ワンオフって言うのはやっぱり『零落
白夜』なのか？」

自らのエネルギーを喰らい、破壊と守護の光を切り裂く刃……絶
対なる力でもあり、呪われた武器特性を持つ諸刃の剣。

それが俺……いや俺と白式との間に生まれた唯一の能力……何で俺
なんかにこんな能力が？

「多分、そうだと思う。だけど第1移行だけでワンオフ・アビリテ
ィーが使えるのは異常だよ。前例がないんだもの……しかも使用で
きるワンオフ・アビリテイーは、織村先生……初代IS世界大会覇
者『ブンヒルデ』が使用していた最初のISと同じだよな？」

あとで調べてみたらわかったのだが、どうやらそれは本当らしい。

「まあ、姉弟きょうだいだからじゃねえか？翔は否定していたけどよ」

「うーん、姉弟だからって言う事だけじゃ片付けられないと思うよ。
それにワンオフを発現させたISとそのユーザーが無意識下で何
かを見たって聞くし……」

なんだか難しいな……これじゃ、進まないな……

「でもまあ、今は考えても仕方がないそれは置いて、訓練を続
けようぜ」

「あ、うん。そうだねじゃあ……射撃でも練習してみようか？」

そう言って渡してきたのは、シャルルがさっきまで使っていたアサ
ルトライフルだった。

「えっ？他の機体の装備って使えないはずじゃ……」

「基本的にね、でも後付けだけなら所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだ。……うん、今、一夏達に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

「お、おう」

初めて構えた銃器は、妙な重さを感じさせた。

実際には、ISが発生させているフィールド効果で重みは感じないはずだが……初体験の武器だからか妙に重さを意識してしまう。

「構えはこうでいいのか？」

「えっとね」

こうして俺の初体験の射撃が始まった。

Side out

Side 翔

浮遊ユニットの向きから大体の射撃方向を予想、『全力』で避け続けているが、これはなかなか辛い。

何か？

それは……しつこすぎるからだ！！

「さっさと落ちろおおお！！」

「そこまでやるか……！！？」

俺は、スターダストを左右に振らせながら必死に逃げ回っていた。

後ろからは、形相が鬼に変化した鈴が何故か数日前より狙いがいい衝撃砲を放ちながら俺を追いかけ続けてくる。

俺は、その威力がどれ程のものかわかっているため回避を続けているが……

「いたあー!!」

「キヤアッ!!」

「ギャフン!!」

「ギャパ!!」

避けた衝撃砲は、そのまま飛び抜け、お構い無く他の女子生徒を吹き飛ばす。

ごめんなさい、皆さん!!

俺が変な風に言ってしまったせいで巻き添え喰って!!
いつ!!

衝撃波が俺を掠める。

どうするかだな……うん?あれは……

俺が見た先には、一夏がライフルを構えて、射撃を行っている姿があった。

シャルルから借りたのか?丁度いい!!

俺は、円を描くような軌道で高度を下げていく。

後ろからは、鈴が追いかけてくる。

同時に一夏にプライベート・チャンネルで呼び掛ける。

(一夏! !)

(? ……翔か)

(十秒後に斜め上方に銃を構えて撃て! !)

(えっ、なんだよ。急に?)

(いいから早くしろ! !こっちは、生きるか死ぬかなんだ! !
と言うより、まともに喰らいたくない! !)

また2、3発、衝撃波が掠めたのを顔には出さなかったが、内心冷
や汗をかく。

(カウントいくぞ! !10、9、8、7、6……)

(ちょ……ええい自棄だ! !)

俺の思った通りの角度に一夏はライフルを構えたのを見た。

(3、2、1……今! !)

一夏のライフルから弾丸が吐き出される。

その弾丸は、俺の思惑通り、射線上に『連れて来た』鈴へと直撃す
る。

「……あつ……」「」「」「(一夏達、一同)

「いたあ! ? 誰よ……一夏あああ、あんたねえ! !! ! !」

直撃された鈴は、直ぐに犯人を見つけ出したのか一夏に衝撃砲を向ける。

「いつ！」

いい加減に……

一瞬、彼女の気が自分から逸れたのを見逃さずに俺は、高度をあげ……散々な目に遭わせた完全にキレないまま最大限に練り上げた怒りを込め……

「……しろおおー!!」

「ギャクア!!」

降下しながら前に一回転した勢いと高度を一気に下げた勢いを合わせた、右踵の踵落としを容赦なく鈴の頭に喰らわせる。

ISのエネルギーフィールドに守られているから重傷は負つことはないが、この一撃で鈴は、気絶したらしく地面に落下した。

Side out

Side 一夏

……

何発目かを鈴に撃ち込んでしまった俺は、気まずい思いに陥るが……その後の強烈な翔の前回り落下踵落とし（要するに空中踵落とし）には流石にギョツとした。

その後の落下して行った鈴が地面にめり込んだ姿を見ると冷や汗が流れだす。

「……ところで一夏、どうだった？ 初めての射撃は？」

シャルルもこの光景に困ったように苦笑いをしつつも俺に問いかけてきた。

「何て言うか……とりあえず物凄く速いな？」

実際に受けた事もあり、せして今、鈴に当ててからか、弾丸の速度は『かなり』速い事を初めて体験した。

「うん、面積が小さい分、平均的なイグニション・ブーストよりも速い。だからさっきみたいに軌道予測さえ出来ていれば簡単に命中させられるし、外に撃てば牽制にもなる。レーザーのような光学兵器はもつと速いから結構避けづらいからね。……そう言った点から一夏は、突撃しようとしているのに心のどこかでブレーキが掛かってちゃってるんだよ」

「なるほど……だから簡単に間合いが開くし、続けて攻撃されるのか……」

「うん」

筈のように格闘戦主体ならまだしもセシリアや鈴に一方的にやられる理由がよくわかった。

「だ……」

「わたく……」

セシリア達が何かを言い掛けたが直ぐに口が塞がる。

何かあったのだろうか？

そう思いながらも俺は、銃身を水平に戻し、シャルルから借りたライフルを空撃ちして射撃訓練を続けた。

手から伝わる衝撃を感じながらもどんな機動で間合いを詰めるかを少しずつ考えつつ。

「衝撃で腕の構えが緩んできちゃうから一回ごとに脇を締めてね」
「お、おう。……こうか？」

シャルルの指導で俺は、構えを直す。

その指導の中で射撃をしつつも俺は、ずっと気になっていたことを聞いてみた。

「そっいやシャルルのISってリヴァイヴなのか？なんか前に山田先生が操縦していた機体と違う印象があるんだが……」
これは、シャルルが専用機持ちであると知った時、本人からリヴァイヴであると言われたのだが……以前の訓練で山田先生が使っていたIS『ラファール・リヴァイヴ』は四枚の多方向加速推進翼が特徴的なシュルエットだった。

それと比べて、シャルルのISは専用機だからと言う事からか機体色がネイビーカラーではなく、オレンジ色であり、シュルエットもだいぶ違う。

背中为推进翼は、一対の推進翼になっていて中央部から2つの翼に

分かれる形になって機動性や加速性が高くなっている。

さらに各アーマーも小さくシェイピング化されており、リアスカート自体も大型化し、マルチウェポンラックや小型スラスタが設けられている。

そして、一番の違いは肩から腕のパーツだ。

本来ついている四枚の物理シールドがすべて取り外されており、左腕には、腕部と一体化された大型シールドが設けられている。

一方、右腕は装甲に被われておらず、代わりに射撃の邪魔にならないためであろうすつきりとしたスキンアーマー（要するに皮膜状のアーマーが被っている）。

「ああ、僕のは専用機だからねかなりいじっているよ。この子の正式名称は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム』って言うんだ」
「量産機のカスタム機だったのか、外見がかなり変わっていたからよくわからなかったぜ」

「そうかもしれないね。この子の場合は、基本装備をいくつか外した上で拡張領域を倍にしてるんだ」
「倍！？そりゃまたすごいな……」

普通、追加できる装備数は、機体によってマチマチだが基本的に2〜3個程度だ。

それが倍……だとしたら……どれだけの装備があるんだ？

「……そんだけ装備があるならちよつと分けてほしいぐらいだ」

そう思いながらも俺は、素直な感想を口にしていった。

そんな俺の言葉にシャルルは小さく笑った。

「あはは、あげられたらいいんだけどね。そんな子だから今、インス量子変換トールしている装備だけでも20ぐらいあるよ」

「うへえ〜ちよつとした火薬庫だな」

また素直な感想が口から漏れてしまう俺。

実際のところ、すべてIS専用兵装だろうからちよつとした火薬庫どころではすまないだろう。

IS専用兵装は、1個で戦車数両分の火力能力を持つと聞く……
・その点から考えるとシャルルのISは、重戦車100両ぐらいの火力能力を持つ事になる。

だが、現実的に考えるとどんなに装備があろうとも手持ち兵装なら同時には使えない。

そして何より、装備呼び出しの時間や戦闘時の切り替えを考えると
なると、多くインストールしてあっても意味がないのだ。

当然、それはわかっている上でのカスタム仕様なのだろうからシャルル自身に特殊技能があるのかもしれない。

俺は、シャルルからの説明にそう納得しながら射撃訓練を続けた。

俺が一弾層分16発を撃ち切ったところで急にアリーナ内が騒つきはじめる。

「アレって!」

「ドイツの第三世代型!」

「本国の方でトリアル中って噂だったけど」

その飛びかう言葉に俺は、注目を集めている人物に目を向けた。

その人物とは……

「……」

転校生の1人、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

転校初日以来、俺も含めた誰ともつるもいとせず、会話さえしない孤高の女子。

とにかくそんな状況でもあるのでどう接しようかわからないままいる。

『おい』

そう考えているうちに黒いISを纏ったラウラからのオープン・チャンネルが突如開いた。

Side out

Side 翔

気絶して墜落した鈴の回収を終えた俺は、一夏達の方に向かおうと
していた。

とそこに一夏と対峙しようとしているラウラの姿を見つけ、『何か
やらかすな』とつい思ってしまった。

やがて何かをラウラの方から一方的に言っているように展開が進み・
・・・話がこじれたのだろうか、右腕部に光が収束しだす。

それはだんだんと、先日見たレールカノンの形をとっていく。

！？ アイツ、こんな密集地帯で撃つ気が！！

今アリーナは、かなりの生徒が密集して流れ弾が飛び交う状況でも
ある。

そんな中でレールカノンのような弱衝撃弾であろうとかなりの威力
を持つ弾を撃ちだして流れ弾にしまったら危険極まりない。

「すまないが、鈴音を頼む」

「えっ……キャッ！」

鈴と近くの女子には悪い事をしたが、投げ渡すように鈴を預けた俺
は、スターダストの可変翼を大きく広げさせ出力最大とする。

企業にて製作された試作パーツが集まってできたスターダストの中
でメインスラスターは翼の展開度や開き方を『可変させ』出力や噴
射方向の操作する方式をとっている。

さらにサイドリアアーマーの大型スラスターにも『火』をいれ、イ

グニシヨン・ブーストを用いらない最大加速で、最短ルートをとり、一夏達の下に向う。

流れ弾がスターダストの装甲に傷をつけ、一步間違えば人波に突っ込む状態を体に負担が掛かるが、スターダストを強引すぎるまでの機体操作でどうにか切り抜ける。

そして……第1射がシャルルに防がれたらしいラウラと大口径のライフルを手に呼び出したシャルル、一触即発の現場に俺は、足と小型スラスターで制動をかけ、砂埃をあげながら間に滑り込む。

滑り込む直前に鞘を付けた状態の『流星』を同時に2本呼び出し、ラウラとシャルルに向けて両サイドに構えた。

「……そこまでだ」

S i d e o u t

S i d e シャ ル ル

突然、一夏に向けて発砲したラウラ。

僕は、一夏の前に出て、左腕のシールドで弾丸を防いだ。

キーン！

甲高い音がシールドから鳴り、弾丸が斜め上方に弾かれる。

「……貴様」

ラウラが僕を睨み付けてくるが、そんなのお構い無く右手に呼び出し、すでに安全装置を解除したアサルトカノンをラウラに向けながら口を開く。

「こんな密集空間でいきなり戦闘をはじめようとするなんてね。ドイツの人はずいぶんと沸点が低いんだね」

「……フランスの世代遅れが。私の邪魔をするか」

「未だ量産化できないドイツの第三世代^{ルキ}よりは動けるつもりだよ」

お互いに涼しい顔で睨み合う。

まさに一触即発と、僕が思った瞬間、その間に何者かが砂埃をあげながら割り込んできた。

「「!?!」」

ジャキ

乱入者は、驚くラウラと僕に砂埃の中から容赦なく何かを向ける。

こんな事をする人とは、今の状況で1人しかいない。

「…そこまでだ」

砂埃が晴れたそこにいたのは、カケルであった。

僕とラウラに向けられている流星。

両サイドに構えたカケルの瞳は静かな怒りを表している。

「またしても、貴様……」

「言ったはずだ、一対一で『けり』をつけると」

ラウラに言葉を発しながらもカケルは、僕らに向けた銃口を下ろさうとしない。

敵味方がない戦いが始まるか周りは思っただろうか……

『その生徒！何をしている！！学年とクラス、名を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。

どうやら騒ぎを聞きつけてやってきた担当教師であろう。

「今日は、引こう」

横槍を三度入れられ、気分が削がれたのか、ラウラはあっさりと引いてアリーナゲートへと去っていく。

去った先には恐らく教師が怒り心頭で待っていることだろうが、彼女の性格から無視されるだろう。

「……ふう」

少しだけ息を漏らしてカケルは、構えを解いた。

「カケル、ありがとう」

騒ぎを聞きつけて急いで駆け付けたのだろうか、スターダストのボ

デイが傷だらけだ。

僕的には、やりあってもよかったんだけどな？

「気にするな……と一夏も無事だな」

「あ、ああ。助かったよ翔、シャルル」

「どういたしまして」

一夏の言葉に僕は、優しく微笑みながら返事を返した。

「まったく、さっさとけりつけないからこつなる」

「すまない……って、俺のせいか!？」

続くカケルの容赦ない一言に一夏は叫ぶ。

「……他に何がある？」

「……はい」

何も言い返せなくなった一夏は、がっくりとうなだる。

Side out

Side 一夏

……翔の奴、言いたいことはわかるけどな……容赦ねえ

友の言葉に俺は、がっくりとうなだれた。

だが、翔とシャルルの眼差しは、つい数秒前までラウラと対峙していた鋭さはない。

「じゃあ、今日はもうあがるっか。閉館時間の四時を過ぎちゃったからね」

「おう。そうだな、あっ、ライフルサンキュうな。色々と参考になったわ」

「それなら良かった」

またにつこりと微笑むシャルル。

その無防備さには、俺はなぜか落ち着かない気分になるのだが……問題はここからだ。

それは……

「えっとじゃあ、先に着替えて戻ってて」

そう、『いつもこうなのだ』。

シャルルは、IS実習後の着替えをとにかく俺達と一緒にしたがらない。

つてか、初日の実習前の着替え以来、一緒に着替えてはいない。

初日以後は、前もってISスーツを着ていたり、俺より早く行っていて先に着替え終わっていたりしていた。

同室である翔は、この件に対しては何も言わないで……代わりに

「たまには一緒に着替えよう……グベッ！」

「行くぞ、一夏」

このタイミングでいつも俺の首根っ子を掴み、引きずってゲートに向かい始める。

毎回、狙ってないかって・・・グエ、苦しいからやめてくれ

「こほん……どうしても誰かと着替えたいのでしたら……」
「箒」

「了解した。……こっちも着替えに行くぞ、セシリア、来い」

「ほ、箒さん、首根っ子を掴むのおやめ……」

翔の言葉に頷いた箒がセシリアの反論を許さずにぐいぐいと首をひっぱり、反対側のゲートに向かっていく。

わぁー何？あの連携みたいの

ってか、いつ頃から女子同士は名前呼び合うようになったんだ？

俺は、翔に引きずられながらそう考えていたが……

「……！？一夏！」

「な、なんだかけ……のあ！」

翔の呼び掛けに答える暇もないままに投げられた。

くるくると放物線を描きながら飛んでいく俺は視界の端に翔が何かに吹っ飛ばされた姿を見た。

S i d e o u t

S i d e 翔

……？何か忘れている

俺は、一夏を引き摺りながら首を傾げていた。

確か……

……許さない

「えっ」

何か怨みの声が若干、地を這うように聞こえてくる。

「……絶対にだから!!」

やつ、奴か!

その声の主をようやく思い出した俺は……とっさに

「……!? 一夏!」

「な、なんだかけ……のあ!」

一夏を投げ飛ばして……

「死ねえええええ!!」

「ぐばあああああ!!」

存在自体を忘れていた鈴からの衝撃砲をもろに食らってしまった。

制動すらかけられない一撃に俺は、誰かにぶつかってしまった。

「ひゃあん!!」

「つう……へっ」

その時、何か柔らかいものを俺は掴んだ。

ま、まさか

その感触冷や汗がだらだと流れだし、俺はそのあとの事が容易に予想できてしまう。

なぜなら父さんからも許しなきタッチは処刑ものと言われていた行為を事故とはいえ『やってしまったのだ』

「妹の胸に何してんの!!」

ああ、やっぱり……

俺がそう思った瞬間、どこからともなく拳がとび……

「ガハア……」

再び宙を舞っていた。

何故、俺がこんな目に・・・

第7話 明るみになる事実（前編）（前書き）

虚空「新年、あけまして……………」

一同「おめでと〜ございますー!!」

一夏「いやあ、しかし、もうすぐアニメか、ワクワクするな」

翔「ああ、そうだな……………その影響で閲覧数も増えて感謝感激だな！」

第「うむ……………じよ、じよ、序盤は一夏と……………このチャンスを活かさなくてはー!!」

セシリア「そうですね。第2巻に差し掛かったら……………人気のあるシャルルさんが……………」

一夏「?とところでお前ら何でそんな格好してるんだ？」

女性陣「え」

女性陣は、改めて自分の格好を見ると……………

女性陣「つう／＼／／」

全員がモコモコのウサギの着ぐるみ（頭は、ウサミミ）を着ていた。ちなみに第はピンク、セシリアは青、鈴は赤、何故かシャルルが白、ラウラが黒だ。

女性陣「作者ああー!!」

虚空「このまま新年ネタやらないのは、なんか悪い気がしたからな……………女性陣には肌を脱い（?）で貰……………」

女性陣「消え失せるおおー!!」

各自、ISを展開全力射撃を実施。

虚空「ひ、光が広がって！ギャアアアア！！」

一夏「作者さん！！」

翔「ははは……こんな作者だが……今年もアニメも……

……」

一同「よろしくお願ひします！！！！」

第7話 明るみになる事実（前編）

第4アリーナ

男子ロッカールーム（仮）

Side 一夏

俺と翔以外に他に人がいない男子更衣室代わりのロッカールーム。

俺達は、ISを待機形態に変換し、ISスーツを脱ぎ始めていた。

「……………なあ、翔」

「……………なんだ」

傍らで着替えを進める翔に声をかけるが、若干堅い返事を返されてしまう。

その原因は……………

「……………タオルで冷やすか、その頬？」

「……………ああ」

事故とはいえ、女の子の胸を触った事で殴られ、左頬を赤く腫れあげた翔は不貞腐れたように眉間に眉を寄せていたからだ。

（触ってしまった本人からは何もしてこなかったのだが、その人物の姉らしき人からキツイ一撃を貰ってしまったのである）

まあ、仕方ねえよ。翔、鈴は一度キレると地の果てまで追っかけて、

容赦ない一撃を食らわせてくるからな……それで巻き込まれ
事故を起こした奴は数知れない

友の不運を心の中で慰めつつもロッカールームの片隅にある洗面
所で使わなかったスポーツタオルを水に濡らし、ほどよく搾ると翔
に投げて渡す。

「ほらよ」

「………すまない」

渡されたタオルをキャッチした翔は、赤く腫れた頬にそれを当てる。

と………

「ツウ………」

冷やしたからか、もしかしたら触った事で痛みがぶり返したのか、
小さな苦痛の声を僅かにあげた。

「大丈夫かよ、おい？」

「………大丈夫だ」

そう答えると翔は一度、タオルをロッカールーム内に設置されたベ
ンチに置くと着替えを再開する。

本当に大丈夫なのかよ？

………翔の奴、自分じゃ気付いて無さそうだけど結構眉潜めて
いるし

そう思うのも翔の表情が未だに苦痛の歪んでいるからだ。

うーん、翔って一応話し掛けやすいけど、表情の変化が少ししか見えないからな・・・シャルルと部屋にいる時は知らないけど……

翔の表情の見づらさには首をかしげたくなる。

「……………さつさと着替えろ、時間食って女子達に変な妄想を抱か
れたらこっちが困る」

「……………へっ?」

物思いに耽っているとさつさと着替えを終えたらしい翔が頬にタオルを当てながらこちらを見ていた。

ちなみに俺の今の状態は、下半身はズボンを履いているのだが、上半身は裸で、汗をかいた肌をタオルで軽く拭いている。

「変な妄想ってなんだよ?」

「……………プイーーーーー」

線状に伏せてあるが、翔が言った言葉は……………俺の脳内の思考伝達の要であるシナプス電流に割り込みを掛け、ある種の男同士の桃色空間を描きだす。

「……………!!」

好きな奴にとっては好きなのはわかっている。

だが、俺は、一応、普通(?)の道歩んでいる。

それを深く意識した俺は、言葉に出来ないほど苦悩した。

それが呻きに代わる前に俺は、頭の中に浮かんだ桃色の『幻想』をロツカーに頭を打ち付ける事でなんとか振り払う。

「おい！何ていう妄想を俺に押しつけた!？」

ロツカーに頭を打ち付けた痛みで額がヒリヒリするが、妄想の根源に俺は叫ぶ。

「……モノの例えだ。妄想を形にしたのはお前だろ？」

「だからって!! 真顔でそんな事を言うなよ!？」

表情を変えないままにそれを平然と口に出した翔に叫びを返す……

「馬鹿らしいが……以前、女装していた時には……そんな話、耳にタコができるぐらい聞いていたからな……」

訂正……翔、お前は本心から言ったんじゃないよ……慣れちゃったからだな

続く翔の言葉と翔の目が遠くを見ているように細めているのを見て、俺は次に出るべき言葉が出なくなった。

翔が女装して企業の中で働いていたのを聞いていたが……どうやらある種、辛い経験もあつたらしい。

「……………すまん、忘れてくれ」

「……………あ、ああ」

翔自身も口に出したのはいいが思い出さなくなつたのか、目元に皺を寄せ苦い表情になっていた。

Side out

Side 翔

企業にいた頃の苦い経験を思い出した事で軽く自己嫌悪に陥つた俺は、頬の痛みがぶり返して来るようだった。

……………地雷踏んだな

自分で言っておきながら嫌な気分になつたためこれ以上余計な事を言う前に口を閉じる。

「……………とりあえず、気にすんなつて……………ああ、風呂入りてえな」

着替えを終えた一夏が場の空気を変えるためか、風呂の話題を振ってきた。

スーツが汗を吸収してくれるとはいえ、汗をかけば不愉快な感覚に陥いるのは、誰だろうと同じだ。

一夏は、そう言った事も踏まえて咳きを漏らしているのだろうか
俺は、思った。

「そうだな……」

このIS学園の寮には各部屋の洗面所にはシャワーが完備されているもののユニットバスのような風呂はない。

代わりに大浴場があるのだが……生憎、俺や一夏達、男性陣へのタイムテーブル（使用時間）が組まれていない。

今まで企業にいたところは、近くのスーパー銭湯などに入りたくなったら入っていたため、使用できないと聞いた時には少しばかり気分を害されていた。

本来、女子校であれば当たり前だが、何とかならないものかと思う部分もある。

が、根本的な理由を転入初日に一夏から聞くと俺は、つい納得してしまった。

要は、『年頃の女の子の乙女心』だ。

家族なら許せるものの、男性……しかも好きな『異性』に自分の臭いを残したくないのだろう。

その逆の場合なら男の汗と言う煮汁の中に漬かりたくないのだろう。

ISと言う一種の『人殺しの道具』を使うかもしれない身でありながらくだらない話……だが、それがあから人は、『人』なのかもしれない。

人が人であり続ける由縁……それは、やはり心だろうと俺はつい思い直してしまう。

「織村、櫻井、デュノア。いるな？入るぞ」

と、突然……学園最凶の鬼教官、千冬先生が返答も待たないまま、俺達がいるロッカールームに突入(?)してきた。

「はっ？」

「えっ、千……織村先生!？」

いきなりの事で俺達は、目が点となった。

「……なんだ。その目は？」

ギロツ

そんな目を向けられた千冬先生が俺達を不機嫌そうに睨み付けてくる。

いや、本当なら俺達がそうするんですが……

俺は、心の片隅でそう思う。

「櫻井、その顔はどうした？」

「あつ、いえ……大したものではありません」

俺は、腫れが引いた頬に当てていたタオルを傍らにおく。

「まあいい……デユノアはいないのか？」

まだ、変な目を向けられた事に不機嫌なのか、俺達を睨み付けながら千冬先生は、そう問い掛けた。

「……あつ、まだアリーナの方にいます。たぶんピットまでは戻ってきているかもしれません」

「ふむ……入る奴だけでいい、あとでお前達から伝えてくれれば良いことだからな。お前達には朗報だ」

「何の事です？」

俺は、千冬先生の話の意図が見えてこない。

「今月の下旬より、お前達、男子に週二回だけだが大浴場の使用日が設けられる事になった」

「！本当……ですか！？」

一夏が目を輝かせて姉の言葉を聞く。

「ああ、本当だ。……まったく山田先生も気を遣いすぎだ。女子のあとにでも時間を組み込めばいいものをここまでズルズルと……」

「」

あの・・・千冬先生、聞けないけど、あなたも女の子だった時代ありましたよね？

俺は、表情を崩さないように意識を張り巡らせながら千冬先生の言葉に心の中だけでツツコミを入れていた。

・・・って、こんな連絡なら1年の寮監でもある山田先生が彼女の性格から直接伝えにくるはず・・・なんで千冬先生なんだ？

俺が僅かにそう思った為か、千冬先生が何時ものようにめんどくさそうな表情で口を開いた。

「・・・本来なら山田先生が伝えにくるはずだったが・・・櫻井、貴様が私に用事を押し付けた」

「・・・えっ」
「なんで・・・あつ」

千冬先生の言葉に俺は、思い当たる節を思い出した。

「翔が？何をやったんです？」

「・・・櫻井が紹介した『何か』と今日が会う日だったらしくな、山田先生は受け持ちの講義が済んだ途端に早退したんだ。まあ、お前達への伝達以外の仕事は、終わらせて行ってくれたのだがな」

今日だったのか。まあ、メールでのやり取りもさせているからな、

『あの人』なら山田先生の悩みも聞いてくれるだろう

俺がそう思うのも山田先生の『男性』への変な意識を治してくれるにの適任な人だからだ。

「……と、そんな事を考えている時でもないか
「……わざわざ、すみませんでした」

Side out

Side 一夏

翔が千冬先生に頭を下げ、謝りを入れた。

素直に謝るな翔も

って、翔の奴、何を山田先生に紹介したんだ？

そんなこんなを考えると千冬姉が再び口を開いた。

「ふん……あと、お前達に……」

「……一夏、カケル？何してるの？」

おわつと！？なんだシャルルか

千冬姉がすべてを話す前にシャルルが急に現われた。

「一夏、カケル、先に戻って言ったよね」

はて、なぜシャルルの言葉に鋭い刺を感じるんだ？

表情はいつもと同じだ。

だが、何故か言葉に刺を感じた。

「お、おう。すま……」

「すまない……が、シャルル。今日は連絡事項で出るのが遅れただけだ」

俺が素直に謝ろうとするのを遮るかのように翔がシャルルに声をかけた。

「ふーん、そうなんだ」

シャルルは、そう返しながらISを解除する。

そんな様子を翔は、なぜか眉を僅かに潜めながら見ている。

なんでだ……とそんな事より

俺は、考えるよりも先程の喜ばしい朗報をシャルルに伝える事で頭がいっぱいだっただ。

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」
「そう」

顔の汗を拭いながら俺を横目で見ながらシャルルは少し冷たく応える。

その目は、何故か冷やかなものだ。

むう、ご機嫌ななめだ……俺達が何かしたのか？

俺が首を傾げたその時……

「態度は気に食わんが・・・伝えたからよしとする。あと織村、櫻井、お前達には、専用機の正式登録に関係する書類一式が届いている。少々面倒だが、私と一緒に職員室まで来て書類に記入しろ」
戯言はいいからさっさと行くぞと千冬姉が目で睨み付けてくる。

あの、千冬姉、生徒間の問題を解決するのも先生の義務だと思うのですが・・・

「わかりました。・・・シャルル、多分遅くなる。今日は先にシャワー浴びてさっぱりしとけ・・・気持ちを落ち着かせるためにも」

「・・・うん、わかった」

そんな千冬姉の視線に怖じけずに翔は、シャルルに口調だけは静かな咎めで指示を出していた。

それをシャルルは、翔に顔を見せないように俯いたまま答えた。

「それじゃ、行くか。一夏」

「ああ、シャルルまたな」

「うん、一夏も」

そうして俺と翔、千冬姉は、ロッカールームをあとにした。

「・・・デュノアは部屋でもああなのか？」

千冬姉が歩きながら翔に問い掛けてきた。

「いえ、ただ今日は、慣れない生活続けた所為でいらついたんだと思います」

「ふむ……ところでお前から見てあいつは『白』か？」

「……気付いていらしたのですか？」

？ 何の話だ？

「……当たり前だ。デュノアの行動を見ていればいずれ『バカ』でもその可能性に行き着く。でっ、どうなんだ」

「……あの『こ』自身は恐らく『白』だと思います。実家の事を喋りたがらないところから何かあるかと」

シャルルの事か？ っていうか、なんでこつも真剣な空気で話し合ってたんだ？

その空気に馴染めない俺が首を傾げた時である。

「一夏……お前は首を突っ込まなくていい」

「えっ？」

千冬姉が俺に対して直接口を開いた。

首を突っ込むなって……一体……

「お前、自分じゃ気付いてなさそうだが、すでに3人の女を手玉に取っているんだぞ。首を突っ込んで以上、『騒動の素』を作られたらたまらん」

何の事だ？

千冬姉の言葉の意味を汲み取れない俺は、また首を傾げた。

「……………あの織村先生」

「……………言うな、こいつはこいつ言う奴だ」

そんな様子の俺に翔と千冬姉が呆れた様子でため息をわずかに漏らす。

何か、やったのか俺？

そんな事を思っているうちに職員室に着き、俺達は書類を受け取るとそれらに記入を始める。

Side out

IS学園外

喫茶店『アルテミス』

Side 真耶

……………どんな人なんだろう？

IS学園から出るモノレールで3つ目の駅まで行き、待ち合わせ場所である喫茶店で私は、人を待っていた。

櫻井君からの紹介で受け始めた『カウンセリング』は、最初はメルでのやりとりだけだったが、それでも私の『男性への意識』をだいぶ変えてくれた。

しかも相手は男性のカウンセラーらしいが、妙な口説き文句のようなものを振りかざさずにこちら考えに上乘せするような言い方でもなく優しげにただ自分が納得するまで話を聞いてくれる人だ。(メール上でのやり取りだが)

それが原因なのか、メールでのやり取りは、この一週間近くで自然と50回を越えていた。

そして、今日が初めて彼と会う日であった。

「……やっぱり自分よりも十歳近く上かな……いや、もしかしたら大学なんかで講義をやってらっしゃる人だったりして……」

私は、その人を待ちながらその人の容姿を不本意だが、思い浮べていた。

あと少しで待ち合わせ時間、でも見ている限りだとそれらしい人がいないで……

「山田真耶さんですね？」

「……えっ」

私はその声に振り返ると先程、真後ろのボックス席に入ったスーツ姿の自分よりも2、3歳年上かもしれない男の人が、向こうも振り向くように私を見ていた。

黒に近い暗い青色の髪、眼鏡を掛け、その奥の黒い瞳は少し鋭さが感じられるが、眼差しは、優しげなものを醸し出していた。

「あの貴方が……」
「……『最初の夢はちっぽけだった、けどそれはすべてに繋がる鍵であり、今の私の始まり……』」
「その一文!？」

私がメールの本文で記した一文だ。

じゃあ、この人が……

「始めましてと言うのは、少し変ですが、私が城戸一夜です」
「あつ、わ、私は、ISが、学園教師の山田真耶です。と、歳は……」

「そんなに慌てなくてもいいですよ。……まだ始まったばかりですから」

「はっ、はっ、はい」

そうこれが、私にとっての始まりでもあった。

それにしても……櫻井君、あなたも先生をイジメルんですか……まさかカウンセラーさんが私と年齢が近くてそれに……美形の人なんて一言も聞いてませんよ!!?

……同時に私は、こんな自分の予想の斜め上を言った容姿の人を紹介してくれた櫻井君に『私、こんな聞いていないよ!』と抗議したい気分になった。

Side out

1年生寄宿寮

翔& amp; シャルル部屋

Side シャルル

「・・・・・・・・・・はあっ」

カケルに言われた通り、先に寮の自室に戻ってきた僕は、ドアを閉めたところで吐き出すようにため息を漏らしていた。

カケルに『頭を冷やせ』と言われた時から我慢していたためだろうか、無意識に出たそのため息は、自分でも驚く程、深く重たいものであった。

カケルや一夏には悪いことしちゃったな・・・・・・・・

さっきの更衣室でとった自分の態度が今になって恥ずかしい。

自分がため込んでいたからかもしれないが、あんな言い方はなかったそれに気づいたカケルが静かに咎めて、ブレーキをかけてくれたからまだ良かったかもしれないが・・・・・・・・それでも彼らには嫌な気分にしてしまっただろう。

そう考えるとますます落ち込みに拍車がかかる。

(今日は先にシャワー浴びてさっぱりしとけ・・・・・・・・・・気持ち落ち着かせるためにも)

……シャワー浴びて気分をかえておこつと

僕は、カケルからの意見も含めて、シャワーを浴びるためクローゼットから着替えを取り出して洗面所へと向かった。

Side out

Side 翔

「ヘックシ！」

部屋に戻る途中で、俺はなぜかくしゃみをした。

職員室に着いた後、俺は本社側から俺に回ってきた書類をすべて記入した。

一応、企業を通して自分のIS、スターダストは正式登録されているが、数枚記入漏れが合ったらしくそれらが届けられたのが今回の書類記入に呼ばれた理由であった。

一方、一夏の場合は、遅れに遅れた白式の正式な登録を兼ねているため枚数は俺より多く、まだかかっている。

そして、先に記入が終わった俺は、部屋に戻るために歩いていた。

風邪ですかマスター？

そんなわけないだろ。

多分、噂だ。母さんかおば……『統括官』あたりの

アストレイアの言葉に俺は、便りがない事に愚痴っているだろう母さんや自分の『おばあちゃん』にあたる『統括』辺りの噂だろうと考え切り返していた。

あの2人は、少し拗ねるといつもこうだ。

だがまさか、その2人ではなく山田先生とシャルル、2人から同時に噂をされてるいるとは知らずに……

そうこう考えているうちに部屋の前につき、鍵を開けて中へと入った。

「ただいま」

と入ってすぐに口にするが、何も反応がない。

シャルル、いないのか？

俺がそう思っていると洗面所の方から水音がしている。

まだシャワーをあびていたのか

シャワールームは、洗面所兼脱衣所のドアで区切れていて中はわからないが水音で俺は、そう判断した。

シャルルが浴び終わる前に部屋着に着替えようと思った俺は、自分のベットに歩み寄りながら脱いだ制服の上着を置いたところであることを思い出した。

……そういえば、昨日、ボディークリームが切れたって言ってたよな……

はい、確かに言っていました

俺の考えを裏付けるようにアストレイアが頭の中に伝えてくる。

いつもなら自分が最初なのでその時に補充すればいいと思っていたのだが……今回は『非常にマズい展開』になった。

……仕方がない、静かに届けるか

本来なら洗面所に予備のボディークリームを置いていけばよかったのだが、生憎洗面所には石鹸等の日常消耗品をおける場所が無いので、クローゼットの中に予備を置かなければならなかった。

俺は、クローゼットから予備のボディークリームを取り出すと静かに洗面所の扉を開き、中へと入った。

……洗面台、辺りに置けばわかるだろう

俺は、洗面台にボディークリームを置くとすぐに洗面所から退散しよ

うとした……が

ガチャ

丁度、俺の真後ろのドア……シャワールームに通じるドアが開く音が聞こえた。

さらに運が悪いことに洗面所の洗面台の前に立っていた俺は、目の前の鏡に反射して映ったシャワールームから出てきた『人物の姿』を見てしまった。

「カ、カ、カケ、ケ……ル？」

「……」

シャワールームから出てきたのは、シャルルであった。

ただ……一言付け加えれば……シャルルらしい顔をした『女子』が鏡には映っていた。

なぜ、女子だとわかったか。

簡単な事だ、肉体的な特徴がそれを示していた。

濡れた髪は僅かにウェーブがかかったブロンド。

すらりとした体は足が長く、腰のくびれが自質的な大きさ以上に胸を強調させている。

バストのサイズは、不謹慎ながら……ぐらいかと思う。

水を弾いている若々しい肌には玉の雫が乗ったままで彼女が先程までシャワーを浴びていた事を示していた。

その姿の『シャルルらしい女子』に『わかっていた事』なのに俺は、一瞬、驚いてしまう。

俺の目が見開いていくのを鏡で見たのか……

「きゃあっ！！？」

先に我に返ったシャルルらしい女子が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込みドアを閉じた。

その閉めたドアの音で俺は、ようやく驚きの金縛りから自己を取り戻した。

最悪だ、こんな事で『彼女』の秘密を暴いてしまうなんて……

俺は、右手を額にやりうつむいたまま、自分の行動が招いてしまった事を悔やんでしまう。

『彼女』がすべてを明かすまで聞かないようにしようとしていた……だが、こうなってしまった以上、彼女はシャワーから出たら否応無しに自分の秘密を自分から話さざるう。

マスター、いずれこうなっていたかもしれません。

今は、悔いるよりも『彼女』が不安がらないように普段通りに振る舞うべきです

悔やんでいる俺に対してアストレイアは、冷静に俺の取るべき行動を示す。

．．．．．そうだな
今は、悔やむよりも．．．．．

4年の付き合いなのである相棒の言葉に頷くと、少しだけ自分を落ち着かせるように目を閉じ、そして少し息を吐いたところで目を開き口を動かし出す。

「シャルル．．．．．」

Side out
Side シャルル

ど、どうしよう．．．．．どんな顔をしてカケルの前に出れば．．．
．．

シャワールームに逃げ込んだ僕は、シャワーから流れ出る温水を体に浴びながら洗面所に通じるドアに背を向けている。

考えようとする鏡に映った驚きに目を見開く彼の姿のばかりが思い浮かぶ。

カケル．．．．．僕は．．．．

そう思った時である。

『シャルル……』

ドキイ!

ドア越しにカケルから声がかげられる。

「なっ、なっ、何？」

混乱が抜け切らないまま僕は、ドアの向こうにいる彼に言葉を返した。

「……どんな言葉を返されても答えよう、僕は、少し身構えてカケルの返答を待つが……」

『……ボディーソープは洗面台のところに置いておく。あと……体を冷やさないようによく浴びてから戻ってこい』

えっ……

それだけ言うとカケルは、洗面所から出たらしくドアの向こうから別のドアが閉まる音がした。

僕は、シャワールームのドアを開ける……そこには確かに洗面台の上にボディーソープが置かれていた。

カケル……どうして? どうして……今すぐに……僕の事を聞かないの?

僕は、君を『騙してたんだ』よ……

僕は、洗面台に置かれていたボディソープを抱え、シャワールームに戻ると何故か少しだけ涙が流れた。

一夏だったら多分、お互いに慌てて何か気まずい雰囲気になっていたかもしれない。

だが、カケルは違った。

彼は、確かに一瞬、驚きの表情を浮かべていたがその後の言葉はすべてを認めるかのように何時もどおり、僕に応じてきた。

そんな何時もどおりに振る舞う彼の姿は、僕の中の何かに刺激を与え、涙を流させていた。

・・・その後、僕は渡されたボディソープで体を洗うよりも涙を止めるのに時間を掛けてしまった。

第8話明るみになる事実(後編)(前書き)

虚空「祝！アニメ放送開始」

ドンドン！パフパフ！！

イエーイ！！

翔「おめでとつ。一夏」

一夏「おう！（^-^）」

ラウラ「……私が出た／＼」

鈴「って、いきなりあそこからはキツくない？」

虚空「そこは置いといて……第1話かわゆかったな（*、）
第／＼／＼／＼」

シャルル「うん……僕らも早く出たいなあ」

虚空「……一夏、第1話みたたく第にやられちまえ(憎悪)」

一夏「ど、どう言う意味だ！？それ」

セシリア「コホン、それでは第8話始まります。一夏さん、次回の撮影に行きますまよ」

一夏「おっおい！」

一夏、引きずられて連れ去られる。

第8話 明るみになる事実（後編）

1年寄宿寮

翔&mp;シャルル部屋

Side 翔

洗面所から出た俺は、近くの壁に身を預け、少しだけ自分が取った『ただ平然とした態度』に自己嫌悪をし、右手で壁を殴り付ける。

………ミシ

少し強めに殴ったためか、右手から嫌な音が鳴る。

………茶でも沸かすか

俺は、それだけで気持ちに区切りを付けると壁を殴り付けた痛みが響く右手をポケットに入れ、部屋に設けられたキッチンへと向かった。

キッチンに着くと、壁ぎわの電気ケトルでお湯を沸かし、それを一夏に貰っていた緑茶の茶葉が入った急須へと注ぐ。

「………」

茶葉が広がる様をゆっくりと見ながらどう流れを運ぶかを考えていた。

少しして、お茶に纏わる事である手を考えだす。

……あの手を使うか

俺は、若干邪道な手だと思いながらシャルルに渡す湯飲みに『角砂糖』を2、3個投入。

『いたずら』の仕込みを済ませるとシャルルを待つ。

すると

ガチャ……

「!……」

気持ち控えに洗面所のドアが開く音が背後からした。

そして、こちらに向かってくる足音に少しだけ身構えてしまう。

「あつ、上がったよ」

「……ああ」

背中越しから投げ掛けられるシャルルの応じて俺も声をだしながら振り返る。

振り返った先には、もう性別を偽る事をやめたシャルルがいた。

「……」

「……茶を入れていく。先に机へ」

「……う、うん」

俺の言葉に、俯いたまま反応を示すシャルル。

僅かに見える目が少し赤いのは何か合ったのだろうか？

……まさか、自分の態度がそうさせたとはこの時の俺は、思ってもいなかった。

「……あと、シャルル」

「……なっ、何？」

俺の続く言葉にシャルルは、身を強ばらせるような仕草をとる。

それに対して俺は……

「……俺は、突き出すつもりはない」

「……えっ？」

シャルルが驚いた表情を浮かべる。

S i d e o u t

S i d e シャルル

突き出さないって……カケル……

カケルの言葉にまた複雑な思いとなる。

「……俺から言いたいのはそれだけだ。さっ、さっさと向こうに行つてくれ」

「あっ、う、うん！」

それだけ言つとカケルは、前に向き直り、急須を手にとって中身をちよつとずつ2つの湯飲みに注ぎだす。

その言葉に気圧されるように僕は、備え付けの机の方に向かい、席についた。

「……1分位して

カケルは、湯飲みを2つ持ってキッチンから現われる。

「ほら……」

「あ、ありがとう」

カケルから湯飲みの1つを受け取る。

僕だけ慌てていても仕方ないよね……まずは落ち着こつと

僕は、少しだけ湯飲みに注がれた中身を一瞥して口をつけた。

が……

うっ……!!!

×¥*ゞ全〇

「ブツ！」

緑茶なのに何でか『甘過ぎる』味に僕は、生理的な拒絶感から吐き出してしまった。

「な、何でこんなに甘……あっ」
「……」

何故、甘かったのか追求する前に僕は、吐き出した分のお茶がカケルに頭から掛かってしまっている事に気が付いた。

「う、ごめん！ か、カケル！！」
「……気にするな」
「で、でも！」
「……フツ、フッフ」

僕の抗議に動じずにカケルは、ポタリポタリとお茶の雫を散らしながら少し笑いだした。

「なっ、何がおかしいの！？」
「いや、こつも疑いなく砂糖入りの緑茶を飲んでくれて、しかも吐き出して俺にぶっかけるとはなって……どっかの漫画みたいな展開でつい笑った」

「ひ、酷いよカケル！！」
カケルの悪戯めいた言葉に僕は、恥ずかしさでいっぱいになり、叫び返していた。

そんな様子を見たカケルは、次の瞬間にはなぜか優しい笑みを浮かべながら僕に話した。

「……ようやく、いつもの感じに戻ったな」

「えっ!？」

カケルの一言に疑問の声を上げる。

「シャワールームから出てから『君』、ガチガチでどんな風にしたかわからないって頭になっていたからな……シャルル、『君』の場合、いつものように屈託のない笑みを浮かべて話してくれた方が俺は安心する」

……えっ

カケルの最後の方の言葉に僕は、頬が少し熱くなるのを感じた。

その感情を何とか押さえると僕は、カケルに抗議する。

「で、でも酷いよ。緑茶にお砂糖入れるなんて」

「悪かった……フッフ」

まだ可笑しいのか、カケルは少し笑っている。

まったくもう!

……でもありがと、カケル

カケルからの初めての悪戯に少しだけ僕は、気持ちが楽になったのに気付いた。

多分、それを狙っているの行動だろう

「さすがにシリアスの場面には場違いだな……新しく入れてくるから渡してくれ」

「うん」

カケルに湯飲みに渡す。

そして、また待つこと一分、今度こそ正しい緑茶を入れてくれた。

そのお茶をお互いに同じタイミングで一口啜ると……

「……話してくれるか、君がこんな形で入学して来たかを」

「……うん」

一緒に持ってきていたタオルで一通り髪を拭き終えたカケルは、少しだけ睨むような目で僕を見ながらそう口にする。

その視線に対して、僕も口を開く。

「……何から話せばいいかな……とりあえず最初は、誰が男のフリをやらせていたかって言うことからだね。……これは、実家の方からそうしろって言われてやってたんだ」

「……実家って事は、デユノア社か。なら目的は……」

カケルは、話が分かっているらしく表情一つ変えず、静かに聞いていく。

そう言えば、カケルは企業のテストパイロットをしていた……
・その筋でデュノア社がやるうとして知っているのだろう。

「うん、目的は『デュノア社から出た2人目の男』……世間からの注目を集めるための広告塔として、それに……同じ男子なら一夏やカケルのような日本で登場した特異ケースとの接触や彼らが使っている専用機のデータも得やすいからね」

Side out

Side 翔

理由を話すシャルルは、段々と俺から視線をそらし、やってしまった苛立ちからか苛立ちを含んだ声で話を続けた。

「…………カケル。……今のデュノア社がどんな状況に置かれているか、知っているよね」

シャルルは、俺に確認するように問う。

俺がすべてを知っているかを……今一度確認するため。

「…………ああ、これでもIS関連の企業にいるからな。嫌でも話は聞く…………デュノア社が『経営危機』に陥っている事をな」

デュノア社は、リヴァイヴTypeの量産機生産ではISのシェア

は確かに世界第3位だ。

だが・・・今、国家防衛のために開発と量産が求められるのは特殊能力を有する次世代IS、第3世代型。

つまりは、どんなに改良されてもリヴァイヴは所詮扱いやすいだけの装備拡張性に重点を置いた『第2世代型』^{ロトル}、それだけでも後れを取っている。

また、IS開発にはかなりの資金が掛かるため、ほとんどの企業が国からの国防計画予算より、次期主力機開発のために回される予算の支援があつてISの開発が成り立っている。

例えば現在、セシリアの出身国であるイギリス含めた連合、『欧州連合』では統合防衛計画『イグニション・プラン』が第3次に移り、次期主力機となる機体を選定中らしい。

選定中の機体は、イギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型^{モデル}、イタリアのテンペスタ型^{モデル}となっている。

テンペスタモデルは見かけた事はないが多分、セシリアやラウラがIS学園に送り込まれたのもそのトリアル勝利の為の実稼働データ取得の為だろう。

では、デュノア社は、どうしているのか？

翔が知っている通りなら・・・

「うん、カケルにはその理由は話さなくてもわかると思うけど、僕の国フランスは『イグニション・プラン』から除名されているから元々、国防予算から予算を出す必要が合るんだ。……そんな中、デュノア社でも第3世代型の開発していたんだけど、元々遅れに遅れて送り出したのは第2世代型最後発。だから圧倒的にデータもそれを埋めるための時間も不足して今すぐには形にならなかったんだよ……それで政府からの通達で予算を大幅カット。そして、次のトリアルに落ちたら……」

「援助の全面カットどころか、IS開発の権限剥奪」

「……うん」

俺の言った言葉に頷くシャルル。

翔が以前、イグニション・プラン参加諸名国のリストを見た時もフランスの名はなかった。

さらにデュノア社が圧倒的なデータ不足になる事は翔がいた企業内でも噂されており、その結果が予算削減という手痛い事に繋がっているのだ。

（これは、デュノア社自体が、もともとIT分野からISの分野に進出してきた企業らしく、リヴァイヴ系のコントロール性もソフトウェアの支援が大きいらしい。その一方で実戦稼働にたえうる為のノウハウはやはり、戦闘機等を受注していた企業が転身し、母体となっているIS関連企業が高く、デュノア社自体のノウハウは少ない。それがデュノア社の経営危機の理由である）

その経営危機に対し、デユノア社は『世界で2人目の男でISが使える男としてシャルル』を自社から出し、世間からの注目を集める事での資産会得。

次世代型を扱う人物からのデータ収集による次世代型開発へのフィードバック。

さらに男の特異ケースである一夏や自分の与えられた最新鋭ISのデータを得るためにシャルルを送り込んできたのだ。

そこまでなら翔は、何も言わない。

何故？

それは、シャルルのようなデータ取りや『企業スパイ』なら飽きる程見てきたからである。

……暗い面も考えれば男を使ったハニートラップ（一種の手段）まで一時期横行したぐらいだ。

また、IS学園自体、『稼働データを無条件で提示』する事を設立条令的にも盛り込まれているため、企業スパイの一匹や二匹、最悪で『黒いG』、英語ではコックローチと呼ばれる昆虫のように30匹ぐらいいてもおかしくない。

ここまででは理解できるが……俺が聞きたいのは……

「背景は、大体わかった。……あと1つ、個人的に聞きたい事がある」

「……なに？」

「……何故、デュノア社社長の『娘』がわざわざこんな事をした？家の命令だろうと拒否権はあるはずだ」

俺が聞いたかったのはそこだ。

一夏や俺なら告げ口などと言う真似はしない。

だが、他の人が同じ判断を下すとは考えにくい。

むしろ、もし面白がってシャルルの噂を流してしまえば、デュノア社が用意したシャルルのプロフィールに疑問を抱いたフランス本国が調査に乗り出す。

その課程でシャルルが『女性』とバレれば、本国に呼び戻され、シャルルが持つ代表候補の権限を剥奪。

その後、投獄と言った処罰が待っているはず……

そんな危険なリスクを犯してもなお、デュノア社社長……つまりシャルルの父親は、娘をIS学園に、『男』として送り込んだ理由がわからなかった。

……と言うより、そんな危険な賭け事に家族である娘を出したのか、それが理解できなかったからだ。

俺の最後の質問にシャルルは、実家の話をしている中で一番に顔を曇らせる。

「……………悪かった。話したくなければ話さなくていい」

そのシャルルの表情に俺はこれ以上、彼女に踏み込むのはダメであると感じ、一步身を退く。

だが、シャルルは首を横に振り、話しだす。

「……………ううん、カケルには気を遣ってもらっちゃってたから……………全部話すよ。……………さっき話した事は、デユノア社、社長……………つまり僕の父から直接の『命令』なんだよ」

わざわざ命令という言葉を使ったからには何かあるのだろう。

心では、もう彼女を追い込むなと抑えがくる。

だが、俺の『本質』でもある冷静な理性がそれを凌駕し、彼女に応じながらその唇から紡がれる言葉の重みを聞く。

「……………何かあるのか？」
「うん……………カケル、僕は、その人と……………『愛人』との間に出来た子なんだよ」

シャルルの口から紡がれた『愛人の子』と言う言葉に俺は、思ってもいなかった理由に思考を停止させてしまう。

『愛人の子』、その言葉の意味を知らないほど世間には疎くはない、

それどころか母さんや父さんが扱ってきた……『事件』でも度々、絡んできており、ドロドロとした方面もよく知っている。

話の中で、可能性としても考えられたかもしれないが、最悪なケースであった。

俺は、止まりかけている思考を何とか再開させ、湯飲みを掴み、中身を少しだけ啜る。

飲み終わり、湯飲みを机の上に置いても湯飲みから手を離さなかったのは、自分が気付かないうちにイラツキを孕みだしているからか？

俺は、そんな自分の行動を理解しないまま話の続きを聞く。

「ちょうど2年前、お母さんが亡くなった時に父の部下がやってきて、引き取られたんだよ。……引き取られた時の検査過程でIS適応が高いことがわかったから非公式だけどデュノア社でテストパイロットをしていたんだ」

ミシリ

何かが俺の中で騒めきだす。

それを抑えるために湯飲みを握る。

湯飲みを右手で握り締めた事で元々、痛みを抱えていた右手から痛みが伝わる。

「……それで」

俺は、騒めきを抑えつけながら彼女の話の話を聞く。

「うん。……実際に父に会ったのは二回ぐらい。会話は、電話しても含めても数回ぐらいだね」

ピキ、ピキ

家族なら……親なら……娘をもつと気に掛けるはずだろ？

腹違いの実の子でもそれは変わらないはずだ。

知らない内に湯飲み握る力をさらに強めてしまう。

「……えつとね。普段は別邸で生活しているけど、一度だけ本邸に呼ばれたことがあったんだ。……あの時は、ひどかったなあ。邸に入った途端、本妻の人に殴られたよ。『この泥棒猫の娘が！』ってね」

ピキ、ピキ

……ピキ、ピキ

さらに強めた事で湯飲みと指の方が悲鳴を上げはじめる。

が、その痛みは別の感情によって凌駕していた。

それは……『怒り』である。

これはシャルルと実家の問題で、自分には関係ない、関係はない……がシャルルの話を聞いているうちに沸き上がる何かが歯止めが効かなくなってきた。

「……………これから『お前』はどうするんだ？」

俺は、何とか平穩を装いながらもなぜか家族の話とは別の事を聞いた。

なぜそう聞いたのかさえ分からないが……………自然と聞いたのがそれであった。

「……………カケルにはれちゃったし、多分、僕は、本国に呼び戻されるだろうね。……………デュノア社は、潰れるか他企業の傘下に入るだろうし……………僕にはどうでもいいことかな……………『罪人』の僕には」

愛想笑いを浮かべながらそう告げるシャルルだが、声は乾ききっており、笑ってはいない……………むしろ、全てを捨てようとする世捨て人のように疲れ切っていた。

「……………話したら少し楽になったよ。聞いてくれてありがとう……………あと、カケルには気を遣って貰っていたみたい……………」
ピキィ！！！！
パリーン！！！！

シャルルの言葉が最後まで紡がれなかった。

何故ならその前に俺の右手は、湯飲みを『握り潰し』ていたからだ。湯飲みの中に残っていたお茶が湯飲みの破片で切った手の傷に入り込み、痛みを発する。

さらに『折れかけていた指の骨』が完全に折れたらしく、指の骨が

肉を抉る痛みがさらに拍車をかける。

が……今の俺には、そんな些細な『肉体の損傷など』気にならなかった。

……この時点で俺は、感情的に『キレ』ていた。

シャルルの実家の事だけでない……全てを諦めようとしているシャルルに対して俺は、『キレ』ていた。

「……『お前』は……それでいいのか」

Side Out

Side シャルル

僕は、カケルが右手に持っていた湯飲みが握り潰した音に驚いて、言葉を途切れさせる。

カケルの右手からは、破片が落ち、残っていたお茶が血と交じりあいながら変色した液体が流れ落ち、机の上を汚す。

「……か、カケル？」

普段の彼から想像できない行動に僕は、呆気にとられ、ただ呼び掛ける事しか出来なかった。

伏せられたカケルの顔は、表情を伺え知れない。

「……お前は……それでいいのか」

「……えっ？」

突然、投げ掛けられた言葉に疑問の声を盛らす僕。

と……

「……お前は、それでいいのかと聞いている」

顔を上げたカケルの表情は、完全に怒りを宿している。

いつもの目元等の僅かな変化ではない……顔の表情が顕になっている。

それに気のせいかもしれないが、彼の目が……いつもの赤ではなく……両目とも『金色』に変色している。

「えっ、え……？」

僕は、カケルの怒りの理由がわからない。

そうしている間に右手から残った破片を払ったカケルは、席を立ち、僕の方に来ると両手で肩を掴んで、自分の顔から逃さないように顔を上げさせる。

金色の目をしたカケルが僕を見る。

「家の……父親からの命令？……親が、娘を道具に使う……八

ツ、『ふざけんな』。親が自分の欲の為に娘をから『選択』する事を奪うなんて、『ふざけきってるだろっ』が
「か、カケル……？ツウ！！」

彼に言葉を返そうとするが……その前に彼に掴まれた肩が痛くなる。

どうやら肩を掴んだ手の力を無意識に強くしているらしい。

いつも着ているジャージの左肩が彼の怪我した右手から流れ出た血で赤に染まる。

「カケル……いた」

「それにシャルル、お前もこのままでいいのか？自分の居場所を無くして、自分から何もかも捨て、『諦める』ように生きる事も……そんな生き方、ただ自分から動こうとしない、ただ全てに絶望した世捨て人だろ？」

その言葉に僕は、言葉が詰まった。

何故なら心のどこかで自分でも分かっているからだ……自分のありのままを口にした言葉の意味を……

「ぼ、僕は……」

僕は、カケルの表情に怯えたような顔になってしまっているだろうが……それを許さずにカケルの表情は、まだ怒りを宿している。
「シャルル……お前は……君自身がどう生きていきたい？」

……カケル

彼の目がじつと僕の目を見る。

その金色に染まった目は、瞬きする事、背ける事も許さずに……
・ただ、自分の答えを待っているようにも見えた。

「ぼ、僕は……僕は」

なかなか続く言葉が出ない、かと言って彼の目からも目を背ける事
ができない。

沈黙が僕らの間に流れだす……

が、次の瞬間、その沈黙はぶち壊された。

『翔、シャルル。いるか？いたら返事をしてくれ』

部屋のドア越しにノックと共に呼び掛けられる。

一夏だ

時間的に見て、夕食に誘いに来たのだろう。

『一夏さん、開けてみてはどうです？』

『バカ言え、断りもなくって……オッ、オイ』

『失礼しますよ、櫻井さん。シャルルさん』

ドアノブが回され、ドアが開きだす音がする。

ちゃんと施錠していればこんな事にならないんじゃないかと思う人もいるだろう。

だが、IS学園の寮では、午後9時以降でなければ、部屋に入室者がいない時を除いて、施錠してはいけない規則がある。

何でも何年か前に当時の在学生が学外から『男』を連れ込み、部屋で……『ヤツ』てしまった事がバレたらしく、このような規則が出来たらしい。

……マズい!!

セシリア達が部屋の中に入って僕らが少しでも物音を立てれば部屋の奥に来るだろう。

それに僕の今の格好は、性別を偽るために付けていた特製のコルセットを外した上でジャージを着ていて、胸の膨らみが明らかになっ
てしまっている。

ど、どうしよう!!

物音を感付かれないようにするため、口も閉じていなければなら
ない。

まさに万事休す……

だが……こんな時でもカケルは、動じずに表情は変わらなかつ

た。

「邪魔が入ったか……仕方ない」

そうカケルは、呟くと僕の肩を引き寄せ、抱き締めた。

!!!!?

突然の事に僕は、混乱してしまう。

口を動かせない僕は、『いきなり、何』と目だけで抗議しようとする。

そんな僕を余所にカケルはと言うと……

「『アストレイア』、転移……始末書？そんなもの、何枚でも書く。とにかく、今は、シャルルと2人だけで話をさせる。……『術式』は送った。細かい調整を頼む」

そう、ブツブツと何か、僕には見えないものと喋りだす。

いつ、いつたい何を？

僕が首を傾げた時である。

《わかりましたよ。………Jump(転移)》

えっ？

何処からか機械的に合成したような声が僕の耳に届くと続いて僕らは、光に包まれる。

その光は、一瞬の瞬きの後、シャルル達と共に部屋から消え去る。

最初から誰もいなかったかのように……

「櫻井さん？あらいらっしやらないみたいですね？」

「セシリア……お前な」

「……許しもなしに入るのは不粋であろう」

「鍵が合いてらしたら普通、いるとお思いですが」

「はぁ……とりあえず。 食堂行こうぜ」

「あぁ、そうだな」

「そうですね。 ……行きましょ、一夏さん」

そう言って戸口だけで一夏達は、シャルル達が居ないと判断して食堂に向かいます。

「って、なんで腕を組んでくる!？」

「あら、殿方がレディをエスコートするのではなくて？」

「そうなのかって……… 篝、お前まで何で腕を絡めてくる!？」

「……… 篝さん、何をしてらっしやるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのが当然なのだろう？別に問題はない」

いや、2人とも膨らみが当たっているって……… てっか、何で俺に寄ってくるんだ2人は？

……文字通り、両手に花状態で……鈍感男と恋する乙女達は、去っていく。

IS学園

寄宿寮 屋上

光が収まって最初に目に映ったのは、巨大な黒い影だ。

だが、その黒い影はどこか見覚えがある。

それは……

「あ、IS学園？」

いきなり暗いところに『移動』したらしく目が慣れずにいた。

が、徐々に暗がり目目が慣れたことでIS学園の特徴的な校舎とその高層部に夜間飛行を行う航空機に建物の存在を示す航空障害灯が点滅している事に気が付いた。

IS学園の校舎が見え、あとアリーナ等の施設も一緒に見えることは……

「寮の屋上？」

「ああ、そうだ」

その声に頭を前へと戻すとカケルが目の前にいる。

僕の手はカケルの胸にすがり付くように制服を掴んでいる。

「ツウ!」、「ごめん!？」

僕は、慌てて制服から手を離し、彼から少し距離を置いた。

恥ずかしさとこの状況を『理解』出来ずにいるためだ。

「か、カケル。これは、カケルのISのワンオフ・アビリティーなの!？」

困惑したまま僕は、カケルに聞いた。

ISを展開しないまま、発動するワンオフ・アビリティーなど僕は聞いたことはないが、『部屋から屋上』まで、一瞬で……まるで『ワープ』したように移動するなんて、ISと同乗者の間に生まれる特殊能力、ワンオフ・アビリティーとしか考えられない。(感覚などを支配するワンオフ・アビリティーとも考えたが、先程まで掴んでいた彼の制服の肌ざわりがそれを否定していた)

僕がそう聞くといつの間にか目の色がいつもの赤へと戻ったカケルが首を横に振る。

「……いや、違う」

「違うって?でもこんな現象を起こせるのは、ISぐらいしか……」
《Ms・シャルル、これは『貴女方』が用いているISとは違う力です》

僕の言葉を遮るように先程の機械的に合成された女性の声が響く。

「……だ、誰!？」

その声に僕は、周りを身構えてしまう。

先程も聞こえてきたが……姿が見えない。

一体、誰!?

僕が辺りを警戒しているとカケルは……

「……『アストレイア』、話を拗らせるな」

《申し訳ありません。マスター、ですが『使ってしまった』以上、先に彼女の疑問を解消するのが最優先です》

「わかったよ。……シャルル、この声の主は、こいつ、『アストレイア』だ」

そう言いながらポケットからケータイを取り出すカケル。

そのケー……

《はじめましてと言うのは正しい定義なのか分かりませんが……
…はじめまして、Ms・シャルル。私は、マスターカケルのアーム
ドデバイス『アストレイア』です》

しゃ、喋った!? AI (人工知能) 付き?

ケータイがスリットスクリーンを点灯させながら話しました。

「えっ、えっ、え!?!? それもISなの?」

僕は、混乱する頭でそう返すが彼らは……

「違う」

《違います》

否定する。

「で、でもそうとしか……」

「……シャルル」

カケルは、僕に近付き、僕の肩を優しく叩く。

先程までの力強いものではないただ優しい叩き方だ。

「カケル？」

彼の行動に僕は、僅かに不安と恐れを抱く。

何故なら彼の知ってはいけない秘密を知ることになると思ったからだ。

「ハッキリ、言う。……俺は……この世界に本来、『存在』しない人間だ」

「……え？ 存在しないってどう言う
「存在しないというより……この世界は、俺の『出身世界』じゃない
い」

？出身世界じゃないって？

僕は、彼の言葉がますます理解できずにいた。

「……どう言うこと？」

《Ms・シャルル。私達は……いくつかある違う世界から次元の壁を越えてここに来ています》

「次元の壁？」

新たなワードに僕は、ただ首を傾げるだけだ。

《はい、乱暴に言ってしまうえば敷地をわける壁みたいのがあると思っってください。……本来、その壁によって世界と世界は区切られ、接触しないのですが、ある世界では科学が、また別の世界では魔法と科学の融合である『魔科学』文明が発達し、次元の壁をこえるための次元航行船が開発されています》

それってつまりワープ………えっ！？僕らの世界では、有人でようやく火星まで行けるようになったばかりなのに

アストレイアの説明を簡単に頭の中で整理して、理解した瞬間、僕は二回目の驚きを味合わされた。

そんな僕をよそに、アストレイアの話が続く。

《その中で私達は、『魔法と科学』が発展した世界から、ある『危険性』の検証のため、IS調査の為にこの世界にやってきました》

アストレイアの解説によってカケルは、別の世界から来たことが説明された。

……えっ、ちよっと待って『魔法と科学の世界？』それに『IS』

の調査って？

僕は、少しずつの説明でようやく落ち着きを取り戻したが……同時に疑問が沸き上がった。

1つは、カケルが魔法と科学の世界から来たことが本当なのか？

もう1つは、何故、『IS』の調査が行われるかの、この2つである。

「少し説明してくれたからわかったけど……本当なの？カケル、君が別の世界から来て、しかも魔法使いだなんて？」
おとぎ話じゃないんだし

半信半疑で僕がそう思った時である。

「……ああ、本当だと言っても信じないだろうし……『バインド』
そうつぶやくとカケルの左手に『白い光の帯』が絡みつく。

「！？」

こんなのISの機能にはない。

一体、何が！？

「……簡単な捕縛術だ。そう驚く必要はない」

術を解いたカケルがそうつぶやく。

「け、けど。そんな力があるのに何で『IS』の調査が必要なのか？」
僕は、目の前で起こった現象に驚きを引きずりながらカケルに問い掛けるが……

《申し訳ありませんがこれ以上は、私達が所属する『組織』の機密事項にあたります。まあ、私とコンビを組んで4年間で初めてですが、今夜だけでもうちの規約違反を犯していますから……これ以上喋りますと職務放棄でマスターが怒られます》

職務放棄って？

「……わかっている。その件は、もういい。アストレイア……一応、話している間に誰かこないかサーチしてしてくれ」

《Yes、Sir》

そう答えるとアストレイアは、黙ってしまう。

どうやらもう聞いてはいけない事らしい。
その後、少しの間、僕らに沈黙が降り立つ。

何をしゃべればいいのか……と言うより、カケルの秘密を知ってしまった僕は、カケルにどう話し掛けようか迷っていた。

……そんな時、切り出したのは、意外にもカケルからであった。

Side Out

Side 翔

術式とデバイスの存在を明かしただけでも処罰対象なのに俺は、一部だけ俺の存在を話してしまった。

シャルルを見れば、こんな話をされた上に実際に魔法を見てしまったためか、まだ困惑している。

……俺は、馬鹿な事にただ『感情』任せて魔法を使って、そして彼女に自分の秘密をバラしてしまった。

父さんは、面白がって笑って許してくれると思うが、『上』はどんな処分を寄越してくるか……

まあ……そんな事、考えるのはあとだ

俺は、そう無理矢理納得させて言葉を発するため口を開く。

「……詳細は、時が来たら話す。今回は……これで『おあいこ』だ」「えっ?」

『おあいこ』と言う言葉に呆気にとられるシャルル。

「……俺と君、お互いの秘密を『喋ったんだ』。だから今回は、もうこれ以上、お互いに言いつこなし……だ」「あ……っ、っん」

そう最後まで話すとシャルルは納得して、頷いてくれた。

「……すまないな」

俺は、彼女の心遣いに感謝しながら謝ると屋上の手摺りに近付く。

手摺りに身を預け、そこからの夜風を浴びる。

春から夏への変わり目だからか少しの暑さがある風だが、今合ったことを優しくすべて運び去ってくれるようだと俺は、思った。

「あの……さ、カケル」

「ん？ なんだ」

と、少し躊躇いがちにシャルルが後ろから声をかけてくる。

姿を見ないのは、聞きたい事がわかっているからだ。

「えつとね……さっきの部屋での事なんだけど………どうしたの？」

さっきの態度の豹変だ。

「……その事か、その『ごめんな』」

「別に気にしてないよ………けど、少し驚いちゃったよ。カケルのあんな風に怒るなんて」

そんなシャルルの言葉に少しだけ気まずいものを感じながら俺は、理由を口にする。

「昔の俺みたいに君が『選択』する事を捨てようとしていたから……
…ついああなった」
「昔のカケル……？」

俺の言葉に疑問の声を上げるシャルル。

と俺は、彼女の過去を聞いてしまったからか少しだけ自分の過去を話す事にした。

……あんな態度をとった理由を踏まえた上で。

「ああ……俺は、『養子』なんだ」

「えっ？」

多分、俺のプロフィールを見ているであろう、シャルルは理解できないと言う表情になる。

「今の両親に引き取られたのが5年ぐらい前だ……引き取られる前は……シャルル、今の君と同じ立場におかれていた」「……」

多少、嘘も混じっているが大筋はあっている。

もともと俺は、シャルルのように自分を捨ててではなく、『何も考えず』に世界を転覆させてしまう程、最悪な事を平気でやっていたのだから質が悪すぎる。

少しの過去への追憶を少しだけした俺は、そのまま話を進める。

「それで……色々あって今の両親に引き取られた時に『自分から選

択する事を捨てるな。自分で選んで、その先の光へ進め』って父さんに言われた事が今の俺に繋がる切っ掛けだ……………だからシャルル」

俺は、彼女を真っ直ぐ見た。

「もう一度、聞く。君自身はこの先、『どうしたい?』」
「僕は…………」

突き付けられた言葉に迷いを見せるシャルル。

焦ることはないと言ってやればいいかもしれないが…………最後に決めるのは彼女自身の選択でもある。

「今、直ぐには無理だな」
「……………うん」

俺の続く言葉にシャルルは、俯いた表情でそう答える。

なら……………

「なら……………」こゝ、『IS学園』にいる
「えっ?」

俺の言葉に顔を上げるシャルル。

Side Out

Side シャルル

「確か、特例条令内にIS学園自体、どの国家、機関にも所属しない一種の特例区としての権限があるはずだ。それなら……本国の方も下手に手出しは出来はずだ」

「……カケル?」「それに3年間も『時間』あれば、進む道も見えてくるはずだ」

カケルは、そう納得するように口にする。

だが、僕は……

「……でも、それでも見つからなかったら?」

カケルの言葉に否定的に……最悪な結果を突き付ける。

カケル、助けしてくれるのは嬉しい……けど、僕はに……選べるよ
うな気がしないよ……悪いことをやった……

そう否定的になるところでカケルが右手で僕の右手を掴んだ。

「……そうになったら、俺の出身世界で暮らせばいい」

「……えっ?」

カケルの言葉に僕は驚きの声しか返せなかった。

カケルの世界で? それは可能なのか?

そんな微かに抱く疑問すらカケルは、払い除けた。

「君のIS『リヴァイヴ』には、悪いが……その時は、専用機を捨てて、こっちに來い。……世界と言っても色んな次元世界からの移住者もいる。家の件や代表候補を辞任する課題はあるとは思いが全部クリアできる事だ。……俺は、ただ君が何にも捉われなようにいきさせたいだけだ、深い意味はない」

「……カケル」

僕は、一瞬泣きたくなるように感じた……何故なら自分にここまで問い掛けて考えてくれ、そしてまるで『お母さん』のように不安を拭い去ってくれる。

その強さに僕は、心にようやく、安心感を得るようになる。

「う、うん……カケル、ありがとう」

「気にするなつと……これからは少し曝け出してくれ。……俺は、直感で物事はわかって……心の奥底まで見えないからな」

そう言いながらカケルは、自分では気づいていないのだろうか？

この一週間で見たことがないようなとびつきり優しい顔で僕を見ている。

「……」

「……シャルル？」

「えっ、あつう、うん！」

「？……顔が赤いぞ」

「えっ！？」

無意識にカケルに見とれていたためか、僕は、恥ずかしさのあまり、さらに顔を赤くした。

「……………まあ、いい。アストレイア、部屋に戻る（転移する）ぞ」

そんな僕をよそにいつもの表情に戻ったカケルは、アストレイアに話し掛ける。

気付いていてこうなの？

《了解です。マスター落としましたね？》

「あ、アストレイア!？」

「……………アストレイア」

しゃべる携帯電話……………もとおい、アストレイアの発言に僕は上ずった声を洩らす。

カケルは、カケルで、冗談はやめろといわんばかりだ。

《冗談ですよ。では転移します。Ms・シャルルは、転移後、部屋で待っていてください……………その格好では騒ぎになりますから》
「う、うん!」

ちよつとしたアストレイアの悪戯に僕は、ドキマキしながら二度目の体験である転移を行った。

S i d e O u t

S i d e ? ? ?

私達は、光に包まれて消えた『櫻井君達』を見ていた。

正確に言えば、IS学園校舎、屋上に設置されたカメラの1つの回線を拝借し、最大望遠にしたものをモニターに流し、見ていたのである。

「……………お嬢様。これは」

「IS……………じゃないわね。明らかに」

彼のISの反応が別のところに移動した時も内心、少しだけ驚いていたが……………私は、さらに彼の不思議さに興味を持つようになる。

「お嬢様どう致します?」

「そうね……………本音。明日、彼が一人になったところを狙って『ここ』に呼び出してくれる?」

「うん、了かい」

さあてと……………櫻井君、今度こそ本気で相手をしてあげるよ……………その代わり、『秘密』を教えてね?

暗がりの一室に集まった女子達、その中の水色の髪をした女性は……………終始、笑みを絶やさず、明日を心待ちにする……………久々に面白くなる明日を。

第8話明るみになる事実（後編）（後書き）

虚空「うーん、やっぱり、入試の時を入れてもらっていたらよかったんだけどな・・・男で使えるって言っても『小さい頃からの』って思われちゃうからな」

のほほ「た、たくたすけてえ!!」

虚空「!?!のほほさん。どうしたの?」

のほほ「ほ、本編にか、かおだしたら〜み、みんな〜から襲われちゃって」

虚空「えっ?・・・!!ああ、そりゃ逆恨みですよ」

のほほ「何で!?!」

虚空「だって、あなたの名前が明らかになるのは第5巻でしかも・

・・・」

のほほ「しかも?」

虚空「他の人より優遇されているから（^ - ^）猫耳パジャマつきで結構よかったですよ」

のほほ「そ、そうかな〜」

未登場組「覚悟はいいな（ね）」

虚空&mp;のほほ「えっ!?!」

全力砲撃!!

虚空&mp;のほほ「いやあああ!!」

通信途絶

番外 ある日の日常編（前書き）

注意

これは、本編 第5話終わり〜第6話開始までを描いたサイドストーリーです。

第8話でもう解禁した内容も含まれるため、読まれる前に第8話を既読されているのがお薦めです。

今回は、早く進みすぎた事もあるので、ほんのり風です。

それに私なりの解釈もあるのでぜひ読んでみてください。

番外 ある日の日常編

これは翔がIS学園に来て数日たったある日の日常である。

IS学園

1年寄宿寮近辺

Side 幕

ふう

朝、日が上り切らない時刻。

私は、朝の稽古を終わらせ寮に戻るために歩いていた。

自分が所属している部活、剣道部の朝練とは別に幼い頃から欠かさず行っている事だ。

朝の稽古は、いい。

それによって自分の体調もわかるし、それに自分の軸のブレも確認できるからだ。

……ここ、今度、一夏も誘って……いや、あの戯け、同室だった頃、私かの、の、のぞきこんでも起きない奴だからな

……若干、自爆しそうになりながらも私は、一夏と同室の頃を思い出す。

……誰が仕組んだか……それともミスなのかはわからない

が・・・・・・・・・・・・・・・・アレはアレでよかった気が・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・ですが、私も彼の・・・・・・・・見ましたが」
ハウー！！？

私は、その声に現実に戻される。

無意識に頬が熱い。

・・・・・・・・どうやら同室だった頃の事を幸せ気分で味わっていたらしく夢うつつ状態へと移っていたらしい。

わ、私は・・・・・・・・！何ヤツ！？

私は、見られたかもしれない声の主を探す。

少し視線を走らせるとすぐに人物が見つかる。

先日、転入してきた『3人目のISを使える男』、櫻井翔だ。
彼は、こちらに背を向けた状態で肩から木に寄り掛かりながら誰かと携帯電話で喋っているらしい。

「機体自体、特に変わった機構はありませんが・・・・・・・・機体各部の改良と武装は『別口』みたいです・・・・・・・・え、え。恐らく・・・・・・・・！！」

そう言ったところで櫻井が振り返って私を見た。

少しだけ驚いたように目を見開かせるが、すぐにいつものような顔となり『ごめん、電話中だから』と開いている手でデスクチャーして

くる。

私は、それを受け入れ、頷くと歩を進めた。

何故なら電話している相手の話に耳を聞き耳をたてるなんて不粋だからだ。

それに・・・今日も一夏に弁当を作っていきいたため、時間が少しでも作りたいが為だ。 Side Out

Side 翔

びっくりした。まさか篠ノ之さんがこんな時間から起きているなんて・・・

『・・・どうしたの?』

と俺が少しだけ茫然としていると電話相手がそう問い掛けてくる。

おっと、いけない

俺は、それに応じるため口を開く。

「・・・予想外のところでクラスメートとあったので・・・」

『あら、それって貴方が気に掛けている娘?』

電話口の声に若干の笑いが含まれます。

「・・・からかわないでください」統括官『」

俺は、自分の身内でもあり、この案件の『最高責任者』である電話口の女性にそう切り返す。

この人は、いつもこれだ。簡易報告の時、何かおもしろい話題があると俺をからかってくる。

『ええ、でも貴方のお父さんは、お母さんに一目惚れみただつたし……』

「『ええ』、じゃ、ありません。……本題です、どうやら織村一夏のIS『白式』は元々どこかの研究室が開発していた『第3世代』に手を加えたモノみたいです」

そのやり取りに俺は、どつちが年上だよと考えながらも少しだけ気が楽になり、落ち着いた報告ができる。

その状態のまま、報告に移る。

『そう。開発者は？』

「不明ですが……。装備から考えますと俺達が『別件』で所在を探っている『あの人』が絡んでいると思います」

そう、自分の『結論』を口にする数瞬だけ、沈黙が流れ……

『そう……。此方としても確保を優先ね。『完全な解析』の為に』

「ええ、それに『篠ノ之束』しののたばねがなぜISを作ったのか、その真意を追求するためにも」

これは、翔達にとっても『最重要項目の1つ』となっている。

ただ各政府機関のような技術的独占欲目的ではなく、『ISを作り出した真意』を聞き出すためだ。

それにカケルの世界のある科学者が提唱した『ISの自己進化の先に・・・待つもの』を見極めるためにも・・・彼女を捕まえないければならない。

「・・・幸いIS学園には彼女の妹がいます。恐らく何らかの形で接触があるかと」

『なら、可能性は大ね・・・ただし』

「分かっています。荒い事はしませんよ」

翔は、そう父親達との『約束事』を呟く。

「では、引き続き『調査』を続けます。『リンディ統括官』」

『わかったわ。そちらも気を付けてね。カケル』

「ありがとうございます」

アストレイアを介した長距離通信を切り、俺は寮へと戻る道を歩きます。

・・・昼飯でも作って時間潰すか

シャルルへの配慮を考え、次の目的地を決めながらも・・・

1年寄宿寮

キッチン

Side Out

・・・また数個失敗したか

私は、目の前にある自分で揚げた唐揚げの一部に少しだけ気分が暗くなる。

ここは、寮内にあるキッチンである。

弁当を持参したい生徒のために早朝、キッチンが使えるようになってる。

材料も特殊なものでない限り、各種取り置きがある。

今、私が作ったのは、先日、一夏にも好評だった唐揚げだ。

また・・・た、食べさせてくれるの？

・・・!!?何を考えてるのだ私は!!

頭に浮かんだ妄想を振り払うと私は、また失敗した唐揚げを見る。

・・・食べるか、このまま捨てるのも罰が当た・・・

「・・・少し、一夏の弁当に入れたらどうだ？」

「なっ!?!」

その言葉に隣のキッチンスペースを見ると葱や人参、卵、それに剥きエビとご飯等の材料をトレイに載せた櫻井がいつの間にか来ていた。

「お、お前は・・・さ、櫻井」

「そんな、仇をとる娘みたいに……睨み付けないでほしい」

自然と先程、見られたかもしれないから私は、睨み付けてしまう。

「……どう言うことださっきのは？」

「言葉の通りだ」

櫻井はどこから取り出したのだろうか紺色のエプロンを身につけ、人参などの食材を細かく切りはじめる。

「成功したもののだけじゃ頑張ったんだって見せられないだろう？そう言った点は個人的にいいと思うんだが」

「お、お前に言われる必要なんてな……」

「それに一夏の場合、小さい変化に気が付きやすいからな。そう言った方で攻めるのがいいと思う」

「攻めるとは、何のことだ!!?」

櫻井の言葉に私は、噛み付く。

「だって君、一夏の事……」

「だ、誰があんな奴のことを好きになんか」

「……俺は、『好き』なんて一言も言っていないが」

ハッ／／！

私その一言で見事に地雷を踏んで狼狽している最中、櫻井は卵をポールの淵で割ると卵黄と卵白をそのまま入れ、醤油と若干のダシのモトを入れ込むと掻き混ぜる。

「あうだ、だ、だれが……」

「それともセシリアや鈴音に取られてもいいのか？」

「！！そんなわけないだろう！！！！」

私は、ついムキになり喚く。

こやつは、私を誑かしているのか！？

櫻井の態度に私は、苛立ちを募らせる。

「……………言い方が悪かった。こないだの訓練時に君を見たときから気づいてたんだが、君は一夏に特別な思いを抱いている」

「ウグ！」

「しかも、かなりの嫉妬深さときた」

「……………グッ！」

「それに……………変に素直になれないから大いに誤解されている」

「……………はハウウイウウ／／」

……………的確にしかも覚えがある事ばかりをつかれた私は、頬が熱くなるのを感じた。

「……………すまない。俺は、直感だけは人一倍敏感なんでな」

私の狼狽えぶりに少し気の毒だと思ったのか、櫻井はそう謝る。

謝りながらも櫻井の手は、ダシと混ぜた卵をゴマ油を引いた中華鍋へと投入していた。

卵に軽く火を通し、切り刻んだ材料を投入してからご飯を中華鍋へと入れ、鍋を振るいだす。

ご飯が宙を舞う。

「……まあ、あいつの場合、とことんアホだから気付くわけ
ないか」

「……そう思うならなぜ、そのような事を助言する？」

私は、気になってそう聞く。

何故なら彼が、私の『恋路』を助ける理由など何処にもないからだ。

「……ただ面白いからかな？それに母さんの知り合いに聞いた
んだが、人の『恋路を助ける事は面白い』から一度やってみろっ
てってな……と」

櫻井は、一度、鍋を振るう手を止め、塩と胡椒を適量入れると再び
振るいだす。

……ハア？

そんな突発的な理由に思わず表情を崩してしまう。

が……

「……深い意味はないさ。ただ、どんな理由で離れるかわか
らないからな……人は。だから後悔だけはしないように……な」

鍋を振るう櫻井の顔に影が指す。

いつ別れてしまう……私は、思い当たる淵があった。

それは、小学校4年生の頃の引越した。

その当時、自分の姉である篠ノ之束がISを開発し、各国家机关に追われていた。

その身内である私や両親も政府の要人保護プログラムにより、引越しを余儀なくされた。

……一夏と突然すぎる別れ……もし彼がISを使えなかったら再び会う事は叶わなかっただろう。

「……」

「……何か思い当たる淵があるみたいだな……すまない」

櫻井が私の顔を見て謝ってきた。

どうやら顔にも暗い思い出が出てしまったらしい。

「……気にするな。私自身がわかっていた……が、ここでアイツ……『一夏』とまた会えた事が忘れさせていた」
それは、2人目の幼なじみである鈴木同じであるが……私自身
身が忘れてはいけない事を忘れていた。

「だから……逆にありがたかった。ありがとう、櫻井」

「礼を言われるまでの事はしてないさ……だけど悔いは残さないようにな、『篝さん』」

「ああ、わかっている『翔』」

彼への、櫻井への印象が変わったからか、これが呼び方が変わった時でもあった。

「ところで先程は誰と？」

「ああ、企業とだ」

Side Out

昼休み

IS学園 屋上

Side 一夏

午前中の授業を終えた俺達は、また昼飯を屋上で取ることにした。

それぞれが売店で買ったパンや作ってきた弁当を広げる。

メンバーは、俺、翔、篤、セシリア、鈴の5人だ。

ちなみにシャルルは……『人さらい』にあった。

ってか、本人の意志に関係なく、クラスの女子に捕まり、断り切れずに結局、シャルルだけ食堂で女子達と食べる事になったのだ。

救出できなくて、ごめんなシャルル

俺は、1人、犠牲になった(？)シャルルに心のなかで黙祷を捧げたが、同室の翔は、「たまには良いだろう」って……翔、お前は思っに時折、ひどいぞ

「一夏さん。1つどうぞ」

そんな事を片隅で考えていると満遍の笑みでセシリアからサンドイツチが差し出された。

「お、オウ……サンキュー」

俺は、少し気後れするように固くなって1つ手に取った。

「じゃあ、俺も1つ」

翔も俺に習って1つ手に取った。

見た目は、サンドイツチ用のパンにジャムを塗って間にチーズを挟んだサンドイツチだ。

……今度は、何を『入れ』たんだ？

俺は、それを一見して、ほおばった。

すると……

ウグッ！！こ、これは……カ、カカレエエエ！！

俺は、買ってきていたペットボトルのスポーツ飲料で口の中を消火する。

……今回は、タバスコとマスタード……それにチーズかよ

消火し終えた俺は、中身をそう判断した。

これがセシリアの料理で怖い部分である。

彼女の実家は、由緒正しい名家であり、彼女は言わば超金持ちのご令嬢だ。当然、お抱えのシェフがたくさんいるわけで……セシリア本人が料理をした事はない。

さらに本人は料理をあらうことか『料理本の写真と同じになれば良いのでしょ？』という考えに基づいて料理をしているため……味付けがその『写真の色』に近くなるような色合いの調味料でしている。（味見はしない）

……何とか1つは……って、アレ？そう言えば同じように口に入れた翔は……

そう思った俺は、隣に座る翔の姿を見た。

翔は、何も表情を浮かべないまま黙々と一切れサンドイッチを食べていた。

？こんだけ辛いのによく平気だな……辛い好きなのか？

俺は、その時点ではそう『解釈』していた。

「夏さん。どうですか？」

セシリアが期待の眼差しでそう聞いてくる。

といけねえ……どう返すべきか……

俺が期待の籠もった眼差しで見えてくるセシリアにどう返そうかと思
い悩んだ時である。

「え、えつとな……」

「……はつきり言って『マズイ』」

「えっ？」

「はい？」

ちよ、翔、ストレート過ぎるだろ!?

翔の感想は酷いを通り過ぎたストレートだった。

「どういう……」

「言葉の通りだ。君はサンドイッチ作ったみたいだが、何を入れた
？」

セシリアの反論を遮る翔。

その表情は、何も浮かべていない。

「何を入れた？それは……料理の写真に近くなるような……
……」

「……なら味見は？」

その言葉を聞いた翔がまたさえぎる。

「味見……ですか？で、でも……」

「……ハア……食べてみてくれ」

「はっ、はい」

少し呆れた様子の翔からの言葉に自分のボックスからサンドイッチを1つ手に取り、2、3口、口へとふくむ。

すると……

「!!!!?ゞ〇」・々全っいい!!!!」

思いつきりからかった様子で、口を押さえながら机に伏せる。

「……ほら、水」

「!!!!……あ、ありがとう……ぐっぐじゃ……います」

翔から自身の未開封のペットボトルが渡されるとセシリアは、礼を言いながらも中身を飲む。

そして、少し落ち着いたところでセシリアが口を開いた。

「な、何ですの!!!?写真の通りなの……」

「味見をしてないからだ。……サンドイッチで博打やる娘なんて初めて見たぞ」

また、少し呆れた様子でセシリアを見る翔。

「……今度、作る時は見る。その時に詳しく」

「なっ、納得いきませぬわ。第一、貴方は何ともないでしょうに!!!!」

翔からの言葉に目くじらを立ててそう返すセシリア。

だが、翔は……『応える暇がなかった』。

「……一夏」

「お、おう何だ？」「俺の弁当、……俺の分だけ残して……みんなでよそつて食べてくれ」

「?どうした?そんな途切れ途切れで」

翔の様子が明らかに変だ。

大して日差しは暑くないのに汗を出している。

さらに表情も目元だけが次第に歪んでいく。

「……気に、する……な」

気にするなって……まさか?

俺が首を傾げた途端、声を掛ける間もなく翔は走り去ってしまった。

「……どうしたんでしょう?」

翔の後ろ姿に『原因のセシリア』が頭の上からハテナマークが浮かんでしまいそんな顔で首を傾げている。

「……あんなね」

「うむ。辛さに堪えきれなかったのだろう」

「……セシリア」「!!わ、私のせいですか!?!」

原因であるセシリアを除いた俺達の意見は完全に一致していた。

翔が走り去った理由はいったって簡単だ。

『辛かった』からだ。

翔自身、訓練やISバトル時に痛みなんかあまり表情として現われないが、本人は痛いと感じている。

なぜそんな事を知っているかという初日、千冬姉に叩かれた部分を軽く触っただけでも苦痛に目元を歪めていたからだ。

本人曰く、昔の事が原因で感情や痛みが表情が出しにくくなっており、そのせいで時折、誤解も生んでしまっているらしい。

さっきの走り去った理由も恐らく辛過ぎて、行動で表れてしまったのだろう。

「…………翔……お前、まだ付き合い短いけどさ…………もう少しその辺なんとかしないと変に誤解されると思うぞ…………」

俺がそう思うのも…………翔は、良い奴であるが時折、言動がほぼ無表情でキツク言っただけ誤解が生じやすいのだ。

「…………翔のも喰うか」

翔からの伝言もあり、俺は翔が持ってきていた包みを開く。

中身は…………

「チャーハン炒飯か」

少し大きめのパックに入った具が盛り沢山のチャーハンだ。

皆と分けて食べるためか、少し大きめのスプーン1つと器が6つ一緒に包みの中に入っていた。

「へえ、アイツ。うまいもんね。焼き色はバツチリ」

よそつたチャーハンを一瞥した実家が元中華料理屋の鈴がそう感想を洩らす。

……翔の料理か、見た目はいいけど味はどうなんだ？

みんなの分を取り終わると俺達はチャーハンに箸を掛けた。

すると……

「おっ、旨いな」

冷めていてもダシを混ぜ込んだと思われる卵の味と塩胡椒が口の中で程よい刺激となり、ご飯の旨味を出す。

さらに温かくないのが残念だが剥きエビを咬む感触が心地いい歯応えを与えている。

箸が同室の頃に彼女が作った何故そうなったのかは未だに不明な味無しチャーハンと比べても断然旨い。

「ふん、少し具は多いけど美味しいじゃない」

「うむ……この卵もダシを入れてあって美味しいものだな」

鈴は、中華料理らしい評価を箸は、以前の失敗を思い出してか少しだけ眉を潜めて称賛してそれぞれ感想を述べている。

そんな中でセシリアはと言うと……

「……殿方の方が美味しいなんて……世の中、間違っていますわ!!」

一口食べたセシリアは、頭を抱え、哀しげな叫びを上げた。

……セシリア、叫びたい気持ちはわかるけど、翔の方がこつち（料理）の経験値が高いんだ……せめて自分でも味見するようにしてくれ……

そんなセシリアを見た俺は、少しだけ同情の意を示しながらも心の中ですら願う。

「い、一夏」

「ん？なんだ筈？」

丁度、翔のチャーハンを食べ終えたときである。

「わ、私も作ってきたんだが……」

「?……ああ！また作ってくれたんだなサンキュー」

「あつ、その……きよ、今日は……」

俺は、筈から手渡された弁当の包みをあける。

中身は、前と同じように野菜等のバランスが取れたものであったが……その片隅に……

「……な、なあ箒……」
「……きよ、今日はたまたま失敗しただけだ、たまたま……
だ」

俺がつい箒に問い掛けてしまった理由は……

にっしても……この唐揚げは……なにがあつた？

普通なのがあるが、その隣に多少、揚げすぎたのか……黒く焦げた唐揚げがある。

セシリアのもの比べたら明らかにミスだと感じられる。

「うわぁ……派手にやったものね」

隣から覗き込んだ鈴がそう感想を盛らす。

「こ、これでも被害が少ないものを選んできた」

「被害が少ないのって……まさかこないだのも」

「ち、違う！それにこないだ失敗したものは……」

「……自分で処理してたのか」

「ハウ！」

俺の一言に明らかかな狼狽えを見せる箒。

何だよ、勿体ねえ。こないだも失敗作も出してくればちゃんと食べたのに……

俺は、勿体なさからも食べたと思う。

それにとにかく誰かが頑張って作ってくれた物を粗末に扱いたくはない。

「……………まあ、ありがとな、弁当。有り難く食わせてもらおうよ」
「あつ、いや……………あ。無理して食さずとも良いのだぞ？」
「いいさ、それにこっちの方が作った人の頑張りがわかるからな」
「!!!!……………そ、そうか」

?何で照れてんだ?

俺は、そんな箸を横目で見ながら焦げた唐揚げから食べる。

味はと言つと……………

うぐ……………唐揚げの下味と黒焦げて墨になった部分が変に混じり合ってる……………

……………不味いとも一言と言えないこの男に誰か1人を選べと突き付けたらどうなることやら??

Side Out

IS学園

校舎裏
Side 翔

俺は、一夏達と別れて1人、校舎裏の水のみ場まで来ていた。

……辛からかった……

水でまだ辛さが残る口を嚙りながら俺は、思った。

《マスター、大丈夫ですか？

ポケットの中のアストレイアが流石に心配そうに聞いてくる。

大丈夫……とはいいい難いな……

実際、舌の感覚が辛さで死にかけている。

……セシリアには暫く注意だな

今の両親に引き取られてからの5年間、色んな事を学んだ。

料理もその一環で人に出しても恥をかかないようなレベルとしたかわかるが……セシリアのアレは酷すぎる。

誰かに頼んでも『修正しなければ』と本気で思っぐらいだ。

・・・誰が適に・・・

「おや、君は・・・」

「ん？」

俺がセシリアの殺人料理（？）について考えようとした時、声をかけられる。

その声の主を探すとすぐに見つかった。

ツナギを着た穏やかな顔の初老の『男性』だ。

「貴男は？」

聞かなくてもわかるような気がするが、俺は問い掛ける。

IS学園は、女子校で教員も女性しかいないイメージが強い・・・が、用務や事務仕事関連には少なからず男性職員がいる。

多分、この老人もその1人なのだろうと俺は、思っていた。

「これはすまないね。私はIS学園用務員、轡木十蔵です。君は、2人目の櫻井翔君だね」

「はい。初めまして轡木・・・さん」

俺は、轡木と名を明かした人の良さそうな初老の男性に何故かはわからないが俺の直感が自然に『上司』と接するような態度を取らせていた。

「そう堅くならなくていいよ。私は、ただの用務員なんだから」
「・・・・・・・・はい」

轡木さんから楽にするように言われるものの、それでも俺は気を抜くことが出来なかった。

「ところで慣れたかい？此処での生活には」

「はっ、はい・・・・・・・・何とか」

「それはよかった。・・・・・・・・君達男の子達には、辛い場面が多そうだから心配していたんだけど？」

「わた・・・・・・・・いいえ、自分は2年近く企業でテストパイロットをやっていましたから落としどころはわかってるつもりです・・・・・・・・」

「へえ、なら来たての頃の織村君よりも落ち着いてるのはそれがかい？」

「はい・・・・・・・・いい意味でも悪い意味でも・・・・・・・・です」

・・・・・・・・また、思い出してしまった

話の流れから企業にいた時のやな経験が頭をよぎる。

女性の裸を見る意味を父さんから再三に渡り、注意を受けていたが・・・・・・・・それでも避けられずに気まずい事、さらに年下の男性だとバレた後のリンチャ『可愛がり方』が半端ではなかった。

「ふむふむ。君の場合、慣れてしまっただけが良かったみたいだね」

「・・・・・・・・はい」

笑っていらつしやるが、この人は理解してくれてる

俺は、轡木がわかってくれた事になぜか救いを覚えた。

恐らく、年相応の包容力と言つやつだろう。

「まあ、これからもたのしみなさい。此処での生活も」

「……ありがとうございます」

俺は、頭を下げ、柔らかい笑顔の轡木さんに感謝をこめたお辞儀をする。

『自分を気に掛けてくれる人は、大切していけ』、これも父さんからの教えだ。

「うん。これからもよろしく……あと」

「はい？」

「一応、此方も君の力が及ばない何かがあつたら協力するようにと『個人的』にも『君の組織』からも頼まれている部分があるから、何かあつたら私のところに来なさい」

「!?!?!」

俺が頭をあげた頃には、轡木さんはこちらに背を向け、声を掛ける間もなく歩き出していた。

「……な、なんだ今の一言？」

私のところに来なさいって……あの人も『エージェント』か何かか？

だが、あの人は『此方』って言った……轡木十蔵……!!!!!!

最後の言葉に俺は、一瞬混乱するがその老人の名を頭の中で再び呟いた途端、ある可能性が頭の中に煌めく。

まさか……いや、有り得るが……落ち着け

《マスターが思い描いている事はあなたが当たり前かもしれませんか?》「ああ、そうかもしれないが、今は……いい」

《何故です?》

アストレイアが不思議そうに問い掛ける。

「あちらとこちらの話はすでに付いているらしい……なら俺が騒いで拗らせる必要はない」

《なるほど》

「……そろそろ、飲み物でも買って一夏達のところに戻るか」

口の中の感覚が戻ってきたのを確認した俺は、歩き出した。

《了解、『M.S.』シャルルはどうします?》

会話方式を簡易魔術会話である『念話』に切り替えたアストレイアがそう問い掛けてくる。

《困っていたら拾う、それ以外は『彼女』の今後のためだ、無視する》
《了解》

念話でそう返すと飲み物を買うために購買へと向う。

Side Out

IS学園
食堂

S i d e シャルル

僕、シャルル・デュノアは、只今、脱出不能な空間に投げ込まれてしまった。

それは……

「デュノア君、美味しいよ。これ!!」

「あつ、ズルい」

「こ、これも食べてみてデュノア君!!」

両脇、さらには前の席も見渡すかぎり女子に囲まれている。

この学園に『男』として入学した時点からある程度は覚悟していたもの……ここまで女性を引き付けてしまうとは思わなかった。

半分は男性だという事、そしてもう半分は……嫌味のない人懐っこさが原因なのだが、本人は気付いていない。

「デュノア君、こっちも食べて」

「ああん、これもこれも!!」

もうすでに自分の分の食事は終わっているが、代わりにまわりの女子から食べてとお裾分けが来る。

それを断れずに笑みを浮かべて応じてしまっているため、悪循環が

続いている。

このままじゃ、食べられちゃいそうだよ……一夏でも誰でもい
いから助けて〜(o)〜

そんな僕の心の声が届いたのか……

「……シャルル」

「か、カケル」

何故か、数本の150mlペットボトルでパンパンのビニール袋を
片手に持ったカケルが来ていた。

「あつ、櫻井君」

「お昼まだなの？」

「いや、もう昼は、済ませたんだ。今は、飲み物買ってくるついで
にシャルルを呼びに来た」

「えっ、僕を？」

カケルの一言にこの状況での救いを覚えた。

「ああ、今日の放課後にまたアリーナで一夏の訓練やるみたいだからその打ち合せをする」

「う、うん。わかった!」

僕は、カケルの言葉に藁にもすがるように飛び付き、席を立つ。

「ええ!」

「そんなぁ!!」

当然、逃さまいと回りの女子から引き止めがかかるが……

「悪いな、シャルルも優秀な教官なんだ。それにクラス代表の一夏が強くなれば、君達への特典が盛り沢山だと思うが」

「特典が盛り沢山？」

カケルの言葉に女子達が反応を示す。

ちなみにクラス代表とは、読んで字のごとく『クラス役員の代表』であり、クラス代表同士の公式ISバトルや学年会議にも出席する忙しいホストである。

クラス代表は、シャルル達がこの学園に来る前に既に一夏に決まっていた。

「ああ、確か秋にもクラス代表戦があつたはずだ……その時に優勝すれば」

「?……!一年間のデザート無料券に冬季休暇中のクラス全員参加の温泉旅行!!」

「その通り、だから今は……」

「デュノア君、またね!」

「櫻井君も今度は一緒に!!」

カケルがちらつかせた特典のために大手を振って僕を解放する女子達。

「……行くか」

「う、うん」

僕は、食堂を後にする。

食堂を出て廊下に出たところで僕は口を開いた。

「助かったよ。カケル」

「……たく、人が良すぎるのも悪い」

そう言いながらカケルは、僕の頭を軽くこづく。

いたあ、もう……カケルのせいでもあるんだよ。業と僕を置いてって

こづかれた頭を擦りながらも僕は、カケルを軽く睨み付ける。

「そう怒るなつて」

「……知らない」

カケルの言葉にさらにムキになり、顔を背けた。

とカケルが……

「……今日は、着替えの時、助けないがいいのか？」

「……それが？」

着替えの時、カケルが一夏を連れ出してくれる事はずいぶん有り難いが、助けないと言った言葉に内心、少し冷や汗を流しだす。

「……俺は、そんな趣味はないが……見たくない一夏の裸を見ることになるがいいのかい？」

「……ツウ！」

カケルが意地悪い声の感触で言ったその状況を容易にイメージしてしまった僕は、顔を真っ赤にしてしまう。

ウ〜ウ〜、カケルったら僕がただの精神の病気だと思ってるの！！

カケルは、勘が鋭いところがあると思っていたらどうやら違う……
……ただ、たんに当てずっぽうだったらしい。

モウ！カケルなんか罰が当たればいいんだ！！

その願いが届いたのか、一夏達の下に戻った時、カケルのお弁当は、一夏達に全部食べられていた。

その時、カケルが悲しい目をしたのを少しいきみだと僕は、からかわれた事から少し笑っていた。

この時、シャルルは、カケルは何も気付いていないと思っていたが……カケルは、ちゃんとわかっていたのだシャルルの正体を……そしてカケルはただ受け止めてくれた。

第3アリーナ

Side 一夏

午後の授業を終えた俺達は、今日もIS訓練のためにアリーナに来ていた。

今回のテーマは、近接戦時の動きだ。

「いいか、一夏。この時は、ズギューン、ズガンといけ」

「あ、ああ」

訓練機であるIS打鉄を纏った筈の指導の下、IS白式を纏った俺は、動く。

「そうではない!!」

「……えっ、ならどうすんだ?」

白式で俺は、雪片を振るうのだが、何故違っのかがわからない。

「ハア……このバカ、そこはもっと鋭い感覚で行くのよ」

甲龍を展開した鈴が呆れた様にそう助言をする。

「……鋭い感覚ってなんだよ」

鈴からの言葉に俺が首を傾げていると……

「一夏さん、そこは半身を20度下げて、右足を二歩前に」

さらにブルー・ティアーズを纏ったセシリアが理論的に話を進める。

ダアあああ！！わかりずれえ！！

3人のコーチの言葉に頭を抱えなくなる。

いつもこうだ、コーチしてくれるのは有り難いのだが……その嘆美にわかりずらい説明から入るのは、俺の行き詰まりを与える。てっか、ああしろ、こうしろってどうすんだよ！！

いつもの事でありながらも今日は……本気で頭を抱えなくなった。

とそんな時……

「……一夏」

「ん？なんだよ。翔」

それまで俺達の訓練を見ていたスターダストを纏った翔が口を開いた。

「一度、箒さんと乱取りしてみてください」

「乱取りって……剣道のか？」

乱取りとは自由に技を掛け合う、要するに竹刀を打ち合うあわせ稽古みたいなものだ。

「ああ。打ち合う回数はお互いに4回程度やってくれ、まずは……
……箒さんから」

「？……わ、わかった。ゆくぞ、一夏」

「お、おう」

俺は、白式に雪片を構えさせ、筥からの長刀タイプの実体剣攻撃を受けとめに掛かる。

竹刀で打ち合う時よりも気が引き締まる感覚がある。

なお今回、俺達が行おうとしている対戦形式は、『模擬戦』だ。

公式ISバトル自体、搭乗者がシールドで守られているから模擬戦の一種じゃないのと思われる事があるが、ISバトルには、二種類の対戦形式がある。

1つは、公式ISバトルでも採用されている『エネルギーブレイク』形式。

エネルギーブレイク形式では、シールドエネルギーを0とした方が勝者・・・要するに格ゲーのようにHPを0にすればゲームに勝つのだ。

だが、エネルギーブレイク形式ではシールドエネルギーもそうであるが、武器に供給されるエネルギー等も消費されるためエネルギー消費が激しい。

さらにバトル後のエネルギーの再チャージに約15〜30分、掛かるため長時間の訓練には不向きである。

これから行うISバトルの『模擬戦』形式では、ISのハイパーセンサーによって攻撃の当たり判定を行う形式である。

この形式では実弾系は発射せず、レーザー系は低出力のモノが放たれる。

だが、エネルギー系統の消費は武装を低出力で扱う事もあり、シールドへの負荷も低いたためもう一つの形式より断然低い。

そのため生徒同士での訓練の場合、模擬戦形式が用いられる。

お互いに『刀』を構えて……その時を待つ……そして

「はあ！」

一撃目

どんな流派であれど、基本的な型である面打ち……刀を両手で構え、振り下ろしてくる。

俺は、それを雪片の刃で真っ向から受けとめようとはせず、刀身で相手の刃を滑らすように弾く。

本当なら真っ向から受け止めても良いのではと思う人がいるかもしれないが、これは『刀』のためでもある。

刀は、剣とは違い、繊細なもので力任せに振るうものでない。

刀は、その切れ味と精巧に作られた強靱な刃で相手を『切り裂く』……が、その分、粗末に扱えば他の武器と同じように刃が欠け、刀身にもダメージを与える。

これは、剣術を学ぶものの共通した決まりごとかもしれない。

二撃目

看破入れず、箒は、弾かれ軌道を変えられながらも振り下ろした刀の刃を返し、右斜め上方へと刃を走らせる。続け様の一撃を雪片にあまり力をかけずにそれを雪平の刀身で滑らせる。

三撃から四撃目

雪片に刃先を滑らされたのを認知したのか箒は、途中で刀への力のかけ方を変え、スラスタの助力を付け加えて雪片ごと俺を押し出すように押した。

俺は、それに逆らわずに『業』と吹き飛ばされ……雪片をかけた、最後の箒からの……『面打ち』を防ぐ。

「やめっ!!」

翔からの指示で俺達は、互いに刀の構えを解く。

「……特訓がきいたか」

「そうかもしれないな」

攻め手の箒は、一撃も決められなかった事に落胆せず、『俺が昔のレベルに戻った』事に嬉しそうな笑みを寄越している。

俺もそれに笑みを返す。

「次、一夏。やってくれ」
「ああ」

翔からの次の指示に従い、距離を開き、俺達は再び刀を構える。

雪片・・・正式名雪片式型は、刀身の展開によって零落白夜の刃を展開する事ができるが、今回は、純粋な打ち合いなので『実体刃』だけでいいだろう。

まずは・・・

一撃目

左斜め下に構えた雪片を鋭く踏み込みながら、右斜め上方に振り上げる。

それを筈は、刀の鍔と鍔を合わせるようにかち合わせ、弾く。

二撃目

弾かれて、出だしに戻った雪片をそのまま戻さずに柄頭を打ち出す。

それを肘で筈は、防ぐ・・・が、少しばかり『力』を強くしたからか逆に筈が吹き飛ばされ、バランスが崩させる。

第三、第四撃目

バランスを崩した筈に追撃を加えるため、スラスタを焚き、距離をつめる。

距離をつめれた事で、筈がバランスを崩したまま刀を振るうが・・・

・俺は、その振るわれた刀をまた少し力を強くして雪片で大きく弾き、から空きになった身体に雪片を……

「そこまで!!」

振るう前に翔からヤメの言葉が入り、俺は、慌てて止まろうとするが……『マニュアル』制御での腕部出力調整がうまくいかずにそのまま筈に……

「うわあ!」

「えっ、きゃ、キヤア!」

抱きついてしまった。

当然、それを見たセシリア達が……

「「「^{さん}夏あああ!!」」」

「はえっ……ギヤアアアア!!!!」

俺の背中に向けて全力射撃……さらには……

「はっ、は、離れる!!この馬鹿者!!!!」

「グハア!!」

抱きついてしまった筈にIS打鉄の手で思いっきり殴られてしまう。

お、俺が何か悪いことしたか!?

後ろと前、両方から攻撃を受け、もはや虫の息になった俺は、地面に倒れながら理不尽だと思った。

ただ、翔だけが……
「……………はぁ」

呆れた声をよこして……………

Side Out

Side 翔

ちよつとしたトラブルを起こして一夏と箒の模擬戦が終わった。

「イテテエ……………ISに守られてるからって……………痛すぎる」

「……………お前が悪いのだ」

「一夏さんも大胆で……………」

「……………この唐変木」

「アハハハ」

一夏の言葉に箒、セシリア、鈴音、そして模擬戦が終わったと同時に来たシャルルが呆れ模様で一夏に切り返した。

「……………俺がいけないのかよ」

その言葉達に一夏は、うなだれる。

はぁ……………まったく、慣れてない事をやるせいだ

俺も心の中で呆れていた。

一夏がこの模擬戦でやったのは、マニュアル制御の基本、腕部の出力制御だ。

ISは、人型であるが故、人の五体、つまりは腕や足の動きをトレースする。

その動作の出力は、本来ならハイパーセンサーとの連動で自動的に調整するものであるが……マニュアルでは、自分の指先の感覚やちよつとした動きの強さが倍増される事で出力となる。

ようは、パワードスーツ特有のパワー増幅が出力で現れるため、『そこ』を気を付けなければ、今回のような事が起きるのだ。

「たく、慣れてないことをやるからだ」

「ウグツ……そういや、翔。さっきの打ち合いの時、なんか筈の動きがいつものタイミングじゃなかったんだが？」

「ああ、私も自分で動いた時と一夏の攻撃を受けた時に感じていた……こつ何て言えばいいのか迷うが……自分の動きが自分よりも早く感じた。アレは一体？」

模擬戦を終えた2人から同じような意見が出てくる。

よし、とりあえず……伝えたかった事は伝わったらしい

「それはISの『ラグ』だ」

「ラグ？そんなもんがあるのか」

「私も初めて聞きますわよ？」

セシリアが不思議そうに首を傾げる。

「ラグって言うのは変かもしれないが、ISなんかのパワードスーツでは人間が指を動かす時に皮膚表面の僅かだが電流が流れる・・・生体電流って言ったほうがいいか？とにかく、ISはその電流を拾って、次にどここの部位を動かすかがわかってナノ秒単位で先に動く。・・・そのせいで一夏や幕のように自分が習得した武術で戦うような人は、自分の感覚とISでの動きにズレが生じる」

「なるほどな・・・」

「だから格闘戦時には、このラグを意識して動けばいい」

そう、このラグは格闘戦時の微細な動きを気にしなければならぬ。刀を振るう、手の握り、スラスタの噴射、その感覚は間近で直接やり合う時にそれは否応無しに大きく響く。

だからこの辺は気を付けなければならない。

「それがわかったところで・・・次、シャルル。頼みたい事がある」

「えっ、何？」

「持っている火器で俺を狙ってくれ」

「えっなんでって・・・ああ回避の訓練」

「ああ、そうだ。セシリアの方もできれば頼みたいんだが・・・」

「宜しくてよ。・・・昼の恨みを晴らすのにもちよつどいいですわ」

「・・・やっぱ頼まなきゃよかったか？」

俺は、セシリアの言葉に一途の不安を覚えながらもスターダストのスラスターを出力して空へ舞う。

(一夏、今から俺の映像を回す。チャンネル446だ

(映像を回すって何のことだ？

同時に一夏とのプライベート・チャンネル開き、ダイレクト・ビュー直視映像を送る準備を整えようとするが、先に一夏から疑問を投げ付けられる。

俺はそんな一夏に呆れる事なく疑問を答える。

(直視映像ダイレクト・ビューってのは……IS同士の視界情報の共有化の事だ(視界情報の共有化？

(ああ、そつだ。言うよりも慣れたほうがいい。ISの方に視点チャンネル設定を要請、チャンネル数はさっき話したとおり、446だ。

(わかった。視点チャンネルを設定、数は446

こちらも受け入れるため、配信チャンネル数を446に設定して配信を開始する。

すると……

(おお、俺が見ていない方向の映像がきた

出来た事に喜びの声を上げる一夏。

(ああ、その映像が俺が見ているものだ。今から回避と高機動戦時の視線移動を見せるから目を回すなよ

そうプライベート・チャンネルで伝えると俺は、スターダストをス

ターゲットさせる。

直視映像は、こう言った風に上級者の視点を初級者へ見せる事で視界移動の上達を促す事につながる。

さあ、スターダスト・・・行くぞ

スラスターも出力し、さらに加速する。

加速と同時にシャルルからの実弾の膜、セシリアからのレーザーによる狙撃が俺へと向かってくる。

俺は、その発射方向を一別すると数瞬毎に片目で発射点を見ながらもう片方の目で進行方向を見つつも足を振るい、回避していく。

銃弾と光の矢の雨^{レーザー}を見て、回避しながらも俺は頭の片隅では別の事を考えだす。

ISは何のためにあるのか？

これは・・・ISの存在を知ってからか、いつも問い掛け続けていることだ。

ISはただ、女性を戦場に連れていく道具ではないか？

ISは疑問を持って扱うべきでないのか？

その答えを・・・翔は、仕事だけでなく、自分の意志で考え続ける・・・すべては・・・『時を越えて自分を生み出した』答

えを求めるかのように……

「……か・翔め、目がま、わるか、……から速度を落
として……くれ」

最終的にその願いは聞き入れられなかった。

番外 ある日の日常編（後書き）

虚空「アニメ、シャルルがきたぜえ！」

シャルル「ノノノノ」

一夏「おう！そうだなって……二度ほど殺されかけた」

翔「山田先生も格好よかったですよ」

山田先生「そ、そうですか……えへへノノ」

虚空「まあ、今回は、かなり原作重視だったから面白かった……

・まあ、なぜかシャルルと一緒にいた一夏をKILLしたい気分にも陥ったが……」

一夏「おい！どんだけ嫉妬してんだよ！！」

翔「篝さんのイベントをしっかりやってくれたことも作者は楽しんでたな（笑）」

篝「そ、そうなのか……感想、意見待っているぞ」

特別番外編 決戦のバレンタイン（前書き）

季節ネタで申し訳ありませんが……天道さんの作品を見て急に書きたく成りました！！

未来要素もありのパロディ風に仕上げてあります！！

さあ、悲しみもすべて……振り切るぜ！！

特別番外編 決戦のバレンタイン

2月13日

IS学園

寄宿寮

キッチン

バレンタインを前日に控えたこの日、キッチンは……『戦場』と化していた。

「ねえ、これを入れるの？」

「うおおおお！！織村君への思いが割れた！！」

「誰よ！！私のチョコに入れたの！」

「やった うまくいった」

キッチンの調理スペースがすべて埋まるほどの各学年生徒が集まっていた。

すべては……明日の『決戦』のために……

その中で恋する乙女達は……

Side 篇

冷蔵庫の中で冷やしていた型に入れたチョコレートを慎重に取り出す。

型は、オーソドックスにハート形の型の物を使用している。

綺麗に冷え固まったそれは、自分でも上手く出来たと思える。

よし、あとは……クリームでなんと書こう……

私の手はそこで一旦止まってしまおう。

純粹に愛の言葉を書いても一夏は受け取ってくれるかもしれないが……今は、『思い』を受け止めてもらえるかが心配になる。

……一夏、お前に私の思いを……届けさせたいだから……

そう思った瞬間、私はそこに描くものが決まり、書き始めた。

Side Out

Side セシリア

湯煎したチョコレートを『2つ』の形へと流し込む。群が出ないようにゆっくりとゆっくりと流し込む。

いい感じですよ。次は冷蔵庫に入れて、待つだけですわ

冷蔵庫に入れ終わると私は、その冷蔵庫に寄り掛かって思いをめぐらせる。

一夏さん……頂いてくださりますよね

ウフフと私は、笑みを浮かべるが……次の瞬間、もう一つのチョコを渡す人物の姿を頭に思い描いていた。

!!.....べつ、別にいつもお世話になっているからですわ!!
こっちに来て、自分を気に掛けてくれるあの『ガンナー』にはたく
さん助けてもらったような気がする。

だからこれはそのお礼だとセシリアは、頬を染めながら自分に言い
聞かせていた。

Side Out

Side 鈴

焼き上がったチョコレートクッキーを気を付けて引き出し、机の上
に出す。

味は.....

私は、焼き上がったクッキーの中から一番歪な物を選び出して一口、
味見してみた。

うん！これならいける！！

予想以上にうまく出来たことに私は、心の中でガッツポーズをあげ
る。

一夏、これであんたを落とすわよ!!!

私は、静かな闘志を燃やして明日に備える。

Side Out

Side シャル

チョコレートチップを含ませたマドレーヌを焼き終えた僕は、その一つを手にとった。

うん、香りもOK!!

バニラエッセンスを付け加えたそれは、いい匂いがする。

／／／カケル、喜んでくれるかな／／／

思い人へそう思いを走らせると……

カケルの部屋に僕らはいる。

そして、僕は、口に含んだマドレーヌをカケルへと持っていくが……

その前にカケルが僕をベットに押し倒して……

キャッ!

カケルとはそんな展開になることはわかっていないけど、何故かそんな展開を思い描いてしまう。

Side Out

Side ラウラ

いいかんじだな。

焼き上がった『チョコレート』のような物体を目の前におき、思いをめぐらせる。

嫁一号と……嫁二号に渡すには……あの女をどうするかだな……

私は、任務遂行の邪魔となるあの生徒会長をいかに排除するかを考える。

そして……嫁達を私の物にする!!

すでにバトルへと移行するラウラは誰に止められない。

乙女達は、明日という戦場に心を奮い立たせはじめている。

Side Out

翔の部屋

Side 一夏

「翔、入るぞ」

『ああ』

俺が部屋に入るとチョコレートの匂いがした。

「!?!どうしたんだ。この山」

「……色々だ」

翔の机の上には、沢山の包みがある。

中には、包みが開かれているものもある。

「……母さん達、企業のテストチーム、それに『アイツ』からだ。当日に渡せないからって送ってきたんだ」
「なるほどな」

俺は翔に促されてベットに腰掛けながらそう返した。

「……なあ、翔。明日はどうすんだ？」

「……明日か」

俺がせう話題を振り出すと俺達の間にも重たい空気が流れはじめる。

「……他の『2人』は、仕事に託けて脱出した」

「げっ、俺達だけで全員と相手すんのかよ!!」

「……まあ、残り『2人』も少なかれお仕置きを受ける。受け取らなかつたらな」

翔は、そう返すが表情は固い。

「……怖いな」

「ああ、あと俺達も受けが悪かったら……」

「……了解」

俺達は、明日の……男だけが体験する『戦場』に恐れを抱きながら明日を待つ。

Side Out

2月14日

IS学園

Side 翔

午前

俺達は……さっそく『波』に呑まれた。

「さ、櫻井君。私の思いをうけとってええええ!!」

「織村くううん」

「私の王子様ああ」

「ギヤアアア、突貫!!」

等々、午前中だけでもかなりの数を貰い受けてしまう。

千冬さんには怒られるわ、予想していたシャル達からの嫉妬があからさまに怖いものがあつた。

人を好きになると言う事は、ここまで人を代えるものなのかと俺は思った。

クラブ活動時間

生徒会室

ようやく午後に入り、部活動の時間になるとようやくグロンキーとなつた体を机に預ける。

「はあ……」

「……チヨコレート、多すぎだろ」

「いやいや、大人気ね。2人とも」

俺達の隣に置かれた山になつたチヨコレートを見て楯無会長が面白そうに声をかけてくる。

「……………会長、面白がらないでくださいよ」

「あらあら、流石の『騎士』^{ナイト}も形無しね」

もう返す言葉が出ない……………俺は、がっかりとうなだれる。

「……………ホワイトデーだけで財布が空っぽになりそうだ」

「……………その時は、『奴ら』にも手伝わせる。居なかったことを後悔させてやる」

一夏の一言に逃げた2人の復讐心を俺は、抱く。

「大変ね……………あつ、そうだ。これお姉さんから」

そう言っつて、楯無が渡してくるのはラッピングされた箱だ。

「あつ、ありがとうございます」

一夏は、礼を言いながらラッピングされた箱を受け取る。

「うんうん。何ならお姉さんと付き合っても良いんだよ?」

「……………義理で良いですよ……………ところで今日、『彼』はどうするんです?」

俺が受け取りながらそう楯無に最後の方だけを小さく返すと……………

楯無は、俺の耳下に口を持ってきて少しモジモジして小さく……………

「……………今夜』かな?」

「……………ご馳走様」

耳元から離れた楯無は、いつもの様に面白がってるような表情で遠

ぞかる。

「?・・・あれっ、虚うつほさんとのほほさんは?」

一夏が聞き取れなかったようで首を傾げているが、その前にいつもいる生徒会役員の姉妹がいない事に気が付く。

「ああ、彼女等なら・・・虚は、学外に。本音はチョコの交換が出来たみたいで部屋に戻っていったよ。・・・今日は活動も無理だから解散しちゃおっか」

最後の方をウインクを付けながら楯無は今日の活動の終了を宣言する。

「わかりました!!・・・先に失礼します!!」

その言葉を聞いた途端、一夏が先に部屋を出ていく。

「では、こちらも・・・」

「うん。じゃあね」

「あと・・・これ」

去りぎわに俺は、鞆からラッピングされた箱を楯無に手渡す。

「これは?」

「お世話になってお礼です」

「あら、ありがとう」

「いいえ、では失礼します」

少しだけやわらかな笑みを浮かべながらそう返した俺は、静かに退

室した。

Side Out

《たくさんのお人の出会い

「一夏、こ、これ！！受け取りなさい！！」

夕日で私の表情がうまく隠れてくれる。

今の表情は、一夏に見せられないほど真っ赤だ。

《出会いの間に思いが生まれる

「あ、あの一夏さん！！これ」

「えっ」

「こ、こんな事初めてなんですけど……」

目の前の人……自分を覚えてくれた人に自分の思いを正直にぶつける。

《その思いがどうなるか……

「「あ、あの」

「そちらからどうぞ！」

「い、いえ、あ、貴方から」

何やってんのよバカニイは！？

赤髪の兄が腑甲斐ない事に隠れてそれを見つめる妹。

《はかなく消えるか

「わ、私のチョコを受け取れ！」

「へえ、サンキューな」

「どれ……………」

嫁二号が先に包みを開けて食べる……………」が

「……………」ガックシ」

「お、おい翔！」

「まだゆくな！！お前の花嫁姿を！！！」

「ちげえだろっ！！！」

《自身の道しるべの糧となるか

「……………」バカア」

受け取ってもらえなかったもう1つのチョコを寝ているセシリアの傍らから静かにとると……………」

「ありがとう」

感謝をこめてやさしく頭を撫でた。

《悲しき物となるか

暗闇の生徒会室の椅子に私は、1人、座っている。

少しして後ろに気配を感じると……………」

「待ってたよ。クスッ」

《それでも……》

「何だよ。こんなところに呼び出して」

「そ、そのなこ、こ、これ！」

私は、意を決してチョコを渡す。

「これ……」

「い、いろいろあったからな……あのなわ、私は……」

自分から言えなかった事を今度は自分から言う。

その結果は……優しく彼女達を照らしていた月しか知らない。

《今だけは……》

僕は、静かに扉を叩く。

『どござ』

その声に頭の中の小さな僕が慌しく戦略プランをたてていき……
・そして……

「は、入るよ。翔」

いざ決戦へと赴く。

たった1つの武器である『手作り』を片手に……

《その思いが・・・for ever、永遠に届くようにと・・・
・・・願いたい

f i n

特別番外編 決戦のバレンタイン（後書き）

次回は必ず本編を更新するので楽しみに!!

……実際に一夏、どうなるのかなこのようなイベントの時？
（笑）

感想、意見待ってます!!

第9話 水を纏う『最強』 (前編) (前書き)

虚空「第9話出ます!!」

一夏「おっ、来たか!？」

篝「うむ!」

ラウラ「いよいよ私の時だ……」

虚空「……悪いが、今回はオリジナルだ……ラウラ無

双は、2話後だ」

ラウラ「……潰す!!」

レールカノン連射

虚空「ギャアアア」

第9話 水を纏う『最強』 (前編)

IS学園

食堂

S i d e 翔

俺は、シャルルを部屋に残し、食堂に来ていた。

……………席が

俺は、すぐに部屋へと戻るため、かき揚げそばを選択し、席を探している。

が、辺りを見渡しても席がすべて埋まってしまっていた。

その中には、食事を終えているところもあるが、そこは今、女の子の特有のお喋りタイムに移行しているため、開く気配はない。

それなら一夏達の方に行けばと思うが……

一夏達なら多分、シャルルの話を聞いた途端、『見舞いに行く』と
言いだすと考えられたからだ。

流石に今日は、魔法や俺の過去を聞いて、困惑するシャルルを会わせるわけにはいかない。

それに今日は、彼女に喋りたくない事を無理に話させてしまった。

だから……もう辛い話させたくなかったからだ。

それに今、一夏は箒達に挟まれていた。

このまま放つて置いても動けずに終わると考え、俺は声を掛けずに席探しを再開する。

罪悪感を感じない。

根っこを辿れば一夏がトコトン朴念仁であるのがいけないからだ。

助ける気などサラサラない。

「あっ、櫻井くん」

「こつち。こつち開いているから」

「それよりこつちに来て私らと話さない？」

「……すまないが、シャルルが熱を出してしまって、あまり時間を掛けていられない。また今度、誘ってくれ」

「えっ！？ 大丈夫なの？」

「一応。季節はずれのインフルエンザの可能性もある。今夜は様子見だが、しばらく部屋と俺には近付かないでくれ」

「う、うん」

少し誘いの声がかかるが、そこはうまく踏み込まれないように嘘を伝える。

何処にするか……ん？

丁寧に断りを入れながら席を探しているうちにある一人の少女の姿を見かけた。

拒絶の絶壁こと、ラウラだ。

彼女は、今日も1人、窓際のボックス席で食事を取っている。

その周りには誰一人と近付こうとしない。

あそこならいいか……それに『いい加減』、息苦しいからな

俺は、そう思いながら彼女に向かい合わせになる位置に移動する。

「……貴様、何のようだ？」

彼女の隻眼が俺の姿をとらえた途端、にらみつけてくる。

「席が空いてなくてな……いいか？」

俺は、事実だけを口に出し、視線でラウラの前の席を指す。

数瞬の間が開いた後……

「……好きにしろ」

不満たつぷりにラウラからの許可が下りた。

「ありがとう」

そう礼をすると俺は、席に着く。

と……

「……嘘」

「あの櫻井君と……」

「神よ！なぜ我ら試練を与える！！」

その光景に俺達が見える周り席にいる娘、特に同じクラスの女子達がひそひそと騒めきだす。

無理もない

日頃、ラウラの周りへの突っ掛かりは異常と言ってもいいものは、割って入っているからか自然とクラスから不仲と認識されている。

「……失せる」

「……」

周りからのひそひそ話が聞こえたのか、ラウラの隻眼が彼女らを睨み付け、その強烈な視線で女子達を黙らせてしまう。

「……………相変わらずだな」

「……………ふん」

俺の感想に、不機嫌そうに鼻を鳴らすと付け合わせのクロワッサンを半分に割って食べ始めるラウラ。

ヤレヤレ……………

「いただきます」

そんなラウラの様子に少し呆れながらも俺は、食事の礼を行い、そばを食べ始める。

かき揚げそばは、野菜やエビ等を練りこんだ衣を円上に薄くかりかりに揚げるかき揚げが鰹だし汁ベースのそばの上に載っている。

かりかりに揚がったかき揚げに汁をからませて味あうと格別なうまさだ。

そして汁に絡ませながらそばをすすれば、そのうまささをさらに強める。

今は、包帯の下に隠れている右手の切り傷が動かすたびに痛みが出てしまうが、それでうまい。

俺は、徐々に箸の速度を進める。

「……ふう」

「……貴様は何が聞きたい？」

「えっ？」

半分程食べ終わったところでラウラがフォークをこちらに向けながら問い掛けてきた。

「聞きたい。 なんの事だ？」

「……とぼけるな」

声を潜めながらもラウラの隻眼は冷たい拒絶の色を示す。

「先日、『教官』と私の関係を貴様が聞いてきたと教官が仰っていた……わざわざ『あの人』に聞くとはな」

「お前に聞いても答えてくれそうになかったからな。……何故、あそこまで一夏を目の敵にするのかをな」

俺がラウラに聞きたかった事はそれらだ。

ラウラが周りから浮いている理由はいくつかある。

その一つ、一夏への憎悪は、並大抵のものでない。

「一夏からその『要因』ともとれる事を聞いたことがあるが……その真意を知るには『本人』に聞くしかない。」

俺の言葉に答える義務はないと言わんばかりに睨み付けてくる。

だが、俺はそんなラウラの態度に一步も怖じけず、口を開く。

「……確かにお前と一夏の問題に『関係がない俺』が間に入るのは不粋だが、赤の他人を巻き込むような気がしてな」

「目的達成のために邪魔する対象を排除するのは当たり前だ」

「……それでも無闇に力を振るうものでもない」

ラウラの変わらない態度に俺は、呟いてしまった。

力を振るう……それは常に代償が付くわ

頭の片隅に自分が直接、『体験』した事のない記憶が蘇り、自分の口から出した言葉の意味を噛み締めさせる。

「ふん………ISをただの『ファクション』か何かに勘違いしている連中ばかりにはちょうど良からう。……あの織村一夏にも私の強さを知らしめる。男で『ISを使える』、その意味すら見いだしていない男が教官の弟であるなど……あってはならない事だ」

そう言葉を紡ぐラウラは、またしても一夏を侮辱する。

そうか……こいつは

ラウラの言葉を聞いた俺は、ラウラが何を『目標』としているのがわかってしまった。

何故なら転入初日の訓練時からずっと憧れが『そうさせて』いるのだと考えていたからだ。

「アイツが、織村一夏さえいなければ、教官は大会2連覇の偉業をなしたはずだ。……アイツは教官の悲願を壊した張本人だ」

「大会……『モンド・グロツソ』の事か？」

「ああ」

ISは、白騎士事件以降、兵器としての有効性を見出だされ、兵器としての開発ベクトルが加速。

だが、ISはISが登場する以前の兵器群（主に戦闘機等）を凌駕する性能、さらには通常兵器での撃退がほぼ不可能に近いがため、アラスカ条約において軍事的利用が制限されている。

その代わりに、ISの防御機構や搭乗者の安全性が高い事からスポーツとしてのIS同士の戦い、ISバトル等が生まれた。

そのISを所有する21国と地域が参加して行われる世界大会が『モンド・グロツソ』である。

各国代表は、代表候補から選び抜かれた『最強中の最強』が代表となり、国のため或いは自らの誇りを胸に戦う。

ちなみに織村千冬は、第一回、第二回大会で日本代表として出場。

第一回大会では、見事に総合優勝を奪取。

今尚、最強の称号『ブリュンヒルデ』と呼ばれることがあるのは、この事からきている。

第二回大会でもその強さから他者を寄せ付けず、決勝まで駒を進めたが、この決勝当日、IS学園に来たラウラと一夏との間に溝を及ぼした事件が発生した。

『織村一夏』が本人いわく『謎の組織』に拉致監禁された誘拐事件である。

『謎の組織』と言うのは酷いネーミングだが、当時の事後処理を担当した諜報員ですら何も掴めないまま迷宮入りにされた事件らしい。

(この話を聞いた翔は、捜査員である父親達に報告し、再調査を依頼。さらに翔自身も一夏に対して簡易的ではあるが、魔法の術式痕跡を一夏に気付かれない方法で調べたが何も出てこなかった)

その事件の際、ドイツ軍部は、各国家よりいち早く監禁場所の情報を入手、その情報を織村千冬に伝えたいらしい。

その情報を得た織村千冬は、会場からISで監禁場所まで急行し、一夏を無事に救出する事に成功。

当然、会場にいなかった織村千冬は決勝戦棄権となり、大会二連覇を逃す事となった。

それだけでも大きな騒動を呼んだが、織村一夏の誘拐事件自体は犯人グループが捕まらなかった事や本人に外傷がない事から世間にはあまり報道されることはなかったらしい。

その後、ドイツ軍からのその件の『借り』を返すため織村千冬は、約一年、ドイツ軍へのIS教官として従事。

やがて現役を引退し、今のIS学園教師の役職へと移ったらしい。

多分、その教官として滞在中、何らかの障害、或いは未熟さを教えられたラウラは、千冬に憧れを抱くようになり『千冬』に成りたいのだろうと俺は、思った。

だが、彼女が『それ』に成ることは出来ない……そして何より……

「大会二連覇をアイツは……」

「……そう思っているなら君は、真の意味で一夏には『勝てない』」

だろうな」

「……………何？」

俺が言葉を遮り、口にした言葉にラウラは、鋭い眼差しで睨み付けてくるが……

「アイツに勝てないだと……………フツ、笑わせる」

すぐに瞳が冷ややかなものとなり、ラウラは鼻を鳴らして笑う。

話しても今は、無駄か……

俺は、ラウラの態度にこれ以上話しても『無駄』だとはっきりと認識し、食べ終わったそばの器が載るトレイを持って席を立つ。

「……………お前がどう思おうが俺には関係ないが、はっきり言う。……………

お前は『千冬さん』の様には成れはしない。『一生』な」

「……………何だと」

去りぎわの言葉にこれまで以上の殺気を放つ、ラウラだが……

「自惚れるなよ、『メス』が……………力だけが強さだと思っているなら今、ここで『殺してやってもいい』」

Side Out

S i d e ラウラ

貴様、今ここで

私は、『奴』の殺気を放ちながらも制服の一部に忍ばせていたコンバットナイフを柄に手をやる。

私があの人に……届く事はないだと……貴様に何がわかる！！

私の脳裏に教官と出会う前の暗い記憶が通りさらに怒りを加速させる。

あらゆる面で後れを取った時期……

それをたった一年で変えた教官への憧れは……私の存在意義になっている。

その怒りのままコンバットナイフを抜き取るうとするが……

奴が纏う『空気』が変わった。

空気と言うよりも気配の本質が変わったと言った方がいいのかもしれない……

私の殺気が小島なら、奴から滲み出るこちらを殺す『殺意』が小島を飲み込む大波のように私を圧倒する。

あり得ない……こんな男が何故、『教官』以上の

殺意に圧倒され、ナイフを抜く手を止めた私は、手の裏が汗まみれになっている事に気が付いた。

奴の目が去りぎわ、僅かにこちらを向く。

自分と同じ赤き目は、怪しげな輝きを宿している。

その輝きを私は知っている。

それは……獣が相手の肉を食い干切る『狂気の目』だ。

「自惚れるなよ、『メス』が……力だけが強さだと思っているなら今、ここで『殺してやってもいい』」

それだけ言うと、目と気配だけで私を『圧倒した』奴は静かに席を離れた。

離れた後ろ姿を黙って見送った私は、またも屈辱を与えられた事より……奴は何者なのだと冷静な部分分析をはじめていた。

奴は一体……

S i d e O u t

翔&シャルル部屋

S i d e シャルル

訪ねてくるかもしれない人に対して、風邪を引いていると装つたため、僕はベットの中に潜り込んでいる。

そのまま寝てしまつてもいいとカケルは言ってくれたが……心臓のドキドキが納まらない。

秘密を明かしあつた先ほどのやり取りもそうだが、何より、カケルが自分の事を『思ってくれた』事が心臓を激しく打ち鳴らしている。

……カケルは、僕の事を……／／／／

好きなのかはわからないが、彼が言ってくれた事に僕は頬が熱くなるのを感じていると……

《なんとまあ初々しいものですね。Ms・シャルル。まあ、マスターも珍しく無茶をしましたねえ》

同じく部屋に置き去りにされたアストレイアが僕の様子を見てか、面白がりながら話し掛けてきた。

「あ、アストレイア!!! / / /」

アストレイアの一言に僕はズバリ凶星を付かれて恥ずかしい気持ちになる。

《おや、これは失礼》

それを見たアストレイアは、まるで笑っているかのようにスリットを点滅させながら僕に謝ってくる。

……この『子』、僕をからかっているのかな？

恥ずかしさを感じながら僕の冷静な部分は考えていた。

人の様子を見極めて茶々を入れてくるAI……僕達の世界では考えられない程、高性能である。

そんなものがあり、それを魔法制御の補助に使っている……カケル
の世界の技術レベルって

「ねえ、アスト……」

「……ただいま」

僕が問い掛ける前にカケルが部屋に戻ってきた。

「あつ、お、お帰り」

《お帰りなさい。マスター》

僕はベットから起き上がり、カケルを出迎える。

カケルの手には、トレイがある。

「……………おう。あとシャルル」

「ん、何？」

「お腹すいてるだろ？ 余った定食だが、夕食を貰ってきた」

「あつ、うん。ありがとう」

カケルが持ってきたトレイが机の上に置かれたのを見た僕は、それに近づく。

近づく……………

「ヴっ」

僕は、トレイに置かれたメニューを見て思わず言葉を漏らしてしまった。

その理由とは……………そのメニューが焼き魚定食であったからだ。

「嫌いだったか？」

それを見たカケルが表情を変えないまま聞いてくる。

「いいや……………大丈夫！」

カケルからの言葉にそう返すと僕は……………意気込んで、割り箸を割り、食事に手を付けようとするが、箸がうまく使えない。

「……………」

「……もしかして、箸が使えないのか？」

「……う、うん」

練習はしているのだが……元々、違う文化圏から来ているからなかなか慣れない……

「俺も同じだったからな」

《そうですね。マスターも最初の頃、苦労していましたから》

僕の様子を見たカケル達がそう納得している。

「……………」
「ごめん」

「気にする必要はない。一応……………」

《でしたらマスターが食べさせてあげればよろしいのでは？》

「……………」
「はっ？」

「えっ！！」

アストレイアが爆弾発言を投入し、一気に僕を混乱させる。

食べさせてあげるって／＼／＼／＼／

《Ms・シャルルが使えないのなら食べさせてやるのが…………》

「残念だがアストレイア、フォークとスプーンを貰ってきている」

何故か、カケルが僅かに眉間に皺を寄せながらアストレイアの提案を切り捨てる。

《……………チッ》

「不満漏らしても無駄だ。……どうせ、父さんや母さんに『お茶目なシーン』って事で送るつもりだろ?」

《いいえ、『統括官』にです》

「!?!?!……もっとややこしくなるだろうが!」

……カケル達は、何を話してるんだろう?

とてもA Iとのやり取りとは思えない2人(?)の会話に僕はただ首を傾げるしかなかった。

「……焼き魚は解しとくから、ゆっくり食べはじめてくれ」

「う、うん」

話が終わったらしいタイミングで僕は、カケルに箸を渡し、焼き魚が載ったお皿をトレイの傍らに置く。

その焼き魚をカケルは慣れたように箸を使ってほぐしていく。

……慣れてるね

ちよつとだけその手際の良さに羨ましさを覚えていると……

「焼き加減は……流石、食堂のおばちゃん方」

解しながら軽く一口、身を食べたカケルがそう呟く。

そこまでは良かったものの……次の行動が予想外であった。

「ほら、まずは一口」

「エッ!?!」

丁度いい大きさにほぐれた身を箸で摘んだカケルが、僕にそれを向けてくる。

「か、カケル？」

彼らしくない行動に僕は、脈が自然に速くなってくる。

う、うれ、嬉しいけど恥ずかしいよ／＼

僕がカケルの突拍子的な行動に頬を染めた時である。

「これくらいは、甘えてくれてもいい」

「カケル？」

カケルがそのままの体勢で口を開いた。

「甘えるのが下手くそでもいい。ただ……苦しい時、頼ってくれ」

「カケル、何を言ってる？」

カケルが言っている言葉の意味がわからないから僕は、再び彼に問い掛けると……

「……この一週間、君を見ていて思った。シャルル、君は家庭の事情があつたからかもしれないが、自分から誰かを頼ろうとしない癖がある。だからそれを克服するための第一歩としてな」

カケル……

彼の心遣いに感謝しかけたが……

「それにこの一週間近く、『君の秘密』を『心の中に秘密』にして
いたんだ……このくらいに『罰』は受けてもらわないとな」
「はいう!？」

一気に真っ赤になった。

S i d e O u t

S i d e 翔

俺の一言にシャルルは、ゆでたてのタコように耳まで真っ赤にさせる。

してやったり

その姿を見た俺は、少し可笑しくなってくるのを感じた。

何故このような手を使ったのか。

アストレイアに言われたからではない。

ましては、罰だけでもない……ただ、円滑な人間関係を築くには時には『意地悪も必要や』と母さんの友達にも言われたからだ。

それに……彼女の気を楽しにするためにも有効だった。

「ほら……あーん」

決まり事らしい台詞を言いつつも『最終通告』のようにシャルルへ箸で渡そうとすると。

「……………ん」

シャルルは、顔を真っ赤にしながらもそれに応じてくれた。

《マスターもやりますね》

「お前は、見るな」

《ああっ！》

アストレイアの悪戯心を阻止すべく、枕を二段重ねにしてアストレイアを押しつぶした。

その後、焼き魚だけは食べさせていく……

Side Out

Side シャルル

「ご、ごちそうさま」

「御粗末さまでしたと」

カケルの手助けを借り、食事を終えた僕は、カケルに問い掛けることがあった。

それは……

「ね、ねえ。カケル……」

「なんだ？」

「その……さっき『1週間近く』って言っていたけど、そんなに早くバレてたの？」

さっきの会話の中でカケルは、『1週間近く秘密』にしていたと言っていた。

その言葉を信じると転入してすぐにばれた事になる。
何が原因だったのだろうか？

「その件か……『行動でだな』」

「行動で？」

そんな……露骨に見せたりとかしたかな？

彼の言葉に首を傾げようとしたら……

「1つ、転入直後の訓練に移動時、『男』である意味をよく理解していなかった」

……うっ

「……2つ、その日とその後の着替え時の行動」

……うっ

「3つ、悪かったとは思っている……毎朝、俺より早く起きて着替えている姿を何度か見ている」

……えっ、あういいい／＼／＼

思い当たる点と着替えている姿を見たと言うカケルの言葉にまた赤くなる。

それと同時にコルセットを身につけていない胸を隠す。

「き、着替えて……まさか！ ぜ、全部？」

「……………ごめんなさい」

僕がそう言つとカケルは、即座におでこを机にぶつけ、土下座のように頭を下げてる。

！！カケル！！

もう真つ赤すぎるほど僕は、恥ずかしさで顔を真つ赤にしているだらう。

……………そう思いながらも僕は、ジトメでカケルに抗議する。

「ツウ！！／＼／＼／＼／＼か、カケルの……………エッチ」

「ごめん」

流石に『かなり悪かった』と思っているのだろうか、頭を下げたままカケルは、謝ってくる。

「行動の事はそれでわかったけど……………さ、何ですぐに聞こうとしなかつたの？」

数分程、カケルからの謝罪を聞いて、僕は改めてそう聞いた。

一夏なら・・・すぐに聞いてくるんじゃないかと思ってる。

が、カケルは、聞かずに待っていてくれた。

感謝すべき事でもあるが、なぜ聞いてこなかったのかと疑問が出てくるのもしかたがなかった。

「その事が……訳があると思ったからな」

「訳があるからって……それだけ？」

「……少なくとも君は、悪い娘に見えなかったから様子見していた。

……千冬さんの場合は、君のファミリーネーム『デュノア』って聞いた時点で警戒していたらしいが」

……『ブリュンヒルデ』にもバレてた？

僕は、何で勘のいい人が僕のそばにいたの？と神様に問いかけたくなる気分になった。

だが、その2人の判断があったからこそ……悪い方面に話が進まなかったのだと無意識に思う部分も出来ていた。

「……まあ、今日のところは、もう話すのを止めにし、一夏に君の事を話すのはまた今度にするか」

「えっ？今日話したほうが……」

カケルの意見に異を伝える僕。

「一夏は僕の事を『男』だと思っているのだから早く伝える必要があると僕は、思っていたが……」

「今日はもう休め」

「けどさ……」

「『俺の件』もあって、まだ考えがまとまらないだろ？落ち着くためだ。それに明日、一夏達に街を案内してもらおう予定だろ？」

「うん、うん」

カケルがそう言うのも転入初日、一夏達に週末、IS学園外の街を案内してもらおう約束していたのだ。

その件も含めてカケルは、休ませたいのだろう。

それに……まだ理解し切れていないカケルとアストレイアの件に対しても考えさせる時間をくれる。

「だったら今日はもう寝とこう」

「……うん。そうだね」

そう解釈した僕は、カケルの言葉に頷くと窓側の自分のベットへと入る。

カケルが部屋の明かりを消灯させると自分のベットに入り込む。

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

お互いに声をかけながら目を瞑った。

.....

.....ベットに入ってどれくらいたっただろうか？

僕は、寝付けずにいた。

何故なら今日あった事が色々刺激が強すぎてリラックス仕切れないからだ。

「.....ねえ、カケル」

どうしようもなく僕は、体をカケルの方に向けさせてカケルに声を掛けてみると.....

「.....うん？眠れないのか？」

僕に対し、背を向けるように寝ていたカケルはゆっくりとこっちに向き返りながら声を返してくれた。

「うん。.....」

「気にするな.....あんな話をして寝ろってというのが無理に近い」

カケルは、そう理解を示しながら僕を見る。

「子どもみたいだね、僕.....」

「.....だから、気にするなって」

「……カケルは、強いね」
「……強い？」

Side Out

Side 翔

シャルルの言葉に俺は首を傾げた。

何故、強いと言ってきたのかわからないか……自らはまだ未熟な身であるのに……

「さっきの事もそうなんだけさ、カケルって……どんな事が合っても全然動じなかったから」

「……つまり、心が強いって事か？」
「うん」

俺の例えにシャルルが頷いた。

「……俺は強くはない」
「えっ？」

俺が発した言葉に理解できない驚きの声を上げるシャルル。

俺は言葉を続ける。

「俺は……まだ心も含めた『真の強さ』を見出だしていない」
「『真の強さ』？」

「ああ……父さんからの受け売りかもしれないが、強さは誰からも与えられない……ただ『それは問いかけ続けながら自分だけの』強

さ』を見出だす事だ』とな」
「……………」

シャルルは、黙って聞いてくれている。

この身に宿る強さの意味……それが今、俺自身が一番追い求めているのかもしれない……大切な『あの方』を守れなかった苦しみの記憶を拭うために……

「だから俺も見つけない……『真の強さ』と言つものを」

Side Out

Side シャルル

『真の強さ』、カケルが追い求めるもの……なら僕は……

「……………見つかるといいね。カケルだけの強さを」

彼がしてくれたようにただ受けとめる。

それが自分を受けとめてくれた彼への1つのお礼だと感じたからだ。

「……………ありがとう。シャルル……………君も君だけの強さを見つければる事を祈ってる」
「カケル」

今夜だけで彼にはたくさん助けてもらったことを知り、そして今、この時でも自分を包み込むような優しさを彼は持っている。

その優しさが僕の心も暖かくする。
これが恋なのかな？と今まで思ったことのない感情にそう考えをめぐらせる。

「もう大丈夫だな」

「……………うん」

僕がリラックスしたのを見たのかカケルは、再び言葉を掛けてくる。

「……………おやすみ」

「おやすみなさい」

カケルにそう返すと僕は目を瞑る。

少ししてカケルの方から静かな寝息が聞こえてくる。

そのあとを追うように僕も今度は暖かな気持ちの中で眠りへと落ちることができた。

Side Out

Side アストレイア

お疲れ様でした。 マスター

主達の寝息を聞きながらアストレイアは、そう自身の中で主を労う。

マスターも随分とかわりましたね

同時に彼の行動記録を改めて参照したアストレイアは、そう推測した。

彼の父親に生みだされ、彼の手に渡って約四年近く。

最初の頃、彼は心の開き方を知らず、浅はかではない『力』だけを抱いていた。

……それを、引き取った彼の父親や母親、兄弟達きょうだいや様々な出会いが彼を『研磨』し、心も育てていき、今に繋がった。

そしてアストレイア自身も予めプログラムされた事かも知れないが、彼をパートナーとして認め、さらに彼の役に立つようと自身を『改良』していった。

それらだけでも様々な変化を与え続け……その結果が本日の行動なのだろう。

それにしても高い買い物（処分）になりましたねえ……

アストレイアは、彼が彼女と話している間、事の次第を簡潔ながら『上』へと報告していた。

返答が先程届き、内容をアストレイアが閲覧してみると……

規約違反と組織秘匿事項を明かした事より、組織に危険を与えたと『上』は判断。

そのペナルティーとして約半月間、魔力リミッターレベルをアップ、さらにはデバイス機能一部制限、そして明日の夕方までに始末書を提出等を課せられてしまっている。

上申すれば、減罪をされるかもしれないが……あの彼の事だ、すべて受け入れるだろう。

マスター、今回は、ささやかなご褒美です……この先もその『開き方』を忘れずにいてください

アストレイアは、マスターの成長に対してのご褒美を出すことにした。

『上』に会話データと状況データ、さらには部屋のPCに備え付けられたカメラをクラッキングしてカケル達を隠し撮りした動画データを追加報告として転送した。

その結果……組織への危険性が低い、また翔の身内であり仕事上では厳しい上司達が翔が初めて見せたお茶目シーンに『笑って』しまったため、今回だけは減罪の余地有りと『上』は再判断。

その結果、数日間の魔力リミッターレベルアップと始末書だけの処分となった。

そして、夜が明けていく……

Side Out

日曜日

IS学園

図書館

Side 翔

IS学園の図書館は、3階建ての別館にある。

3階建ての建物内には、IS関連等の書物は勿論の事、数学、科学、
化け学（化学）、経済学等々、あらゆるジャンルの本が貯蔵されて
いる。

国立だからという事か、絶版（すでに販売していない本）となつて
しまった本も多数存在しているらしい。

それら読んで学びたいと思う事もあるが……今はそんな事のために
ここに居るわけではない。

その理由は……

《マスター、あと数時間しかありませんよ

《わかっている……泣きたい気分になるから時間は口にするな

俺は、

アストレイアからの念話にそう答えつつめ自分の所持品であり、部
屋から持ち込んだノートPCのキーを叩きながら始末書を書き進め
ていた。

何故そうなったのか……

今朝、起床後に昨日やった事に対してのペナルティーが来ていたからだ。

魔力リミッターと始末書は予想通り行われたが……始末書の方に鬼畜すぎる条件が提示されていた。

……なお、始末書ページ数は、ページ数五百以上でなければ受諾しない。

また、内容に類時点が見当たれば受諾せずに破棄を行う。

期限延長は認められません。期限超過の場合、魔力リミッターレベルを半年間、MAXとする……魔力リミッターとは、魔力要素がある本人が放出する魔力量を制限するものであり、直接的に自身のテクニクには影響をもたらさないものの……放出する量が少なければ使える術式も少なくなるし、そして何より、『感覚的』にもずれる。

今でも微細にズレを感じている事を半年……俺のような『騎士』には生殺しに近い仕打ちとなる。

その為、泣く泣くシャルル達との外出をキャンセルし、図書館で始末書を書いている。

(シャルルは、気まずそうな顔をしていたが……歓迎会でもあるので楽しんでこいと送り出した)

図書館は、確かに資料の宝庫だが、近年のインターネット技術の拡大により、キーワードだけで調べごとにケリが付くため、日曜の図書館内は特に人が少ない。

その事もあり、俺は図書館で静かにレポートをやっているように装いながらも始末書を駆け足で書き続けていた。

………一夏じゃないが………これは死ぬ

俺は、心の中でそう思いながらも指を走らせ、文字を打ち込んでいく。

そうやっている中で翔は最後までこの程度で済んだのは『相棒』のおかげである事に気が付かなかった。

………数時間後

日が傾き出したところで俺は、何とか『501』ページにわたる始末書を書き上げ終わった。

………終わった

俺は、脱力感からノートPCを脇に避けながら机にうなだれた。

《お疲れ様です。マスター

《………ああ。………アストレイア、頼む

《了解。転送を開始します

予め持ってきていたケーブルを通し、アストレイアとノートPCを

繋いでやり、俺は、アストレイアに文書データの転送を命じる。

データ量が大きいからかアストレイアは、途中から念話をやめてチカチカとスリットスクリーンだけを点灯させるだけとなる。

「くーうう」

俺は、それを見ながらもずっと座りっぱなしで固くなった体を解すかのように首を回したり、背伸びをする。

夕食ぐらいは、一夏達と食べるかな？

一通り体を解し終わったところで壁に掛けられた時計が示す時間を確認するとあと三時間位で夕食の時間となる。

「やつほお〜い……サクサク」

「ん？」

夕食を何にしようかと思った時、声をかけられた。

その声に首を巡らせるとその人物を見つけた。

浅い茶色に僅かに赤が入った髪にウサギなのかわからないが動物のキャラが付いているゴムバンドを使ってツインテールとしているのんびりしていそうな女子がいた。

「のほほんさん？……どうしたの？」

俺は、彼女の姿を見て即座にそうあだ名を呼んだ。

彼女は、俺や一夏と同じ1年1組のクラスメートではあるが・・・
本名は知らない。

その『のほほん』とした空気から『のほほんさん』とあだ名がついている娘だ。

噂では何処かの部活に所属しているらしく放課後にはあまり姿を見ない。

「うん……んとねえ、これえ……………」

そういいながらのほほんさんは、俺にmicrOSDを渡してきた。

「俺にか？」

「うん。……………また、あとでねえ」

それだけ言つとのほほんさんは、ふらりふらりとしながら消えてしまふ。

「あつ、ちよっ……………行つちまった」

呼び止め暇もなく彼女を見送ってしまった俺は、渡されたmicrOSDを見た。

何のデータが入ってるんだ？

《転送終了。……………？ どうかしました？

データ転送を終えたアストレイアが俺の様子を見てか、問い掛けてきた。

《終わったか……アストレイア

《はい

《microSSD内のデータを読み込んでくれ

《了解

怪しまれないようにこっちの世界の規格に合わせたのが功を奏し、アストレイアにmicroSSDを組み込むとデータの閲覧を開始した。

ファイルが1つだけ？

画面上に表示されたファイル数が1つだけと不自然すぎたが、俺は臆せずにファイルを閲覧する。

なっ!？

そのファイルを閲覧した途端、俺は椅子が倒れるのも気にせず立ち上がったしまった。

そのファイルに示されたものとは……

昨夜、シャルルと共に部屋へと戻るために使用した転移魔法を使用したまさにその瞬間を記録した画像データであった。

画像データだけでなく、そのファイルにはこんな一文が記録されていた。

『君の秘密を教えて？じゃないと学園内にデータを流すよ？』

その一文の下には、校内の見取り図があり、場所の指定がある。

……クッ！

目的は、俺の秘密だろう……が、この画像から想像するかぎり、シヤルルにも手が伸びるであろう。

これを送り付けてきたのほぼさんが所属する部の真意は分かりかねないが、俺が今すべきは……その部の頭を『潰す』事だ。

潰すと言う表現は、いささか乱暴かもしれないが……

このような脅しもとれる行動をする奴らには、容赦は出来ない。

「アストレイア」

「はい、マスター」

「microSSD内のデータをすべて未梢しろ」

「了解……全データを未梢完了」

その報告を受けた俺は、アストレイアからmicroSSDを抜き取

る。

念のため、それを握り潰し、指定された部屋へ向けて走りだす。

翔を待ち受けるものは………いったい？

第9話 水を纏う『最強』 (前編) (後書き)

虚空「……………」

返事が無い屍のようだ。

翔「ああ、とうとう作者が……………」

虚空「ふつかあああつ！」

ラウラ「ちっ、しぶとい奴だ」

翔「ははは……………」

シャルル「そう言えば、作者さん。僕に何か用事があるって」

虚空「ああそうだ。アニメ版リヴァイヴカスタムの事なんだが……………」

・・原作と形がちがくね？」

一同(……………それだけ!?)

鈴「はあ……………このバカ作者への感想、意見待ってるわよ」

第10話 水を纏う『最強』（後編）（前書き）

虚空「……………戦闘で死んだ……………ガクシ」

一夏「作者！！」

翔「戻ってこい！！」

ラウラ「……………ふっ」

楯無「あらダメよ、ラウラちゃん。笑っちゃ」

ラウラ「なぜお前が！！」楯無「だってようやくだもん」

第10話 水を纏う『最強』（後編）

IS学園

校内

生徒会室前

Side 翔

俺の前に重厚な両開きのドアがある。

ドアの上隅に設置された電光板には『生徒会室』と表示が。

「ここだな」

「はい、間違いありません」

アストレイアにも確認し、指定された部屋である事を確認するとドアのぶに手を掛ける。

「サーチの結果、中には3人います。トラップ等の反応はありません
「だが、物理的なトラップは……」

俺は、重厚なドアを開き、中へと入る。

それと同時に何か外れた音がして頭上から何か落下。

俺は、慌てずに流星／雷を鞘ごと左手に展開しながらドアノブから離れた右手で頭上に向けて、刃を抜き放つ。

斬！

抜き放たれた一撃は、すんなりと落下してきた球体を斬り裂く。

斬り裂かれたくす玉らしきものが役割を果たせないまま真っ二つとなり、俺の両サイドへ落ちる。

「感知出来ないだろ」

そうアストレイアに小さく返しながらも静かな怒りをいだき、俺の目の前にいるその雰囲気から部長でありそうな人物へ流星の切っ先を向けた。

「やあ、来てくれたんだね。お姉さんとしては……もっと和やかに入ってくればよかったんだけどなあ？」

切っ先にいる水色の髪をしたショートヘアーが特徴的で、その手に握られた扇子せんすがより存在感を強くする女性が悪戯せんすっぽく笑みを浮かべている。

「ご期待に添える事ができなくて残念でしたが……『こんなもの』を送り付けられていて、流石の私でも穏やかには出来ませんよ」

そう言いながらも握り潰したmicrossDを俺は、机の上に放り

投げた。

「あらら、ここまで握り潰したら使えないねえ………けど、貴方を呼び出すには効果テキメンだったようだね？」

「何が目的だ？」

俺は、その人物だけを静かに睨み、話を折らせないように敵意を滲みだす。

S i d e O u t

S i d e ????

部屋に入ってきてから彼は、明らかに怒りを覚えているらしく目の輝きが暗いままである。

あちゃー、ここまで怒らせるつもりはなかったんだけどなあ

自分の目論みがかえって彼を怒らせてしまった事は誤算だったなと私は、面白がりながらも彼を見た。

「何が目的だ？」

と彼が静かな怒りを讃えたまま私に問い掛けてくる。その怒りを受け流すように私は、口を開いた。

「そうだね……まあ、立ち話も難だし、まずは座ってくれたまえ」

彼の怒りを感じながらも私は、彼に席に座るように促す。

すると

「……わかりました」

手荒い事をする気はないらしく、突き付けてきていたブレードを引かせる鞘へとブレードを納めてから展開を解き、薦められた席に座ってくれた。

どうやらなるべく話し合いで問題を解決するのがかれの流儀らしい。

「ありがとう。虚^{うつほ}、お茶をお願い」

「……はい」

私の呼び声に眼鏡に三つ編みの髪の子が私の傍らを通って部屋の片隅に置かれたティーセットで紅茶を入れはじめ。

彼女の名は布^ほ虚^{うつほ}、3年生で生徒会のメンバーであり、そして私の幼なじみ兼メイドである。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

「いいえ」

注いでもらい、渡された紅茶に対して、少しだけ目元を和らげた彼が礼を言う。

やっぱり、悪い子じゃないみたいね

その様子を見た私は、自分も紅茶を貰いながらもそう頭の片隅で思う。

「ねえねえ、けーきも……出す？」

そう彼に聞くのは、布仏虚の妹であり生徒会メンバー、そして彼のクラスメート。

のほほんさんとあだ名が付けられた彼女は、のほとけほんね布仏本音である。

「……君は……すまないが今は、遠慮する」

「……グズツン」

「……今度、食べさせてくれ」

思ってもいない人物が居た事に少しばかり驚きを漏らした表情をすがるが、すぐに戻り、そう冷たく彼が返す。

が、その言葉を聞いた途端、本音が泣きそうな顔をしたためか最後の方を優しい言い回しで言い直す。

ふふふ、本当にいい子だね

彼の行動にまた笑みを浮かべたくなった。

それに先ほどまで出していた敵意を虚や本音にまで振るわず、『私に』のみ、振るっている。

敵となる人物を理解した上で。

「では、お嬢様。これで……」

「うん、ありがとう。櫻井君の件は後で話すよ」

「はい。いくわよ、本音」

「はあ〜い」

お茶を貰ってから布仏姉妹はあらかじめ私が指示したとおり、部屋から退出する。

そして……残った私たちは

「……」

「まずは、私の名からだね。私は、現IS学園生徒会長『更識楯無』まさしきたてなしよ。これでも2年生だから貴女の先輩ね」

お互いに紅茶を一口飲んだところで、自己紹介から入った。

「1年1組在学、総合先進企業『イザナギ』試作IS運用担当者
櫻井翔」

こちらが名を明かした後、彼……翔君も律儀に名を告げた。

「ありがとう、わざわざ名を言ってくれて」

「いえ……そんな事より、貴女方の目的を聞かせてください」

言い方は、歳上に接するような言い方ではあるが、少しだけ刺を感じる。

「もうせっかちなんだから……じゃあ本題に入るよ。 櫻井君、」

君は何ものだい？」

「質問の意味がよくわかりませんが」

彼は、表情一つ変えることなく言葉を返してくる。

手札の一枚を切った、後は……

私は、まるでカードゲームをしているかのように今出した『札』を生かすために話を進める。

「あは……『2人目』の男の子だからって事でお姉さん『達』の方でも君の周辺調査をやっていたんだよねえ」

「……」

その言葉を聞いてもわかっているかのように表情を変えない。

「でね、中学2年生からの記録裏付けはとれたんだけど……それより前の記録が出鱈目だった」

意地悪い笑みを浮かべつつも私は、話を進める。

そう、2年前までは正式な記録は合ったものの……私の『脈』で入

念に調べあげたところ、それ以前の記録はすべて偽造されて作られた節が合った。

通常なら『暗部』として処理するところだが……

「……………それで」

「それからお姉さん、君に興味を持つちゃってねえ、君と一度やり合ったんだけど……………覚えているかな？」

わざわざ、完治したばかりの左腕を掲げて見せると彼はすぐに思い至ったらしく言葉を返してきた。

「転入初日の……………貴女でしたか」

「ええ。覚えていてくれてお姉さん、感激」

冗談も混ぜ合わせた笑みで私は、彼の反応を受け入れる。

「それで今回の『これ』だから……………そろそろはつきりさせたいとお姉さんは思っただけだな？」

空間投影ディスプレイに彼に渡したものと同じ画像を表示させて彼に迫る。

「……………答えなかったら？」

それでも表情を変えない。

逆に『それがどうした』と言わんばかりだ。

むむむ……なかなかお堅い

なかなか彼の態度が堅いがため、話が進まない。

なら、これでどうだい？

私は話の流れを変えるため、もう一枚『手札』を切った。

「……………シャルロット・デュノア」

「……………その名は？」

私が口にした『ある子』の名に彼は、私でも見落してしまいかもしれないわずかな反応を示す。

「南フランス、プロヴァンス地方出身。 2年前までデュノア社長
長の愛人であった母親と生活していたが……彼女が14の時に持病
により母親が死去。 その際、父親であるデュノア社現社長が彼女
を引き取る」

「……………」

すでに聞かされているのだろうか、変化を見せないように見えるが
目の鋭さがかなり変わっている。

「その後、IS適性検査において高い適性を示した彼女は、非公式
にデュノア社、テストパイロットとして迎えられる」

「……………」

「そして現在彼女は、名と『性別』を偽り、IS学園に在学。……シャルル・デュノアとして」

扇子で空を斬り、新たな投影ディスプレイに偽造がない『シャルロット・デュノア』のプロフィールデータを表示させる。

データが表示された時、彼の目は、一瞬だけ見開かれる。

………動揺かな？

それをそう捉えた私は、話の流れをがっしりと掴み上げていた。

多分ではあるが、彼にとっても彼女、シャルロットの存在はイレギュラーに近かったが、昨日の時点で何かしら手で自分と同じ側に引き込んだのであろう。

それゆえに彼は、私がプロフィールデータを入手している事で『彼女』をどうにでも出来るんだよと『脅迫』まがいに聞いてきている事を感じている。

「君がこのまま黙りする気ならそれでもいいけど………そっちがその気ならこっちは『これ』を好きにできるよ」

「………ここに集まる代表候補みたく抜けてると思っていましたが意外に調べがついていますね」

彼が私の言葉を聞いてもそう返してくる。

その彼の目は、先程とは比べものにならない敵意を垣間見せた。明らかないらつきのあらわれかな？

私は、そんな敵意を押し退けて笑顔のまま口を開く。

「うん。 IS学園は、無条件のデータ開示が求められるけど……流石に次期主力機候補を持っている専用機持ちが『ゴロゴロ』……いる中で強奪なんてされたらたまらないからねえ……だから提出された必要書類やプロフィールデータだけじゃなくて君のような『怪しい子』に対しては『私みたい』なのがさらに詳しく調べるんだよね」

無条件に学園の門を開き、入学する事をIS学園は、認める。

……が、ISの技術や全機体数が限られているため、どこぞのアニメごとく『謎の組織』によって強奪される危険性もあり、また中には秘密工員や紛れていたりと、強奪目的のために入学してくる可能性がある。

その為、学園の『暗部』ではそれらへの対処が行われる。

私の友人である『老人』も彼の事を自分が納得するまで調べる事を許可したからには、彼にはかなり裏があるのであろう。

「なるほど……」

その説明で彼は、何かを納得したのであるうかが頷いてくれた。

「じゃあ、どうしよつか？」

もう『逃げられないよ』と彼に通告して笑みを浮かべながら私は、彼を見る。

彼は、表情を変えないままだが、目元が僅かに苦く歪んでいる。

多分、シャルロットの件はすでに聞かされていて彼は、庇っている。少し私らしくない卑怯な手だが……ここで彼の正体を明らかにしなければ今後、何かあるかもしれない。

そうして答えを待っていると彼は……

「……わかりました」

何かを決意したかのように口を開いた。

「ただし、条件があります」

「あら、お決まりだね。……で条件は？」

「条件は……」

その条件を聞いた私は、彼が優しい人物である事を改めて知る。

Side Out

第4アリーナ

S i d e 翔

夕日が沈み、本来なら生徒が使用できない時間帯であるのに関わらずアリーナは、夜間ライトに点灯し、フィールドを照らしだしている。

その中でISスーツを着た俺は、フィールドの真ん中に立ち、同じくISスーツを着た楯無と向き合っていた。

「……………ありがとうございます。 わざわざこんな事をしてもらって」

俺は、今から戦う相手に対し、俺が望んだ『この状況』を作り出してくれた事への感謝の意を示す。

すると楯無は笑みを浮かべながら返事を返す。

「気にしないで、私は顔が広いからこの程度、簡単簡単。 それよりも障害が合ったほうが私も面白いよ」

……………冗談なのかは、判断しにくいだが、どうやら先日会った『あの老人』もこの件に絡んでいるらしい。

「それよりも君は『あんな条件』でよかったのかい？」

楯無が笑みを消して、真剣な顔で続けて問い掛けてくる。

俺もそれに答えるために気を引き締めて彼女に応じる。

「ええ。そちらから見れば旨すぎる条件ですが」

「まあね。……勝つにせよ、負けるにせよ、どっちにしても君は『話すんだから』そりゃ、いいかもしれないけどさ……」

そう俺が出した条件とは……以前、楯無と戦った際の約束を利用した形で出したものだ。

俺が勝つたら俺の『秘密だけ』を話す。

逆に楯無が勝った場合では……俺をどうしようが好きにし、シャルルの件の決定権を委ねる事となっている。

自分が自然と出した条件に、我ながら無茶苦茶だと思っていた。

何故ならこれでは『自分は好きにしていから彼女には手を出すな』と昔の映画みたいな展開だからだ。

だが、条件的には向こうに利益しか盛り込まれていない……たとえ負けて条件の大部分は、俺だけ受ける事になる。

楯無の『俺の事』を知りたい件

……勝っても負けても向こうのその目的は充分達成する為、シャルルの件に対しては悪いようにはしないと俺は、思う……いや信じたい、戦士の礼儀として

「そろそろ……始める」
「そうだね」

俺の言葉が戦端を切る。

俺達は、同時に自身の専用機を呼び出す。

「……スターダスト」

左手を拳に変え、胸を軽く叩き自らの愛機を呼ぶ。

その呼び声に応じ、スターダストは光と共に俺の体を包み、展開を開始。

展開をすると同時に流星 雷、疾風を2本ともガンモードで両手に展開開始、スターダストの展開が完了するとその直後、流星の展開も完了する。

俺は、僅かに顔を動かし、すでに展開を終えた楯無の専用機の全容を見定めていた。

基本色が彼女の髪と同じくスカイブルー。

アーマーは、俺のスターダスト、一夏の白式、付け加えるなら量産機の打鉄との設計思考とも似つかず、全体的に見ても面積は狭く、小さい。

代わりにそのアーマーの面積の小ささをカバーするかのよう透明の液状フィールドが形成されている。

その機体外見を見た俺は、まるで湖を舞う水のドレスを着た『妖精』のようだと思った。

それだけでも特徴的な機体であるが、その近くをセシリアのブルー・ティアーズのような自律兵装らしきものが左右一対の組み合わせで浮遊している。

「ミステリアス・レディ、この子の名よ」

そう自らのISの名を明かしながら先日、俺が指摘したような『大

型ランス』状の武装を展開する。

ただ、そのランスも矛先が本体と同じく液状のフィールドを有しており、こちらは攻撃用だと思った。

視界の片隅にハイパーセンサーを通して、楯無のISSの詳細データが表示される。

『ミステリアス・レディ

ロシア 第3世代型ISS

近距離戦型

特殊兵装 『不明』』

ロシア製……危険な戦いにだな

俺がそう考えるのも過去のモンド・グロツソ等の公式戦に参戦したロシア製のISSは、通常ではあり得ない特殊な装備……例えば関節部を破壊するクラッシュャーや近距離で相手を絡めとる特殊ワイヤーカッター等を搭載していた。

シミュレーション上で俺もそれらの機体と戦った事があるが……

ロシア機とやり合うなら『拳動に気を付ける』、そう企業でも畳み込まれている。

「さて……かかってきなさいな」

そんな思考を働かせている間にランスを『あの時』のように構えずに彼女は宣言した。

その表情は、涼しい顔だが……何故か、以前の戦い時には感じなかった背筋に流れる冷たいものを感じ取る。

……やるしかない

その冷たいものを気迫で看破すると……俺は、心そのものを『刃』のように研ぎ澄まし、流星を構える。

右手の流星／雷を前に左手の流星／疾風をやや引きめに構える。

その状態のまま俺達は、睨み合って……『時』を待つ……

その一瞬でも俺の頭の中では、幾つもの戦術と経験が攻めぎ合っている。

動く前から……彼らの勝負は始まっている。

戦術と経験がある一定の高まりへと彼らを導いた時……彼らは同時に『動いた』。

お互いにイグニション・ブーストを起動。

その直後、彼らは『超高速』の領域へと突入しながら真っ向からぶつかりに行く。

真っ向から突っ込んで行く最中、俺は流星ノ雷からレーザーを、楯無は手持ちの『大型ランス』に設けられた銃口から銃弾を放つ。

Side Out

お互い、それらの攻撃が掠め、シールドを削り合っが……一歩足りとも引く気はなかった。

そのまま両者、フィールド中央で激突する。

超高速での『激突』の衝撃を物語るように砂煙沸きたつ。

やがて砂煙が霞み、彼らの姿が視認出来るようになる……

お互い、相手の得物を押さえ込んでいた。

翔は、左手の流星／疾風でランスが右に振り払われるのを防いでいる。

一方、楯無も突きから真横に振るわれた流星／雷を柄の部分に左腕部のアーマーを押しあてて受け止めていた。

その状態から先に動いたのは……楯無だ。

楯無は、ランスの矛先のフィールドをまるでドリルの様に回転を開始させ流星／疾風ごと翔へと押しあてようとする。

翔は、それを初動作をステップ、次に背部、腰部スラスターを使い距離を置いて回避。

そのまま滑るように反時計円状飛翔へと移り、牽制の為に流星／疾風よりレーザーマシンガンを見舞う。

だが、自律兵装からまるで水の膜のような物が展開し、それによりレーザーが拡散されて威力を失った。

Side 翔

!?

俺は、その光景が一瞬、理解できなかった。

放ったレーザーがいきなり展開された水の膜のような物で無力化されたのだ。

レーザー系の武装は、光とほぼ同じく大気中の水分や塵などにより減衰してしまうが……ただの『水』に突拍子もなくレーザーが消える事などはさすがにない。

いったい何が……

驚きを心の内だけで納めつつ、俺は円状飛翔を続けながら散発的にレーザーを放つ。

それらも水の膜に拡散され、楯無に当たることなく威力を失う。

「無駄だよ……って言わなくてもわかってるよね」

水のベールを纏った……ISの名の如く『ミステリアス・レディ』、楯無がランスを構えながらこちらに突っ込んでくる。

くっ！

俺は射撃をやめ、その攻撃に、跳ね上がるように上昇して回避。

同時に流星／雷から鞘を量子状態へ、抜き身として上段から斬り掛

かる。

「あま〜いよ」

避けられたのを見た楯無は、その場で駒のように回転し、体の向きを変えるとそれを当然、迎撃&追撃に入る楯無はランスの4連装ガトリング・ガンを連射しながら再び突っ込んでくる。

俺は、銃弾の雨を左腕部のアーマーと発動するシールドで直撃だけは受けないようにしながらもお返しとばかりに抜き身とした流星ノ雷を振るう。

バシユイイイン！

流星ノ雷はその水のベールに接触した途端、阻まれてしまう。

接触した面がまるで水のように波立ち、その回りには小さな白い紫電が迸る。

流星ノ雷を握る俺の手に伝わる感触は、『エネルギー系のシールド』に接触したようなものが伝わってくる。

この水……エネルギー系か！？ なら……

俺は、流星の特殊刀身兵装『サンクチュアリ』を起動。

この手の防御への対抗手段の1つ、『エネルギー吸収』に入る。

刀身が青白く輝いた途端、その刀身は輝きを増していく。

「はあああああ」

「これは、ちよっとまずいかな？ えい！」

楯無も黙ってやられるわけもなくランスを俺目がけて突き出してくる。

グウ！

明らかに避けられるタイミングではなかった……俺はせめてもの防御としてシールドを貫通してくるであろうその一撃を左腕のアーマ―を前に突き出してあらがう。

突き出されたそのランスは、左腕のアーマ―を大きく削りながら俺の傍らを通る。

「……あらま」

「グウウ！！……はああああ！」

衝撃でうめきが漏れるが、俺は流星ノ雷に掛ける力をさらに強くする。

右手が先日のまだ『修復』が終わっていない怪我で痛むが……

構わず押し込む。

その瞬間、水のボールは『エネルギー不足』からかその形を小さくする。

俺は、その隙間、ねじ込むように小さくなった部分に左手を前に出したのと同じに出していた流星／疾風を放つ。

「!？」

「……くられ！」

幾つかのレーザーが防御を掻い潜って楯無に直撃するもののすぐに別のボールが防御に回り、無力化される。

くっ！ ……ガハア！？

俺は、楯無が体勢を完全に立て直す前に引こうとするが先に膝蹴りを入れられた。

「はいはい、もう1ついかかな？」

体勢を完全に崩した俺は、立て直す間もなくさらに追撃を食らう。

ランスの突きがさらに突き出される。

アゲウ、ゲウウウウ！！

微細にPICを制御できない中、俺は何とか流星、2本でその一撃を受ける事に成功するもの……

「お〜ま〜け」

「!!--」

・・・その合間を掻い潜った矛先の『水』が意志を持ったかのように形を変え、無数の刃となって襲ってくる。

「があ!」

散弾のように広がりながら襲ってきたそれらは、アーマーを浅く削り、アーマー以外ではシールドが働いて防御してくれるが、衝撃までは殺せず、無数の刃によって吹き飛ばされ、俺はアリーナの壁に叩きつけられた。

「ぐ・・・ガハア・・・」

『シールド貫通、物理ダメージ有り。機体各部ダメージレベルE。シールドエネルギー206まで低下』

衝撃で意識が飛び掛けるが・・・何とかつなぎ止める。

が、壁から剥がれ落ちた俺は、流星を手放してうずくまってしまっ

「うううう……くっ」

俺は立ち上がろうとするが……衝撃の痛みで体が悲鳴をあげる。

たった、3発。

ただ、攻撃を入れられただけでなく……的確にISの防御が及ばない衝撃で体が動かなくなるように入れられたらしい。

……っ、つよい

今まで会ったどんなISユーザー（乗り）よりも楯無は『圧倒的』な強さを持っている。

ISの特性を理解しているだけでなく、楯無本人も桁違いに強い。

……負けるな

俺は、俺が知っている最強の『Strikers』以外に初めて俺はそう思った。

だが……このまま黙って終われるかよ……

何とか立ち上がろうと足と腰に気合いを入れようとすると……

「まだ、やるの？」

楯無から声が掛けられる。

顔をあげた先には、いつの間にか着地した楯無が俺を見ていた。

「はい」

俺は、そう答えながらも手放していた流星ノ雷を掴むとそれを杖代わりに立ち上がろうとする。

「……1つ、聞いていいかな？」
「……何です？」

その様子を見た楯無から問いかけが来る。

俺は、それに応じるように彼女を見る。

「どうして君は、出会って数日しか足っていない『あの子』を庇おうとするの？」

「……いけない事ですか？」

俺は、思わず楯無を睨み付けてしまう。

楯無の言っている意味もわかるが……俺は、ようやく自分の意志で『走りだした彼女』を他人事のように見捨てたりは出来ないだけだ。

俺の表情を見てか楯無は、訂正するように苦笑しながら改めて口を開く。

「いや、悪い事じゃないと思うよ。……ただね、君のように『戦い慣れている』ような子には『枷』になるんじゃないかなあと思っ
つて」

戦い慣れてるか……確かに間違っ
てはいないが……

楯無の言葉に訂正を加える。

「『枷』になるなんて思ってますん」
「？」

俺の言葉に首を傾げる楯無。

「……俺は、嫌なだけだ。……昔の俺ように『選択』しない……生きる事から逃げる事を見るのを……」

言葉を盛らした俺の脳裏に5年前の事が鮮明に思い出されていた。

当時の俺は、散々抵抗したものの、捕まり……『研究検体』として違法研究所に護送されそうになった。

その時の俺は……この世に『再び』生まれてから相も変わらずに『いつも』のように何も考えず、それを受け入れようとしていた。

が、移送される直前に今の両親が所属していた部隊に救出された。

その後、何故自分を救い出したのか……と今の両親に聞いた事がある。

呪われた『血統』を持つ俺をなぜ助けたのか……と

その時、彼らは自分を抱き締めて……こう言ってくれた。

あなたは、まだ始まったばかりなんだよ……
だから生き続けて……自分で考えて……迷ったりしながら……あなただけの道を……もしあなたが心の暗闇に囚われそうになるなら私達が必ず助ける

それにカケル、お前は这个世界に生きてるかぎり、沢山の楽しさや苦しみ、そして『俺達』のように誰か、大切に思える奴らと『出会うなきやいけない』……だから、自分がどんな存在であれ『自分の戦い』を続けて行け。

それが生きる事だ

生まれてから口にもした事がなかったその言葉が俺の始まりだった。

今まで何かを与えられても深く感じてこなかった俺は……生きる事への楽しさを知り、その人達と家族になり……そして迷いの中でも暖かさがある事を知った。

諦めない『心の強さ』も……

だから……父親のせいで心を傷つけたシャルルにも知って欲しいのだこの世は冷たき『者』だけではない事を……

その為なら……俺は……

「だから戦つてやるのさ」

「櫻井君？」

俺の呟きに首をかしげるが俺は気にせずには抜刀した2本の流星を構えた。

「…………ただ、今だけは手を『差し伸べる』為にな」

Side Out

Side 楯無

雰囲気が変わった？

私は、彼の言葉が紡がれていく毎に彼から発せられる雰囲気が変わっていくのを感じた。

ISバトルを初めてからの彼の雰囲気は、戦い慣れた戦士としてものであった。

だが今は、何か心に決めたものを引き出したのだろうか、目の輝きが増し、雰囲気も触れただけでも斬れてしまう『刃』のように強靱であり、静かなものだ。

「あは…………愛のパワー炸裂かな？」

それをもしかしたらと感じた私は、冗談も交えて彼にそう告げた。

だが彼は、怪訝そうに表情を少し歪ませるだけで何も返してこない。

……どうやらそんなんじゃないみたいだね

彼の態度に私は、認識を改めるとランスを構え直した。

ただ、取り違えてはいけないのは、先程までの若干、『手を抜いた』
構えではなく、相手の『急所を貫く構え』へと変化させている事だ。

「……君の強き信念を見せてもらったよ。 なら私は戦士の『礼儀』
としてある事を君に教えよう」

お互いに構えを解かないまま私は、紡いでゆく。

「私のIS……『ミスティアス・レディ』から流れ出る水のヴェー
ルは、君が思っているように『ISのエネルギー』を伝達するナノ
マシンによって制御されてるのだよ」

「……なぜ、自分の手の内を開かず？」

それを聞いた彼が口を開いた。

私は、笑みを浮かべながらそれにも応じる。

「そうしなきゃ、フェアじゃないからね……それに、この装備は『
汎用性』が高いからねえ？」

若干の嘘も紛れているが……たぶん、最初に攻撃を与えた時から気
付いているであろう『水の変幻自在』さは彼も警戒しているはずだ。

あえて明かしておけば、まだまだ『手のうち』があるとフェイクを
思わせる事も出来る。

そして彼も打ち破れる『手』を握っていて、すべてを出していない
だろう。

ならお互い取るべき手は……すでに『1つ』しかない。

私達は、にらみ合い……最後の激突に備えた。
そして……

「……勝負だ」
「『来^きなよ』」

私達は、またぶつかり合う。

Side Out

ぶつかり合った2人は、激しく刃を交え、火花を散らす。

ぶつかったりあった2人は、まるで同じ極同士の磁石のように弾け、
そしてまた違う極の磁石同士のように引かれ合いながら、人工の燈
が照らす空を舞い、火花を生み出す。

そう、お互いにとつたのは身を削り合う『超接近戦』……楯無は仕掛けを、翔は得意な距離として刃を振るう。

翔は、2本の流星の特殊能力『サンクチュアリ』を惜しむ事なく発動させながら楯無へ迫る。

サンクチュアリの『聖域』により水のヴェールが弾け、雫となる。

一方、楯無はその2本の剣をランス1本で致命傷となる直撃を防ぎながらも翔へ、ランスを突き立てようとする。

ランスの矛先がスターダストに細かな傷を刻みだす。

2人は、互いに刃を交えながらもさらに加速していく。

『それら』によって刻みだされた軌跡には、刃が交わった事で火花が散りばめ、削られたアーマーが微細な金属片となって輝きを生む。

『星屑の輝き』と『水の妖精の舞い』が……フィールドを照らす。

その軌跡は、終わりなきものと

とも2人を見ている者がいればそう思うのだろうか……

が、どんな結果であれ、終わりは訪れるものである。

S i d e 翔

『シールドエネルギー114まで低下、各部装甲ダメージレベル増大中。……被弾、右可変および左腰部スラスタ―推力80%まで減少』

……次で最後だな

自機の損害報告を聞きながら流星を振るう俺はスターダストに礼を言いたくなってきた。

何故なら俺のわがままから始まったこの馬鹿げた戦いに付き合ってくれたモノ言わぬ『相棒』であり……今回、初めて酷使したのに関わらずしっかり俺について動いてくれる。

だから礼を言いたくなってくる。

これで最後……ラスト一撃、決めさせてくれよ『スターダスト』！

恐らく俺が食らわせる最後であり、今の俺がもてる『最強の一撃』は、楯無のシールドを削り切れないと思うが……もはや『全力を叩きつけなければ』、勝負の幕を降ろせない。

俺は、最後の攻撃を仕掛けるために距離を置き、流星の鞘を2本とも呼び出す。

そんなの引いた感じに楯無は、許すはずなくランスの猛威を俺に浴びせてくる。

俺は、それらを紙一重で回避しながらも隠し腕も使い、呼び出した鞘達を連結させていく。

流星／雷の鞘側面に流星／疾風を、その雷の鞘に流星／疾風の鞘を連結、最後の『パーツ』である流星／雷を連結……………

「もらい！」

「！！」

連結中の隙を突かれ、流星／雷をはねあげられた。

跳ね上がった流星／雷は、俺の手を離れ、回転しながら空に舞う。

しまっ…………

「これで終わりだよ」

そう楯無が言って、指を鳴らした瞬間、斬り合っている途中から感じていた絡みつく『水気』にアーマーが『急激に熱せられた』のを感じた。

不味い！

俺は、相手の『特性』から一瞬でこれから起こる事を予期し、手元に残った流星を引き寄せた瞬間、『爆発』に呑まれた。

Side Out

Side 楯無

彼が爆発に呑まれた。

私は、彼と斬り合っている最中、『水』を意図的に霧状に散布していた。

その霧状となったエネルギーを含んだ『ナノマシン』にIS本体からの指示でエネルギーを一斉に熱エネルギー転換し、『対象物』を爆破したのだ。

限定空間やある一定濃度以上しか使用できないものではあるが、すべての行動と同時並行で行える利点もあり、実戦においてかなり有効性がある。

……………これで終わりじゃないよね

私は、爆発した時に発生した水蒸気らしい白い霧むぎに目を向けてそう考えたその時……………

彼が白い霧を切り裂いて、上昇した。

その手には、強い輝きを放つ剣がある。

あは、やっぱり『楽しませてくれる』

S i d e O u t

S i d e 翔

俺は、ギリギリのところまで難を逃れていた。

引き寄せた流星にあの熱エネルギーを吸収させていたのである。

だが、同時に流星はスターダストのシールドエネルギーも吸収していたため、もはやシールドエネルギーは、風前の灯状態。

もう後には引けない。

……終わらせる……！

俺は、上昇と共に『最終形態に移行した流星』を掲げ、宙を舞っていた流星／雷に連結させた。

持ち手から連結された流星達は、今までに溜め込んだエネルギーの解放を求めるかのように『大型ブレード』全体から白き輝きを放つ。

これこそが流星が持つ最終形態の1つ

流星／終乃型『死兆星』

(ミーンティアファイナルモード『アルコル』)

死兆星とは……北斗七星の尻尾の先にある1つの星の事をさしている。

一際、輝く星であり日本では寿命星と呼ばれることがある。

この星の輝きが見えなくなると死の予兆、もしくは弱っている事を示すと古来記等では語り継がれている。

どうせならイカツクテ、終わりを示すものにしようぜと父さんが勝手に名を決めたのだが……確かにそうかもしれない。

相手が自分の輝きが消える時、勝負が決まるのだから……

「ハアアア！」

連結後、俺は、上昇から降下に転じるため小さなインメルマン・ターン(U字の機動を描く事)を描き、一気に楯無目がけ高速で『落下』してゆく。

スラスターの推進力と落下エネルギーが付け加わったその落下は『自身が弾丸』となったような速度になっているだろう。落下しながら俺は、流星を振るう。

楯無は当然、水のヴェールで防御してくる。

流星と水のヴェールが拮抗し合い、強烈な光が発せられる。

「楽しかったよ。……でもこれでおしまいだよ」

水のヴェールの向こうで楯無がその口にしながらランスを放とうとする。

「まだ、終わりませんよ。………流星『全開放』」

俺は、流星の『力』を開放する！

その瞬間、流星は強靱な光を放つ『白銀のブレイド』へと変化して……水のヴェールを斬り裂き……楯無をも『斬った』。

その直後、楯無の自律兵装が火花を散し爆散する。

S i d e O u t

S i d e 楯無

私は、爆発した自律兵装『アクア・クリスタル』が作り出した爆風から逃れた。

『機体ダメージレベルDを突破。ナノマシン制御機構に問題発生。一部フィールド展開不可………絶対防御』発動によりシールドエネルギー270まで低下』
今の一撃で……弱ったわね

私は、内心・・・ヤバいなと感じながら彼の『最後の攻撃』に備えた。

すると爆風から翔が飛び出してきた。

Side Out

Side 翔

流星に溜め込まれた全エネルギーを開放したことにより、楯無に大ダメージを与えた。

だが、流星の破損が大きいものになってしまった。……試作兵装だったせい……あるいは粗末に扱ったせいもあるかもしれない……
そんな感傷を抱きながらも破損した流星から刀身の一部にヒビが入った流星／雷を抜き取ると俺は、最後の絞めに移った。

爆風を引き裂いて加速した先に楯無がいる。

「……これで」

「まだまだだよ」

流星／雷を振りかざしたが……『水』が流星／雷を持つ右手に集まり……『凍りついた』。

今度は、エネルギーを伝達せずにナノマシンが熱を奪ったのだ。

「チー！」

「おしまい……」

「まだだ！！」

楯無が左手でランスを突き出してくる。

俺は、叫びながら右腕のアーマーを強制排除パージを実行。

通常、空中でのベイルアウト（脱出）時にユーザーを地上に降りるまで保護するパーツ以外をパージし、エネルギーを確保を目的とした機能である。

が、時には、被弾等で機能が失われ、デットウェイトとなったパーツや機体バランス調整のためにパーツを切り離す目的にも貢献している。

上腕まで被っていた氷が内部から砕け、流星／雷が手から離れる。

それを『右肩』の隠し腕で掴み寄せ、ランスを流星／雷で『受け流した』。

「！？」

「うおおお！！」

生身となった右手を拳に変え、楯無の顔目かけて拳を繰り出した。

ドドド……

「……ッウ」

「……………」

少しだけ拳が楯無の頬に直撃したのを確認した。

が、その直後……………」

……………」
ドス

「グッ！」

俺は、腹部に『何か』を食らい……………」その衝撃とギリギリまで切り詰めた精神的疲れからか俺の意識が飛び、暗闇へと落ちた。

S i d e O u t

S i d e 楯無

彼に殴られた頬が軽く痛いなど私は、思いながらも意識を無くした彼を、彼に止めをさした『蛇腹剣』をほっぱり出して抱き留めた。

最後の突撃時に蛇腹剣を呼び出していたのが功を奏したのだ。

私の腕の中にいる彼は、ここまでの激戦を繰り広げた彼とは思えない程、穏やかな笑みを浮かべて意識を無くしている。

やれやれ……………」いい顔だね

私は、また笑顔となった。

しっかしまあ……少し本気を出してたけど、……手痛お返しだったかな

自分のISの被害報告を改めて確認した私は、少しばかり気落ちする。

これでは、自分が『継いでいる』名が廃るではないか……

でも、以前も戦っていて私は、思ったが……彼の動きは時折、鋭いものがあり、それを実行する恐ろしい速さも持ち合わせている。

だが……まだ荒削りで、発展途中である事もわかった。

たぶん自分がちゃんと『ISTekニック』を教えれば、彼は自分以上に強くなるだろうと私は、思った。

と……可愛い後輩見つけたのを考えるのは後回し、後回し……
彼を見てあげなきゃねえ

また、自然と笑みを浮かべながら私は、引き上げを開始した。

Side Out

Side 翔

誰かが呼んでいる

聞き覚えがあり、そして懐かしい響きがある。

その声と共に暗闇の中に一筋の光が現れる……

その一筋の光の先に誰かがいる。

その人物を俺は、知っている……いやよく知っている。

その人は、『前』と同じく自分に手を差し伸べてくる。

俺は、何かを呟きながらその手を……

何かをなそうとするその前に意識が覚醒していく。

「……………」

目を明けた瞬間、光が目に入り、俺の目が少し眩しさを感じさせる。

何処だろうか？

そう覚醒したてのぼんやりとした頭でそう考えだす。

「あら、お目覚め？」

頭を動かしたからか、俺の目覚めに気づいた人が光をさえぎるように俺の目の前に顔を寄せてきた。

よくよく見るとその人物は、楯無だ。

「…………あれ、更識先輩？…………なにやってるんですか？」

何故ここにいるかを問い掛ける前に俺は、ある事に気が付いた。

1つ、自分の体勢が寝かされている事。

2つ、自分が寝かされているのがベットではないこと。

3つ、その枕が妙に柔らかく…………少しシャンプーらしきいい匂いがする枕のようなものだ。

それらを統合した結果…………今、俺がいるのは…………

「ひざまくら」

…………やっぱりかよ

俺は、起き上がろうとするが、いつの間にか着替えた(仮定だが、服を持って来てここで着替えたのだろう)楯無が俺を元の体勢へと戻す。

「えっ？…………何を」

「…………約束、わすれてないよね？」

笑みを浮かべながらそう告げてくる楯無。

そう告げてくると言う事は、対決結果自体、俺の負けらしい。

好きにしろと言ったが、いきなりこれはないだろと内心思った。

とその前に……

俺は、深く考える前にある事を思い出して楯無に聞く。

「あの更識……」

「楯無って呼んで」

「……楯無さん」

「はいはい、何かな？」

「……ここは何処です？」

「更衣室だよ。君の」

そうか……なら『アイツ』は

俺は、『もう一つ』の相棒がやっている事を頭に描き、口を開いた。

「……『アストレイア』、隠し撮りしているならやめろ」

「えっ？」

楯無は俺の言葉に誰かいるのかと辺りを見直し始めた。

すると今日、俺が使用していたロッカーが開き、中から声を響かせはじめた。

《おや、気付かれましたか？》

「当たり前だ。こんなおいしい『画』を撮らないお前ではないだろ？」

《はい、ここまでボロ負けして膝枕とは画にならないのはおかしいでしょ？》

「……折らりたいか？」

若干ながら相棒のデバイスへ殺意を抱く。

「…………えつと、『君』は一体？」

楯無が少しついていけない様子でアストレイアに問い掛けてくる。

《申し遅れました、Ms. 更識。私は、マスターカケルのデバイス、アストレイアです》

「『デバイス』？ ISじゃなくて？」

楯無が言葉だけで目ざとく違いに気が付く。

「アストレイア、説明を」

《私ですか？》

「悪いがボロボロなんだ…………頼む」

《わかりました。では話しますね、私達は…………》

先日、シャルルに話した通りにアストレイアは、楯無に話す。

ただし、シャルルの時よりも詳しく話す部分があるのは、楯無がこちら『サイド』に近い人間だからなのだと言った。

「…………なるほどね、理解できたよ。アストレイア君」

《それは、何よりです》

楯無は、昨日の『アレ』を見ているからか、シャルルよりも順応が早い。

「あの……楯無さん」

「ん？なんだい。『魔法使い』の翔君？」

さっそくあだ名を付けてくる楯無を余所に俺は、もう1つの条件について問い掛ける。

「シャルルの件は？」

これが成されなかつたら俺のここまでの『激戦(?)』が一気に水の泡に化してしまう。

俺は、やな汗をかきながらも楯無の答えを待つ。

すると……

「あれえ、シャルルの件て何の件？」

「えっ？」

俺は、思わず声を洩らしていた。

「だってあなたは……」

「えええ、私が言ったのは……君のルームメイトが『変わっている子』だよって言っただけよ？」

そう言いながら楯無は、自分の口元に人差し指をさして『大丈夫だよ。何もしないから』と言いたげな素振りをとった。

俺は、それを見てようやく力を抜く事が……

「その代わりに……」

「えっ？」

月曜日

放課後

一日の時間があっという間に過ぎた。

そして俺は、生徒会室にいた。

「今日から生徒会に所属する事になった翔君よ。 イエーイ！」

開かれた扇子に『祝』と書かれている。

「わ〜い、かけるんよろし〜」

「よろしくね、櫻井君」

同じ生徒会所属の姉妹が喜びの声を上げた。

好きにしるって言ったが……なぜ？

俺は、ただただ首を傾げた。

「だ〜けどさあ〜、かけるんが魔法使いって驚き〜」

「そうですね。普通なら信じられませんが……先日のアレとお嬢様がそう仰るのなら認めなければなりませんね」

生徒会所属になった時点で楯無が俺の正体がある程度、簡単に姉妹達にも伝えたのだ。

「……うふふ、本当なら魔法の事を聞きたいところだけど、お茶にしましょっか？ 翔君の歓迎会も兼ねて」

「あつ、いいですね。私がお茶を」

「わ……い、け〜きだ。け〜き!〜!」

自己紹介が改めてすんだところで楯無が提案すると彼女達は、すぐに準備をはじめた。

『上』はもう認知済みか………どうなるかな、この先？

何だかにぎやかなところに来たなと感じながらも俺は、自分の行く先に何があるのかが『楽しみ』になってきた。

第10話 水を纏う『最強』（後編）（後書き）

虚空「ふう……………」

翔「体が痛い……………」

一夏「……………今回、翔を虐めすぎだろ」

シャルル「でもどうやって戦闘を書いたの？あんなに激しく？」

翔「それか？それは作者が今まで見てきたアニメなんかや戦闘挿入歌からのイメージやそれに……………実際にどう動けばつながりがよくなるかを考えているみたいだしな」

シャルル「へえ〜」

翔「でも気を付けるよ……………夏休みはいる前にもオリジナルをやるって……………曲イメージでは『閉ざされた世界』らしいから……………」

一同「……………えっ？」

第11話 胎動と噂と過去に……

深夜

IS学園寄宿寮

Side ラウラ

私は、暗闇の中にいる。

暗い、暗い闇……それは、すべてを無くさせるもの……

いつのからそうであったのかはすでに覚えてはいない。

生まれたときからすでに闇の暗さを『知っている』。。

大半の『人間』は生まれてからまもなく光を見るといっが……
私は違う。

闇の中で生まれ、そして育はぐまれた。

その事は、今も変わる事はない。

光のない部屋で私は闇を纏い続ける。

「遺伝子強化試験体

C 0037……識別名、ラウラ・ボーデヴィット」

呟いたそれが、私の名である事はすでに知っている……そしてその名に意味が無い事も……

だが、あの人……教官に……織村千冬に呼ばれる時だけは

特別な響きがある。

(あの人の存在こそ……私の『存在理由』)

出会い、……その強さを目の当たりにした時からその強さに『心』を恐怖、歓喜、そして……真の強者に巡り合えた感動に震えさせた。

体が熱くなった……だから願った。

……なりたいと

感じていた空っぽな場所が急速に埋まって……暗やみの中の唯一の光となった。

師であり、圧倒的な力を示す存在。

その完全無比の存在である師が……『完全』で無くなる唯一の存在……それを私は……

織村一夏……教官に汚点だけを与える者……排除する……
……奴に荷担するもの……『全て』を壊して……

どす黒い闇を抱きながら私は、まぶたを閉じた。

冷たき闇へとその身を委ねる……

汚れに満ちた女子よ……我は故に待つ……『無』へと返すために……

微かに何かの囁きを聴いて……

Side Out

火曜日

IS学園

1年1組

Side 一夏

「それは本当ですよ!?!」

「ガセじゃないわね!?!」

「もつちろん 産地直通からの情報だよ」

火曜の朝、教室に向かっていた俺達は、廊下まで響いた話し声を聞いた。

「何、話してんだ?」

「さあ?」

「……面倒だ」

男子3人で登校していた俺達は、反応が違えども話がわからないため教室に入った。

「この噂、学園中で持ちきり！月末の学年別トーナメントで優勝したら……」

「おはよう」

「……あっ」「」

俺が声を掛けながら教室に入るとクラスの女子が一斉にこちらを向いた。

な、なんだ、普通に入って声を掛けたんだが……

いつもの反応とのギャップに俺は、驚きつつも首を傾げた。

「？なんかあったのか？」

「……な、何でもないよ！」「」「」

うおっと

俺の問い掛けにまるでユニゾンしたかのように一斉に返事が戻ってきた。

「そっなのか？」

俺は、首を傾げながらセシリアと鈴にも問い掛けた。

「え、ええそっですわ！」

「う、うん。何もなかったわ」

なんだ？

2人は、なぜかよそよそしく答えた。

「あつ、いけない！そろそろクラスに戻んなきゃ」
「そ、そうですね。わたくしも席に」

そのまま、2人はその場を離れていく。

その流れに便乗してなのか、他の女子のグループも同じように自分のクラス、席へと散った。

「なんだっ たんだ？」

「・・・さあ？」

「・・・ん？」

ふと視線を横にずらしたところ、翔が箸を見て何かを気付いたらしい。

「どうした翔？」

「いや・・・何でもない」

「？」

俺は、ますますもって首を傾げるしかなかった。

Side Out

Side 箸

午前中の授業が終わった。

私は、一夏達が昼食のため移動する中、教室に残っていた。

お弁当を作り忘れた、調子が悪い等ではない事は、自分がよくわかっている。

だが・・・私は、一夏達からの誘いを断り、教室に残っているのは表面上何もないように装っているが、心の中ではのたうち回りたい程、頭を抱えていたからだ。

その理由は・・・月末の学年別トーナメントに関する噂である。

・・・なぜ、このような事に・・・あの約束は・・・私と一夏だけの約束だろうに・・・

噂の元になった自分と一夏との約束がどこから漏れたのかはわからないが・・・聞かれなかったと高をくくってたのが悪かったらしい。

「・・・・・・・・」

非常まずい展開となった・・・

自分以外の女子が一夏と付き合う事に激しい抵抗感（もちろん、その前には他の2人と同盟を結び、止めに入るが）が、これではもし自分と付き合いだした時に憧れている『ふたりだけの秘密の関係』ですら一気に学園中に広まってしまっではないか。

・・・この点から見ても彼女は、セシリアや鈴と抱く望みは大差は無いらしい・・・

考えれば考える程、自滅に追い込まれそうなので別の方向に考えをかえた。

とにかく！！ 優勝さえすれば、何も問題はない・・・あの時のようには・・・

考えがあるところまでいった時、意識が思い出さくなくない記憶が掘り起こされた。

「あ、あの時とは違う・・・」

「・・・何がだ？」

「!？」

つい呟いた言葉を聞いた誰かが私に言葉を投げ掛けた。

顔を上げた先には、相変わらず表情がよく見られない翔がいた。

「か、翔。お前・・・いたのか」

「いたも何も今朝、女子達が騒いでた件・・・聞いていた君が、複雑そうに指先を動かしていたから・・・『原因』ではないかと思っただから、理由を聞きにきた」
「『原因』とはな・・・」

こないだも思っただが翔の『勘』の良さは恐ろしいものである。

「・・・だが、それよりも何かあるみたいだな」

翔は、先程の漏れ出た言葉だけで何かを見たのか静かに問い掛けて

きた。

「……………ああ」

翔は、人の話を面白がったり秘密をバラすような人間ではない……
・短い期間でそう感じた私は、翔にはよく一夏の件を含めて相談に
のってもらおうようになっていた。

恋愛も然り、格闘戦の動き然り、さらには自分があまり使わない射
撃兵装の助言等々、IS関連も……………『一夏の周りが専用機持
ち』ばかりなので遅れをとらぬべく話をしていた。

今回も同じように、隠し事が難しかったため素直に口を開いてしま
った。

回想

私が一夏と今回と同じように約束した事は前にも……………小学4
年生の時の剣道の全国大会「小学生の部」の時であった。

私は、実家が剣術道場でもあった……………そのキャリアの差から
優勝を有力視され、間違いないものとされていた……………だが、
大会当日に引越し、参加不能による不戦敗となった。

理由は……………私の姉でありISの世に生み出した篠ノ乃束が……
……………ISを世に発表したからだ。

発表後の1ヶ月後、ISが活躍した『白騎士事件』により兵器とし
ての有効性を示したが……………発表段階でもその圧倒的な性能から
既に兵器への転用が危ぶまれていた。

そのため、東本人を含む親族の保護という名目で政府主導で転居を余儀なくされた。

「……その後も重要人物保護プログラムによって西へ東へ引越しを繰り返した……。そして両親とは別々の暮らしを余儀なくされ、元凶である東は行方をくらすという顛末となった。

さらに私は……。実の妹ということで執拗なまでの監視と聴取を幾度もなくされ、心も体もともに参っていた。

そんな苦しみの中で剣道だけは続けた。

それが唯一、離れて尚、想い続けた一夏との繋がりに思った。

いや……。思っていた。

「……。だが、全国大会での優勝は……。私に知らしめた……。醜い自分を」

翔に少しずつ話ながら私と翔は、一夏達と来られた時の待ち合わせしている屋上ではない、少し遠いが部活練の屋上に来た。

ここから見上げる空は、少しだけ心を落ち着かせる。

「……。わざわざそんな言葉を選ぶと言う事は……。感じてしまったのか」

「……。あ、ああ」

翔も体験した事があるのか、静かな眼で呟く。

呟いた言葉に私は少しだけ落ち着きを覚えながら返事を返した。

全国大会で参加した理由自体、単純明快……『ただの憂さ晴らし』でしかなかったからだ。

……誰かを叩きのめしたい……そう思っていたからだ。

けれど、太刀筋は己の心の醜い様を明確に映し出した。

己に……純粋な思いで戦い負かした対戦相手が涙を流した姿を……

「……その時から、私は……『強さ』の意味を……

己に強く問い掛け続けている」

「……」

翔は最後まで黙って聞いていてくれた。

翔も何らかの形でそれを持っているのだろう。

なら問い掛けたい……翔の答えを……

「翔……私は……強さを見謝らず……己自身に……

勝つことは出来るだろうか……」

「……何故、俺に問い掛ける？……一夏ではなく」

一夏に何故、問い掛けないと翔は私に口をした。

その理由は……

「一夏……では、優しすぎる……」

一夏では……私を……『女』にしてしまう……だから……

女である私を見て欲しい……だが、武人としての私は……一夏に甘えることを許させない。

私の言葉に何かを感じたのか、翔は眼を瞑り口を開く。

「……一言だけ、言う。……剣は、剣だ……その先は……一夏といたら何かが見える」
「一夏に？……何故？」

何故、一夏の名を出す……

私が再び口を開こうとしたら翔は……

「……今は、それだけだ。答えはすぐ『傍』にある」
「あつ……」

それだけ伝えたと翔は去ってしまった。

それは……自分で出すべき事ものだと言っているではないか？

私は、見送りながら思ってしまう。

私は……強さを……どうすればいいのだ……
……一夏

与えられたヒントから考えてゆき……自然と一夏の名を呟く……

・・・答えを出すために・・・

そして、今度こそ強さの意味を見誤らないために・・・

Side Out

Side シャルル

えつと・・・どうしようかな・・・

僕は、一夏達と行く前にのほん達に掴まっていた。
掴まっただと言うよりも・・・相談したい事があると云われて引き留められたのだ。

今朝の女子達の話し合いについて・・・

とは言え、僕だけでは荷が重すぎる。

女の子だけど・・・今は男の子だから・・・どうしよう・・・

僕は、頭が頭を悩ましていると・・・救いが来た。

「シャルル？」

「あっ、カケル。ちょうどよかった」

「？何かあったのか？」

「実は・・・」

「？」

side out

食堂

Side 翔

俺とシャルル、そして本音、本音といつも本音と一緒にいる相川静香さんと谷本癒子さんを誘って俺は、昼食をとっている。

「……………それが今回の噂の発生源なのか」

「……………うん」

俺は、食事を取りながらも『噂』の発信源である3人娘から真実を聞いた。

……………どうやら篤さんが前に一夏の部屋の前で『優勝したら自分と付き合って（もちろん恋人としてだろう）もらう』と宣言したのが発端らしい。

それを聞いた3人娘達が皆に『篠ノ乃さんが勝負かけた』と伝えようとしたところ、本音が変に伝えてしまったのである。

その変な伝達と共に学園中に広がった噂は伝言ゲームのように『やよこしい尾鱈』が付け加えられてさらに広がった。

こうして今の学園中で持ちきりの噂、『トーナメントの優勝者には3人の男子のうち1人との交際権を与える』が広がったのである。（多分、俺達の方はさらに途中で付け加わったのであろう）

女子高ならではの事情に俺は、軽く頭を抱えなくなった。

「あははは……………非常にまずい事をやっちゃったかな？」

癒子がそう口にする。

「……いや、君のせいじゃない。……原因は……」

俺が視線の先を変えると全員がこの騒動の『原因』、本音を見る。

「えへへ……なにかな？」

「何か……じゃないだろ」

俺は、そのいつもの『のほほん』とした態度が今回ばかりは許せず
に本音の両頬を掴んで無慈悲に引っ張った。

「いたら、いたらいい！！放してええ……」

あまりの痛みに本音は悲鳴を上げるが、それでも止めるつもりはな
い。

まわりも自業自得だと思っているのか、止めに入らないでくれた。

「……とにかく、やってしまった事は仕方がないがないな
……面倒だが」

一分間、引っ張り続けて流石に泣きそうになってきたため、俺は手
を離れた。

「ううう……えええん……かけるんがいじめた……」

本音が赤く腫れた両頬を抑えながら泣き出す寸前の声を出す。

と・・・・・・・・

「・・・・・・・・自業自得だよ、本音」

「うううううううううう」

友の静香の言葉に慰めの言葉を貰い、さらに泣きそうな声を漏らす。

「優勝した子がか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・シャルル？」

シャルルがそう呟いて数瞬後、続けて『爆弾』を投下してしまった。

・・・・・・・・

「ねえ、それって僕が優勝してもそれって有効なのかな？」

「えっ？」「」

「はにゃ？」

「・・・・・・・・はっ？」

シャルルの一言に俺達は、思わず間抜けな声を出してしまう。

言っている意味は理解しているものの、何故、今切り出したが分からなかった。

「？何かおかしかった？」

シャルルが無邪気そうな笑みを浮かべて、首を傾げた。

いや、言葉的には間違っていない・・・・・・・・・・がシャルル、今

の立場わかってるよな？

「えと……た、多分だと思うけど……」

「えっええとデュノア君って……」

シャルルの発言を俺以外は、やはり『別の意味』で捉えてしまった。

「Bえ……」

「そうだな。俺『達』、男子が優勝した場合はどうする？」

最後まで言われる前に俺は、シャルルの名譽ノーマルさを証明するために言葉をさえぎり、話題を切り替えた。

その言葉にシャルルは、自分の発言が『今の自分』の格好では方向性として不味かった事に気が付いたらしく、口を押さえる仕草をとった。

「えっ、それは……」

「その……」

静香と癒子が眼を泳がした。

反応からして、どうやら俺達、男子『3人』に対しての優勝した場合は考えていなかったらしい。

「……死に物狂いで襲ってくる『敵』に対し……こっちは報酬も無しか……」

その反応を見た俺は、少しだけ呆れながらもつい呟いてしまった。

噂が流れた時点で女子達は、実際の戦場いくばくのごとく、優勝と言う絶対的な目標へと走りだしている。

一方、こっちが優勝しても何もないと言うのは少しばかり気乗りしない……と言っより、そんな『死に物狂いに襲ってくる中』に無闇やたらと飛び込みたくないからだ。

「その……櫻井君、ごめん……」
「すでに決まったことだ……気にしないでくれ」

静香が俺に謝りを入れてくるが俺は、やんわりと受けとめてやる。

今さらだが……IS学園は『女子校』であり、男子はイレギュラーだ。

そう考えれば、……『男子』のためのイベントなどないに等しい事が改めてわかる……

「……あつ」
「どうした？」

と癒子が何かを思い出したかのように声を盛らした。

「……実は、上級生からも……」
「？」

首を傾げながらも俺は、話の続きを聞いた。

何でも『学年が違う優勝者でも有効なのか？』等、上級生からも優

勝した場合の事を聞いてきたらしい。

さらには……

「あと、優勝したら織村君と同室になれる権限を付け加えたらって
いう人もいたよ」

「……どんな修羅場を望んでんだ……その人」

……同室まで権利として出したら全学年の女子はもちろんの
事、第達のバトルがさらに過熱して収拾が着かなくなってしまっ
てはな
いか。

条件を出した人物は、それを見たいのだろうか俺は思ってしま
い、
つい呟いてしまった。

「あはは……まあ、その人も楽しんでいるんじゃないかな？」

「えっ？何でそんな事がわかるの？」

その言葉にシャルルは問い掛けた。

すると問い掛けを受けた癒子が口を開いた。

「だってその人、2年生なんだけど……私達が話している時
に笑いながら話しかけてきて、こうしたほうが面白いよってさっき
の意見だしてくれたんだもん」

……ん？2年生で笑みを浮かべながら……

俺は、その2年生と聞いた時点で何かが引っ掛かりだす。

何故なら頭の片隅で……笑みを浮かべ続ける『ある人物』の姿がちらついているからだ。

そんな俺を余所にシャルルは、続けて問い掛けた。

「へえ、どんな人だったの？」

「ええっと……ショートカットの水色に扇子をしていて……うっとりしちゃいそうな人だったなあ……」

最後の方は、何故か夢つつつのように問いかけに応じてくれた。

「……どんな人なんだろうね？」

その返答にシャルルは、首を傾げながらも会ってみたいなと言った口調だ。

「……」

「カケル？」

シャルルから呼ぶ声が聞こえるが、今の俺は頭を抱えたい気分に陥っていた。

何故なら……特徴を聞いた瞬間、頭の片隅で思い浮かんだ姿が鮮明となり、俺の脳裏に現われたからだ。

……やっぱりあの人か……だが、何で……

俺は、少し呆れながらも同時に考え出す……わざわざ賞品としな

くとも『生徒会長権限』で自身が同室となる事ぐらい簡単なはず・・・
何故、優勝者に・・・

「……………」

「えつと・・・カケル？」

「えつ？」

「どうしたの？そんな難しい顔をして？」

シャルルから再度の呼び掛けで俺は、思考を止め、顔を上げた。

どうやら楯無の意図を考えている最中に、深く考えすぎ、顔にも若干出たらしい。

「……………何でもない。ただ……………」

「ただ？」

「……………そんな条件を出す人物は、どんな人だろうかと考えていた」

俺は、咄嗟にそう答えてしまった。

その条件を出した人物を知っているせいも合ったかもしれないが、『シャルルの件でもお世話になった』と言って踏み込まれたら不味い事になりかねなかったからだ。

……………だが、その口にした言葉は少し迂闊だった。

何故なら……………

「ふう〜ん、カケルって歳上が好みなんだ」

その言葉を投げ掛けてくるシャルルは、表情こそ笑顔なもの・・・
・声に僅かな刺を含ませている。

「いいや・・・そこまで言ってない」

「・・・どうだか」

俺は、否定をするもののみすます、怒ってらせてしまった。

《M S・シャルロットを怒らせてしまいましたね、マスター

ポケットの中にあるアストレイアが少し楽しんでいる様な言語使い
で俺に念話を流してきた。

アストレイアの念話に少々、イラつきを覚えながらも俺は念話で応
じた。

《・・・仕方ないだろ。今、楯無さんとの関係を教えたらまた不
安にさせるかもしれない・・・

《・・・では、受け止めてあげないのですか？彼女の思いを

楯無との関係が拗れる事を怖れているのではない。

一応、シャルルの思いに気づいているから俺に深入りされたくない
のだ。

《・・・気付いているが俺は、『彼女の何でもない』・・・そ
れに

《それに？

不自然に言葉を切った俺に対してアストレイアが問う。

「……それに俺と長く共にいれば……『彼女』を不幸にする……」

「……マスター」

念話に載せて語った俺は、自身でも気付かない程、思い詰めた感情に襲われた。

そしてそう思い詰めた感情になる理由も……『生まれながら』に知っていた。

「だから、この状況を利用してもらうさ」

「……そうか、すまない」

「カケル？」

「櫻井君？」

俺は、念話を一方的に切ると言葉を発した。

「企業にいる間、どうしても歳上の女性と会う機会が多かったからな……自然に異性への興味等一切無にどんな人物かと考えていた」

「えっとつまり……」

俺の言葉に癒子が首を傾げた瞬間、俺は続け様に言葉を発する。

「つまり、俺は異性に対しては関心は持っていない。ただ評価するのは人柄だけだ……年代であるうとも」

「えっ！」

「ウツソオ!!!!!!」

「……………えっ？」

俺の言葉に彼女達は悲鳴を上げる。

Side Out

Side シャルル

僕は、カケルの言葉に驚いていた。

驚いたと自分で表すのは不適切だと思う部分もあったが……………僕にとつては秘め始めた思いを砕かれたような音を響かせていたからだ。

「……………可笑しい事でもない……………だろ？」

「で、でも……………さあ……………」

カケルの意味を見せない対応に静香が食い下がるが……………

「……………剣を振るう人、たとえ罪を生みしものであるとすべ
てを『噛み締める』」

「えっ？」

「へっ？」

カケルは、何かを小さく呟く。

それに対して僕らは聞き取れずに声を漏らすだけであった。

「……………ただ何故、この場にいるのかを常に問い掛けてくれ」
「えっ、あ。カ、カケル!!!？」

僕が呼び止める間もなくカケルは、空になったトレイを持って立ち去ってしまった。

……………カケル

その後ろ姿を黙って見送ってしまった僕は、胸の奥底が締め付けられてしまった。

……………どうしたいの、カケル・僕はわからないよ・君の心が…………

こんなにも苦しい気持ちがわからないまま僕は顔を伏せてしまう。

答えは見えないまま…………

S i d e O u t

S i d e 翔

シャルル達と別れた俺は、2年生の教室階に来ていた。

確か、あの人は……………

「えい」

ブシュリ

捜そうとした途端、誰かに扇子で頬を押された。

「……楯無さん、何をしてるんですか？」

「あは。いやあ、わざわざ会いに来てくれた可愛い後輩を見つけたからね。つい可愛がっちゃった」

……これでリンディさんと会わせたら絶対、息が合うな……

楯無の雰囲気を変えてそう感じた俺は、本題を忘れないようにしながらも片隅でそう考えていた。

「用件なのですが……」

「うん。ここじゃ何だから……」

Side Out

IS学園

屋上

Side 楯無

彼が尋ねてくる事は予測していたが、二日ぐらい後かと思っていた。

こつも早いとは、仕事熱心だね……

傍らに並び立つ彼を見ながら私はそう思った。

「……話ですが……何故、『あんな条件』を？」

彼は、表情を変えないまま口調が面倒だと言いたげな感じだ。

「あら、楽しみに条件なんて必要？」

「そうではありませんが、こんな危ない橋を渡る必要があるのですか？」

「……渡る必要があるんだよ。前月の事件で」

私は、理由を口にするに翔は何か納得したように口元を引き締めた。

「前月の……無人IS機の襲撃」

「そう」

翔がこのIS学園に転入するつい1ヶ月近く前の事だ。

5月に行われる1年生最初の行事、クラス代表戦において1組クラス代表 織村一夏と2組クラス代表 凰 鈴音との対戦中、所属不明のIS機の襲撃を受けたのだ。

最終的に鈴音の援護を受けた一夏が所属不明のIS機を撃破した事で危機的な状況を脱した……がその後の調査で驚くべき事がわかったのだ。

その襲撃してきたISは、アラスカ条約上で登録がない『コア』を持っていただけでなく……『無人機』であったのだ。

ISの無人化、それがもたらす効果は、凄まじいものだ。

第1に無人機なら操作ミスや通常兵器でISを倒せる有一の瞬間である絶対防御が発動しないエネルギー切れ時に扱う人間が100%死ぬ事がない。

第2に翔が所有するデバイスのようなAIを搭載でき、戦闘を行えるのであればIS学園のような育成へ回す資金を大幅に削減できる、それに『搭乗者の安全』を考えなくていいため、今より無茶苦茶な設計が出来るようになるだろう。

それらの利点から各国がこぞって開発を進めている事ではあるが・・・

『ISモドキ』では成功しつつあるものの、IS自体での開発は未だに開発段階を脱していない。

つまり、有り得ない事が起こったのだ。

学園側は、この自体に対してアスカ条約下で設立された『委員会』と呼ばれるコア管理委員会にたいしては報告を行い、各国や一般生徒に対しては『IS学園近くの研究所で開発されていたISが暴走して乱入した』と言う情報を流したのである。

だが、織村千冬や楯無のような学園の裏に精通するもの達はこの事件の裏にある種のフラグを感じていた。

それは・・・

「やはり、その時の狙いが」

生徒会に引き入れた時点で彼にはこの事件の事を既に話しているため、すぐに繋がってくれる。

「うん、『織村一夏』君を狙った可能性が高いから今回の処置を取ったんだ」

一夏を狙う理由、それは分からないものの過去に攫われた経歴を持つ彼をISごと攫いにきた・・・そう考えればつじつまがあいすぎる。(さらに同時刻に全アリーナにて試合が行われていた最中で一夏達のところ『だけ』をねらって落下してきた事も理由である)

だから・・・

「でね、私が動いてもいいんだけど・・・そうなっちゃうと後々『面倒』になるから」

「つまり、自身は・・・『切り札』として置きたい」

「うん。そう、ちなみに優勝者に同室になれるように取り計らったのは、少しでも実力者を彼のそばに置いて彼を鍛えてあげたいからねえ」

そうまだまだ『ひよっ子』である彼を鍛えるため、翔等の実力者を近くに置いといたほうが、訓練面や技術面においていい刺激となる。(そう言った意味では彼に恋心を抱く代表候補の2人もいいかもしれないが、彼を思いすぎていてこちらが思った以上に踏み込んでくれないからだ)

「それもご自身が動けないからですか？」

「うん、それもあるんだけど・・・君から見ると私と彼とはどう思う？」

私は、翔に呟くように問い掛けた。

すると翔は、目元を引き締めて口を開いた。

「……差が開きすぎてます。……本人も徐々に力を付けはじめていますが、早く見て2年に上がってようやく『今』のあなたと互角ぐらいかと」

ふむふむ、やっぱり冷静に見極めているね

「さらに言えば、今の一夏ではラウラ……ラウラ・ボーデヴィツヒには勝てないと思います」

「ボーデヴィツヒ……ああ、あのドイツのね？」

「はい」

私が頷いた時、何故か翔の口元が苦く歪んだ。

「……」

「彼女とは不仲だって聞いてるけど……なにかあったの？」

翔は、転入初日からラウラと何度かぶつかっているが、本音から詳しく聞くとラウラが八つ当たりのように『本当』に暴走するのを押さえているらしい。

何故そうしているのかはわからないが……翔のことだ、理由があるのだろう。

「いいえ……嫌っているだ……」

《マスターは、昔の自分のように、ただ無作為に力を振るう行為が許せないだけです》

珍しくはつきりしない翔に代わり、翔のポケットから声が響く。

「……アストレイア」

翔がポケットからデバイス アストレイアを取り出して自らの相棒を見る。

「昔の翔君？」

《はい、それに……》

「……昔の……罪を行ってしまった『姉』にも似ているんですよ……容姿もたった一つのために戦うところも。だから、止めたくなるんです他人を傷付けることを……」

そう最後の方を引き継いで翔が咳きを漏らした。

その顔は、より複雑さを滲みだしている。

「……色々あるみたいだね」

「有るから……歩き続けなければならない……んです」

私がそんな翔の様子にそう投げ掛けると彼は、いつもの表情を見せないままこの場から立ち去った。

彼の後ろ姿を見送りながらも私は軽く息をついた。

はあ……今年の新入生達は結構重たいよ……

そう思いながら胸元のリボンを結び目を解いてワイシャツ下に隠れていた白い片翼をイメージしたネックレスを取り出してじっと見つめた。

……特に翔君は『貴男』に似ている……よ

既に亡き者との……『絆』であるそれを見ながら私は……
翔が完全に立ち去ってから自然と近くて遠い『過去』に思いを巡
らせてしまう。

Side Out

Side 翔

……

楯無は、面白がって人の話を広めはしない……だから信用で
きる。

少しだけ嫌な記憶だけが蘇ったが、楯無のような人物に話せてよか
ったと思う部分もある。

同じように『裏』を持つものとして……

そう思いながらも俺は教室へと向かう為、廊下を進んでいると……

「……など」

「……そこまですておけよ、小娘」

「……ッ！」

よく聞こえなかったが、誰かが話し合っている。

近づいて物陰で見るとラウラと千冬先生が話していた。

やがて、話が破綻したらしくラウラは、沈黙したまま足早で去っていった。

「……………異常性癖は感心しないぞ」

「……………失礼いたしました」

俺に気付いていたらしく、千冬先生は睨み付けてきた。

それに対して、俺は謝りを入れる。

「……………おまえ達もだ」

「……………は、はい」

俺が謝りを入れた瞬間、千冬先生は別の方向をにらむ。

すると……………そこから一夏と箒が出てきた。

飲み物でも買いに来ていたのだろうか、彼らの手にはペットボトルが合った。

「少しでも時間があるなら、頭を使え……………このままじゃ、お前らは月末のトーナメントで初戦敗退だぞ」

「で、ですがちふ……………織村先生、アヤツの言い方は……………」

「いいって……………箒」

「だが……………」

一夏達は、最初から聞いていたらしく何か言いたげな雰囲気になっ

た。

「……………アイツに言わせてんのは俺のせいなんだ……………」

「……………一夏」

「……………なら、勤勉さを忘れずに勝ってみせろよ」

「……………はい」

そついうと一夏達は去って、俺と千冬先生だけが残された。

完全にいなくなったのを確認した俺は、口を開いた。

「……………ラウラは、何と？」

「気にするな、ただの『ガキの戯れ言』だ」

一言で切り捨てる千冬先生の顔は、つまらな過ぎて呆れている。

「……………そうですか」

それに対して俺は、それだけ返して去ろうとした……………だが

「貴様は、このままでいるつもりか？」

「何の事ですか？」

「……………とぼけるな」

俺は、とぼけようとしたが、千冬先生は逃がさなかった。

「櫻井、お前は……………ラウラを圧倒する……………『牙』があるのだろ？」

千冬先生の眼はなにか腹黒さを宿して、俺に口を開く。

「そしてお前の『牙』は向ける気がない」

「何が言いたいんです?」

俺は、千冬先生が気付いている点をわかっているがらわざわざ聞くが……

「隠すのはいいが……もう、ラウラに『牙』は隠してはおけない」

「……はあ?」

「見誤るなよ。『牙』の出どころを」

千冬先生は、伝えたい事を伝えたのか、さっさと居なくなってしまった。

この時……ラウラの様子をもっと聞いていれば……千冬先生が言うように『牙』は使わずに済んだのかもしれない。

だが……『牙』は向かれました、変えるため……涙を飲み干すために……

第 12話 黒き暴虐

放課後

第3アリーナ

Side 鈴

ISスーツに着替えた私は、気合いを入れていた。

何故なら月末の学年別トーナメントに勝てば、一夏との交際権が絶対的なものとして手に入るからだ。

「……今は朴念仁であっても交際していけばチャンスはいくらでもある。」

それに権利を勝ち取れば……

「あら、お早いですね」

自然と『優勝』する事を考えていたら誰かに話し掛けられた。

それに応じるように振り返った先には……

「セシリア」

同じようにISスーツを着たセシリアがいた。

「ここに居るといふことは……」

「奇遇ね。あたしはこれから学年別トーナメントに向けて特訓すん

のよ
「よ」

「オホホホ、奇遇ですわね。わたくしも同じですわ
そうお互いに理由を返したところで……………」

「むウ」

「……………むむむ」

私達の間で火花が散る。

どうやら狙いは優勝らしい。

経緯はよく知らないが同じ男を好きになった間柄だ。

……………友であり、恋のライバルであろうとも一夏を譲らないた
めに負けられないのだ。

とその前に……………

私は、以前からケリを付けなければならぬ事を思い出して口を開
いた。

「ならちようどいい機会だわ。新入り（ニューマーカー）の腕前に
面目奪われっぱなしだけどアンタとはこないだの訓練の件も含めて、
どっちが上かはっきりさせるのも悪くないわね」

そう考えるのも恋のライバルとして、そして同じ世代の代表候補生
として相手の実力を見たい部分もあるからである。

だから……………この機会を利用する手はない。

するとセシリアも同じ事を考えていたのだろうか薄く微笑みながら口を開いた。

「あら、めずらしく意見が一致しますたわね。いいでしょう、どちらの方がより強く。そして優雅であるかをこの場ではっきりさせましょうではありませんか」

そっちもその気のような……なら

「なら、話は早いや」

お互いにISを展開、さらにメイン武装を呼び出し、構えて対峙した。

差し引きなしの戦いが今まさに始まるうとしていた。

「では……」

セシリアが呟きながらもそのメイン武装であるレーザーライフルの引き金を引こうとした時である。

突如、ISからセシリアからではないロックオン警告、さらに発砲警告が鳴り響き、直後、私達に向かって超音速の弾丸が飛来する。

「！？」

そこは、代表候補生として訓練で鍛えられた反応と反射神経で緊急回避を実施、回避のあと、私らは、揃って弾丸を放った人物を見た。

その先には、銀髪の絶壁こと漆黒のISをまとったラウラがいた。

両背部から突き出したアタッチメントユニット、さらに先程放ってきたレールカノンが色濃い機体……名は……

『機体名『シユヴァルツェア・レーゲン（黒い雨）』、中距離戦闘型。登録ユーザー名……』

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「……どういつつもり？いきなりぶつ放すなんて喧嘩売るのも大概にしなさいよ」

元々、気に喰わなかった相手を見た私は荒々しい口を開いた。

口は荒々しいものではあるが、冷えている頭は両手に双天牙月を呼び出すのと同時に龍砲をいつでも起動できるように命を下している。

セシリアの方もハイパーセンサーから左目が火器管制に移行したのを確認した。

そんな私らの様子を既にハイパーセンサーを通じて分かっているであろうラウラは、それでも冷笑を浮かべたまま口を開いた。

「……甲龍にティアーズか……データ以前の問題だな」

あいもかわらない、いきなりの挑発に頭の片隅が熱をおび始める。

「どづいつ意味でいらして？」

セシリアも表面上は冷静さを保っているが右手の人差し指がレーザーライフルの引き金に掛かっている。

「はっ……言葉のとおりだ。2人がかりでフランスの量産機ロットルに負ける力量しか持たぬ『豚』が専用機持ちなど……機体性能以前にそれほど人選に困っているらしいなお前達の『お国』は」

「うんうん……わかった。アンタの言いたいことはよくわかった……スクラップがお望みなわけね」

私は、口調を抑えていたがすでに龍砲の最終安全装置を外セーフティしている。ボコツボコツにしてやるわ!!

「いいえ、鈴さん。素敵な『風穴』を開けて差し上げるのがよろしくてよ」

そう言葉をよこしながら自身も最終安全装置を解除したセシリアがレーザーライフルを向ける。

セシリアも同じくキレているようだ。

自分の祖国を馬鹿にされただけでは、代表候補となり国の最新鋭ISの試験運用者となるまで並々ならない努力を重ねてきた。

それをこんな冷徹野郎に否定されるのは黙っていられない。

それに……私らには一夏を殴ったと言う事でも腹ただしく思っている。

だから……ここで叩きのめす!

「わたしがやるわ、ここで!」

「いいえ、私が……」

「はっ、2人がかりで来たらどうだ?所詮、くだらん種馬を取り合うような輩にこの私に傷など負わすことは出来ないのだからな」

！！！！あんだ…………龍の逆鱗を味わえ、業火とともに！！

怒り狂う龍の如く、私は振り切った。

次の瞬間には、セシリアと同時に得物を繰り出していた。

Side Out

第3アリーナ隣接区画

IS整備室

Side 翔

俺は、第3アリーナに隣接されたIS整備室に足を運んでいた。

各アリーナに隣接したこの区画は、ISの格納庫と同じようにISの整備の為の機材やISバトル等において破損、故障が生じた場合の補修、修理が行えるようになっていた。

またここでは……2年生次から学科として登場するISの整備士育成を目的にした整備学科の学生、同じようにISの技術者を育成を目的にした男女共学制の大学の学生のための設備でもある。

さらに言えば、専用機の定期点検や大ダメージを負った際に国家や企業からの整備チームが時折来るのがこの区画である。

ツナギとIS学園の校証がペイントされたヘルメットを身に纏った男女が割り当てられたISの整備、あるいは器材を取りに行くべく動き回っている。

また、自身が扱うISの整備状態の確認のためか俺と同じようにISスーツを着た女子の姿もちらほら見える。

俺は、その中を縫うように目的の場所に向かっていると……

「あつ、櫻井君」

声をかけられたのでそちらを向くと……

「影島さん」

2年生、整備学科に在学中の浅茶色の髪の子、かけしまあやか影島彩花が顔に油の筋を付けてそこに居た。

「今日も勉強？」

彩花は、油塗れであろうとも笑顔で俺に笑いかけてきた。

彼女とは、何度か整備区画で会っており、整備の事やISの事で話しているから仲が良い。

「いえ。今日は、スターダストの修理状況確かめに」

「あつ、そつか。そう言えば君のところの整備チームが来ていたね」

「ええ、本体だけなら呼ばなくてよかったです、武装の方もやっってしまった」

「ふう〜ん。あつ、でも会長相手にあれ位で済んだらそれはそれですごいと思うよ？1年の後半から無敗のあの会長に」

彩花には、楯無との対決後、すぐスターダストを整備区画に持って行った際、遭遇。

隠し切れなかったので損傷理由を吐いてしまったのである。

「……確かにそうですね」

楯無との戦闘を思い返した途端、少しだけ背筋が萎縮するのを感じつつもそう答えた。

出来るならもう一度、戦ってみたいと思う部分もあるが……その時も多分、死にかけるだろうなと俺は、思った。

「まあ、1年生としたら保ったほうだと思っよ……うん」

俺が考えた事が顔に出てしまったのだろう、何故か彩花から慰められた。

「……はい」

「うん。よろしつと、じゃあ行ってあげな。『スターダスト彼』と『あの娘』のところ」

頑張つてねと励まされながら俺は彩花に見送られ、目的のところへ向かった。

少し歩くとISスターダストが収められた待機スペースにたどり着く。

スターダストは、各部の装甲を解放した状態でケーブルがつながれている。

その目の前のコンソールに張り付いている白衣を着た女子が何かを打ち込んでいた。

「エリー」

「あつ、カケルさん。授業終わったんですね」

俺が声を掛けるとその女子は、ツインテールにしたサクラ色の髪型を揺らして、笑みを向けながらこちらに向き返った。

「ああ。そっちはどうだ？」

「いやあ、なかなかおもしろい具合になってますよ。この子も」

そう笑いながら俺の仕事仲間で整備チームの一員であり、同い年の水城エリス（みずしろエリス）、愛称エリーは、スターダストを見た。

「装甲の傷は研磨して消しました。あとスラスタ類なんかも内部機構をちよちよと弄って出力UP。さらにOSもバージョンアップと最適化を済まして元気百倍、月光仮面ですよ！」

「……最後の方が何故かいつの時代の人間だ？と疑ってしまいそんな表現だったが、スターダストの調子は良くなったらしい。」

「ただ、ミーティアは根本的に修理をしなきゃいけないので、一旦インストールを解除。その上で本社に持って帰ります。二日程で修理は終わると思うんですが……その間、拳1つで何とかしてくださいね」

「ああ」

続く言葉に自分がやってしまった事とは言え、メインの武装が使えなくなるのには頭を痛めてしまった。

何故なら、冗談にも近いと願っていたが、もしこの二日間の間で拳1つで模擬戦をやれと言われたら一夏じゃないが、それは素敵な『砲弾の嵐』に見舞われるだろうとこの時点で容易に考え付いていたからだ。

「フフフン、でも翔さんがこんなに無茶をやるのは珍しいです。やっぱり、レイアちゃんからの噂どおりLOVEですかねえ」
「ハアツ？」

俺は、エリーの言葉に眼を丸くした。

レイアとは、エリーがアストレイアにつけた愛称であるが、今の俺には言葉の内容にしか目を向けていない。

「ちょっと待て、噂……だと？」
「はうい！言ってしまいました！！」

しまったと言わんばかりにエリーは、驚いた顔をした。

その様子に俺は、原因が大体読めた。

少しばかり、『犯人への怒り』を覚えながらも片耳を叩く仕草をとった。

するとエリーの方もわかったと言わんばかりにうなづいて、『俺達だけ』が使える会話方式を変えた。

《アストレイアからは、どこまで聞いた？》

『念話』を流しながら恐らくシャルルの件全部だろうと考えて聞く
と……

《えっとですね、『報告会』の時に全部……です》

《……あの野郎》

この場にいない相棒に殺意と言つものなのか並々ならぬ怒りの感情を抱く。

しかも『報告会』時となると最高責任者の方まで流れてしまっているだろう。

《他には？》

《え、えっと……》

俺は、イラつきを抱きながらも余罪を吐かせるように睨み付けた。

その睨みにまるでへビに睨まれたかのようになったエリーは、泳がせる。
泳がせる。

その眼を泳がせた仕草に俺は、嫌な予感が頭の中を過る。

まさか……

《まさか……エリー、お前》

《あつ、いやあくレイアちゃんから動画ファイルも送られてきちゃいましたからね、『つい本気』を出して訓練学校時代の皆にもばらまいちゃいました》

《……！

俺は、そこまで聞いてから声が漏れぬよう、エリーの口を抑えつけながら頭にアイアンクローを見舞った。

アイアンクローによる頭部圧迫の痛さのあまりか、エリーは声を出さずに暴れるが、止めてやらない。

《い、イツイタイイ！？はな、離してください翔さん！！頭に亀裂入って私の脳細胞死にまくりですううう！！！！

《知るか。罪を数えながら墮ちろ

《な、なんですかその痴女を扱うような言い方は！

《変人であるのは変わらないだろ？

《グズツン、うええええん。翔さんが虐める

《虐めているわけではない…お前が悪いんだ。それと嘔泣きはやめろ

不毛なやり取りだなと俺は、思いながらアイアンクローを加える指の力は最後まで抜かなかった。

彼女とは、『向こうの世界』での短期訓練学校からの付き合いではある。

出会った当初は、『バカキャラ』を演じていたが、俺が彼女の本質を見抜いたのが友達付き合いの始まりだった。

本質を見抜かれた時には嫌悪感を抱かれたがある事件を境に仲良くなかった。

ちなみに彼女は性格的にはチャランポランだが……頭脳は恐ろしい。

何故なら……以前、数人の男子にからかわれた事を腹いせに笑いながら訓練学校の共用サーバーを介して個人端末にクラッキングを仕掛け、その男子達を『社会的』に抹殺しかけたのだ。

いやあ、あんな紙屑当然のセキュア（セキュリティ）を突破してもエッチイーなやつが見つかなかつたら偽造しようかなあって思ったんですよねえ

事件後にそう語る彼女は、そこから止まる事を知らずに、最後の学期末で実技を除いた全筆記科目で首位を奪取したから伝説に近い存在になった。

そんな伝説に近い存在が父さんも含めた『潜入部隊』に居る理由も歳だけでなく、優秀だったからだ。

《……とにかくシャルルをこちら側に引き込むなよ

アイアンクロウを解いた俺は、念話を流しながら既に決定を下した事を出す。

「ええっ、いつ秘密がもれるか分かりませんかよ？」

「構わない。……『例』の件はどうなった？」

俺は、エリーや潜入部隊に出回っているシャルルの件をややこしくするなと口にしつつもシャルルの件が判明した時点で『偶発的』に開始されたある件について聞いた。

ある件とは……

「その件ですか？……その件でしたらいつでも。それに『ダミー会社』やこちら側の味方で『アレ』の入手を始めています」

「そうか……派手にやりすぎるなよ？傘下に入れたら時のデータの入手が厳しい」

「わかってますよ。いやあ〜今からあの娘を自分の事情に巻き込んだ野郎の顔が歪むのが見えてくるようです」

少し黒い笑みをして、エリーはわきわきと手を動かしている。

「……はあ……また変わるが『クラール』と『レン』の方は？」

そんな彼女を少々、引き気味に見ながらも専用機開発が遅れているのも含めて転入が遅くなっている同僚2人の事を聞いた。

機体が無くともIS学園に入学する事はできるが……

「えっ、あっああ。……2人とも『男の子』ですからそれにクライスさんの機体はともかく、私とレンさんのは……『こちら』の技術をカムフラージュしながら製作、それに委員会への登録も有人『ニーズヘッグ』として登録しますから、余計時間が係りすぎているんですよ」

「そうか。なら……2学期からか？」

「はい」

そう『こちら』が入学させようとしている男は翔だけでない。

ただ、それらが遅れている理由自体は開発が遅れているだけではな

い。

むしろ、企業内で『新たに見付かった特異ケースのフリ』をしなくてはならなかった為、参加が遅れている。（シャルルの方は、フランス国内のみだったらしく広がりが遅い）

「……ならいい。訓練の方は？」

「順調です。クライスさんの方は『馬鹿げた機体』だってぼやいてましたよ」

「また、父さんの設計だろ？当たり前だ。あんな『実弾とビームの武器庫』のような機体、アイツにしか使えない」

「ですよねえ」

俺の言葉にエリーが頷いたその時……

「おおい、エリス。そろそろ」

撤収準備をしていた別の整備チームの人がエリーを呼んだ。

「あつ、はいはい！では、翔さん、また」

「ああ」

俺は、軽く手を振ってエリーと破損中の流星が納められているだろうコンテナが共に歩き去るのを姿が見えなくなるまで見送った。

「……………さてと」

姿が見えなくなったところで俺は、コンソールにスターダストのステータスを表示、それを見ながら細かい調整を始めた。

・・・この後、スターダストに無理をさせるとは思わないまま・・・

Side Out

第3アリーナ前

Side 一夏

……どうしたんだ、シャルルの奴？

授業を終え、俺とシャルルは今日の開放アリーナである第3アリーナへと足を運んでいた。

いつもなら箒、セシリア、鈴、翔と言ったメンツと共に歩いているところだが……セシリアと鈴は先にアリーナへ、箒は部活練に顔を出してから合流するらしい、ただ翔だけはどこかに行ってしまったらしく居場所が掴めない。

残った俺とシャルルだけがアリーナに向かっている……が

……なんだ、このシャルルから流れる重たい空気は？

何かあったのか、隣を歩くシャルルからは気落ちした雰囲気の流れ、話し掛けても解決出来そうにないくらい重たい。

何時もなら翔の奴が解消してくれるんだが……今日に限って雲隠れしたからな……よし、なんなら話し掛けてみるか

「その……なんかあったのか？」

「……何でもないよ、一夏」

やはりと言っか、やっぱり覇気が感じられないシャルル。

うーん……あつ、もしかして翔となんかあったのか？

「翔となんかあったのか？」

「……ッウー！」

凶星だったらしくさらに顔を歪ませるシャルル。

翔とか……いったい何が……

そう思っていると……

「何をしている」

「うおっ！」

その声に後ろを振り向くとそこには……

「ほ、箒」

箒がいた。

「何を驚いている。失礼だぞ」

「あつ、いや……すまん」

「ごめんなさい。いきなりなことでは」

シャルルも気が付かなかつたらしく頭を下げた。

「あつ……責めているわけでは……」

そのシャルルの姿勢に箒もその氣勢を崩す。

そんな箒に俺が言葉を返えそうとすると……

「第3アリーナで代表候補生達がバトってるってよ！」

「ええ、ホント!？」

慌ただしいまでに騒ぎながら駆けていく女子達。

それによって、声をかけられなくなった。

「代表候補生達？」

「オルコットさん達かな？」

「行っって見ようぜ!」

俺達は、合流したてとは言え、その事が気になりアリーナの観客席へと急いだ。

この時には思っていなかった光景が広がっているとは思わないうまま……

Side Out

第3アリーナ隣接区画

IS整備室

Side 翔

俺がその模擬戦に気付いたのは、スターダストの調整が一段落して、コンソールから顔を上げた時であった。

金属音や整備用の器材が動く音が少なくなっている。

その代わりなのか、整備室の一面に設けられたモニター前に人盛りが出来ていた。

そして、モニターを見て何やら騒ぎが起こっている。

なんだ？

俺は、その騒ぎ方が少し大らかなもので無かったので、それらに近づいた。

「あの、どうしたんですか？」

集まっていた殆どが二年生であったため、何時ものように俺は、敬語に近い形で問い掛けた。

「あっ、櫻井君。・・・確か、イギリスとドイツの代表候補生と同じクラスだったよね？」

その問い掛けに振り返ったのは、影島であった。

「そうですが……あの2人が何か？」

ラウラも絡んできているとなると考えられるのは1つだった。

まさかと思ったが、俺は状況説明を求めた。

「……………これを見なよ」

影島に習い、モニターへと目を向けた俺は、思わず見入ってしまった。

モニターは、カメラが煙によって見えなかったのか、黒く染まっていた。

それがやがて、煙が薄まってくると2人の姿を映し出す。

ISを纏ったセシリアと鈴である。

ISのダメージはモニター脇に表示されたデータと映像からかなりダメージを受けていることを示していた。

そんな中で画面上の2人は、先ほどの煙を生み出したらしい爆発の中心部へと視線を向けている。

その爆発の中心部から煙が引いたそこに居たのは、漆黒のIS、ドイツの第三世代『シュヴァルツエア・レーゲン』を纏った……

「……………ラウラ」

その名を呟いた俺は、人知れず『止められなかった』事に唇を噛んだ。

そんな俺を余所にモニターの中ではISバトルが続けられた。

セシリアと鈴が一瞬だけ眼でアイコンタクトを取ると飛び出し、鈴

の甲龍が龍砲を放った。

不可視の砲弾がラウラへと向かう……だが、ラウラが『それ』
に向かい手をかざした瞬間、何もなかったかのようにラウラは立ち
続けている。

「えっ、いったい何が？」

「わかんないよ。あれが『独』の兵装？」

その光景に集まっていた生徒達が意見を交わし合う。

「……！まさ……」

「おい、映像にエネルギーフィルターを掛けてみる……！」

「えっ？ 衝撃砲は、空間に圧力で指向性を持たせて撃ちだしている
からエネルギーフィルターじゃ見えないはずじゃあ？」

「……！ 違うわ。レーゲンTypeの方を！」

「はっ、はい！」

俺が、企業にいた時にかすかに聞いた事を思い出した時、意味がわ
からないまま、男子学生と3年生の女子の指示の下、2年生の女子
が映像にフィルター（あるものを見えやすくしたり、目に見えない
ものを見えるようにする機能）を掛けた。

すると……

「えっ、なにあのフィールド？」

「PICのフィールドにしても広がりすぎなような……」「……これ
ってもしかして……！」

フィルターが掛けられたことにより、ラウラの目の前に何かのエネ
ルギーフィールドが展開されている事がわかった。

そのエネルギーフィールドが持つ性質を俺は、知っている……それは

「A I C …… アクティブ・イナーシャル・キャンセラー、実戦段階まで来ていたのか」

S i d e O u t

第3アリーナ 観客席

S i d e 一夏

なんだ？アレは！？

セシリア達がラウラと戦っていたのには驚いたが……鈴の衝撃砲が『何か』に防がれた事にはさらに驚いた。

衝撃砲を無効化したラウラは、そのまま肩のユニットからワイヤーがついた刃を射出、複雑な軌道で鈴に迫る。

その前にセシリアが鈴の援護のためにビットを展開、ラウラへと向かわせ、ライフル狙撃と視界外攻撃をラウラに撃ち放つ。

が、ラウラは、それら両方を回避し、先程と同様に腕を突き出す。

腕を突き出したその先にあったビット達が何かに掴まれたかのように動きを止めた。

まただ、何が？

俺が首を傾げようとしたその時・・・

「A I C、もう実戦レベルになっていたんだ」

シャルルが険しい顔でそれらを見て呟いた。

「A I C？」

「まさか、山田先生がこの間の授業内で言っていたP I Cの発展系か！？」

俺が聞き慣れない単語に疑問の声を出した時、箒がシャルルへと迫った。

「うん。A I C……アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。I SのP I Cの静止、加速、浮遊の機能の内、『静止』を第三世代の兵装に応用したもの。まさかドイツがここまでレベルが高いものをつくってたなんて……」

シャルルが呟きを漏らす中、俺はマニュアル操作の事で教えを貰っていた時の事を思い出していた。

P I C…パッシブ・イナーシャル・キャンセラーは、I Sが浮遊したり、加速するのに一番必要なものだ。

剣撃での振りかぶる時の加速や回避時に意図的にコントロールしてやると効果が高い……

そこまでもマニュアル操作の特訓と称して翔に課せられた『課題』に悪戦苦闘していた俺にとって勉強になっていたが、翔は補足も付

け加えた。

俺も噂程度にしか聞いていないが、ISの特殊兵装としての開発が進められているみたいだ。特に『静止』は、『静止結界』と呼ばれるほどのものが作られているみたいだ

その時は、あまり深く聞いていなかったが……今、現実的に目の前にある。

やがて……

至近距離でセシリアが弾道型ビットを放ち、セシリアと鈴自身がダメージを負い地面へと叩きつけられたが確実な一撃が入れられたかと思われた……が、弾道型ビットが爆発して発した煙が晴れた先には、ダメージが殆ど無いラウラであった。

その後は……暴虐の始まり……だ。

ラウラは、イグニション・ブーストで一気に降下、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに幾つかのワイヤーを束ねて吹き飛ばす。

さらには、束ねていたワイヤーを分担し、2人の体を捕縛してラウラの元へとたぐり寄せ、拳をたたき込んでゆく。

アーマーを壊し、体を殴り尽くす。

シールドを削り尽くし、機体維持警告レベルまでダメージとなっているだろうと思われる、2人に攻撃を緩めないラウラ。

もう止め……!!!!?

その口を開こうとした時であった。

ラウラの無表情が愉悅に口元を歪めていた……それを見た瞬間、俺は、怒りで抑えが『限界を振り切った』。

「一夏!？」

筈の呼び止めは、今の俺には何も聞こえなかった。

エネルギーを多量に消費する緊急展開モードで白式をISSスーツごと展開。

展開と同時に雪片式型を展開し、全エネルギーを集約、『零落白夜』を発動。

刀身の間から現れた巨大な光の剣が、アリーナのバリアーを切り裂く。

切り裂いた隙間から俺は、アリーナへと飛び込む。

飛び込むと同時にイグニション・ブーストで最大加速を行いながらラウラに斬り掛かる。

「その手を……放せ!!」

「……絵に描いたような直線的な動きだ」

俺の動きをそう評価し、また腕を突き出す。

その腕の動きを見た俺は、頭の中に煌めくものがあつた。

『突っ込むな!!』

「!!」

俺は、その『煌めき』に体を動かされ、雪片の刀身展開を解除。

実体剣となつた、雪片を地面に刺す。

さらには背部スラスターの逆噴射と脚部を突つ張らせてイグニション・ブーストの加速を殺し、脚部スラスターで斜め上方へと舞う。

「なっ!?!」

「...!!」

荒い事をし、体が悲鳴を上げるのを無視した俺は、そのまま一回転し、逆手に持ちかえた雪片から零落白夜の光を放つ。

「チィッ」

だが、不意打ちをラウラが許すはずもなく、俺は、何かのフィールドに捕われ、動きを止められてしまう。
腕一本すら動けない。

クッ!動け...!!

逆手に持ちかえた雪片の先は、ラウラに向けられている。

AICと言う『静止結界』に捕われた俺には、もう打つ手がないと思われているかもしれないが……まだ手は『有った』。

俺は、マニュアルで雪片式型の零落白夜が出る刀身展開度を調整、あとは俺の気合いを雪片に乗せる。

すると零落白夜の輝きが強靱な刃と化し、一種の『エネルギーフィールド』である静止結界を切り裂いてラウラへと向かう。

「!？」

流石のラウラもこれは、予想できなかったらしく狼狽した表情でセシリア達を手放していったん下がった。

翔のお陰だな

この一連の動きに関わっていたのは翔であった。

彼は、訓練中に第三世代機との戦いは不用意な接近戦が怖いことや雪片の特性を違った角度から見えてくれた。

それが今ここで活かされたのだ。

「……ほう、少しはヤルようだな」

「……やるなら俺だけのはずだろ、なんで2人をヤリやがった」

無茶に近い最大出力での各機能発動の弊害によって殆どエネルギーを出し切った俺は、戦えないと分かっているながらISの安全装置が働いて気絶したセシリア達の前に出てラウラへと雪片を向けた。

理由はどうあれ、仲間に出された怒りを抱いて。

「勘違いするな、売られた喧嘩を買ったままでのこと……まあ、貴様もすでに敵ではないがな」

ラウラは、凶星を言い当てながらレールカノンを向けた。

「…………お前…………」
テメエが挑発したからじゃないのか!?

さらに沸き上がるラウラへの怒りを咬み殺し、俺は刺し違える覚悟で前に出ようとした…………とその時。

(一夏、離れて！)

シャルルからのプライベートチャンネルが響いたかと思ったら、同時にシャルルがアサルトライフルを放ちながらラウラに向かい、降下する。

「チィ、雑魚が！」

シャルルの射撃に応戦するためにラウラがワイヤーを飛ばす。

(一夏、オルコットさん達を!!)

(なっ!? シャルル、こいつは俺が…………)

(エネルギーが少ないのに無理しないで！)

(ツウ！)

シャルルの言い分に歯痒い思いをするが、エネルギーが少ない身で援護すれば、シャルルの方にも負担がかかる。

俺は、齒痒い思いを冷静な部分で潰すとセシリア達を連れてアリーナの片隅に退避する。

S i d e O u t

第3アリーナ隣接区画

IS整備室

S i d e 翔

……グッ！

ラウラの愉悦に口元を歪めたのを見た俺は、拳を握りしめ、このような事を止められなかった事に自虐しながらスターダストを身に纏う。

身に纏った瞬間、繋がれたケーブルが弾け飛んでゆく。

「さ、櫻井君！？まつ、待って！その子には！！」

武装が無いまま、出ようとしているのに気が付いたのか、影島から呼び止められるが、俺は、すでに『昔』の俺へと戻りつつあった。

スターダストを纏ったまま、俺は、武装整備場所に置かれていた打鉄用のブレードを掴んだ。

そのまま、ピットへと通じるエレベーターに乗り込み、自らの居場所へと行く。

戦いという名の『殺戮』に……

Side Out

Side 一夏

シャルルは、自分の技能である高速武装展開『ラピット・スイッチ』で戦闘を行いながら次々に銃を切り替え、ラウラに絶え間なく弾幕を撒き散らしていたが……それらを掻い潜ったワイヤーに捕縛され、引き寄せられた。

「シャルル！」

今にもAICの結界に捕われそうになっているシャルルを助けようと俺は、飛び出そうとしたが……

『下がってろ、一夏！！』

「!?!」

オープンチャンネルを通じて誰かの叫びが俺を制止させた。

誰だと思考する前に変化は始まっていた。

『何か』がワイヤーを切り裂いたのだ。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

シャルのリヴァイヴの腕を絡めとっていたワイヤーが空気を切り裂

いて『投てき』された何かに切断された。

それに対してラウラとシャルルは、驚きながらも投げられてきた『物』を見た。

投てきされたものは、打鉄が基本的な装備としている刀型の実体剣であつた。

その実体剣はワイヤーを切断した後、アリーナの壁に突き刺さっている。

いったい誰が？

俺やシャルル、ラウラはそれぞれ投げられてきた方向を見た。

すると俺達のところからでは一番距離がある第3ピットの暗がりから金属が擦りあつ音が響き何かが出てきた。

それは……

「か、翔？」

自身のISスターダストを纏った翔であつた。

第13話 目覚めの機神(きしん)

IS学園

第3アリーナ

S i d e シャルル

…………カ、カケル？

放課後から姿を見失っていたカケルが急に現れたのには、僕は驚いていた。

カケルは、ピットからアリーナのフィールドに降り立つとIS特有の浮遊はせず、歩いてこちらに近づいて来た。

ISの重量で地面が歩行するたびに地面が捲れ、ひび割れを起こす。

「はっ、誰かと思えば貴様か」

最初こそ驚いていたラウラが近づいてくるカケルを認めると冷笑を浮かべながら口を開く。

「だが、丁度いい。今ここで貴様を倒せば私の強さの証明となる」
「…………」

ラウラからの挑発に顔を伏せたまま歩み寄るカケルは何も答えない。

ただ…………『何か』が違う事以外は…………

僕らを見渡せるところまで来たカケルは、そこで立ち止まった。

「私の強さに怖じけついたのか？……………無様な」

それをそう捉えたのかラウラはさらに冷笑を深めた。

が……………この時に気付けばよかったのかもしれない……………今のカケルは『カケル』ではないことに……………

「……………そんな御託は聞き飽きた」

「何？」

表情を今だに見せないカケルがラウラに口を開く。

その口調は、僕が数日前に一度だけ聞いた……………怒りを含ませたものだ。

カケル？

「……………確認する。『これ』はお前がやったのか？」

カケルが一夏や僕、そして一夏に運ばれ、フィールドの片隅で気絶したセシリア達を見たのだろうか、その口調のままラウラに問い掛ける。

「何を今さら、この状況を見てわからないのか？」

「……………お前がやったのかとこちらは聞いている」

カケルが顔を上げると赤い眼の輝きが妖しい輝きを放っている。

明らかに『怒り』を抱くその姿にラウラは、何を思ってたか冷笑を讃えたまま答えた。

「……ああそうだ。どれ程のものかと思ひ相手をしてやったが……私の足元にも及ばなかつたがな」

「……ただ見せしめのためだけにか」

「他に何かある？」

重い、そして荒々しい空気が彼らの間に流れだす。

やがて……

「言った……よな、『巻き込むな』と」

重々しくカケルが口を開き、話をはじめた。

「はっ、力を持ちながら『振るう事』を躊躇する、貴様がいくら言おうと……ただの『木偶の坊』だ」

「……」

「せめてもの……憂いだ。私の強さを示してやるう。さあ、戦え『弱者』よ」

そう口にしたラウラは、僕を無視してカケルだけに戦う姿勢を見せた。

！カケルだけに戦わせる訳には……

それを見た僕も新たにライフルを呼び出しながら戦闘態勢に移行……

「……『戦え』？違うな……『潰す』」

「何？」

「カケル？ツ！」

カケルが言葉を発した瞬間、カケルから僕は何か肌に刺すものを感じた。

何かの波動と言っているのか……とにかく目に見えない『何か』が僕らに突き刺さる。

「カ、カケル」

「翔よせ！いくら何でもお前だけでアイツを……」

AICを体感した一夏が、僕の呼び掛けを遮るように立ち向かうカケルを呼び止めようとするが……

「邪魔をするな一夏、シャルル……」

「えっ！」

「!？」

凄味を発し、一夏の呼び止めすら意味をなさないものとしたカケルは、眼を『金色』へと変色させ……殺意を滲みだす……すべてを壊そうとするまがましいものを……

（カ、カケル！ダメええ！

悪い予感がした僕はプライベート・チャンネルで止めに入るが……
・すべて遅かった……

「こいつは……俺がすべて『潰す』……存在も、憎しみもすべて

「!!」

宣言したカケルには、もう優しさを失わせていた。

Side Out

Side 翔

俺は、すべてを『失わせる』為に……『楔』を自ら抜いた。

『機人モード』、Active（起動）

「!!?マスター、ダメです！ その『モード』の使用には!!
（カ、カケル！ダメええ！）

更衣室に置いてきたアストレイアが魔法とは違う『別の力』を使う俺を押さえ込み、シャルルが俺の異変に感付いたのか、プライベートル・チャンネルで呼び止める……がすでに遅かった。

「こいつは……俺がすべて『潰す』……存在も、憎しみもすべて
「!!」

ラウラがここまで愚かであった事、さらには止められなかった俺自身に対してもすべて……だから俺は今一度、人ならざる者として見られた理由の一つであるこの身に宿る『マシナリー機械』を解放させた。

『機人モード』、各部機能問題無し……出力最大

眼の色が赤から『金色』ふ、さらには体の感覚や思考の速度がすべてが置き換わる。

そして、俺は『実行』しはじめた。

「目標……ラウラ・ボーデヴィツヒ……『破壊開始』」

そう宣言すると同時にスターダストのスラスターを最大にしてラウラの懐へ飛び込んでゆく。

もう、彼女に過ちを重ねさせないために俺は……『機神』となる

考える事、すべてをやめた頭に誰かの悲しき声を聞いたような気がしたが……俺は、立ち止まらなかった。

S i d e O u t

S i d e ラウラ

何だ？

奴が宣言した途端、何らかの覇気のようなものが放たれ、髪を揺らす。

奴の仲間達が奴の変化に感付いているらしく強ばった表情となって

いる。

奴の表情は、この一週間近くで見た事がないほど、怒りに歪ませていた。

『同じ』と思っていたが……貴様もただの弱き者だったか……なら潔く『散れ』

気迫等からただの専用機持ちと思えなかった為、私は奴を『自分と同じく、戦う為に生まれた存在』として認めていたが……この戦いで見せた『感情』には、それを否定させた。

何故なら我々は『兵器であり、敵を倒すため』に造られたのだ……
……感情等というものは……『完全な存在』には不要である。

508

私は随分と萎えてしまったが、奴の動きを止めるために『A I C』を起動した。

奴が飛び込んだ瞬間、手を広げ、A I Cの『網』を形成、動きを止め……

「なっ!？」

飛び込んできた奴がいきなり消えた。

真っ直ぐに突っ込んできた姿が急に消えた。

ど、どこに……ガア!?

私が首を動かそうとした途端、何か私の背後から蹴りが入れた。

奴の仲間か!?

私がそう思った瞬間、それは否定された。

蹴られ、弾き飛ばされそうになるのが何かに掴まれ、引き戻された。

掴まれたのは……私の目の前から消えた『奴』であった。

金色に輝かせた眼が私を見る。

「くっ!?!」

何故いきなり背後につかれたかはわからないが、私は、奴を視認した時点でワイヤーユニットを展開。

5本あるワイヤーの内、2本を奴を引き剥がすため、残る3本を奴が移動するであろう方向へと飛ばしたが……いきなり掴まれていた感触がなくなり次の瞬間、『真横』から弾かれた。

「グウウウ!?!」

いったい何がと弾き飛ばされながら真横を向いて思った瞬間、また奴が迫る。

その直後、拳を『撃ち込まれた』。

ISの絶対防御を発動させたその一撃は、それだけで止まる事なく私の腹を『撃ちつける』。

「うぐヴあああ」

今までにない苦痛が私の体を駆け巡る。

ISの拳が私の腹部を『直接』捉えていた。

普通、IS同士での戦闘ではシールドによる防御、さらにはIS自体の防御機構によって搭乗者は守られるが……この戦いに限って違った。

拳が入れられた瞬間、それらを『打ち砕き』搭乗者に直接、撃ち込んだのだ。

内蔵が潰れるまでいかなかったのはISスーツのお陰だろうが、私は奴の拳に体を預けるようにのぞけた。

「……まだだ」

「!？」

意識を奮い立たせ、体勢を直そうとしたが……その前に拳に跳ね上げられ、飛び蹴りを食らう。

また腹部に入れられ、意識が飛びかける。

「グウウああが」

「……まだまだ」

蹴りから蹴り上げられてから拳を今度は連続で交互に食らう。

胸部に突き刺さるそれは、一瞬呼吸を停止させる。

それを回復させる間もなく、奴は拳を加え続けた。

「アガアアア!!」

連続的な打撃に意識が途切れかける。

寸分なくシュヴァルツエア・レーゲンのシールドを貫通してくる『打撃』に絶対防御が連続発動。

それにより、シュヴァルツエア・レーゲンのシールドエネルギーは、瞬く間に100をきる。

グッ!

だからといって負けるわけ『はず』はない!!

私は、意識を精神力で呼び戻し奴を迎え撃つ。

「……………まだまだ」

うわごとのように呟きながら奴は、さらに『撃ち込む』ため、スラストを焚き、私に突っ込んでくる。

「調子にのるなあああ!!」

私は、残ったエネルギーでAICを最大展開、今度こそ奴を『絡めとった』。

「はああああ!!!」

ワイヤーユニットを全基、アンカーごと奴のISの装甲に食い込ませて固定。

レールガンの銃口の身体に押しあて……………『放った』。

秒速を越える弾丸が奴の装甲を砕き、本体へと攻撃を加え、奴のISが発動させた絶対防御の強い輝きが視界を焼く。

その状態のまま、2、3発たたむが……………1発目は着弾したものの残りは、奴が盾代わりに展開した両肩の隠し腕が、追撃を防ぐ。

細いアームが砕け散るが、奴は無傷である。

「グッ!ならば……………この手で!」

両袖のプラズマ手刀を出力し、最後の1撃を入れるべく右腕を振り上げた。

「消えろお!」

奴の頭へ振り下ろされるそれは確実に捉え、私に勝利を伝えるもので……………『はなかつた』。

「……………」

「なっ!?!」

なんと奴は、ISの手でその手刀を掴んだのだ。

手刀から発せられる超高温のプラズマが奴のISの左手を焼いてゆく。

「くっ!?!」

私は、すぐに引かせようとするが、奴の左手は、ガツシリと掴んだまま離さない。

ならば!

私は瞬時に左腕を突き出し、奴の胸部を抉ろうとしたが……

「……フッ」

「何!?!」

その胸部へと放たれるはずだった一撃が奴の右腕によって弾かれ……直後、奴の右手が拳へと変わり、私の顔目がけて撃ち込まれた。

「つうつう!」

撃ち込まれた一撃を顔を動かす事で回避したが……その威力は半端なものではなく、掠めただけでISのヘッドギアを吹き飛ばし、左眼の眼帯を外させ、私の左眼を露にさせた。

今の奴と同じ金色の眼をした左眼を……

「…………『同類』みたいだな『お互い』」

その眼を見た奴が段々と凶悪な顔へと変貌していく。
まるで戦いを楽しんでいるかのように……

だが、今の私は『落印の印』を露にした奴への『憎しみ』が私を突き動かしていた。

「貴様!!よくもおおお!!!!」
よくも落印を!!

この眼は、私の落印の印……それを露にした……生かしてはおかない!!!!

私は、左腕のプラズマ手刀を奴の首を跳ねるべく斜め下に振り下ろそうとする。

が……

「フツ、アハハ!」

「!?!?があああ!」

奴が急に笑いはじめたかと思うと掴まれていた右腕から痛みがはしる。右腕を見ると、プラズマ手刀ごと右腕の装甲が握り潰されそうになっていた。

さらには……

痛みに気をとられているうちに奴の左手で首を捕まれていた。

「グウフフ！」

「『アイツ』らと同じようにしてやる。安心して逝け！」

狂気に染まりきった顔で奴が宣言する。

「ツウウウ！！ただが、『出来損ない』が私を見るなあ！！！」

私は、本当に最後のエネルギーと集中力でA I Cを起動、奴の動きを止めた。

が……その直後、私の左眼……落印の印であるI S適合性向上の為に肉眼へのナノマシン移植処理を施した『擬似ハイパーセンサー』がI Sのハイパーセンサーより早く『異常』を私の脳に伝えた。

敵I S、各間接部異常加熱……警告、敵I Sユーザーより、『性質不明エネルギー波』を探知、エネルギー波、A I Cフィールド拡散。A I C使用不能

何！？

確かにI S自体、激しく動けばその分、間接部近くの摩擦によって熱が生じるが、戦闘中に『異常加熱』と警告が出るのは長時間の戦闘を行った、或いはI Sの性能を超えたI Sユーザーより、無理矢理I S側が追従させられているからなる事が多い。

前者はあり得る事だが、それほど時間は経ってはいない。

なら考えうる後者は、何らかのエネルギーによって奴が肉体を強化している事を推察させるが、情報の曖昧さが余計混乱をもたらした。

エネルギー波だと一体！

？グッ

一瞬、思考した私は、その隙を突かれ、A I Cを食い破った奴に顔を近づかれた。

血を好むカラスのように血を求める奴の眼・・・それを見た私は、すべての感覚が凍り付くように凍り付いた。

その瞬間から私の運命は、勝利から『絶望』へと転落した。

S i d e O u t

S i d e 一夏

翔の猛攻にラウラが圧倒されている。

と言うより、もう勝負ではない。

先程のラウラの戦いでは確かに圧倒的な強さをセシリア達に見せ付けた。

だが、今の戦いでは翔の方がまるで赤ん坊が子犬の手足を引きちぎ

るかのような残酷さが滲み出ている。

そして何より、翔らしさが感じられない。

ただ『叩きつける』だけの戦いとなっている。

最初は、翔の登場に沸き立っていた観客席も今はあまりの残虐さに静まり返っていた。

『ISスターダスト、各部異常加熱確認。なお温度上昇中』

翔が動いたびかなりの負荷が掛かっているのか、ISスターダストの所々から稲光がはしる。

「も、もうやめて」

「シャルル？」

俺の斜め前にいたシャルルが両腕で顔をはさみながら擦れるような声で言葉を出す。

その声が届くことなく、翔は一気に急降下してラウラを地面へと叩きつける。

その後、ボロ雑巾を引きずるかのように地面に押しあてながら引きずる。

ラウラのISの装甲が傷つき、一部が弾け飛んだ。

「もう……十分だから」

シャルルが涙を讃えながら言葉を続けるが……翔は、ラウラを投げ捨てるように放るとそのままスラスター全開で突っ込んでいく。

ラウラは最後の抵抗なのか、レールカノンを放つが、今の翔の速度には擦りもしない。

それどころか逆襲と言わんばかりに翔はレールカノンを基礎部から引きちぎられ、それを混紡代わりにラウラに叩きつけ、レールカノンが壊れるのを見ると変わって拳で殴り続けた。

ハイパーセンサーのサポートで翔の表情を見ると翔はかつてないほどに狂気に染まり切っている。

「だからもう……」

「……やめる」

今度はシャルルだけではなく、俺も言葉を洩らす。

友がいつもの優しい人物に戻るようにと……

観客席からも悲痛な叫びがあがりはじめている。

だが、それでも止まらずに今度はラウラを投げ捨て、アリーナの壁にめり込ませた。

同時に意識を失ったためか、ラウラのISが光の粒子へと戻ってしまった。

「カケル……もう」
「翔……止める」

翔は、最後の一撃なのか自身がいる高度からスラスタも焚き、ス
ターダストの右足を突き出しながらラウラへ真つすぐ迎った。

……まるで死を振りまく『流星』の如く。

「ヤメテエエエー!!」

「ヤメロオオオオー!!」

俺達は、ラウラを『殺そうとしている』翔を止めるため、止められ
ないとわかっていながら飛び出していた。

だが、後少しのところまで届かず、止めることができなかった。

くっ!!

俺が心の中で悔しさからの叫びを上げたその時……ラウラの
前に誰かが割り込んだ。

誰だと思った瞬間、『流星』と化した翔が着弾し、土煙を上げた。

S i d e O u t

S i d e ラウラ

私は、目の前にはしまった衝撃によって途中から手放した意識を取り
戻していた。

何だ？と思ひながら眼を明けた先には……

背を向けたスーツ姿の……織村千冬がいた。

「きよ、教官!？」

Side Out

Side 翔

俺の最後の一撃が何ものかに『受け止められた事に気付いていた』。

土煙が消え去った先には……

「……………織村先生」

「きよ、教官!？」

「千冬姉!？」

「やれやれ、お前まで『ガキ』だったか櫻井」

千冬先生だった。

その姿は、スーツ姿であったが……ISを纏っていないのにIS用の実体剣で俺の足を受けとめていた。

通常ならありえない事であるが、俺は何も感じずにそのまま後ろに下がって着地した。

着地した瞬間、先程から鳴り続けていた警告音がさらに響く。

『ダメージレベルD+を突破、各部及び、スラスタ―異常加熱を確

認。危険、ただちに……」

最後まで聞かずとも機体の状態は手に取るようにわかっている。

『機人モード』との併用は考えられていなかったせいもあったが、リミッターを解除しても受け止めきれない負荷に再び損傷を負ったスターダストは、不協和音を響かせていた。

「模擬戦をやるのは、構わんがアリーナの施設をぶち壊してまで行うのは黙認できん」

千冬先生が呆れた様子で俺を止めに入った。

「……なら、そいつはどうすればいい」

『機人モード』解除、モード、ノーマルへ移行

いつもの表情へと戻した俺は、早まっていた感覚から『まとわりつく泥沼』の中に落とされたように鈍い感覚に支配された。

鈍った肉体に鞭を打って、立ったまま千冬先生に聞いた。

「そうだな……この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「もし、『待てない』場合は？」

「はあ……櫻井、貴様がこいつ（ラウラ）にイラつくのもわかるが……今は『頭を冷やせ』」

千冬先生が俺の発言に呆れながらも意味深げな言った瞬間、背後から何かを押しあてられた。

「?.....」
「.....ごめんね」

背後から何かを押し当てたのは何かを堪えたシャルルであった。

シャルルが以前、部屋での雑談で言っていた左腕のシールドがその先端部の『カバー』を外していた。

シャルルのISにインストールされた武装の中で一番の威力、そして第2世代型最強の装備、69口径パイルバンカー『グレー・スケール』.....通称《盾殺し（シールド・ピアース）》を開放して俺に押しあてていた。

シャルルが俺の豹変に悲しんでいる.....なら元に戻ってやるう。

昔とは違い、それが出来るようになったから.....この力で狂い切らない。

だが.....悲しませたケリも付けさせなくてはならないので.....

.....なら受けてやる

そう考えるのと同時に.....俺は、散々痛み付けてやったラウラにプライベート・チャンネルを送った。

(.....ラウラ

(……私に何ようだ

痛みからか……叩きのめしてしまったからかは、わからない
がかたく応じられてしまった。

だがそれでも俺は続けた・謝罪もかねて、教える事も含めて・

(叩きのめしたのは悪かったが……ラウラ、お前は『本当はどう
したい』？

(突然、なんだ。いつたい今度は何を……

(いいから答える

数秒の間を開いたその回答は……

(……私は『何にでもない』、私は……

(そうか……昔の俺と同じか……

(昔のお前？

(……なら、探していく事をしていけ……お前が何であるかをそ
の左眼の呪縛を考えず

(ふざけるな。この眼は……

(……もし呪縛に囚われるならその時は、俺も戦ってやる

(お前、何をいつて……

(答えは自分で考える

言いたい事だけを伝え、そこでプライベート・チャンネルを一方的
に切ると俺は、シャルルにひどい事をさるなと思いつながらも優しく
口を開いた。

「……………『引け』、俺を止めるために」
「ツウウウウ!!!」

俺の言葉にシャルルが悲痛そうな呻きを洩らしながらグレー・スケールの引き金を引いた。

火薬によって撃ちだされたパイルバンカーが、俺の背後から突き刺さり、もともと少なかったシールドエネルギーを絶対防御で0とした。

さらに『肉体』にもダメージを与え、俺の意識を『刈り取った』。

Side Out

Side シャルル

もう、カケルを止められないと思っていたから……………

僕は、カケルが織村先生と話し込んだ隙を突いて背後から歩み寄った。

「もし、待てない場合は？」

「はあ……………櫻井、貴様がこいつにイラつくのもわかるが……………今は『頭を冷やせ』」

織村先生が僕の方に『黙らせる』と言わんばかりの仕草をとりながら口にした。

それで僕は……………左腕に装備された盾から『カバー』を排除し、

グレー・スケールを開放させて・・・彼に押しあてた。

「?.....」

「.....ごめんね」

僕は、恩を仇で返す『この行為』に対してまだ引き金を引くのをためらう・・・抱き始めている思いが彼に謝る。

それに対して彼は、もう元に戻ったいつもの『赤い眼』になっている。

その眼は、優しい眼差しを宿していた。

宿した眼差しのまま、彼はただ一言だけ『頼んで』きた。

「.....『引け』、俺を止めるために」

カケル・・・ツウ！

既に元に戻っているのはわかっていた・・・わかってはいたがそれだけじゃもう收拾がつかないこともわかっていた。

だから・・・

「ツウウウウー!!」

僕は、引き金を引いた。

目を瞑り、悲痛を押し殺して、流れ出そうになる涙をこらえて・・・
・
引いた引き金により、グレー・スケールの撃鉄が杭を打ち込むための炸薬を叩き、爆発させ杭をカケルの背に突き刺す。

一瞬、絶対防御の輝きがカケルを包むが、元々エネルギーが少なかつたのか、それともISが致命的なダメージを受けたと判断したのだろうか、搭乗者の意識を失わせる最終保護機能によってカケルが意識を失わせた。

「……………終わったのか」

それを見た一夏がそう呟くが、僕は応じる暇がなかった。

がっくりと糸の切れた人形のように膝をついたカケルに僕は、グレー・スケールを投げ捨てると僕は背中からカケルを抱えた。

完全に意識をなくしているらしくISを纏っていても重かった。

……………ごめんね、ごめんね、ごめんね……………

救ってくれたカケルにこんな事をしてしまった僕は部屋に着くまで謝り続けるしかなかった。

同時にカケルが僕を離れようとしていた理由が……………こうなるからではないか、あの姿を見せたくなかったのではないのか、と思いつながらも。

Side Out

Side ラウラ

何故……奴は……

私は、奴が崩れ落ちた姿を見ながら先程のプライベート・チャンネルの意味を考え始めていた。

私は、奴に殺されかけた……だが、最後の最後で止められたからとは言え、あっさりと引き、謎めいた言葉を投げ掛けられた。

……何故

「……ラウラ」

「はっ、はい」

教官が私に呼び掛ける。

「櫻井は、お前をただ止めたかったらしいな」

「どう言う事です」

教官が言いたい意味がわからない……私は答えを求めた。

すると……

「つまり……おまえを本当に殺そうと思っていたならすぐに『決着』がついていたと言う事だ」

そういつもの不機嫌そうな顔をしながら剣を軽く叩いた。

軽く叩いた瞬間、金属が割れる音とともに……剣が半ばから折れた。

「なっ!？」

「アイツが本気だったらこうなっていたのはお前だったかもしれんぞ」

折れた刀を見ながら教官は、冷たい眼で私を見た。

「ラウラ、私を追うなどは言わんが……そろそろ探して見たらどうだ」

「……何をですか？」

教官の言葉が何故か今の私には、何か足元が崩れていくような音のように響く。

そんな私の心境が顔にも出たのか教官は、その場を去りながら言葉を投げ掛けた。

「ラウラ。わからないか、なら……『悩め』」

「きょう……官？」

「悩んだ先に何かあるかはおまえ次第だがな」

「あっ……」

呼び止めも虚しく、教官は行ってしまった。

教官……私に何を望んでいるのですか……私に

私は、答えのない道へと足を踏み入れたかのように迷う……先の見えないままに……

フッフ、我は汝を望み…汝は我を求めらるであろう

我は、絶対なる力であり、人の闇なのだから…

第14話 次元の管理者

暗闇の中に誰かが、膝をついて倒れた俺に手を差し伸べている。

汝、持たされし力にて何を望む？

前に問い掛けられた時、同様、その人物は俺に問い掛ける。

俺は……

『前』と同じく、答えようと口を開きかけたが、その前に目の前の人物が口を開いた。

我は、再び切に願わん……貴公……いや、『今の』あなたが、あなただけで望んだものの為に剣を振るう事を……

そう言った途端、暗やみが一瞬で白く輝きだしその人物の姿を俺に見せる。

金髪の……俺が……『我^{われ}』が仕えた……

そこで俺の意識はどこかへ飛んでしまった。

IS学園

寄宿寮

翔&シャルル部屋

Side 翔

……………つう

目蓋裏に少しの光を感じた俺は、意識が揺れ動きだす。

目を開いた先には、いつもの自室の天井がある。

体を包み込む感覚は、ベッドの中であつた。

……………俺は確か、アリーナで倒れたはず……………

俺は、気だるい身体を起こそうと力を掛けようとする……………

「ん？」

ベッドサイドで誰かが泣いていた。

身を起こし、その人物を俺は見た。

その人物とは……………

「……………シャルル」

「……………ヒグツツウ……………か……………グツ……………か、カケル」

顔を涙でクシャクシャにしたシャルルであつた。

「…………診ていてくれたのか？」

『修復』が終りきっていない体に巻かれた包帯が肌の感触と目で見える。

「……………うん」

未だに涙を止められないのだろうか、クシャクシャにした顔でシャルルは応じる。

「……………ありがとう」

「……………」

俺が礼を言っても涙を流し続けている。

理由はわかりきっている……………はずだ……………

「……………その…悪かったな」

理由を理解している俺は、少しだけ、顔を伏せながらそう口にした。すべてを伝えることは……………今は出来ないが……………謝らなければならぬ、何も言わずに診てくれたシャルルへ……………

「……………謝らないで…僕は…僕は……………」

「……………シャルル？」

シャルルは、顔を伏せたまま口を開きだす。

Side Out

Side シャルル

あの後……………

約三時間前

両脇からカケルの肩を掴んだ僕と一夏は、カケルのISごとカケルをピットへと運び入れていた。

「翔、大丈夫なのか？」

「……………」

反対側から支えている一夏が気を失ったままのカケルを見ながらそう呟く。

そんな一夏に僕は、言葉を返せないまま、僕らはピットにたどり着いた。

するとピットに待ち受けていた整備学科の人達がわらわらと僕らに集まってきた。

「えっ、どうしたん……………」

一夏がそう呟こうとした時、整備学科の人達はカケルの方に集まる。

「早くユーザーとISとの接続を切って！」

「慌てんな！先に冷却だ！！この機体温度だとISをパージし

た時にユーザーが熱にやられる！」

「了解です。なら早く冷却剤を！」

「それと同時に各部の強制解放をしてやれ、そうすれば冷却効率も上げられるはずよ」

「ほら、お前らも下がれ！ガキを降ろしたらやるから！」

整備学科の人に押される形で僕らは下がらされ、カケルが降ろされるのを待たされた。

「……相当やばいのか？」

「……わかんないよ」

一夏にようやくそう返したが、覇気自体、入らない。

撃ってしまったショックから……

「……」

少しして……

「あと少しだ！」

「両脇、支えて!!」

「一緒にやるぞ、1、2、3！」

カケルがスターダストから降ろされた。

カケルのISを整備学科に預け、意識を失ったカケルを引き取った僕らは部屋へと戻った。

その傍ら、一夏は、ラウラとの模擬戦で怪我をしたセシリア達の様

子を見に行っている。

部屋に戻った僕は、更衣室から持ってきたアストレイアの言つとおり打撲や打ち身の手当てをカケルに施した。

それがすんだ後、張り詰めていた糸が切れてしまったように声を殺して泣きだしてしまった。

自分を救ってくれたカケルに対し、方法が無かった戸は言え、引き金を引いてしまった事を僕は……最悪な事で返してしまった。

それとカケルがなんで距離を置こうとしているのかが、今日の動きを見てわかったから……どうしようもなく悲しい。

カケルが持つ凶悪な力を目の当たりにして……

「僕は……カケルに」

「気にするな」

「えっ？」

顔を上げた先には、カケルが静かな目で僕を見ていた。

そして、口を開く。

「あの時は……事態を収めるためにも必要なことだった」

「でも……」

それでも僕は……

口を開こうとするとカケルが先に口を開く。

「……生きていればいい」

「カケル？」

「俺は……いや、いろんな事でもそうだが……人は、亡くなってしまえばそこまでだ。思いが告げられないままでも……だから生きていればいい。そうすれば、思いや話が聞ける」

カケル……

カケルがどんな人生を送って来たのかはわからないが、僕以上に失う『者』があつたらしい。

多分、想像できないほど……

その証拠に、言葉を口にした彼の目に少しの哀しみが垣間見た。

だから……彼の言葉は、重たく心に響く。

生きていれば……そうかもしれない……そうであるから

彼の言葉を聞いてそう思った時である。

《……失礼。マスター》

ベッドサイドに置かれ、今まで黙っていたアストレイアが発言をはじめた。

ただ、雰囲気がいいつもと違う……ただの機械のように

《本日の件に対して、『統括官』より説明要求を求められています》
統括官？

また、知らないワードに僕は首を傾げる。

そんな僕を見てか、アストレイアはいつものようにフレンドな言い方ではない、機械的に話し掛けてきた。

《Ms・シャルル。申し訳ないのですが、この先は機密事項に……》
「いや、アストレイア。このままでいい」
《ですが……》

話の流れ的に僕はこの場にいないほうが望まれているみたいだが……
・カケルがこの場に居ることを認める。

「……この先、何かあるかわからない。それに……もう少し身近にも理解者を作っておくのもいい」
《Ms・シャルルを巻き込むのですか？》
「……巻き込むと言うより、以前簡単に話した事を詳細に話し、理解してもらおう。一方的に情報を与えるのも問題だ」
《……わかりました》

少しの間を置き、アストレイアは、そこまでカケルが言うのと了承した。

《長距離の通信となるため、エリスさんを介して通信を行います》
「わかった」
《では……》

アストレイアが二つ折りの構造を展開し、ディスプレイをこちらに向け、映像を空中に投影しだす。

黒い空中投影が少しして……

『翔さん！どうしてくれるデスカーー！！』

サクラ色の髪をした女の子を画面いっぱい映し出す。

「えっ？」

誰デスカ、コノ人

『本社に帰ってきてすぐに学校から連絡が合ったと思えば、スターちゃん（スターダスト）がボロ雑巾と化しているじゃないですか！』

「すまん。……損傷の程度だが、各関節近くの制御機構だ」

画面上の女の子に対し、カケルは、慣れているのか謝りながらも僕が整備学科に預けた時に言われた損傷の程度を見事に言い当てた。

じゃあ、カケルは、それがわかっていて『何か』を使ったの？

『そんなんでも二日は、徹夜ですよ！？美容の大敵をわざわざ招いて！』

「……」

「えっと……貴女は？」

2人の突如始まった会話に少しだけ考えをめぐらせながらもただただ流されてしまう僕。

すると……

『ハウイ！ こんな時に何、彼女を部屋の中に入れてんですか！？
バレたら上がカンカンですよ！！』
か、彼女！？

僕の姿が見えているのだろうか、彼女は騒ぎ立て、僕を驚かせる。

僕が驚いている中、何時ものように表情をあんまり見せないカケルが説明してくれた。

「彼女は、エリス。俺と同じ企業に勤めている。……俺と同じ『側
の人間だ』」

「えっ？ 同じ側って事は……同じように来た」

『相変わらずクール過ぎですカケルさんは……まあいいや。はい！
私は、第97管理外世界 03『ライン・アース』調査隊所属、エ
リス。よろしくです！！』

カケルの言葉に僕が疑問の声を出した時、画面上の女の子が自分の所属を明かしながら自己紹介してくれた。

「あつ、ああ……よろしく」

『はいです』

結構偉いところだと思うんだけど、こつもニコニコ顔で応じられては、さっきの自己紹介時に聞いた新たなワードを聞けないから……結構つらいような

「エリー、世間話なら今度だ。今は」

『ええ、女の子は、長話が当たり前ですよ』

「エリー……」

『わかりましたよ！！まったく、シゴ中（仕事中毒）のカケルさん

には女の子心おんなのこころを理解できないんでしょうね」

「……仕事に女も男も子供もない」
『うえええん、カケルさんのバカアア』

僕がそう考えているうちにそれだけ言って、泣いていたのだろうか？ エリスの顔が消え、代わりに音声通信を示す『SOUND ONLY』の表示に画面が切り替わる。
そして……

『カケル・S・ハラオウン』一等空士、そこに居ますね』
「はい」

女性で、威厳がありそうな声が流れだした。

カケル・S・ハラオウン？

その中で、聞き馴れない彼の名に僕は疑問を覚える。

『S』が櫻井の略？

そう勝手に解釈しようとした時であった。

「『櫻井』の性は、偽名だ」

「えっ!?!」

カケルから明かされた事に驚きの声を洩らす。

それってどつしどつ……

『それと、リージュ』『一等陸士』との会話は聞いています。……どう言ってもりかしら空士』

僕が問い掛ける前に通信相手が怒っているような口調でカケルに問い掛ける。

その凄味が少し利いた口調に一瞬、顔の見えない相手に萎縮する僕。カケルも少し顔を歪めたが、すぐに表情を戻して通信に応じる。

「今後の為でもあります。リンディ統括官。今は、ごく少数での行動ですが、この先、我々と同じ目的、もしくはISの強奪等の事件が起こりうる可能性があります。その際、生徒側にもこちらの味方が居たほうが良いと私は、考えたからです」

『ですが、今は一部高官及び関係者に情報を開示しているのみ……特にISを扱う人に情報を与えても危険性が高すぎるわよ』

「だからと言い、いづれ私と私がIS学園にて出来た友が否応なく事件に巻き込まれる可能性が頭から離したくないのです。それに、今の時点で『IS』への疑問を持ってもらえば少なからず効果があるはずです」

『……わかりました。この件は、今日のところは組織概要などを話します。詳細は後日、改めて話しましょう』

少しの論争のあと、カケルと通信相手との話は、閉じられ、いよいよ本題へと入る。

『これより本題へと移ります。本日15:19、IS学園潜入任務中に空士、あなたは上官、または私の承認なく『機人』モードを使用したのは間違いありませんね』

機人モード？

カケルのISに組み込まれた特殊な機能なのかな？

疑問が僕の中を過る中、彼らの話が進んでいく。

「はい。間違いありません」

『では、そのモードを起動させたまま、学園生徒を殺しかけたのは、本当ですか？』

「……あと一歩でそうなっていました」

殺しかけたって……カケル！？

あと一歩でと言う言葉に僕は、背筋が凍り付いた。

確かにカケルとラウラは、クラス内でも不仲であることは認知されていたが、殺しかける程のものであったとは……夢にも思っていなかった。

『理由は？』

「……昔の私と似ていた点、それと彼女が……私の親類に似ていたせいもあります。 チンク・ナカジマ陸士に……」

僕が軽くショックを受けている最中でもカケルは、冷静な報告を続けている。

『そう……でも、それだけで使用したのであれば……処分は、わかりますね』

「……はい」

処分って……

「即刻、IS学園より撤収ですね」

「えっ!？」

カケルが呟いた撤回と言う言葉に僕は、驚愕の声を出してしまふ。

『そうね……部隊長がどのようなに上申を下すかは分からないけど……私ならそうします』

「まっ、待ってください!」

見えない通信相手に向かって僕は、叫んだ。

「シャルル、いい……」

カケルが僕を制止しようとするけれども……けれどもカケルが僕と同じ目に会おうとしている。

確かに僕には、引き止められないかもしれないけど……救ってくれたカケルを……いや、居なくなろうとするカケルを今度は僕が助ける!!

僕は、ある種、抱きはじめての思いに突き動かされながら気を引き締めて通信相手に向かって声を張り上げた。

「確かにカケルが、貴女達のルールを破ったのは悪い事かもしれませんが……カケルは、僕らを助ける為にも戦ってくれたんです? どう言う事かしら?」

「シャルル、よせ……」

「実は……」

僕は、カケルを無視してその時の様子を説明した。

カケルがたまたまそのタイミングで出てきたのかもしれないけど……あのタイミングで出てきてくれたからこそ一夏や僕は、無事であった。（流石にラウラへのアレは、やり過ぎだと思う）

「……ですから、カケルに重い処分を与えないでください。僕らも悪いんですから……」

「シャルル。もういい」「でも……」

「処分は受ける。……そうしなければならぬ」

そう言うカケルの顔は、組織の人間らしい固いものになっている。

カケルの……堅物

この数日で新たにわかったことだが、カケルは一見、感情に流されない真面目な感じがするが……自分からは、本当に弱いところを見せない堅物だ。

弱いところを見せないから強く見られるし、女子からの受けもいい。

だけど、少しは弱いところを見せて欲しいと僕は、思う。

「リンディ統括官、彼女の言ったことも一利あります……が、たまたまそうなただけ……」

『あら、女の子を助けるためには主義も必要？』

僕の言葉に何かが変わったのだらうか通信相手の女性が途端に柔らかい物腰となった。

「ですが……」

『なら処分は、リミッターの半月間、増大とデバイス機能の一部制限、あと機人モードのロックかしらねえ』

「……ちょ、リンディ統括官！ 部隊長からの処分がまだ……」

『ああ、言い忘れてたけどこの通信、部隊長にも流れているわよ。それに先に部隊長と話を付けて処分を任されたから』

その軽々しい最終通告にカケルはと言うと……

「……父さん、酷い」

完全に折れたらしくガツクシとうなだれてしまった。

すごい、カケルをあんなにも……

堅物のカケルを糸も簡単に陥落（？）させるなんて……僕は、通信相手に尊敬の意を抱く。

と……

『さあって、きな臭い話はこの辺にして、貴女がシャルルさんね』

SOUND ONLYの画面が切り替わり、代わりに黄緑色の髪をした人当たりの良さそうな女性を映し出す。

えっ……この人が通信相……

「リンディ統括官！ 最初から映像が回せるなら映像回線ぐらい開いてください！……」

それを見たうなだれていたはずのカケルが噛み付く。

えっ……えっと……

普段のカケルからは想像が出来ない食い付き方に僕は、茫然としてしまっ。

『ふふふ、叱るんだから雰囲気は必要でしょ？』

「だからと言い……大人でしょうが……第一、勤務中にそんな風にならないでください」

叫んでも無駄と分かっているのか小さく愚痴を零す。

『もう、今日の勤務は終わっているから大丈夫よ。カケル』

「ああ、そうですか……」

その言葉にカケルは呆れ返った。

「あ、あの……リンディ統括官……さん。カケルとは一体？」

ただの上官と部下の関係とも思えなかったため、僕は少し躊躇いながらも聞いた。

一体どんな関係が……

『あつ。ごめんなさいね、シャルル・デュノアさんでしたね』

「あつ、はい」

『私は、時空管理局総務統括官、リンディ・『ハラオウン』です。今後よろしくお願いしますね』

「はっ、はぁ……………」

ハラオウン？どこかで……………あつ！

女性の名を聞いた瞬間、疑問を思ったが……………直ぐにその疑問が無くなった。

「……………！カ、カケルと同じファミリーネーム！？じゃ、じゃあ、貴女がカケルのお母さん！？」

同じファミリーネームだった事から思わず叫んだが……………

「……………残念だが、シャルル。リンディさんは……………『おばあちゃん』だ」

「……………へっ、エエエエ！！！？」

嘘だ！こんなに若いのに祖母だなんて！？

『もう、カケル。そこはもっと茶目っ気で行かないと　ちなみにシャルルさん、カケルを含めて私には5人の孫がいるのよ』
「エエエエ！！！？」

さらに驚かされ、僕は、混乱した。

……………

Side Out

シャルルがすっかり驚きついていた。

無理もないと……俺は、内心、シャルルの気持ちを察していた。

ディスプレイに映る……母方の祖母、『リンディ・ハラウン』は、俺が属している管理局において様々な事件を解決、さらに……驚くほど若い容姿を保ったままの人物だ。

管理局等では、周知された人物でもあるからあまり騒がれないものの、所見の人物には驚くのが普通である。

「シャルル、受け入れてくれ、俺と同じように」

「……………うん」

俺の言葉にシャルルも驚き疲れたのか自然と頷いてくれた。

……………すまない

最終的に巻き込む形となってしまった事を心の中で謝りながらもリンディとの会話を再開した。

「リンディさん、毎回あなたは……」

『あらあら、報告には聞いていたけど可愛らしい子じゃない、あなたが気に掛けた子は。未来が楽しみになってくるわね』

「はづい！」

その言葉にシャルルが顔を真っ赤にする。

「……………リンディさん、からかわないでください」

『ええ、また難しい話に移るのに』

「リンディさん！ 頼みますから母さん達にも言われそんな事を一気に言わないでください！！ シャルルがオーバーヒートしそうですから！！」

ここでオーバーヒートされたら困る、と言うよりまだそんな話をする事じゃないだろう。

呆れながらもリンディに真面目な話に戻るように訴える。

『ちえ。 まあ、直接会った時に話せばいい事もあるから今日のところは、私達の事を知ってもらいましょうね』

「ぼ、ぼくがカケルの……………」

「助かります。……………それとシャルル。 真面目な話に入る。……………」

俺が関係している事を知ってもらったためにも

「あつ、う、うん」

俺の一声にシャルルは夢鬱から帰還を果たす。

そこから彼女の始まりでもあった。

Side Out

S i d e シャルル

カケルの一声で冷静さを取り戻した僕は、カケル達の話聞く姿勢を取った。

『コッホン、さてシャルルさん。カケルからはどこまで聞いているのかしら?』

「あつ、はい。カケルが別世界から来たこと等を聞きました」

『そう、なら私からは組織の事について説明させていただくわね』

そこからリンディさんの説明が始まった。

まず、カケルが所属する組織の名は『時空管理局』と呼ばれている。

組織概要は聴いたかぎりではこんな感じだ。

カケルの出身世界に本局がある組織で、その世界が中心となり設立した数多の次元世界を管理・維持するための機関。

さらに詳しく言うのなら警察などの司法機関も集約している『警察と裁判所が一緒になった』組織、もう一つ付け加えるなら分化管理や災害の救助等、様々な機関が一つになった強大な組織らしい。

「そうなんですか……」

「あと、こっちの世界のような軍隊みたいなところもある」

「えっ?」

警察みたいで軍隊って……

僕がそれに対して疑問を出しているとカケルが話を続けた。

「……悪い面も言えば、設立から百年近くたっているせいか、ダイクサイドもかなり深い……各次元世界への兵器類廃絶を謡ながら自分達は軍備を保有、昔の戦時中の日本のような『最悪、死しても事を成せ』の精神が一部に浸透、さらに最近の事をでは5年前のある事件で上層部の一部が死亡したから管理局内は三派閥化。表面では仲良しゴツコだが水面下では日夜喧嘩中等、その他e t c . e t c . e t c . 普通の巨大組織と大差ない」

カケル、一応聞くけど、その組織にいるんだよね？

組織に属しているならそこまで悪口言ってもいいわけなの？ ……
ほらリンディさんも困った顔しているよ。

僕がそう思った時である。

「ただ、組織全体がそうも腐っているわけじゃない。全次元世界の平和と法に基づく正義のために……はつきり言えば大切な誰か、自身が信じるもののために働く人も多い……俺がストレートに暗部も言うのも組織の大きさに惑わさせないためだ」

カケルが最後にそう締め括ると口を閉じた。

……なるほど

カケルは、カケルの考えで話を付け加えたのだらう。それを聞いたリンディも穏やかな笑みを浮かべている。

「そうなの？」

「ああ、現にリンディさんや俺の両親、それにその親友達がそれぞれ信念を持って働いている」

『……………言い方は、少し困っちゃったけどカケルの言う通り私達は、少し大雑把だけれども、人々の安全と無事を願いながら日々、働いています』

そう口にするリンディの眼は、真剣そのものだ。

強い人……………あつ、そうかカケルが目指そうとしている強さって……………

僕は、リンディを見て、カケルが目指そうとするものが見えた気がした。

『……………と、ここまでの話でわからないところは？』

話が一段落したところでリンディがそう聞いてきた。リンディの話で大体の組織概要はわかった。

あと、聞きたいとすれば……………

「説明も分かりやすかったんで、大丈夫です。……………ただ」
『ただ？』

「……………少しそちらの機密に関わる事かもしれませんが1つ、聞いてもいいですか？」

『ええ、答えられる範囲であれば』

そう答えて貰えたので、僕は、少しだけホッとしながら口を開く。
ずっと疑問としていた、とある謎を……

「高い文明、技術レベルを持つあなた方が何故、ISの調査を行うかについてです」

これは、カケルから別世界の話を聞いた中で生まれた僕なりの謎であつた。

僕が知りたい事、カケル達がISの調査をしている事である。

カケルやアストレイア等の話を聞いていて思ったのだが、カケル達の世界のデバイスと呼ばれるツール1つとってもこの世界ではISだけでしか無得ないような特異現象を容易に引き起こす事が出来る…… そうでありながらもなぜISの調査が必要となるのか、それが謎であつたのだ。

僕は、少しだけリンディの気配が変わつたのがわかつた。

その気配に少しだけ萎縮する気分に陥るが、ここまで来たら聴くしかない。

それを聴くのを認めているのか、カケルは止めにも入らなかつた。

覚悟を決めて、リンディからの返答を待った。

するとリンディは、少しだけ真面目な顔となりながら口を開いた。

『シャルルさん。 1つだけ、先に聴きます。 それらの事を聴いてどうしますか?』

「……カケルが動きやすいように計らいます。 ……勿論、ここで聴いた事は、カケルが皆に証すまで口にしない覚悟があります」

自然と出たその言葉に僕は、カケルが大事なんだなと改めて思ってしまう。

『……わかりました。 なら話しましょう』

そんな僕の覚悟を見てか、リンディは、深く頷いて口を開いた。

『私達、時空管理局は、あなた方の世界のようにある基準を満たしていなければ管理外世界として扱いますが、その世界において『ロストロギア』に分類されるものが発見、もしくはそれに近い事象が起こりうる場合、事件として捜査、活動を行います』
? ……ロストロギア?

また、新たに出てきたワードに首を傾げていると……カケルが口を開いた。

「ロストロギアは、共通意味で文明世界が発達の過程で作りに出した『負の遺産』の事を指す」

「『負の遺産』?」
それって……

「……この世界のもので例えるなら『白騎士事件』においても発射

された人類の負の遺産とされる、『核兵器』がそれに該当する。
………もつとも管理局が動く場合は、そんな一都市を破壊するレベルの破壊力を持つものじゃなく、今いる世界が崩壊………たった一個で複数の次元世界が消滅するようなレベルだ」

たった一個でそんな……

負の遺産と呼ばれる物は、どの文明、世界であっても共通の意識『文明の崩壊』があるのだと僕は、背筋に冷たいものが流れたのを感じながら思った。

……あれ、ちょっと待って……まさかISが？

「じゃあ、僕らの世界のISが？」

この時、ISの事を改めて考えたその瞬間、一気に怖い事が次々に思い浮かぶ。

ISのコア自体、1人の女性にしか製造出来ない点や完全なブラックボックス化がなされている点があるが………それを各国は『全く疑う事なく』扱っている。

それが普通だと言えば、普通なのかもしれないが……カケル達の話で別世界では『危険なもの』とされているのであれば………今の世界は『かなり異常』である事が自然と……いや、目の前にあった『異常』が顕になってくる。

そんな冷たさを感じつつも僕は、リンディの言葉を聴く。

『かもしれない……何せ、私達も『5年前』にISSの存在を知り、ある理由から調査を始めたのです』
5年前から？ それにある理由って……

僕は、新たにそんな疑問を抱きながら続きを聴く。

『5年前のある事件で私達は『ISSのコア』を押収し、分析を行った際、『我々が知らない魔術がISS』に使われている事と……ISSが持つ特性に近い将来、危険を及ぼす事がわかったの』

えっ？ ISSに……『魔法』が？

ますます意味がわからなくなった僕は……話を聴き続た。

そして……

「……まさか」

それが僕のISSへの謎を深める事の始まりでもあった。

第15話 覚悟と示す者達

食堂

Side 一夏

俺は、筈と一緒にボックス席で遅めの夕飯を取っていた。

ただ、一言付け加えるなら……何時もならある会話がまったくいって出てこない静かな夕食だ。

先ほど見舞いに行ったセシリア達が、ISの方の損傷が酷く、トーナメントへの参加が無理となっただけで特に酷い怪我を負ったわけではなく、ホツとしているのだが……俺達の間には会話がなかった。

理由は、簡単だ。

友から凶悪なまでの力を……『見せつけられ』たからだ。

しかも何時もの翔……らしさを感じられない獣のような力を。

ぶちギレた……それだけで片付けられるほど簡単な問題ではない気がするのは、翔だからだろう。

代表候補であるセシリア達2人と途中から乱入した俺とシャルルを同時に相手をしていようともし余力を見せ付けたラウラを翔は、赤子を捻るように容赦なく『殺そう』としていた。

翔が何を思い、何を感じながらあんな暴拳に出たのか？

……俺が翔の言う通りにケリを付けないでいたのが、翔にあんな事をさせたのか？

確かに俺とラウラとの間には、戦う訳があった……だが、俺は意図的にラウラとの戦いを避け続けていた。

俺が戦うと言えば、箒達を否応なしに巻き込む形となってしまうからだ。

だが、そうしている間に……怪我を負わせる事態となった。

今度は、俺がこの手で決着を着けなければならない……だから……

翔にあんな事をさせてしまった俺は、もう翔や箒達を、守るべき仲間を巻き込んでほならない。

俺を心から憎むラウラを終わらせるためにもだ。

俺が、静かに決意を固めていると……

「何、葬儀みたいに暗くなっている」

「!?!? 翔!?!」

シャルルに肩を借りて翔が歩み寄ってきていた。

Side Out

Side 篇

私は……翔が持つ『力』に自分の姿を重ねてしまった。

翔の見せ付けた力は、圧倒的であり……それに今の自分の達筋に似ていた。

アリーナの観客席で専用機がなく、手を出せない事に指を啞えながら見た翔は、力に執着した……愚かしい自分のような……感じであった。

だが……その戦いの終盤、私は、自分との違いを見せ付けられてしまった。

シャルルに止められた時、一瞬だけだったが翔は普段の状態へと戻っていた。

そこが翔と自分との違いだ。

……力に酔い痴れるか、そうでないかが……

翔は、もうすでに酔い痴れないまでの強靱な精神じしんを持っている……
なら私は、それをどう得ればよい……自分だけの「力」が……
欲しい……酔い痴れないまでの自分を律する「力」を……

私が迷いの道に一筋の光を、求めながら考えている。

と……

「何、葬儀みたいに暗くなっている」

「!? 翔!」

いつの間にかその人物、翔が現われていた。

ただ、シャルルに支えられているところを見ると万全の体調ではな
いらしい。

「隣、いいか？」

「あ、ああ。いいぜ」

翔は、それだけ聴くと一夏の隣へと座る。

「えっと……篠ノ乃さん、隣、いいかな？」

「ああ」

シャルルは、私の隣へと座ったが……何やら青い顔をしている。

「? 気分でも悪いのか?」

「えっ! あっう、うん。夕食に食べたものがいけなかった……のかな?」

そうシャルルは、よほど気分が悪いのか、歯切れの悪い答え方をする。

「?...そうか」

「大丈夫なのか? シャルル?」

「うっ、うん。少しすれば落ち着くと思うから……」

一夏に対しても歯切れの悪い受け答えで返した。

そんなシャルルを脇目に見るが……今の私は、翔へと視線を移していた。

あのような戦いを見せ付けた翔を……

Side Out

Side 翔

シャルル、もう少し我慢してくれ

筈とシャルルのやり取りを片隅に捕えた俺は、少しばかりシャルルを思う。

部屋での通信を終えた俺は、ISの謎と危険性を知り、かなりシヨックを受けたシャルルを無理矢理、食堂へと連れてきていた。

あのまま部屋で大人しくしていた方が身体的にポロポロの自分と心的にシヨックを受けているシャルルにとって良かったのかもしれないが、姿を見せなければ、やな時であろうとも友達が部屋へと来てしまう……寮制度の疫どころがあったから出てきたのだ。

だから無理矢理、部屋から出た俺達は、人が少なくなった食堂で夕食をとっていたのだ。

夕食が終わり、部屋に戻ろうとした際、暗い気分に陥っている一夏達を見かけたため、立ち寄った。

暗い気分になっている理由がわかっていながら……

「俺とラウラとのアレか？」

「っー！」

隠す事無く、今日の件を口にした俺に一夏と箒は、言葉を詰まらせた。

「お前達が、気にする必要はない事だろう？」

それを見た俺は、少しばかり突き放すような言い方で本音を言った。

確かに普段の俺からは感じる事のできない荒々しく、日本の古来の歴史の中で登場する戦いの神、『アシユラ』を纏ったような怒りを一夏達は、感じたのだろう。

だが、それはラウラの横暴を止められなかった自分への戒めも含めた行動であり、一夏達が暗い気分陥る理由にはならないはずだ。そうなると2人がそれぞれ塞ぎ込んでいる訳は……

「それぞれ思うところはあるかもしれないが……アレは、俺がやった事だ。ラウラには、個人的にもイラついていた」

「けどよ……」

「ならこう言えばいいのか？ 『一夏、お前がラウラとの戦いを避けていたから俺がこんな事をした』と」「……はつきり言うな」

俺の発言に一夏は、タジタジとなるが……

「確かにそうだが、翔。お前は、あそこまでの力がありながら何故、今まで出さずにいた？」

逆に篤が、昼間、俺が問い掛けた事にも関わってしまう今回の件について、疑問を投げ掛けてきた。

力を持ちながら振るう事をしなかった俺に……

「俺は、強さを示すつもりはない」

「翔？」

「……だが」

「強過ぎる者は、災厄を呼び込む……どんな理由があれ、それは変

わらないはずだ」

「……………」

俺の言葉に筭が押し黙ってしまふ。

そつだ、強すぎる力は、意味は人それぞれだが責務が伴う……………例えそれが正義であれ、悪でもあれ。

ようは、善悪は関係なく剣は、剣でしかないのだ。

そんな中で筭が目指さなければならぬ強さとは……………

「目立て、逆に小心者でいるとは言わないが……………俺は、人を傷付けてまで強さを示し、酔い痴れるような奴には成りたくもない。それにそんな奴を許してはおけない……………それだけだ」

言葉を選んだつもりだったが……………俺の言い方に一夏達が目を丸くしていた。

「……………とにかく。一夏、今、お前は……………」

俺は今、一夏がしなければいけない事を突き付けながら一夏の付け合わせである生卵を手に取り、一夏に放る。

「……………おっ……………とと」

それを一夏は、右腕だけ『部分展開』を行って卵を優しく抱き留める。

「今度こそ、ラウラと決着をつける。二度と仲間に出させないためにもな」「!……ああ!」

俺は、一夏に課していた『課題の成果』を満足しながら俺は、一夏の覚悟を求める。

それに対して一夏は、すでに決めていたのだろうか、覚悟に満ちた表情で応える。

もう仲間を傷つけさせない覚悟を一夏に着けた。

こうなれば負けはしない……あとは、一夏を鍛えてやれるだけだ。

一夏の覚悟を見た俺は、鍛えるためのプランを立てつつも口を開こうとしたその時。

「ようやく見つけた、織村君達!!」

「篠ノ乃さんもいるけど……大ジヨブだね!？」

「早いもん勝よ! 突撃いいイ!!」

「織村君!!」

「櫻井君!!!!」

「デュノア君!!」

何故かは知らないが、騎兵隊の如く団体の女子群に俺達は、囲まれた。

Side Out

Side 一夏

なっ、何だ!?

雪崩のように表れた女子群に俺はただ、目を丸くするだけであつた。

箒やシャルルも驚いたように目を丸くしている。

「? どうしたんだ?」

「これは一体なんだ?」

流石の翔も俺と同じように目を白黒させながら俺より先に口を開いている。

その次に言葉を発した俺の声に応じるように女子達は、何かの書類を俺達に見せながら口々に告げてきた。

「「「これ!!」」」

見せられた書類は、学内の緊急告知文が書かれた申込書であった。

えっと、何々……

「今月末に開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、2人組での参加を必須とする。なお、事前のペアが無理な場合、抽選により選ばれた生徒同士でのペアとなる……………」
「でっ?」

「ダアアア、櫻井君!?!」
内容を読み上げた翔が少し呆れた表情で問い掛けた。

女子の方も翔の態度に思わず絶句した声を出す……………」

「とにかくっ!!」

すぐに切り替え、柵に阻まれ、手を伸ばすしかないゾンビどものように手を伸ばしてくる。

ある種、コエエ!!

「私と組んで織村君!!」

「デュノア君!!」

「櫻井君!!」

そう押し掛けてくるうちに……………さらに人盛りの後ろからも増援が……………てか増えすぎだ!!

何故、いきなりトーナメントのルール変更があったのかは知る余地がない……………が、集まってきているこの1年生の女子群は、学园内の貴重な男子成分をく……………いやいや、男子ととにかく組もうと突貫してきている。

……今回は、セシリア達がないのが幸いしたか？と思いたくなる
ぐらいの数だ。

とは言え……い、いきなり言われても……と、どつすりゃ……

俺が思い悩んでいると……

「まだ組んでないなら……」

「悪いが、この4人の中で組む」

……えっ？

翔の発言に場が一瞬固まるのを聞いた。

Now Reading

……3……2……1

「はっあ！？」

「……なっ！？」

「……えっ」

以下、女子達。

「クソオオ！！」「」

「先を越されたアアア！」

「でも、男同士もいい絵に……ゴホン」

「ちょ、まって4人の中でって事は、篠之乃さんも……」

「篠之乃さんだけ両手に花だああああ」

等々、様々な叫びが揚がった。

それから少して、落ち着いたところで翔が理由を説明する。

「本当にすまないと思っっているが……下手に組み直すよりも実力がわかってるもの同士のほうが組みやすいと思っただから……な」

「……なら、仕方ないか」

「無理して組んでもなあ……」

翔が理由を説明すると女子達が自然と納得してくれた。

そして、1人、また1人とそれらの女子達が解散して行って俺達だけが残った。

「ふう……？ どうしたんだ？」

翔が女子達を見送ったあと、不思議そうな口調で俺達を見る。

「ど、どうしたじゃ……」

「無いと思うよ。カケル……」

「……うむ」

「何故だ？ 下手に別の相手と組むよりはマシだと思っただが……」

俺達の言葉に翔が首を傾げる。

あのなあ……

そりゃ、翔が言っている事もわかる気がするけど、いきなり決められるのもこちらとしては困る。

この4人で組むとなると絶対、片方が射撃タイプでなければならぬ。

飛び道具が味方側に有るといふのは近接戦しか出来ない俺にとって大きな助けにもなるし、それに俺が近接戦で相手を牽制しているうちに射撃で倒してくれる、そんな戦略的なメリットも大きい。

多分、俺は、翔かシャルルと組むことになるだろうなとこの時点では思っていたのだが……

「組み合わせは、俺とシャルル。一夏と箒とで考えている」

「へっ!？」

「なに!？」

「ええっ!？」

翔の誰から見ても無茶な組み合わせに俺達は驚きの声をあげた。

Side Out

Side シャルル

僕とって……やっぱり、隠しているから？

僕は、驚きはしたもののカケルの考えは少し読めた。

カケルは、僕の正体を隠すためにも自分と組むと言いだしたのだろう。

それにカケルが自分の組織のために動く時に僕となら動きやすいと考へての事だと思ふ。

そう考へながらカケルの話を聞く。

「俺と箒じゃ、同じ距離だからキツくねえか？」

「う、うむ！ これでは飛び道具のいい的ではないか……私個人なら別によいが……」

「箒？」

「な、何でもない！」

「……各々、思うところがあるかもしれない……が対ラウラ戦も意識した編成だ」

対ラウラ戦を？

不思議に思いながらも僕は話を聞く。

「確かに接近戦が得意な2人を組ませるのもどうかと思うが、接近戦でうまく立ち回ればラウラの集中力を欠くことができる……それに僚機がいる戦闘を最大限に生かせればあるいは……」

「？ どう言うことだ？」

カケルの意味深げな言葉に一夏が首を傾げる。

「ISは、その性能から単機での戦局投入が多い。特にラウラの動きをよく見ていれば、ラウラ自身が一対一での戦いより、一対多数戦を意識した動きをしている」

「一対多数って……あれ、ちょっと待てよ翔、セシリアの機体も一対多数戦の装備があるだろ？ それだったら戦い方が似てくるんじゃないのか？」

一夏の疑問も最もだ。

言葉だけを聞けば同じような戦法を思い浮かぶだろうが……

それにたいしてカケルは、机の上にあった調味料のビンと箸を使って何かを示し始める。

「わかりやすいようにすればこんな感じだ。セシリアの場合は、射撃による同時攻撃だ。つまり『的、一つ一つに当てるための装備』だ」

3つの調味料のビンに対してセシリアを見立てているのだろうか、青い蓋のビンをから1本の箸を1つの調味料のビンに、少し離れたところから別の箸達を調味料のビンへと渡す。

セシリア本体からは一点、他のブルー・ティアーズの子機からも別のターゲットへの攻撃をこれは示しているのだろう。

「一方でラウラは、一対とは格闘、または射撃で戦闘。別のターゲットへは牽制、あるいは妨害をして状況的に2対1の環境になるのを防ぎつつ、ある程度ダメージを与えたら別のターゲットへの攻撃を行う多数戦タイプだ」

今度は、青い蓋のビンから複数の方向に箸を置き、一方向に対してだけ箸を2本おいた。

「だが、この戦い方は同じ距離で同時に仕掛けられると牽制の意味合いも弱くなり簡単に……」

そう言いながら青い蓋のビンを挟み込むように調味料のビン達を動かしてぶつけてやる。

「攻め落とせる」

「なるほど……」

「うむ……」

一夏と篠ノ乃さんは、カケルの説明を理解したらしく頷いている。

「多分、ラウラは、自分側が複数の戦いは慣れていないはずだ。

そこに付け込む」

「なるほどなあ……けどよ、片方がバリバリ射撃系だったらどうすんだ？」

一夏は、また首を傾げる。

確かにラウラの相方がもし自分のように豊富な武装で援護をすれば、状況はいとも簡単に変化してしまう。

それに対してもカケルは対策を講じていた。

「それに対しては、箒機の装備をかえればいい……詳しくは、木曜辺りに外に出て話す」

「えっ？　ここで話さないのか？」

「ここで話すと聞き耳をたてた輩に対策をたてられるかもしれない……詳しくは学外だ」

そう言いながらカケルは、立ち上がるが軽くよろけてしまう。

「おっ、おい？」

「大丈夫だ。部屋に戻るか、シャルル」

「う、うん」

僕は、カケルがもうここでの話は終わりだと目で告げているのを知

り、カケルの傍らについて肩を貸しながら部屋へと戻りだした。

「気を付けるよ。翔」

「ああ、そつちも木曜まで『ポテチ』を漁ってるよ?」「ああ」

それだけ一夏に返し、僕らは食堂を後にした。

1年生 寄宿寮

翔 & amp; シヤルル部屋

部屋に着くと僕は、カケルをベットへと寝かせた。

「……クッ」

「大丈夫?」

《平気ですよ、これくらい。ねっ、マスター》

「ああ、これくらいなら1日寝れば修……いや、治る」

そう言うカケルの表情は、少しだけ普段どおりのものになっている。

「ならいいけど。……ねえ、カケル」

「何だ?」

「さっきの組み合わせだけど……やっぱり、僕の事やカケル自身の目的もあったの?」

少しばかり酷い事を聞く女だなと僕は、心がチクリと痛んだ。

それに対してのカケルの返答は……

「……それもあり、さっき説明した事もあり……結局は、筈のため

でもある」

「えっ？」

篠ノ乃さんのため？

いったい何がと僕は、同性としての敵対心も無意識に抱きながらカケルの話の続きを聞いた。

「昼にも言ったが異性としてじゃない」
ホッ

その言葉に何故か僕は、心が軽くなる。

「ただ6年間、純粹に思い続けている筈が求めている答えが一夏に有るからだ」

「？ どういう事なの？」

確かに普通の学校生活でも篠ノ乃さんやセシリア達は、一夏に恋心を抱いている事を感じ取るが、なぜ筈だけカケル自身が気に留めているのだろうか？

「筈は……重要人物保護の名目で一夏と離れ離れになった……それだけで十分だろ？」

「あっ」

僕は、その言葉ですぐに理由を知った。

S i d e O u t

S i d e 翔

人はいつ離れ離れとなるかは、分からないもの……不当な理由にて引き離される事がある。

特に篤は、そんな中であつても一夏を純粹に思い続けた。

情に流されてはならないと昔の俺であつたらより現実的な編成を考えただろうが……そんな純粹さに俺は、思いの力に賭けた。

「……まあ、それがなくとも喧しいからな一夏の周りは」
「は、はあ？」

俺の続く言葉に呆気にとられるシャルルに俺は、予め決めていたあの提案を出す。

「話は変わるが、シャルル」
「何、カケル」
「今度の木曜日の件だが……」

俺の提案にシャルルは、目を丸くして驚いた声を出した。

「エエエエ！？」
《あらあら》

その提案とは……

Side Out

一夏の部屋

Side 篇

一夏と話し合うため、私は、一夏の部屋の前に来ていた。

突拍子に決まったペアでは有るものの……私は、混乱していた。

専用機を持たぬ私では力不足ではないか、一夏の力に慣れないではないか……そして一番の不安感は、一夏の隣で私は、私を見失わずに戦うことが出来るのかだ。

それらが頭の中をドロリとした感覚にし、混乱を与える。

もしも一夏が自分とのペアに一筋でも影があるなら私は……

私は、不安と並々ならぬ心の揺さ振りに穏やかでない心境の中で、一夏の部屋の扉をノックする。

『あいてんぞ』

中から返事が着たところで、私は、扉を開いた。

「邪魔するぞ……なんだこれは!？」

「ん？ なんだ篇か」

部屋に入った途端、思わず声を荒げてしまった。

「なんだではない！ なんだこの多量の菓子袋は!？」

一夏の部屋の中には、チップス系の菓子袋が多量におかれていた。そのほとんどの袋がひらかれていて、幾つかが粉々になったものの中に入ったものもある。

「……翔からの訓練メニューだ」

「訓練メニューだと？」

ポテチを使った訓練など聞いた事が無い。

私は、ふざけているとしか思えない訓練の意味を聞く。

「いや、翔がな。全部をマニュアルするなら微細な力の入れようを学んだほうが良いと言って……ポテチ掴みをやってたんだ」

「ポテチ掴み？」

「ああ」

一夏は、ISのヘッドセットと両腕部のみ部分展開をし、ポテチを1つ手に取った。

「普通、ISは搭乗者からの視覚情報だけでPICやパワーを調整しているわけじゃなくてハイパーセンサーを通じて俺が感じ取っているらしい。けど、それを独立するようにするとちよつとした力加減で……」

ヘッドセットだけ展開を解くと力加減間違えたのかポテチを粉々にしてしまった。

「こつなつちまう。あと、IS自体のフィードバックで先に動いちまうからその点の改善も含めた訓練だ」

今度は、力加減がわかってきているのかポテチを摘んだまま持ち上げても崩れずにいる。

「！」

そんな芸当を体得したのか！？

「まあ、慣れるまで苦労した……何驚いてんだ？」

顔に驚きが現われてしまったのか、ISの展開を解きながら私に問い掛けてくる一夏。

私は、それに対してすぐに気を引き締めると言葉を返す。

「い、いや何でもない……一夏」

「お、おう、なんだ？」

「私などでよいのか？ その……と、トーナメントでのパートナーは？」

「？何いつてんだ？ それならさっき……」

「翔が言うからではない……お主自身がどうしたいかが聞きたい……私と組むのに不安がないのか？」

不安の煽りか、少しばかり声が上がってしまった。

より実戦的に成っていく一夏を見ているとこのまま、一夏の足を引っ張ってしまうような気がする。

だからここで一思いに身を退いた方が……

「ないぞ、全然？」

「ハツア!？」

一夏の返答に思わず透かしを食らってしまった。

「だってな、翔の言った件もあるけどよ。一番お互いの手を知っている奴と組んだほうがいいだろ？」

「う、うむ。そ、そうだな」

「それに翔やセシリア達とだったら実力の差があって逆に足を引っ張りそうだし、ここはやっぱり組みやすい同門のよしなだな」

一夏……

ニカリと笑いながら告げるその一夏に心が温かくなった。

一夏は、自分を信頼してくれる……これほど嬉しい事はない。

なら自らがすべき事は……

「そっ、そうか。うむ、よろしくな一夏」

「おっ、おう」

Side Out

Side 一夏

篝の奴、なんてっか、嬉しそうだな？

返答に自然と嬉しそうな顔となってくる篝に首を傾げてしまう俺。

それにしても翔の奴、俺と篝を組ませるって……俺に対しての当て付けなのか？

翔の思惑はわからないが、もしかしたらもう逃げ出せないようにするために筭と組ませたのかと思う部分も出てきている……………だが

まあ、何にせよ。負けはしねえよ……………だから翔、もう手は出さなよ

俺は、自然似そう考えながら筭との話に移る。

Side Out

???

Side ???

「ようやくだ。ようやく、クソな世界に狼煙を上げられる」

「なあなあ、『こいつら』を見たISの雌豚、どう見るかなあ？」

「知るかよ……………出てきたら出てきたらで潰すだけだ」「あゝ、俺達の目標は、ただ雌のケツを追っ掛けてるバカ共を殺しまくる事だろ」

「ちげえねえ！」

部屋に入らず、僅かに開いた扉から漏れ出る声を聞いた俺は、ため息をつくしかなかった。

やれやれ……………金で雇った弱者が力を与えた途端にこうまでなるか……………

一応、彼らに与えた『力』は今まで作ってきた物のプロトタイプ
の1つだからIS相手にうまく立ち回ってせいぜい機能不全にする

のが限度だろう。

それに殺しすぎた場合の『保険』を賭けてある。

こんな『人殺しのマシン』を作っておきながら人が死ぬのを嫌うなんてどんな奴だよと俺は、自身に対して自虐的な笑みを浮かべる。

同時に俺は、『弟子』が やった事へのけじめをこの世界に示さなくてはならないのだろうと考えだした。

ISと言う……可能性を歪めた形で世に出した彼女へ……

「東、君が生み出した『歪み』、背け続けるなら俺が示す物は……」

俺は、目の前に静かに身を静める5つの災厄に銃の形にした手で射つ仕草をとる。

『理性』と名付けられた鋼鉄の殺戮者への皮肉を込めて……

特別番外編 2年目の春を前に〈新しき始まり〉（改訂版）（前書き）

諸事情により本編更新が遅くなります。

今回は、それを踏まえまして以前、IS短編 グラハム杯と題された作品集に投稿した作品の改訂版を投稿させていただきます。

未来軸を意識した構想ですが、未来はどのようなものかはわかりません。

さあ、お楽しみを

特別番外編 2年目の春を前に〈新しき始まり〉（改訂版）

3月中旬

IS学園

第二アリーナ

Side 翔

先日より行われていたトーナメントの最終日であり、特別戦のこの日。

自身のISを纏った俺は、カタパルトから飛び出した。

歓声に沸き立つアリーナ。

そのほとんどが女子であるが、外来やVIP用の席にはスカウト目的であろう企業の人間らしき人物の姿も見受けられる。

ここまでは、いつものトーナメント戦のような入り方だが、その中で一際、俺達を見つめてくる一団がある。

その一団をよく見ると殆どが女子ではあるが、IS学園の制服ではない別の制服であったり、中には私服姿でいる。

それぞれの眼差しには不安や尊敬、憧れのようなものが入り交じっている。

（かなり来てるな

今回の相方である白式・雪羅を纏った一夏がカタパルトから射出さ

れ、俺の傍らに並び立つとその一団を見てプライベート・チャンネルを流してきた。

俺は、それに応じるため自分もプライベート・チャンネルを開く。

(ああ、一番忙しい時期でのこれは厳しいが……いいプランでもある
(まあ、そうだけどさ。楯無さんが立てたプランに千冬姉が乗っ
てくれたのは大きかったよな？
(そうだな

今回の1年生最後の行事、学年別トーナメント。

昨年の6月と7月に途中中止してしまった学年別トーナメントを煽り
で例年よりも注目が高いこのトーナメントは1年生の1年間の成長
具合を見る事が主な目的である。

だが、今回はそれだけでなく生徒会長 更識楯無の提案で新年度か
ら入学してくる新1年生を招待しており、間近でISバトルを観て
もらう事となっている。

その理由は……

(千冬先生もそうだが……この1年色々とあり過ぎて学園側の信用
が危う

(そうだな……俺や翔がISが使える事から始まって、みんなが『
怪物』達に捕食されかけたり、翔が『魔法使い』だったり……あつ、
あと別世界に行ったしな

(こちらとしてもIS技術の『拡散』が予想を超えて異様だった事
には驚いた。……それに一夏、お前が書の『主』となった事がこち

らの最大の驚きだ

(ま、まあな……同時に俺も自身の秘密を知っちゃったからな……今でも驚いているよ。驚いたと言やあさ……シャルが『実家』に攫われて結婚させられそうになった時の翔の怖さは驚いたのである。翔達が当事者となった数々の事件により、各国の動向、さらには一般家庭より入学してくる女子生徒の親の不安感が露骨なものとなっ
てしまい、IS学園は多少なりとも辛い立場に立たされてしまったのである。

その状況打破を含め、楯無は、入学してくる新1年生とその一部の『友達』に対して今トーナメント戦の観戦を了承する事を提案した。透明さを見せるための処置でもあるが、ある取って置きのイベントが用意されていた。

(……忘れる

(忘れられないな、あの後

余計な話に話が転化しかねなかったため、ある条件の下に密約を交わしている『伏兵達』に話を振った。

(……『マテリアル』ズ、一夏と箒はその後、どうなったんだ？
(なッ!?)

《マスターと篠ノ乃さんですか？

《ああ、一夏とね！

《ふん、下僕にしては……

(オイ！お前ら何バラそうとしてる！

《何故です？事実関係を明かすのはいけないのですか？

(あつ、いやそういう意味じゃ

(そろそろ始まる。…引き締める

俺達に対し、向かい側のピットから出てきた相手を睨みながら、俺は感覚を研ぎ澄ましてゆく。

Side Out

Side 一夏

翔の一声で我に返った俺は、白式の『中にいる3人の少女達』に呼び掛けた。

《話は、あとにする。……今回は悪りいけど手を貸さないでくれよ？

《了解……マスター、頑張ってください

《うん、わかったよ！やつちやえ！！

《……ここまで来て負けたら承知せぬぞ

3人の少女達の激励のようなものを受けた俺は、苦笑しながらも相手をみる。

エキシビジョンマッチの相手を……

その相手とは……

「まさかこんな形で千冬姉と戦うなんてな」

「ああ、そうだな。……………客よせパンダにされた気分だがな」

俺がつぶやく先には……………第1回モンド・グロツソ優勝者であり、『ブリュンヒルデ』の異名を持つ……………学園最凶の教師であり、俺の姉『織村千冬』がどこから持ってきたのか現役時代のIS『暮桜』を引つ提げ、この場にいた。

「まあまあ、織村先生。いいじゃありませんか、皆さんも喜んでますし」

千冬姉の相方、山田先生が相性がいいISラファール・リヴァイヴを纏って、抑えようとす。

ただ通常のリヴァイヴとは違い、背中のスラスターが追加されたり、両腰にもフィンアーマーのようなものが追加されている。

どうやら本気モードのカスタム仕様らしい。

「ふん。まあ……………叩きのめせる相手がいる分まだましか」

そう呟く千冬姉の眼は、完全に相手を狩る眼をしている。

その眼に俺は、生唾を飲み込む。

最終戦でもあるイベント、今尚最強の名を持つ織村千冬とその弟であり、世界初の男でISを使える男、つまり俺、織村一夏と戦う事だ。

このプランが持ち上がった時、俺は一瞬、恐怖を抱いてしまった。

何故なら千冬姉の強さは、家族である自分がよく知っている事であり……そして何より、千冬姉に守られていた意味を改めて知ったからだ。

そんな恐怖を看破してくれたのは、翔や篤達が『存在する意義』に迷っていた自分に対して……『光』を示した事が強い。

その『光』を俺は、この戦いで千冬姉に示したい……俺が俺である事を得られた事を……守っていてくれていた千冬姉に家族として……

翔と山田先生は、ルール上の数合わせかもしれないが付き合ってもらった。

翔は、俺が何をしたいのかわかっているらしく……タッグを組む際、こんな言葉を寄越してすぐに了承してくれた。

何かを得たなら……伝えてやれ、それが出来るのが『人』だろ？

何かを得たなら……か、確かにそうかもしれない。

この1年近くで俺は、出会い、学び、失い、そしてたくさんもの

を『得た』……だから

俺は、雪片式型だけ展開すると構えた。

千冬姉もそれに応じるかのように白式の雪片式型の『オリジナル』である『雪片』を展開し、俺と同じように構えた。

歓声に湧き立つ『決闘場』……

同門の流派、そして何より一種の師弟関係である俺と千冬姉……
・その勝負は、すでに始まっていた。

赤いシグナルが、青へとかわった瞬間……

「ハアアアア！」

「ウオオオオ！」

開始のカウントがゼロとなった瞬間、俺と千冬姉は最大加速で飛び出し、零落白夜の輝きを発振させながら剣を振るった。

『零落白夜』と『零落白夜』の輝きが重なり合う。

重なり合った瞬間、強い反発が生まれ、俺は押し負けそうになるがそこを強引に押さえ込む。

「成長したな一夏」

「千冬姉こそ、相変わらず強えよ」

つばぜり合いのように俺達は一步も退かずに言葉を交わしあった。

「…………どうやらもう私は要らないみたいだな」
「要らなくはねえよ…………千冬姉は、俺の家族…………それ以下は絶対ねえ」

1度目のつばぜり合いから離れた千冬姉は何かを感じ取ったかのよう
に言葉を発し、俺はそれに対して言葉を返す。

「言うものだな…………大切にしたいと思った奴は出来たか？」
「ああ、それならたくさん出来たさ」

二度目のぶつかり合い、これにも思いをこめて打ち込む。

得たものすべてを伝えるために。

「たくさんって…………なら確認するが、あの娘達の好意にはいい加減、気付いてるな」

「ああ。てか…………4人は振っちゃまった」

思いぶつけられた拳げ句、それで自分がたった1人の『女』を思っていた事にようやく気付かされた。

結果、他の『4人』を振ってしまった。(…………その直後は、思い出したくもない地獄を体験してしまった)

「このバカが、お前が早く振っていればアイツらの傷はさぞ小さかつたろうに」

「…………反省しております」

雪片に力を掛けて弾き返しながら俺は、つばやきを漏らす。

「反省して済むか………だが大事にしてやれよ、選ぴとつた小娘を」

「ああわかつてるよ」

俺は、刃を交わしながらちらりと観客席に眼を走らせた。

その中に期待と不安を絡ませた視線でこちらを見る1人を見た。

いつもは強気な表情が今では、不安で曇らせている。

それに気が付いた俺は、一回だけ大丈夫だと言わんばかりに笑ってやる。

受けとめた『あいつ』は表情を赤く染める。

恋をすると人は変わるといふのは、お互いにらしい。

それを見たのか、千冬姉はつぶやきを漏らした。

「ラブラブなのはいいが………今度、私の相手をして貰うからな」

「千冬姉………どんだけ試練与えようとしてんだよ」

姉の鬼畜さに俺は、ヒヤリとしたものが流れだす。

「手塩に掛けすぎた『弟』をやるんだそのくらいやって当たり前だ………それに『結婚式』はまだかと『アイツ』が煩くて適わん………」

………」

千冬姉が雪片を大きく振るって俺を弾き返す。

「それに……私に勝つまではやらんつもりだ」

あの千冬姉……いつの時代の『お父さん』ですか……

千冬姉の発言に冷や汗を通り過ぎた。

流石に『あいつ』が死にかけの姿を見たくない、そこで……

「……千冬姉、俺が勝ったらキャラにしてくれねえか？」

「何故だ」

「ええと……俺が決めた相手なんだ。なら俺が勝たなきゃ示しがつかねえだろ？」

「阿呆らしい……がそれに『のった』」

いったん離れた千冬姉は、雪片を構え直しながらさらに言葉を重ねる。

「……だが、そのつもりなら『手』を抜くつもりはない。……さあ、かかってこい」

言葉を重ねた千冬姉の表情は、眼をまるで目の前に獲物を置かれたトラのように輝かせながらさらに恐ろしいものになっている。

ヤバさ100%ってか……

（ですが楽しそうですね、『主』

脳裏に新しく響いた言葉に俺は、自然に笑みを浮かべている事に気付いた。

「当たり前だろ」

俺も雪片を構え直しながら言葉を続けた。

なんたつて……

「以外に早く越えられるかもしれないんだ、千冬姉をなら全力を出すのが礼儀だろ」

眩きを漏らして再び睨み合う俺と千冬姉……

そして……

「今日こそ勝つてやるぜ、千冬姉!!」

「やってみろ!一夏!!」

激突する俺達、零落白夜の輝きを煌めかせながら螺旋軌道を刻み、上昇していく。

まるで無限の空を示すかのように……

Side Out

Side 翔

「……完全に眼中に在りませんね、俺達」

「ははは……ちよびり寂しいですね」

俺と山田先生は、眩きを漏らしながらも一応、一夏達に負けず劣らずに剣撃を交えながら戦っていた。

先生がライフルを放つと俺は、スラストをバラバラに噴射、明らかにバランスを崩したような機動を取りながらも2本の『流星/雷』を撃ち込む。

だが、山田先生はそれらを銃口の角度を見て、射線を読んで回避していく。

さらには、ライフルを放ちながら突撃を仕掛けてきた。

自分から体勢を崩したままなので通常なら対応しきれない。

が……

俺は、スラストの両膝部に搭載された『隠し腕』で掴み『流星/疾風』を鞘ごと振り回す。

すると鞘先からレーザーを発振させながら円状に回し出す。

光のサークルが目の前に楯のように現れた。

それらにより、ライフルの弾丸を防いだ。

弾丸を防がれながらも突撃をやめない山田先生に対して俺は、体当たりをするかのように光の楯を前面に押し出して突っ込む。

この行動に山田先生は、少しだけ驚いた表情をしたがそれだけで、振り下ろされるレーザーの円のタイミングを見計らってぎりぎり回避してこちらにグレネードを投げようとしてくる。

それを俺は、流星ノ雷でグレネードを展開しかけた手を叩き落とすた。

「くっ」

一撃を与えないまま俺の下を駆け抜けて、距離を置く山田先生。

「最初に戦った時よりも『キレ』が出てますね」

「当たり前ですよ。1年近くいろんな事がありましたから」

自然と笑みを漏らしながら俺は、得物を放つ。

そんな攻撃も山田先生は回避しながら両手にライフルを呼び出してこちらに攻撃してくる。

「そうですね。あっ、ですけど変わったのは櫻井君も同じですよ。

表情に感情を見せるようになりましたから」

「……皆のおかげです」

動きながらも俺は、この1年近くを思い出す。

いろんな事があった。

転入してから一夏や筈、シャル、様々な人に会っているいろんな事を体

験して、分かち合い・・・そして俺の秘密を受け入れてくれた。

同時に俺は、俺の『意志』で本当に大切に思えるものを見つける事ができた・・・もう心で迷う事は無い。

だから・・・

「クスツ、それはよかったですね」

山田先生が俺の返答に少しだけ笑うとナイフを呼び出し、俺も応じ
るべく鞘を抜き、格闘戦へと戦いが変化させる。

「山田先生ですよ」

「えっ？」

俺が投げた言葉に山田先生のメガネが僅かにずり落ちる。

「……あの人からの『婚約』受けたんでしょ？」

「はうい!!!」

『なにいいい!?!』

続いた言葉に山田先生の顔は真っ赤になった。

なんか通信が紛れたのは一先ず置いておこう。

さすがにこのまま相手をするのはしのびだったので、一端離れた。

「だ、だ、だ、誰に聞いたんですか!？」

「テストチームと……父さんからですね。……テストチームは阿鼻叫喚、父さん達は嬉しがつてましたから」

「は、ははうううう!!!!」

情報源を素直に吐くと山田先生は、さらに真っ赤になった。

『や、や、山田先生!いいいい!!!』

「いつ!さ、さ、むかあはら榊原先生!？」

どうやら先ほどのオープン・チャンネルがアリーナの管制室に届いたらしく、本日の主任管制担当の30歳『独身』榊原先生の喚きが通信を占有した。

『なぜ教えてくれなかったんですか!?!これで私と織村先生だけ独り身じゃないですか!?!!』

「えっ、あっ、あうい……」

山田先生が顔を真っ赤にしながら応えようとするが、うまく伝わらない。

そこで俺が間に入り、説明をしてやる。

「……手が早かったんですよ山田先生の『お相手』が」

『はい!?!』

「さ、櫻井君。なにを!?!」

山田先生が止めに入るが、もう遅い。

既に俺は、口を動かしている。

「会って、1年近く。それでいて『恋人の過程』をほとんどすっ飛ばして『婚約』に行っただんですから」

「櫻井君!!!!!!」

「……グハア」

通信先から何かがつぶれたような音が聞こえそうな声が響いた後、崩れ落ちる音がした。

その直後、管制室にいたであろう女子達の黄色い声が榊原先生に代わって通信を占拠した。

「……ふう」

俺は、煩くなったオープン・チャンネルを閉鎖、別のチャンネル数を開く。

これであの人も……

「……翔、お前」

「櫻井……お前は変わったかと思ってたが……これはやり過ぎだ」

別のチャンネルを開いた瞬間、刃を振るう手をとめないまま話しているであろう、一夏達の通信が流れた。

2人にも一応、教えていたためあまり驚いていなかった。

「……話の流れでたまたまです。……それに山田先生もいい加減『婚約指輪』ぐらい気軽に身に付けさせてあげないと可哀想でしたし」

『だからと言って、このバカが……いろいろとばし過ぎだろ』

俺の返答に千冬先生が呆れ果てた声を出していた。

ちなみに俺がそう思ったのも、こないだその『お相手』に会った際、既に婚約指輪をしていたのに山田先生は、学園の女子から興味を持たれなくなかったのか婚約指輪をしていなかった事からだ。

『ところで山田先生は、どうすんだよ？あんなにしちまって』

「……………すまん」

一夏からの通信を返しながら見る先には……………

「ホエエエエ／＼／＼」

顔だけでなく耳や首まで真っ赤にして、まるで湯気が出そうな山田先生が立ち止まったままだいる。

千冬先生じゃないが……………やり過ぎた

その様子に不味さを感じながらもまだ、試合中なので俺は、何とか呼び戻そうと通信を送った。

「……………山田先生」

「はづい！ー！」

変な叫びと同時に山田先生は、現実にカムバックしてくれた。

その様子に胸を撫で下ろした俺は、言葉を続けた。

「しっかりして下さい。まだ試合中なんですから」

「さ、さ、櫻井君のせいなんですよ!？」

「……面目ございません」

「もう!容赦はしませんよ!」

(ですが、ありがとうございます……。……。これでようやく

両手にショットガンを新たに呼び出し、先ほどよりも猛攻を浴びせながらプライベート・チャンネルを流してくるのは彼女の本質だろうか？

俺は、両膝部から両手に流星ノ疾風を持ち、レーザーマシンガンで応戦しながらこちらにもプライベート・チャンネルを流す。

(いいえ……。『カズヤ』さんには、俺もカウンセリングで世話になってましたから……。これぐらいは

(そうだったんですか

(ええ。あつ、あとカズヤさん、二年後に挙式するみたいでしたけど……

(それは……。私から頼んだんです

(?何故ですか?

際どいところで右手のショットガンを投げ捨てて、ナイフを振りかざしてくる。

それを左手の流星ノ疾風から鞘を分離させて応戦する。

ぶつかり会う刃から火花が散りゆく。

(そのまま、結婚しちゃってもいいって言ってくれたんですが……

この1年、いろんな事に巻き込まれちゃいましたから……織村君達が卒業するまでフリーで動けるようにしときたいんです……お節介すぎますね私

(いいえ……その事でカズヤさんからは、なんと返答を?)

山田先生の決意は認めたものの……自分達がいるためにすぐ手に入る幸せを奪ってしまったような気分になった俺は、余計な話まで話を流してしまった。

が、その意味を知っていてか山田先生は、少しだけ笑って答えてくれた。

(カズヤさんから……『わかった』と言ってくれました。実を言うとかズヤさんもカズヤさんで、どちらに身を置こうか決めかねていたそうですから……色んな意味で

(……そうですか

俺は、山田先生も恐らく聞かされているだろうカズヤさんが引きずっている事を知っているから責めたりはしない……寧ろ、考えて『失った最愛の者』のために次のスタートを切ってほしいのだからと感じた。

(それじゃあ、話はお終いにして……終わりにしましょう。……皆さんにも説明しなきゃいけませんから

(……了解

そう言った山田先生の動きがさらに速いものとなる。俺は、遅れをとらないようにさらに加速していく。

強者に挑むものとして、そして……自分なりの祝福を送るためにも

……いつか、自分もそうされる立場になるとしても……

Side Out

アリーナ 観客席

Side ????

目の前をIS達が高速で飛びかう。

「千冬様、負けないで!!」

「一夏さん!ファイト!!」

少しだけ歓声が湧くが、まわりの女子が声を出す間もなくIS達を見つめ続けている。

今回の対戦は、本日だけ現役復帰してISを操る織村千冬がいるそうだから余計、注目度が高い試合だ。

だが……『IS嫌い』の『男』の俺にとってはどうでもいい事だ。

何故、『IS嫌い』かって?

それは……一番大好きな頃の父から『空』を奪ったからだ。

父は、戦闘機乗りであったが……ISの登場によって『お役』を奪われた挙げ句、戦闘機の有意義性を示すために挑んだ模擬戦で

散々叩きのめされて空軍を去ってしまったのだ。

(結果はボロ負けで、墜落したと聞いているから叩きのめされたに違いない)

今現在では民間航空会社とバイトに近い形で何かの研究機関で働いているが……あの頃の姿を忘れられない俺は次第に父を嫌いになっていった。

ISが無ければ……思うだけで激情にかられそうになる。

そんな俺がこんな場所にいるのは、『適正テスト』に合格したからだ。

なんでもこの1年で男でISが使える人間が何人か見つかった事から、政府がISの適正テストを男子の方にも広げ、一部の中学で実施した。

適正テストと言っても、実機のISに触れるだけといった実に簡単なものだ。

順番は、最初から拒否していた事もあり、最後であった。

逃げ出そうとも考えていたが、逃げ出そうとした矢先に幼なじみである女子に捕まってテストを受けてしまった。

その結果……起動を成功させてしまった。

何故だかわからない・・・起動できなかった男子連中からは驚きの声が上がって、男子を笑いに来ていた女子達も流石にこれには言葉を失っていた。

それからは・・・トントン拍子に話が進んでIS学園への強制入学が半ば決まってしまったのである。

入学せずに1年浪人、しようかと思ったが・・・
一番、ISに苦汁を舐めさせられたはずの父が笑いながら入学してみろって言った。

理由は・・・

たまには変わった経験もしてみるのも、人生だ。
行ってみたらどうだ？

・・・と

ますます嫌いになったが・・・結局、一緒に入学する事になった幼なじみの付き添いという形で4月から入学する生徒を対象にしたこのイベントに参加したのだ。

「うわあゝ、見てみて瀏ちゃん!!」

「いちいち騒ぐなよアイ、みつともなさ過ぎだ」

俺、不知火瀏夜は幼なじみである浅利愛流、愛称アイに呆れた声を返した。

「だってだって!こんな間近でIS同士の勝負が見られるんだし!」

そうアイは、自身の特徴である茶髪で一本だけ跳ねているアホ毛を揺らしながら嬉しそな顔をしている。

「そうかい、そうかい……まあ、嫌っている奴にとっては地獄だな」

俺は、ダークブラウンの髪を弄りながら少しだけ皮肉を入れて答えた。

「もう瀏ちゃんってば……」

隣にポテリと座り直したアイが俺の心境を理解した上で困った顔をした。

「まだ気乗りしないの？入学もほぼ決まってるのに」

「当たり前だ。だいたい……俺のIS嫌いは知ってるだろ？」

「もう……瀏ちゃん以外にも男の子はいるよ？」

そうつぶやくアイの視線の跡を追うように視線を走らせるとたぶん俺と同じように起動が出来てしまった男らしい人物が二、三人いた。

……俺と同じで哀れだ

……俺もそうだが、入学してから女尊男卑社会の洗礼でコケにされて、つまらない罪を浴びせられんだろうな。

その姿を見た俺は、自然にそう思ったその時……目の前が陰

った。

視線を前に戻すとモースグリーンのISと白銀のISがかなりのスピードでアリーナの淵に沿うように飛び続けていた。

剣撃を交えた格闘戦を行う2機は、一步も譲らない。

やがて一周してきた時、白銀のISは、片方の剣でナイフを弾いてもう片方の剣の形を瞬時に変えたかと思うとモースグリーンのISの片翼を切り裂いた。

その時、俺は白銀のISの搭乗者を見て驚いた。

その一撃を食らわせたISの搭乗者は『男』だったのだ。

「女のISと『男のIS』が戦ってる！？織村一夏か？」

俺は、つい世界初で男でISを扱える男の名を口走った。

「えっ、瀏ちゃん。このエキシビジョンの対戦表見てないの？」

その口走った言葉に反応したアイが俺に言葉を投げた。

「ああ……………どうせ女同士の戦いだろうと思ってな」

「はあ、瀏ちゃん……………今やってる試合はね、IS学園に在学中の『4人』の男の子の内、2人が試合をやってたんだよ」

「『4人』の男？じゃあ、今戦ってるのは何年生なんだ？」

「ええっと……………あつ、あつた来年度から2年生に上がる1年1組の織村一夏さんと櫻井翔さんだよ」

渡されていたパンフレットを見たアイの言葉を聞いた俺は、応じる。

「そうなのか……………はっ、どうせデモンストレーションだろ……………
そう簡単に勝てるはず……………」

「あつ、今2人が戦っているのって織村千冬さんとIS学園の『教師』さんみただよ。千冬様のコメント欄には『殲滅するのみ』ってあるけど?」

「はあ!?じゃあ何か、あの2人、本気の教師達とやりあってんのか?」

「た、たぶん」

俺は、驚愕しながらIS達を追った。

白銀のISは、モースグリーンのISに追い打ちをかけようとするが、その前に回避されて弾幕をまかれた。

だが、弾幕を加速で振り切ると白銀のISは、斬り掛かっていく。

一方、白色のISと桜色のISは、刃から同じ白い輝きを放ちながら刀を打ち合い、高速で交わってゆく。

そちらの方は、既に一つの芸術の域に達しているのだから、美しい舞のようにも見えた。

その2つの高速戦の中で俺は、ある事に気が付いた。

……………戦っている彼らの表情が『楽しんで』いるものだったからだ。

何故、楽しんでんだ!?

全力を出している教師達、2人をたかが高1が、あんなにもって!
!?

俺は、最後まで理解出来ないまま試合を見続けた。

やがて……

「キャッ!?!」

「よし、っ……」

「惜しかったな、お前達!!」

「しまっ」

「なっ!」

「終わりだ!」

「「うわ!!」」

『試合終了。勝者……』

最終的に男子達は敗れたがその顔は最後まで変わる事はなかった。

Side Out

夜

IS学園

食堂

Side 一夏

「「織村君、櫻井君。優勝おめでとう!」」

クラッカーの紙屑を浴びながら俺と翔は、特別戦前の学期末トーナメントでの優勝の祝福された。

「おう！と、そんだけじゃないか？」

「ああ、『副会長』。宣言を」

隣に座る翔が薄く笑いながら次に移るように促す。

「ああ。ええ〜では、これより来年度、入学の1年生との懇談パーティーをはじめ。新入生の諸君、楽しんでくれよ！！」

「「「はい！！！！」」」

俺が宣言すると一ヶ所にまとまっていた新入生達は固まっていた気持ちになったのか散っていき、所々で元気よく人に会っていく。

「オルコット先輩！凄い撃ち方でしたよ！」

「あら……先輩だなんてそんな……」

「照れんなよ。気持ち良く受け取ってやれ……でなきゃ俺がそれを受け取るうか？」

「うう！！クライスのイジワルです／＼」

「ハハツ。そう、怒んなくて」

セシリアが早速、新入生に慕われ、照れているところに彼女のパートナーが軽くおちよくる。

「鈴お姉さま！！貴女に惚れてしまいました！！」

「そうなの。あははは……」

鈴も照れくさそうに眼を泳がしている。

「シャルさん、俺と付き合っ……バグッ!？」

「……手を出すなら……悪夢を見るか？」

「か、カケルノノ」

シャルに変な虫が集ろうとしたのを見てか、翔が本気のアイアンクローを食らわせて引き剥がしている。

「ラウラ先輩!! 師として崇めても宜しいでしょうか!？」

「私が師だと?……よいのか？」

「はい! 試合で憧れてしまいました!! どうか」

「……私の指導は甘くないぞ」

「師匠おお!!」

「!?! いきなり抱きつくな!!」

女の子の弟子が出来たラウラは、照れ隠しだろうか、恥ずかしそうに頬を染めながら弟子を抱き締め返している。

とその一方で……

「やまやま、いつの間に!？」

「おめでと〜ございます!」

「相手はどんな人？」

「あっ、えつと……」

片隅では、婚約が判明した山田先生がクラスの女子から祝福を受けている。

その左手の薬指には指輪のような輝きが俺のところからでも確認できた。

それを少しだけ微笑んで見てから回りを見渡すと和やかな空気が流れだしていることがわかった。

ふう、よかったよかつ……

「い、一夏さん！」

「ん？」

俺が成果に満足しながら後ろを振り返るとそこには、赤毛の髪が見えた。

「おっ、蘭。久しぶり！」

「はっ、はい。一夏さんも！」

去年からIS学園を目指していた五反田蘭が俺の前にいた。

「ここにいてるって事は……」

「はい！試験通りました！！」

「おっ、良かったじゃん！おめでとう！これからよろしくな」後輩

「はい。『先輩』！」

俺は、無性に喜んで蘭の頭を乱雑に撫でてやった。

撫でられた蘭は、恥ずかしそうに頬を染める。

「えっ、えっと……あと聞きたいんですが」

「？ 何だ？急に改まって」

彼女の態度の変化に俺は、首を傾げてしまう。

「えっと……一夏さんて付き合っている……人は」

「一夏」

蘭の言葉がすべて紡がれる前に声がかげられた。

その声の主はわかっている。

「おう、箒」

俺の幼なじみがその特徴であるポニーテールを揺らしながら近づいてきた。

「ここにいたのか」

「ああ、そっちは？」

「………新入生にもみくちやにされていた」

その言葉に改めて顔を見ると少しだけげっそりしていた。

「そりゃ、御愁傷様」

「お互いにな……ほら、飲み物を貰ってきてやったぞ」

「おっ、サンキュー」

俺は、箒にねぎらいの言葉を言いながら箒から飲み物を受け取った瞬間……

「ご、ご沙汰です！篠ノ乃さん！」

「？ 君は……ああ、夏祭りの。名前は……蘭」

「はい。そうです！」

「この場にいるという事は……」

「はい、来年度から一夏さん達の後輩になります。よろしくお願
い
します」

「そうか……ならよろしくな」

「はい」

箒達は、互いに手を差し出すと握手をした。

だが……手を離れた瞬間から……箒が『笑顔』のまま、俺の
方を見た。

「一夏……」

「……はっ、はい」

微かに箒からどす黒いものを感じた俺は、冷や汗を掻き出す。

ヤバイ！ 逆鱗さかひんに直ちつた！？

「あとで……『オハナシ』を聞かせ……」

「何よあんた！！」

箒からの恐ろしい言葉を遮って何処からか言い争う声が聞こえてき
た。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろうが」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ！」

「……そんな口、ISを持ってから言うんだな」

「何ですってえ！」

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

どうやら新しく見つかった新入生の男子と新入生の女子とが何か揉めたみたいだ。

事前に起こりうる事態だったので、俺は慌てず冷静にシャルという翔にプライベート・チャンネルで呼び掛ける。

(どうする?)

(……うるさいと場が悪くなる。プラン『オハナシ』)

(了解……話し聞いてからにしろよ?)

(わかってる。……どっかの『白い魔王』のようにはしない
(ハハハ……ならいいけど。俺もすぐに行く)

俺は、プライベート・チャンネルを切ると箒に声をかけた。

「箒、わるいんだが……」

「……わかっている、手伝うさ」

「へっ?」

「いつもすまん」

「気にするな。お前と『付き合っ』、このくらいは軽いうちだ……」

「えっ、ええ……」

「なら行くか」

「うむ」

俺は、いつものように箒の手を取ると引っ張りだす。

引つ張られた筈は、少し頬を染めたが自然についてきてくれる。

こういう顔を見ると可愛いと頭の片隅で思ってしまうのは、『恋人』
になったからかなのかと……少しだけ考えてしまった。

気付かなかった時よりも、綺麗になったような何を考えてんだ！
！！

同時に立ち去ったところからピシリと碎け散った音がしたが……
・何の音だったんだろうか？
と考える前にお勤めだな

そう考えているうちに騒ぎの場所にたどり着いた。

Side Out

Side 翔

「ふう」

俺は、辺りを見渡しながら軽く息を付いた。

うまく行ってよかった……

「お疲れさま、カケル」

「ああ、ありがとう。シャル」

俺は、シャルから渡されていた炭酸系の飲み物を受け取った。

「乾杯するか？」

「うん、カケルにとっては残念乾杯になっちゃうけど？」

「気にするな。アレはキツ過ぎた」

「うん、クスッ」

シャルが小さく笑ったところで俺も小さく笑って乾杯した。

「ふう」

「でも、惜しかったね」

お互いに一口飲むとシャルから話しだした。

「ああ、山田先生を戦闘不能にしたのはよかつたんだが……」

「そのあとに織村先生が、決めちゃったからね」

「……悪い夢だ」

結果を簡単にまとめると、俺が山田先生を落とした直後、千冬先生が一夏を吹き飛ばした。

ちょうどその時、一夏と俺は、直線上に並んでしまい、その隙を千冬先生が見逃す事無く、イグニッション・ブーストを起動。

直線上に駆け抜けながら千冬先生に余す事なく零落白夜で切られ、絶対防御が発動、その結果、シールドエネルギー残量が0となって負けてしまったのだ。

一夏は、謝ってきたが謝らないといけないのは、いつの間にか近くで戦っていた俺の方だ。

近くに居なければ勝てたものを不意にした……

そう考えるだけで気分が落ちる。

「はぁ……」

「クスッ」

「なにが可笑しい？」

「いや、ただカケルも変わったなあと思って」

「……ああ、そうだな」

その言葉にまた自然と笑みが出る俺。

こうできるようになったのもみんなのおかげだ。

そう思いながらも席に体を預けているとシャルが肩に寄り掛かってきた。

「シャル？」

「……カケル、一ついいかな？」

僅かに顔をあげてくるシャルの上目遣いに一瞬だけドキリとしてしまった。

「……何だ？」

特技として身についたポーカーフエイスを久々に発揮しながら俺は、シャルの問いかけを待った。

少しモジモジしながらシャルが口を開いた。

「……僕は……カケルに何度も助けてもらった」

「ああ」

「……それに僕の存在を認めてくれた」

「……それにそれは俺も同じ……」

「まだあるから最後まで聞いて……そ、それでね。か、か、カケル

……僕は、カケルが『好き』なんだよ」

「……とつくに知ってるさ」

そこまでなら俺も同じだ。

……最初は、決める事をやらないシャルに手を差し伸べるため、気に掛けていた。

だが、色んなもののために『無茶』をして傷ついた時、泣かれてしまった。

その頃から何か別の感情が表れ出した。

やがて、俺の秘密が明かされた時、泣かれながら抱き締めてくれた……心から……

だから、攫われて結婚させられそうになった時、かつてないほど怒りが沸き上がり、『解体戦』にまでしてしまったのである。

それから、公認の仲になったもの……

今までの事を思い出しながらシャルの言葉の続きを待った。

「だから……だから、『証』が欲しいんだ。僕は……物とかじゃなくて『気持ち的な意味』で」

「シャル……」
「つう／＼／＼／」

シャルの言葉は、真っ赤になりながらだがしつかりと伝わった。

気持ち的な意味では……今の段階で出来る事だろう……
だと祈りたい。

別の意味に捉えられてしまつかもしれない中、俺はシャルが望んでいるものを大事に理解した。

今まで邪魔や他人がいる……そして、自身が一步引いていたからしていなかった事を……

なら俺は、してやらなくてはならない。

真に思いを伝えるために……

俺は、静かにシャルの肩を掴んだ。

シャルは、少しだけ驚いたような顔をしたが……直ぐに落ち着いたようで、受け入れるため目をつぶった。

俺は、僅かに胸の高まりを聞きながら彼女の顔に近づく。

「キャアああ！マスターいよいよですね
「邪魔してはいけませんよ。アスト姉様

今日ばかりは、アストレイア『達』からの冷やかしを受け流して近

づいた。

「……さらにいくつかのカメラや楽しんでいる視線も感じたが、それすら無視する。」

息が掛かり合い、もう少しで……

「何よあんた!!」

その空気を見事にぶち壊し、何処からか言い争う声が聞こえてきた。

「な、何?」

シャルが体を強ばらして離れてしまった。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろ?」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ!」

「……そんな口、ISを持ってから言っただな」

「何ですってえ!」

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

アイツら……

邪魔されたからかもしれないが、今回はかりは『昔』に戻ろうとした。

「か、か、カケル。眼、眼を戻して！」

自然と眼が金色に変わったからヤバいと感じたのか、シャルはあわてて止めに入る。

「心配するな……1分で『殲滅』」

「『殲滅』はダメ！」

つぶやきを漏らした俺は、まわりからため息やあちゃーと言った風に残念と言葉が投げ付けられた事にさらに怒りを加速させた。

Side Out

Side シャル

カケル、悔しいのはわかるけどさ『戻って来て！』

僕は、ストレートにしてくれそうになったカケルを抑えようとするが……今回ばかりは、許しきれないのか『金色』に眼を輝かせて恐ろしい事になっている。

恐すぎる！

もう止められないと思ったその時……

「了解………ああ、わかった」

「へっ？」

何かを頭で聞いたのか、カケルはすぐにいつものように戻った。

僕は、何が何だかわからなかったため、首を傾げた。

「プライベート・チャンネルだ。一夏と止めに入る」

ああ成る程

それで僕は理解した。

「殲滅はしないが………場合によっては、話を聞く」
「うん、わかった」

話を聞いて………内容自体大体わかるんだけどね
僕らについてはいくため、立ち上がる………と

「……と、その前に」

「えっ、む……ん／＼」

先に立ち上がっていたカケルが僕の顎に手をやり、そのまま……
『唇同士』を重ねられた。

明らかな不意討ちだ。

「「「あああ！」」」

「わっお」

「ニコニコ」

「……終わったな」

『運命のばつきゃローー!!』

その光景にまわりから歓喜が上がり、同時に……悲鳴が上がる。

か、カケル!

僕は、そのまま固まってしまい動けなかった。

少ししてカケルの唇が離れるとカケルは、耳元に口を近付けて囁く。

「……これが今出来る『証』だ。君へ対してのな」

カケル……

嬉しさと恥ずかしさから僕は顔を真っ赤にして顔を伏せてしまった。

「……行くかシャル」

カケルの顔が見ることが出来ないが、差し伸べられた手を取ると僕は、一緒に歩きだした。

ううう／＼／＼／＼カケルのバカ!!!不意打ちなんて!!

あとでポカポカしてやるうかと思いつながら僕も僕は嬉しい気持ちで胸が満たされた。

確かな絆を感じられ……すべてが満たされた。

ようやく僕は、新たな一歩へと踏み出し始めた。

Side Out

Side 瀏夜

俺は、適当にバイキングで料理を取ってから席に戻った。

回りでは懇談会が行われて、騒がしいが俺は食いはじめた。

「さすが国立、材料も一級品だ」

「もお、瀏ちゃん臍曲り過ぎだよ」

隣の席に戻ってきたアイが、俺の皮肉に愚痴をこぼす。

「いちいち、反応しなくていい。……ところでお前はいいのか？」

「ふえ、何が？」

「何がって試合見て、憧れたヤツが出来たんだろ？」

隣で騒いで見ていたアイの姿を思い出しながら何で俺と一緒にいるのかがわからないため聞いた。

「えっ、えっと……一緒に居たかったからじゃいけない？」

可愛い上目＋若干涙目でアイは、こちらを見る。

グ！……負けた

通算何度目かの惱殺必殺『ダメなの？』攻撃に負けた俺は、白旗を振った。

「……勝手にしろ」

「ありがとね」

「……しかし、ゲームなんかじゃ羨ましい環境だが実際には地獄絵図だな」

俺は、とびっきりの笑顔で笑ってくるアイを無視して回りを改めて見て、呟いた。

見渡す限り、女子、女子、女子ばかり……IS学園は、女性しか扱えないIS『運用者育成のために作られた学園と聞いたが……それに対してイレギュラーの男子が4人しかいないとなるとかなりシビアだ。

……聞いて極楽、見て地獄……まさにその空間に投げ込まれた事になる。

「はぁ……本気でやめ……」

「あんたら男子は、私らに『コケ』にされてればいいんじゃない？」

「ん？」

真後ろのボックス席から何やらムカつく言葉が出たような。

「……えっ？」

「だから、例えばISが扱えれば私らと同等になれたと思えるわけ？」

まただ・・・

俺には関係ないが、気になったため後ろを向いてみることにした。

様子から見るとそこにいたのは、全員が俺と同じ新入生だ。

一人で座っていた男子が2人ぐらいの女子に囲まれている。

「ど、どう言う意味です?」

気弱なのかたどたどしく返す男子。

バカ、弱いとこ見せたら……

「言葉の通りよ。いくらISが使えても結局は、それだけ!!偉くも何ともないのよ」

「……偉くも何ともないって……どんな」
ちっ、女尊男卑の弊害か。

俺がそう思うのも女尊男卑の社会仕組みが作られて早十年。

その間、社会を担っていた男達は『IS』と言う物が使えないただそれだけで権利を奪われ続け、今では女性が偉いと言う形になった。

だが、だからと言って今尚、男性は社会的基盤を支え落ちぶれてはいない。

つまりは『権利』としてそれを振りかざしてはならない。

しかし、すべての人間が同じ方向を観るわけではないように中には、振りかざす奴、従う奴がいる。

俺にとっても一番嫌いなタイプだ。

そうイラツキながらも俺は、話に耳を澄ました。

「つまりはね、あんたら男子は私らに使われ、食い潰され、浪費されればいいのよ」

「なぜ浪費？」

「黙りなさい、あんた。所詮『ゴミ』なんだから」

それはテメエだ…！

暴言を言われてなんも反応を示さない男子もそうだが、女子の言い方も言い方だ…人を『ゴミ』のように扱う『チキン野郎』がいる。

…そんな奴らばかりが父を地に墮としたISを使うなら…上等だ！
「……………」

「何も言い返せないようね……………いいぞ……………」

「ホント、『女』がISを使えるなんて馬鹿馬鹿しく思ったが、本当にバカばかりだな…！」

「!？」

「何よあんた！」

「りゅ、りゅ、瀏ちゃん」

隣のアイが俺の発言に驚いているが、止まる事はもう出来ない。

俺は、席から立ち上がると女子らと向き合った。

「バカらしく、見知った事を振りかざし続けて何偉そうに喚きつづけてんだ？はっ、近年の日本が落ちぶれたのもお前らみたいなのがいるからだな」

「何よあんだ！！」

俺の怒りを乗せた挑発に見事に引つ掛かる女子。

「何って、お前がグチグチと嫌味ったらしく言ってたんだろっが」

「グチグチって、あんたら男子が不釣り合いなのよ！」

「……そんな口、ISを持ってから言っただな」

「何ですってえ！」

ISがなければただの人間である事は変わらない、そんな事すら考えていないならこいつは、アホだ。

「やめなよ。瀏ちゃん」

「止めんな。アイ」

アイが止めに入ろうとするが、俺はまだまだおわらない。

と言うより今まで溜まっていた鬱憤が一気に吐き出されていたからだ。

「だってそうだろ？ISがなければお前らだってただの人間……いや、『豚』以下だな」

「あんだ、舐めすぎ。舞！」

「ええ、ここで殺してやるわ！」

2人の女子のうち、片方が右手を掲げて何かをしようと……

「……そこまでだ」

「えっ……イッタタタい!!!!」

出来なかった。

何故なら黒髪で赤い瞳をした男がその掲げられた右手を掴んで、後ろに締めあげたからだ。

よくよくその男を見るとIS学園の制服に似た制服を着ている。

「あ、あんたは？」

「おい、新人生」

俺がその男に問いかけようとする前に首に絡めるように後ろから抱きつかれた。

誰かと思いき横を見ると見知らぬ男が眉間にしわを寄せてこちらを見ていた。

「啖呵きんのはかつこいいけどさ、『専用機』持ちに展開させるまでいったら、お前今ごろ頭撃ち抜かれてたぞ？」

「『専用機』持ち？」

聞き慣れない単語に俺は、ただ首を傾げた。

「ああ。と、そろそろ向こうも止めねえとな。おい。翔」

「……」

俺にまとわり付いた男が未だに後ろに締めあげている男…声をかけ

ると呼ばれて男は、無言で頷いて締めあげていた腕を離してやった。

「ツウ！」

強く締めあげていたからか、何かをしようとしていた女子が崩れ去った。

「ま、舞！な、何すんのよあんだ!？」

崩れ去った女子に駆け寄りながらもそうした男を睨む女子。

「何する？こっちの台詞だ。『専用機』持ちが下らない言い争いでISを持ち出ほうがどうかしている……もっとも前例はあるがな」

男が小さく言った最後の方を聞いた一部のIS学園側の女子が苦い顔をした。

何でだろうと俺は、頭の片隅で考えだしたが、今は目の前だけを見た。

「何よ。男が偉そうに、あんたが最初の織村一夏？」

「いいや違うさ、俺が織村一夏だ。でそっちが、2人目の櫻井翔」

こいつが？

俺に抱き付いてきていた俺が織村一夏……なんと言つかあんなり覇気を感じられない男だなと思ったが……

「……と、途中からだか、お前ら散々な事を言ってくれたみたいだな？」

急に目が鋭いものとなり、女子達を見た。

「だったら何よ？」

「入学したら俺のところに来い……」その腐ってたれ流れそうな根性』叩きのめしてやるよ」

若干、笑みを見せながら言う言葉には凄味が滲み出てきている。

な、何だよこいつは……

最初にニュースで見た時には俺でも十分倒せるただの歳上と考えていたが……この1年で何かが変わったらしく、なんと言ったらいいかわからないが強さを感じた。

「舐めた口を」

「いや、一夏。俺がやる」

織村が宣言してすぐに櫻井と言った男が口を開くが……

「別にいいさ。こんな『ひよこ』、相手にするぐらい俺だけでいい」

「ひ、ひよこですって!？」

「このくそっ男が」

「……ヒヨコか。確かにそつだな……喧しいヒヨコ二匹ぐらい、今のお前には造作もないか」

櫻井もそつ言いながら眼の方が怪しい輝きを放っている。

アレは、殺意を絡ませた視線だ。

だが、そんな事にも気付かない女子は……

「ひよこですって!!!?」

怒りのボンテージをさらに上げた。

てっ、ちよつと待てよ!!!

すっかり蚊帳の外に置かれた俺は、叫びを挙げた。

「まつ、待ってくれ!」

「どうした?」

「……………下がっている。新入生」

俺の叫びに2人の男が反応する

「新入生、新入生とうるせえ!俺には不知火瀏夜って言う名がある!」

「不知火……………」

櫻井が何か思ったことがあるのか、俺の性を気にしたが今は深く考えなかった。

「で、話だ。俺が買った問題だ、なら俺がやる!」

「お前が?」

未だに殺意に満ちた眼で俺を見た櫻井が問い掛けるように呟く。

ピシリ、ピシ……………

その俺に向けられた殺意で背筋が凍り出す音を聞いたが気合いで碎

くと答えた。

「あ、ああ！」

「……………一応聞くけどよ。お前、何時間、ISを使った事がある？」

俺が返事を返した時、俺から離れた織村がそう問い掛けてきた。

「な、なんだよ急に？」

質問の意味がわからずに首を傾げる俺。

Side Out

Side 一夏

なんかデジャブリそうな流れになってきたなあ……………

話の流れ的に『俺がクラス代表決定戦』でやったみたい流れになつてきたため、俺は、聞かずともわかることだが一応聞いてみた。

「な、なんだよ急に？」

「いいから答えてみる」

いきなり問い掛けられた事から瀏夜は眼を白黒させるが、俺はそれを無視して問い掛けを続けさせた。

と……………

「……………適正テストと入試の時を入れて1時間弱ぐらいです」

「アイ！」

彼の傍らから出てきた女の子が彼の代わりに答えてくれた。

「君は？」

「し、失礼しました。お、織村先輩。私は、りゅ……………不知火君と同じ中学の浅利愛流と言います」

俺に緊張しているのか、愛流と名乗った女の子はぎこちなく答えてくれた。

「アイ、余計なことを」

「ご、ごめん」

瀏夜に睨まれた愛流は、少し小さくなった。

ああ、そうか

2人の関係がそれだけでわかった。

それだけで関係が見える俺も成長したということか

そう頭の片隅でかんがえていると……………

「はあ、1時間弱でやりやうわけ？勝ったわね」

「なんだと！」

鼻で笑った様な言い方で女子が言った言葉に瀏夜が怒りを顔にする。

落ち着け、理由はすぐに……………

「だってそうでしょ、ISの強さはね。どれだけ扱ったかが勝……」
「あら、どんなに扱っていても不意を突かれれば負けますわよ？」

そうさえぎったのはセシリアだ。

ナイス援護！

俺は、心の中で親指をたてた。

その言葉に新入生達が眼を点にする。

（あとはお任せますわ

）ああ

同時にセシリアからのプライベート・チャンネルを返すと俺は、口を開いた。

「そうだぞ。俺も本格的にISを動かしたのは入試のあと試合……
しかもぶつつけ本番。だから稼働時間だけで勝負が決まるわけじゃない」

「ちょっと待て、誰がISでやるって……」

瀏夜がISではない勝負を言い掛けるが……

「ああ、そうだな。それにIS自体、人の形をしている……その点から見れば体の動き方1つでもかなり変わってくる」

翔がそうさえぎりつつも、俺にプライベート・チャンネルを流してきた。

(時間を稼ぐ、そいつにISで勝負に応じるように説得しろ……)
もう直接ケリ付けないかぎり治まりそうにない
(……了解)

翔がみんなの気を引くために持論を展開している中ではつきりとデジャブを感じながら俺は、瀏夜の肩を掴んで耳元で囁く。

「……もう事態は、ISでやり合つところまで来ちまってる。諦める」

「だが……」

「俺だってそうだったんだ……それともISを使いたくない理由でもあるのか？」

「それは……」

瀏夜は、俺の言葉に眼を泳がし始めた。

何かあるのだろうか？

俺がその様子に首を傾げていると……

「あの実は……」

「……わかりました」

翔の持論を聞いていた対戦するであろう女子が頷いた。

「その方とは、入学してからISで決着をつけるわ」

「……ヤルしかないのかよ。クソッ」

それを聞いた瀏夜が小さく愚痴をこぼすが……次の言葉には、頭を抱えた。

「で、お前にハンデは付けるか？」
「はっ？ハンデ」

新入生の殆どが瀏夜の言葉に眼を点にした。

そんな光景に首を傾げながら瀏夜は、再び口を開いた。

「？……俺は、女相手に本気でやりあう気はサラサラない」
「ぷっ、アハハハ！！」

やっぱりかよ

その言葉が紡がれた瞬間、新入生達が笑いだした。

完全に再現された事に俺は、穴を掘って逃げたい気分になった。

だが……

「……女尊男卑で馬鹿げていることは、わかってるが！！　これだけ外せねえよ」

瀏夜が言い切った言葉に新入生達が眼を点にした。

あっ、わかったうえでなの

俺は、彼が愚かでない事に気が付いた。

「やめときなよ、ハンデなんて」
「うんうん」

「だけどねえ、あんた。男と女が戦争したら3日は持たないって」
呆れ果てた顔で新入生の女子が、『昔の一般論』を口にしながら・・・
・この時点で気付くべきだった・・・修羅の存在に・・・
「…………それはもう昔だ。小娘共」
「へっ?…………ギア!」
「アギヤ!」

何かがめり込む音と共に2人が倒れる。

お見事です千冬…………

「お前達もだ」

ドス!ドス!ドス!

「…………!」

「ツウ!」

「アゲツ…………」

「まったく、お前達がいながら騒ぎを大きくしてどうする。…………

さっさと『つぶせばいいもの』を」

刀ならぬ出席簿…………いや今回は食堂らしくトレイで俺達の頭を叩いた、別の意味で学園最凶の教師、織村千冬は、不機嫌さ丸出しで出現した。

わざわざご苦労様です。

「…………織村先生、流石に潰すのは…………」
「…………煩くてかなわなかったからな、これくらいが妥当だ。おい、

誰がこの2人を医務室に連れていけ」

「あつ、はい！」

翔が、地面に倒れた・・・受け慣れていない新入生達を見ながら
そう言うが・・・千冬姉は、連れていかれる女子2人を見送り
ながら不機嫌さをより深めて口にした。

「キヤアア！本物の千冬様よ！！！」

「私も一撃受けてみたい！」

千冬姉の参戦に一気に色めきたつ。

「ああ、鬱陶しい……織村、櫻井。そっちは任せる。その『クソガ
キ』から詳しい経緯を聞いてやれ」

「あ、ああ……」

「……了解」

千冬姉がそれらの女子を連れていくのを見送りながら、俺達は多分、
幼なじみであろう愛流が必死に呼び掛けている気絶した瀏夜をとり
あえず引き起こして移動する。

Side Out

Side 瀏夜

ツツ！つめてえ！！

俺は、頭の冷たいものに乗っけられ、その冷たさに意識を取り戻し
た。

「あつ、瀏ちちゃん。目を覚ました」

それをやったのは、氷を包んだハンカチを持ったアイだった。

「アイ？……あいつらは……ツウ！」

頭部が異常に痛い、誰かに殴られたようだ。

「ツツ！う！いつたい何が……」

食堂のボックス席みただが……

「あつ、えつと……」

「織村先生の攻撃を食らわされたんだ、お前は」

とアイの代わりに答えた奴がいた。

痛みで下げていた頭をあげるとそこには、2人目の男 櫻井翔がいた。

「初めてじゃあ、仕方ねえよ。あれは」

1人目、織村一夏も少し笑いながらそこにいた。

よく見ると他にも目付きがきつい女やツインテール、眼帯付き等、IS学園の制服を着た女子がいる。

「……あんたらは？」

「りゅ、瀏ちちゃん。先輩に向かって口悪すぎだよ」

「……失礼しました」

俺は、アイの言葉に不満ながらも言い直すが……

「別にいい。まずは自己紹介からだ。俺は、櫻井翔だ」

「いきなり突っ放すかねえ……と俺は、織村一夏。よろしくな」

「はっ、はぁ……」

俺は、冷たく止められた櫻井と明るく名を告げた織村にただ啞然とした。

「もう、瀏ちゃん。せっかく、先輩方が言ってくれたんだが……

あつ、私は浅利愛流……アイって呼んでください」

「……おい」

俺は、アイの順応さに驚いて思わず待ったをかけたが……

「よろしく」

「おう、よろしく。あつ、そうだ。皆もいいよな」

織村がアイに返事を返した後、同席していた女子達に声をかけた。

「いいもわるいも、元々引き込むつもりなのだろ？まったく……篠ノ乃箒だ」

ポニーテールの女子が名を告げる。

「セシリア・オルコット、よろしくですわ。不知火さん、アイさん」

長い金髪の女子が上品そうな口調で言う。

「『専用機』持ちに喧嘩売るなんていい根性してるわね。私は、凰鈴音。鈴て呼んでちょうだい」

ツインテールの女子が元気発露して言った。

「僕は、シャルロット・デュノア。よろしくね」

人受けのよさそうな女子が名を言った。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ……よろしくな」

眼帯を付けた軍人ぽい女子が名前を明かしてくれた。
全員が自己紹介を終えたところでアイが笑顔で口を開いた。

「よろしくお願いします 先輩方」

と自分の自己紹介が未だである事に気が付いた俺は、口を開いた。

「お、俺は……」

「知っている。不知火瀏夜。さっき名乗っていたじゃないか」
「あっ」

そうであった。

「しかし……一年前と同じ展開になるとは……」

「そうですね……」
「一年前？」

「あの、一年前に何か合ったんですか？」

アイが篠ノ乃達の言葉に首を傾げた。

「あっ、ああ……実はな」

織村が口を開き、訳を教えてくれた。

「……どうやら、一年前にも織村とオルコットが同じ事になったらしく戦ったらしい。」

「へえ、そんな事があつたんだ」

「その頃から嫁は……まったく」

聞く機会が無かったのであろうか、デュノア達も納得した。

「いやあ……台詞まで似てたのは驚いた」

「……」

「アハハハ」

「……マジかよ」

俺は、どんな結末であれ、同じ節を踏むんじゃないかと今から不安になった。

そう考えていると織村が問い掛けてきた。

「ところで瀏夜。ISで戦う気がないみたいだったけど、何でなんだ？」

「うっ、それですか……」

俺は、答えずらい質問に口を閉じた。

何で答えなきゃなんねえんだ……

俺が織村に対してそう考えた時である。

「……不知火は、IS嫌いなんだ。親父さんがISとの模擬戦時に墜落してな」

「えっ？」

一同の視線が櫻井に集まった。

「そうなの？」

「ああ」

「って！」

「何でお前が知ってる！」

机を叩いて立ち上がった俺は、櫻井をにらみつける。

「りゅ、瀏ちゃん。落ち着いて！でも何で櫻井先輩が知っているんですか？私も瀏ちゃんから聞いて知ったのに？」

アイが俺を押さえながら櫻井に首を傾げた。

確かにアイには、話した……だが、その他の連中には言っていない事を何故？

その答えを櫻井が言った。

「確認するが、不知火。お前は、不知火終夜の息子だな？」

「！！！？父さんの名？何で知ってたんだ？」

父さんの名が出てきた俺はますますもって解らなくなってきた。

すると櫻井は、俺に座るように指示を出した後、ゆっくりと話した。

「不知火終夜……いや、不知火さんは二年前、父さんがIS開発に引き入れたアドバイザーだ」

「IS開発って？……じゃあ、父はISを作ってるのか、散々苦汁を飲ませられたの？」

父さんがIS開発？冗談だろ！

俺は、そう思っただけで怒りが燃えだした。

なんだって、そんな事を……

「俺は企業から試作機テストのために転入して来たんだが、うちの開発チームのコンセプトは『IS登場以前の通常兵器との融合』だ」

「はっ？」

「へっ？」

俺とアイは、いきなり何でこんな話をされるのかわからずに首を傾げた。

「つまり、IS自体まだまだ技術的に開発段階だから、既存の技術を応用して開発を進めると言う事なんだが……ようは、新しい店よりも古い馴染みの店のほうが怖くないって事だ」

「……！あつ、はい。理屈はわかりました。けど、なんでおじさんが入ったんですか？」

「そうよ。なんでその……何に乗っていたかわからないけど、パイロットであつた人を」

アイと鈴が翔に問い掛けた。

理由は、決まっている。

父は、IS登場以前の戦技競技大会にも参加した凄腕だった。
レッドフラッグ

しかも機体の性能限界を知るために様々な知識を持ち合わせている。

そうなれば、声が掛かるのは……

「戦闘機乗り（ファイター）としても優秀だっただけじゃない。『彼』はISの脆さを知っているからだ」

えっ？

ISの脆さ？

「カケル、それって？」

デュノアが問い掛ける。

「墜落したって話には続きがある。あの時……」

ISが世に出てから数カ月後、空を愛するパイロット達の威信を掛けた……IS対戦闘機の大規模な模擬戦が行われた。

ISの登場した『白騎士事件』は、確かに世界の戦争の仕方すら変えてしまった。

だが、『はいそう』ですかと戦闘機乗り達は頷くわけなく戦った・・・滅びゆく存在であろうと・・・

ISとの戦いは、IS1機に対して瀏夜の父も含めた腕利きが乗る戦闘機4機であったが・・・わずか2分で2機に減らされた。

残った2機も時間の問題であろうと考えられたが・・・この時、事件が起きた。

2機の内、1機がエンジントラブルを起こしたのだ。

原因は、ISの機動力に追い付くため、リミッターを外したアフターバーナーを連続使用した事によるエンジンの異常加熱。

生き残っていた瀏夜の父は、すぐにその機に対して脱出を指示してパイロットを脱出させた・・・だが、パイロットがいなくなつた機体はあろう事にISに直撃しそうになったのだ。

瀏夜の父は、ISのパイロットに対して回避を命じたが・・・彼は、見てしまったのだ『彼女』の顔が恐怖に歪んだ事を・・・

「怖がった？」

「ああそうだ」

何故怖がる必要がある、だってISは・・・

「IS導入初期は、空軍に在籍していた女性パイロットが転科したパイロットを務めていたが・・・ISへの安全性が懐疑的だった」

「懐疑的だった？いつたい何故ですか？」

「そつよ。ISの安全性は高いはずよ？」
「どう言つて意味なのカケル？」

櫻井の言葉にオルコット、鈴、デュノアが疑問を投げ掛ける。

「それは……」

「ISが従来の兵器とは違い過ぎた事が原因なのだろ」

「ラウラ？」

ラウラの言葉に視線が彼女に集中する。

「ISは、確かに今までの兵器とは違う次元の火力、機動力、防衛力を我々に示した。だが、搭乗者が『むき出し』になる構造や我々の世代では余り気にならないが今までパイロットの生命維持に必要だった対Gスーツやマスク等の装備を含めたパイロットスーツが、いきなり『特殊繊維』で作られたISスーツ一枚になった事でも運用当初は資料があっても生存性が懐疑的になった。さらに言えば、初期のISへの訓練内容自体もIS学園のカルキュラムのようなものではなく、飛行パワードスーツだった事から空軍主体の『墜落』しない事を前提とした訓練だったとよく聞く。恐らくその事故の原因なのだろう」

ラウラがそれらを一気に言つと櫻井以外、一同は呆然となつてしまった。

「……カケル」

「……なんだ？」

「……何か間違つていたか？」

「いや、俺より詳しく話してくれたから助かる」

「……そつか、よかつたノノノ」

櫻井に誉められた(？)ラウラは頬を染めた。

「けど、説明が下手な歴史よりも凄かったな。やっぱり軍にいるからか？」

「えっ！ラウラ先輩って軍人なんですか？」

アイが織村の発言に驚いた。

「ああ、そうだ。そもそも私は、軍がISを導入した初期からISを使っている」

……！そうになると6歳からISを使ってたのか！？

話しからしてヤバさを感じ取った俺は、僅かに冷や汗をかいてしま
う。

「へえ……じゃあ、ラウラ先輩のところでは、どんな訓練をしてい
たんです？」

そんな俺をよそにワクワク気分でアイは、ラウラに聞いた。

「そうだな……我がドイツでは、IS導入の段階では飛行と言っ
りも余りパワーを消費しない『地上』での運用に重点を置いていた。
その為、砲撃や格闘戦を中心にだな」

「へえ、そうなんですか？」

「……って、そんな事より話の続きを」

アイがそのまま興味を持つと軍関連のヤバイ方向に行きそうであっ
たため、俺は、櫻井に話を進めるように促した。

「ああ。ラウラが言ったようにIS導入期の頃は、どんなに訓練しようとも砲撃やミサイル相手には、恐怖してしまうパイロットが多かった……その時も同じだったんだろう。さらにISを扱わない側の人間からもISの安全性が未知数なものだった、だから……」

そう言いながら櫻井は、両手を指の間を明けないようにくつつけた状態で片手を垂直に、片方を水平にして俺達の前に出した。

そして……

「不知火さんは、『こうした』らしい」

水平にした方を垂直にした方にぶつけた。

それが意味する事は、俺は、分かってしまった……つまりは……

「……………ISのパイロットを守るために」

筈の言葉に櫻井が頷いた。

「ああ。自機で体当たりし、軌道を変えて不知火さんは脱出した。ISのパイロットも無事だったが……この模擬戦の結果は、IS側の圧勝で処理された。倒せたはずのタイミングで倒せなかった事で軍のお偉いさん方に嫌がらせを受けはじめたらしい。……最終的に家族にも手が伸びそうになったから、そこでやめて転職した。それから父さんがIS導入初期の人を探していたら丁度、2年前に不知火さんと会って、空力なんかかわる空戦時の機体バランスの指摘やアイディアを貰うようになった」

「……そうだったんですか」

アイが櫻井に言葉を返ししながら俺をいたわるような眼で見つめてきた。

が……。俺は、応じる気力がなかった……。何故なら今までISのせいで父の空を奪われたと考えていた、だがそれが『人助け』を優先させた事で嫌がらせを受けたと言う真実を知った。

なら、俺に何で教えてくれなかったんだ？

その答えを求めるため、俺は櫻井を見るが……。

「……何故、君に教えなかつたかはわからない……が今、不知火さんが望んでいる事はわかる気がする。……たぶん、IS学園への入学に何も言わないのもISを嫌うのもいいが、ISを『知って』から嫌いになれって事じゃないか？」

ISを『知って？』

どう言う意味だ？

俺は、混乱が抜け切らない頭で必死に考えようとするが……。まったく考えがまとまらない。

と……。

「えっ、えっつまりこう言う事ですか。ISを意味嫌うのをやめて、ISに触れてから『好きにしゃがれえ』と」

アイが、最後の方を俺の言い方を真似たのか、らしくない言い方を

した。

それを聞いた一同は、さすがに眼を丸した。

「あつ、えつあ……うつつ／＼／」

自分がいった言葉にアイは、赤くなっていく。

それを見た皆が笑った……俺でさえも……

「わ、笑わないでくださいよ」

「ああ、わりい、わりい。だが、たぶんそれが正解なんだろうぜ」

「はい？」

「えっ？」

織村の言葉に俺達は、同時に間抜けな声を出してしまった。

移動中

モノレール車内

俺とアイは、織村……もとおい一夏達との話し合いを終え、滞在先であるホテルに戻るためにモノレールに揺られていた。

隣に座るアイは、はしゃぎ過ぎたのであろうか眠りこけて俺の肩に寄り掛かっていた。

やれやれ……

俺は、それを一瞥すると窓の外を見ながら、一夏達との話し合いを

思い出していた。

.....

「それが父さんの望み？」

「わからないが……知っておいても悪い事ばかりじゃないと思うぜ」「何故です？」

「IS自体、こうして俺達を繋げてくれたし……それに俺や翔に『輝き』を示してくれた」

「『輝き』？」

「ああ、俺の場合は、『大切なものを守れる』ための力を示してくれた」

「……俺は、ISに『繋がり』……世界の大きさを、人の暖かさ』を伝える事を貫く剣を貰った」

「あんたらがそう言うなら……俺も何かを掴む事になるのか、ISに『わだかまり』をもった俺にも？」

「わからねえけど、たぶんそうなるんじゃないかねえか？」

「た、たぶん……そんな大雑把な」

「……一夏の言い方も悪いが……瀏夜、それを望んでいるなら『願いつける』、どうありたいか」

.....

「『願いつける』、どうありたいか、か……」

真実を知っても奪われたもののほうが大きかったため俺のIS嫌いはずぐに治らないだろうと考えながら……翔が口にした言葉をもう一度口にした。

確かに今まで父に理由を聞かず、ただ、昔の勇ましい姿を忘れられない……いや、自分が目指そうとしていた場所から居なくなっ

てしまった事が許せなくて嫌ってしまっていた。

自分が目指そうとしていたもの……それは……戦闘機で空を舞う事だった。

だが、捻くれたせいでもう一度、目指すことができない……と幼き日に思い浮べた目標すらまともに見る事ができない。

……どうすれば

「ううん、瀏ちゃん……」

いきなり隣のアイが俺の名を言ったため、隣を見た。

だが、眠りこけているから寝言なのだと

やれやれ……

その眠りこけているアイを見た、一瞬、頭に言葉が響いた。

…… ISは脆い

絶対的な強さを持つISを使う側の人間にもそう言われた……なら戦いによつては、それをカバーする事ができるのではないのか……戦いにさらされる事になるだろう少女達の命を守る戦いにも繋がるのではないか……

俺の中で何かが填まる音がしたのを確かに聞きながら俺は、携帯を取り出して父に電話した。

Side Out

Side アイ

瀏ちゃんの肩に寄り掛かって寝ていた私は、話し声で目が覚めたが、寝たふりを続けていた。

「父さん、俺だ。ああ、今帰り……女引っ掛けて来たかって？んなわけないだろうが……うん、うん。あと父さん……櫻井翔に会った……ああ、事件の真相を聞いたよ……うん。……確かに怖い人だったな。……で、父さん……俺は、IS学園に行こうと思う」

えっ？

瀏夜が自分から言い出した事に少しだけ驚いたが、私は、寝たフリをしたまま話の続きを聞いた。

「……って、女を釣るためじゃねえよ！ああ……櫻井……いや翔先輩から父さんが今やっている事を聞いたからかな？……IS嫌いは治ってないけど、ISとISではない戦闘機が共に飛ぶ空を見てみたいんだ。……それにこんな学園作って女だけに怖い思いさせたら男が廃る……たった1人ぐらい女を助けたいからな」

……瀏ちゃん

薄目を開けて隣を見れば、瀏ちゃんは、意地悪くない笑みを浮かべている……まるで空へ羽ばたき出す『鳥』のような迷いなき目で

Side Out

《時の流れ、それは失うもの

「おもしろい子はいた？」

「はい」

「……………何人か」

懇談会が終わった夜。

月光が屋上を照らし、いつもの『10人』の姿を照らしだす。

「いきなり喧嘩なんて、本音に聞いたとおりね」

「……………楯無さん」

「……………更識会長」

その発言に一夏とセシリアは、もうやめてくれといわんばかりだ

「その……………楯無先輩やめていただきたい」

「あら篝ちゃん、『夫』のお茶目なところからかわれて妬いてる妬いてるう」

「なっ／＼／＼」

その言葉に篝が真っ赤になり全員が笑った。

《失っていく事、残酷なまでに灯火すら奪いゆく

「フフフ……………私らももう2年かあ……………後輩には教えたいものね、ISを使いまくって盛大な恋のバトルしてたなんて」

「……………同感だ。弟子にも示しがつかん」

鈴とラウラがこの1年を思い出して自然に暗い気分に戻った。

「まあまあ、青春の1ページと思えばこれくらい楽よ?」

そんな2人を見た楯無は、いつものように笑みを浮かべている。

「いや、いくら何でも1ページじゃ納まらないんじゃない?」

「確かに……色々な事があった。……そして苦しんだ事もたくさんあった」

シャルの言葉を引き継いだ翔がそう締めると10人は、それぞれ複雑な顔となるが……

《だが、同時に……》

「それでも……」

「一夏?」

篝の言葉に一夏は、何か強いものを瞳に宿し、口を開く。

「それでも俺達は、沢山の新しい事や……」

「愛しいパートナー」

「えっと、大切な人達との絆かな?」

「……そして、護りたい存在を見つける事が出来た」「ああ」

男性陣、4人の言葉に女性陣は穏やかな顔になる。

それを見つめていた楯無の肩にも手が掛けられて温もりを伝えていた……愛しいの温もりを……

それらを見ていたのは月の光だけであった。

《時は、様々な邂逅を運び……》

4月

IS学園

どんな悪戯だよ！クラスの男が俺1人だなんて！

「……えつと次は………不知火君よろしい？」

「あつ、はい！」

瀏夜は、学年で男が数人いたはずなのに何故かクラスでは1人だけで割り振られた事に心中で恨み言を吐いていると担任が自己紹介を促した。

チイツ！こうなったら自棄だ！

俺は、立ち上がると口を開いた。

「不知火瀏夜です。………よろしくお願いします」

終身監視のごとく、まわりからの女子の眼が『それだけ？もっと、教えて』と、さらに説明を求めてくる。

た、助けてくれ、アイ！先輩方！

《その邂逅は、複雑にからみあい

2年生になって新しいクラスわけになった。

クラス編成上、1クラスに専用機持ちを集中させることは流石に出来ないため、旧1年生の『10人』いる専用機持ちを約2人ずつにわけて各クラスに分ける事となった。

「ねえねえ聞いた、2組には櫻井君とデユノアさん、水城さんがいるみたいよ」

「うえ、あのタッグだけでもかなり強いのに」

クラスの名を知らない女子が騒いでいる。

「：今度の学年代表、かなり厳しいものとなりそうだな？」

「らしいな」

「だが」

「ああそうだな」

また同じクラスになった篤と俺は、口をそろえて・・・紡ぐ。

「「楽しめるな」」

《新たに輝くものを示し・・・

二組

「なっ！……」

「？どうしたのかケル？」

変な声を出した俺にシャルが問い掛けてきた。

「…………部屋割りを見てたら」

「…………部屋割り？…………えっ！／／／」

覗き込んだシャルも顔を真っ赤にして部屋割りの表を見た。

そこには……………

室 織村 一夏

篠ノ乃 箒

・
・
・

室 櫻井 翔

シャルロット・デュ

ノア

・
・
・

「だ、誰が……………」

「またかよ!!」

シャルが口にする前に隣のクラスから一夏の声が響いてきた。

どうやら一夏も気付いたらしい。

だが何故……………

「?……………!」

「カケル?」

今朝、楯無に登校する直前に翔と一夏に手渡された生徒会だけ先に通知される部屋割り表だったのだが……………よくよく見ると俺と一夏の部分にだけ『生徒会長権限』の印が押されていた。

つまりは……

「……………楯無さん、酷過ぎだ」

楯無が猫のような容姿で、なぜか生えている尻尾を忙しく振って喜んでいる姿が目には浮かんだ。

「……………カケルとなら『次』のステージに進んでいいよ」
「ハア!？」

まだ学生だろうか!!

……………まだまだ混乱は続きそうだ。

《そしてまた色々な色を示し……………》

俺は、入学する前の喧嘩にケリを付けるため、ピットにいた。

『いいか、瀏夜。その『白夜弐型』は、一夏の白式と俺のスターダストのデータをもとに開発された『白夜』に旧デュノア社の技術を盛り込んだ量産試作機だ。今年度入学した男達に運用を任されているから壊すなよ?』

「わかっていますよ。にっしても少しごっついすっね、これ」

そう俺が着こんだ白いISに対しての感想を口にする。

この機体が回されるまで訓練機、打鉄やリヴァイヴで先輩方に『地獄』と言ってもいい訓練をさせてもらったからわかるが、この白夜弐型は、一夏先輩と翔先輩のISを元に行っているものの、所々打鉄に近くそしてそれよりも強きものを持っていることがわかる。

兵槽ユニットを兼ねた肩のユニットに真横を向いたスラスタ、背部グライダー方式の大型スラスタ、この2つは、白式、スターダストのメインスラスタを参考にしているため、かなり機動力を与えている。

下半身は、足回りの防御を意識していないものの両腰には大型ウェポンラックが設けられていて武装を予め収納できるようにしていた。

武装は、後付けに弾槽が肘まである小機関銃『百花』。

グライダーの両翼にパイロン（追加装備）として、高機動マイクロミサイル、対地ロケットランチャー等を装備可能。

さらに、初期武装として未使用時に空力制御を補助する刀『空前』が上腕部に2本装備されている。

『そう言うなって……さっ、さっさと入学前の問題片付けてこい』
「ああ」

今回の目的を改めて言われた俺は、頷きつつもカタパルトに乗った。

「カタパルト接続」

『瀏ちゃん、頑張つて勝つてね!』

「ああ!」

幼なじみからの激励を受け、俺はカタパルトから射出……新

たな空へ翼を広げた。

《その輝きを強きものにして……絆を広めてゆく……先
を行く者から続く者へ……紡がれる物語は続く

END

第16話 静かなる初まり

木曜日

IS学園

1年寄宿寮

寮玄関

Side 一夏

うーん、早く着過ぎたか？

今日、その日の授業をすべて終えた俺は、着替えて寮玄関にいた。

今日は翔、シャルル、箒と出掛ける約束をしていた。

出掛けると言っても今月末に行われるトーナメントに対しての細かいアドバイスなどを、モノレールで4駅程行ったところにある大型ショッピングモールの中の喫茶店で話し合うだけだ。（その後の予定は寮の門限ぎりぎりまで買物らしい）

翔とシャルルは、一足先にショッピングモールの方へ行っているらしいが、何か用事があるのだろうか？

一方、俺は翔の指示で箒と一緒にショッピングモールに行くことになっている。

そっぴや、こないだこの事、箒が聞いた時、喜んでるように見え

てたな。

どうしてだ？

俺は、特に断る理由もなかったため任されてここにいるが、その時の筈の様子に首を傾げはじめ。

それに俺と組む事になるかもって言ったらメチャクチャ喜んでたし……うーん、わからんな

俺は、ますます首を傾げる。

この男はこれまで幾多の娘達の思いに気付かずに散らせたのだろうか……

俺が首を傾げて悩んでいると……

「イテエ！」

誰かに背後から何やら柔らかい物で頭を叩かれた。

何ヤツ！？

と思いながら振り返った先には……

「……」

「ほ、箒……」

いつもと違う格好の箒がいた。

いつもと違うと言ったらひどい言い方かもしれない。

だが、この時の俺は箒の格好には少し呆気にとられてしまった。

ポニーテール状の髪型は変わらないけど、俺と同じように学園外への外出だからか格好は浅いさくら色のトップスに落ち着いた茶色のロングスカートだ。

いつも制服かISスーツ、もしくは剣道着の袴姿しか見ていなかった俺には何故か新鮮に見えた。

「……」

「……何をじろじろ見ている」

そんな呆気にとられ、仰視してしまった俺を箒は睨んでくる。

「い、いや、似合ってたなって思って」

「………そ、そうか」

俺の言葉に明らかに照れを見せる箒。

何で照れてんだ？

俺は、その照れた理由を理解出来ずに首を傾げる。

「? ……とにかく行くぞ、篤。せっかく翔達がトーナメントの相談に乗ってくれるんだ。待たせたら悪い」

「あ……ああ、そうだな」

そんなよくわからないやり取りをしながらも俺達は、寮を後にした。

ちなみに学園を出るまでは……

「おっ、織村君!!」

「篠之乃さんと一緒……」

「ぬおおお、先を越された!!」

等々、何故だか乙女達の叫びがあがっていた。

なんでだ?

Side Out

当然、一夏は、その訳を知る事はなかった。

このままであったなら『気軽な一夏』のまま、変わらない学園生活を送れたかもしれない。

が……彼は、知ってしまっ。

……『男』でISを使える事の『真の意味』を……

大型ショッピングモール

『フロントティア』

一階

少し郊外寄りであるがアクセスには、モノレールや高速が近くにある事からしやすいものとなっている。

屋根に太陽光パネル、床には振動発電のパネル板が引きつめられている。

さらには一部の外壁が蜂の巣状となっており、そこに風力発電のヘラを設置した等、クリーンエネルギーによる発電施設を有している。

二階構層のフロアとなっており、雑貨や衣服、食料品等の店舗がところせましにある。

それらの店舗に目を配らせながらもシャルル達は歩いていた。

S i d e シャルル

僕とカケルはちょっとした『用事』を済ませてから一夏達との待ち合わせ場所である喫茶店にむかっていた。

「主……これ」

「楓さん、それは高すぎです！」

「まあまあ、玲奈……楓、それ食べたら晩飯抜きだ」

「……それだけは、嫌……」

家族なのだろうか、自分達と同じ年代の男女がそんなやり取りをしている。

「……よかったのかな？一夏に伝えないで」

「たまにはいいだろ」

「で、でもさ一夏、篠之乃さんに『殺され』ないかな？」

そんな様子を見ながら傍らを歩くIS学園の制服姿の何故か大きめのカバンを持ったカケルにそう返す僕。

そう考えてしまう理由は……

「一夏と箒が組む。……特訓するなら知っておいてもらったほうがいい」

「けど……この格好をいきなり見せるのは、ちょっと」

そう言う僕の格好は……上は、浅い黄色のTシャツとジャケット代わりに薄手の白いシャツを着ている。

問題は下である。

下はいつものズボンではなく、女の子のらしい裾が少し短い広がりがあるフレアスカートだ。

付け加えるなら髪も下ろし、男性と思わせるための胸のコルセットを外していて、Tシャツの胸のあたりが自分の膨らみで顕になっている。

カケルがわざわざ学園外で話そうと言った理由自体、これが原因だ。

シヨップピングモールに一足先に来て、着替えを済ませてから一夏達と会う。

部屋に戻ってから計画を聞かされた時には、絶句した。

その後、早過ぎると反対したのだが……結局は、カケルの言い分やあくまで中立であったアストレイアにまで諭されて、今に至ってしまったのだ。

着いて、すぐに障害者用のトイレで翔がクローゼットの隅に入れていた『女装用の服』に着替えて今に至ったのだ。
(何故、持っていたのか疑問を抱いたが……彼の名誉のため、割愛)

カケルいわく、あの2人を組ませる為、『対ラウラ戦』を意識した戦術や訓練方法を考えるのが今回の集まりのメインだ。

共に近接型、しかも一夏の白式が近接武器しか積めないとなると正直、ラウラの勝ちほぼ確定に近い。

それでも組ませたいのは、こないだ話された事だけでなく、カケル自身が何か思いがあってじゃないかと思う。

しかし、いつも彼らの訓練を見ているからわかる。

このままでは、この大会での目的でもある『ラウラに勝つこと』は不可能だ。

だから今回、カケルが一夏達を連れ出してまで話し合いに踏み切ったのも、より高度な訓練を行うために正体を明かし、少しでも長く真剣に行く必要があるからだろう。

でも、急ぎ過ぎると逆にあぶくない？と僕は頭の片隅で思っていた。

けれども、翔ならそこらを大丈夫なようにすると思った……が

「……一夏の場合、これくらいの『罰』がちょうどいい。『罪深き者』には安息に眠るぐらいの一撃だ」

そう呟くカケルは、少し黒いものを瞳に宿して、口元を緩めて薄い笑みを浮かべている。

……カケル、楽しんでいるね？……絶対

彼の表情にある種の腹黒さを垣間見た僕は、少しだけ引いてしまう。

「……冗談だ」

……カケルのように顔に出ないとさ……冗談に思えないよ……

さらに引いてしまったが……

「ただ、もう一つ目的がある。シャルル、君に対してのお礼だ」
えっ？

カケルが僕の考えをさえぎって口にした言葉に僕は、彼を見た。
普段と変わらないまま、彼は口を開く。

「こちらの事を黙っていてくれる件と、こないだ俺が倒れた時、何も聞かずに看病してくれただろ？ だから……お礼だ。今日は何も制約が無い買い物が出るようにと思っただけ」

か、カケル……

僕は、驚きながらも自然に落ち着いていくのを感じた。

カケルの場合、心からの行動であるため、期待感を抱く事はないがこういった事を自然とやってくれる。

だから僕も自然に嬉しい気持ちになる。

「あ、ありがとう」

嬉しい気持ちを抱きながらも少し恥ずかしい僕は、少したどたどしくお礼を言う。

そんな僕にカケルは、目元と口元を緩めながら口を開いた。

「お互い様だ。それより、早速何か見ていくか？」

「えっ？」

「約束した時間までまだある。 2店舗ぐらいなら見られる」

ああ、なるほど

カケルの提案は、いい感じに的を得ていた。

確かに着替えが早めに済んだためか、一夏達と約束した時間まで後、1時間ぐらいある。

「じゃっ、じゃあ……」

その後、僕らは2店舗ぐらい店を回った。

1件目は、洋服店で見るだけで終わった。

だが、2件目のアクセサリショップでは……

「あっ……」

「？何かあったか？」

「う、うん……」

僕が見つめる先には、小さな星を形どったアクセサリがついたブレスレットがあった。

しかもそのブレスレットはペアの小物らしく、同じ形の星にそれぞれスカイグリーンとオレンジの小さな石が付けられていて僕の趣味にあっていた。

綺麗……でも値段が……

ペア品だからか少し値が高い。

これだけ買うとしても……

「……………」

「すみません、これを……………」

「えっ!?!」

僕が物欲しそうに躊躇ったのを見てか、カケルはそれを手に取り勝手にレジの方に向かった。

「あつ、いやカケル……………僕は……………」

「給料は貰っている。これくらいなら……………」

「で、でも……………」

給料貰っていようと流石にこれでは……………恋人に物をねだるやらしい女ではないか……………

それにこう言ったのは恋人同士の特別な日や……………告白した時に渡すようなプレゼントであるう。

それをこんな……………恋人でもない僕に……………買ってくれても……………そりゃ、恋人みたいになりたいと思うけど……………

そうこう考えているうちに引き止める手が遅くなり、カケルが会計へと向かってしまった。

「……円になります」

「あつ、すみません。プレゼント用のラッピングをお願いします」

「えっ!?!」

「はい。……失礼ですがお客様の御連れ様にお渡しに?」

会計の人が僕を見ながらカケルに問い掛ける。

「ええ、まあ」

「それはそれは……なら割引かせていただきますね」

「? ……いいのですか?」

「いいも、わるいもね」

その口にしながら会計の人が『お幸せ』にと意味を孕んでいるのだろうか、飛びつきりの笑みで僕に笑いかけている。

「あつ、えつと……」

それに答えようと口を開き掛けるが、その前に……

「ありがとうございます。またのご来店を」

「時間が不味いな。急ぐぞ、シャルル」

「えっ、ああああ」

会計が済み、僕は、カケルに手を掴まれて、引きずられるように店を後にした。

つて、これじゃあ!?!完全に恋人って思われるよ!!!/!/!

Side Out

一時間後

Side 篇

私と一夏は、ショッピングモール前まで来ていた。

翔からの提案もあつての事で私と一夏は、晴れてペアとなれたわけだが……課題が山積みだ。

主な課題だけをあげるならお互いに近接戦闘スタイルで、一夏の白式には射撃武器が積めないため、私が慣れない射撃を主に行う事になることや一夏自身がこのトーナメントで完全に眼中としているラウラとの戦闘をどうするかである。

射撃武器の方は、ISを扱う中で少しだけ練習した事があるもののはっきり言って苦手だ。

だから、少しでも効果的な訓練を受けないとならないのだ。

そ、それにしても………翔の奴は、な、何故、一夏といつ、一緒に来いと言ったのだ？ ……こ、これではデートではないか!？

そんな山積みの課題を考えつつも無神経を装いながら歩く私の心は、暴れ馬に乗っていた。

出し抜けたとも言えるが……いざやったところで一言も喋れずに歩を進めていた。

ええい！ このチャンスを……

「箒！」

えっ？

一夏に手を掴まれたかと思うと急に一夏の胸元に引き寄せられた。

すると、次の瞬間、後ろから轟音と共に突風が私を襲う。

視線を横にずらすと大型トラックが猛烈な勢いで通り過ぎ、黒い穴へと入って行った。

どうやら気付かないうちに駐車場の出入口に出ようとしていたらしい。

「ふう……なんだよ、あのトラック。大丈夫か箒？」

抱き寄せた私に一夏は、問い掛ける。

しかし、今の私には答える余裕が無かった。

その理由は……

「ぶ、ぶ、無事だが………一夏」

「？ なんだ？」

「は、離してくれないか、今すぐ！」

なんと筈を抱き締めたまま聞いてきたからだ。

かなり体同士が密着していて私の心臓は早鐘を打ち続ける。

このまま……い、いや！

シ、静まれええ！

「お、おう、ワリィ」

私の言葉に首を傾げながら一夏は身を退く。

女子を抱き寄せた筈であろうに一夏は、平然としている。

その態度に恥ずかしさから段々と腹立たしい気分となっていく。

まっ、まったく、こいつは……！！

「……」

「？ さっき抱き寄せた時、変に掴んじまったか？」

無言の状態ですら勝手に判断されたのが怒りに油を注いだ結果となつた。

私は、一夏の爪先を思いつきり踏んでやる。

「いつう！ ナンダヨ……！！」

「……いくぞ」

「いくぞつて、おい！」

だいぶ不愉快になりながら私は、さっさと進んだ。

その後からは爪先を押さえた一夏がなぜ私が怒っているのか首を傾げて痛みながらも付いてくる。

……このままではいつか、私の気持ちに気付くのが不安となるな

怒りながらも私は、頭の片隅で不安となっていた。

Side Out

Side ????

「おい、引きそこなつたぞ」

「別にいいじゃねえかよ、いま引いても」

「バカ、ここで騒ぎ起こして荷台を見られでもしたら大誤算だろうが」

先程、筈が引かれそうになった大型トラック内で2人の男が言い争う。

「けっ、そんな時は『アレ』を出せばすむだろ？」

「『先生方』の準備がまだだ、そう言うわけにもいかん!!」

イラつきが最高潮に達しているのか片方の男が運転役でもある男を怒鳴り付ける。

それに対し運転役の男は、小さく愚痴を溢しながらバックミラーで荷台である大型コンテナを見た。

「チッ、早くしてくんねえかな天下の先生様は。 さっさとしねえ

と俺らの『クソ共狩り』ができねえよ、『コイツら』で」

その中に眠る鋼鉄の『理性』が作り出す惨劇を思い描く彼は、残酷な笑みを浮かべる。

Side Out

フロンティア

入り口B

Side 真耶

学園での仕事を終えた私は、ここで人を待っていた。

土曜日に初めて顔を会わせた人物であり、自分の教え子から紹介された人物。

一度目の出会いは、驚きが合ったものの、今まで会った男性の中でも落ち着いた感じの人であった。

そんな人が私に簡単なテストをするため、ここを待ち合わせ場所にしたのだ。

どんなテストであるか、次回、会ってからの楽しみとされたため対策は討てない。

ただ、いつも通りに振る舞ってくれればと言っていたので特に難しいテストではないらしい。

だが、そうであっても……

それでも緊張しますね……………テストと聞きますと……………えっ!?

私は、テストと言う言葉に少しだけ気を引き締めて待ち人を待つて
いると、入り口の自動ドアから教え子達が入ってくるのが見えたで
はないか!?

お、お、お、織村君に篠ノ乃さん!?!? どうしてここに……………ハッ!

彼らの姿を見た私は、驚きながらも見つかった場合の展開を予期し
た。

・自分を見つける

・当然、1人であるところを不信がり、近づいてくる

・そこに待ち人がくる

・それを教え子達が勘違い、『大人の世界を想像される』

・明日には、学園内に伝わって……………

そんな流れになって、待ち人が『恋人』さんになったらヤバイです
!!

自身の軽い妄想も混じっているかもしれないが、私は、若干のパニックを起しながら待ち合わせの場所であった柱の影に隠れた。

向こうが通り過ぎるのを織村君達から見て柱の影になるように動きながら息をひそめ続ける。

「何怒ってんだよ？」

「ふん！！」

「たく、お前のそう言ったところ全然変わってねえよな」

「何が言いたい！！」

「だからさ……」

何やら痴話喧嘩をしながら織村君達は、通り過ぎてくれた。

ふえ〜、なんとか回避しましたね。 それにしても何を喧嘩してたんでしょうか……？

2人の後ろ姿が遠ざかっていくのを確認しつつ、私は少しばかり首を傾げた。

それと同時に妄想が炸裂した。

ひょっとしてデートだったの………

「山田さん？」

「はふいいい……」

真後ろから呼び掛けられた声には私は、ビクツと背筋を反応させながら間抜けな声を小さく漏らした。

振り返ったその先には、仕事帰りの時間でこちらに来たのだろうか、背広の上着だけを片手に畳み、ワイシャツ姿の城戸の姿があった。

「き、城戸さん。い、い、いつからそこに!？」

「つい先ほど……貴女が何か隠れる素振りをしていた時からです。……何かありましたか？」

私の反応に何か不振を抱いたらしく私を不安がらせないよう静かに問い掛けてきた。

まさか教え子達に見つかりそうになったから隠れていたと言えないため、私は不自然ながらも愛そう笑いをした。

「あっ、いいえ、なんでもないんです! あ、アハハハ!！」

「……ならいいのですが」

どうにも納得してないように城戸さんは私を見る。

そうされると見透かされてしまいます! !と思っただ私は、とにかく歩きだした。

「さっさ、きよ、今日のカウンセリングをお願いします!！」

「………わかりました」

どうにも腑に落ちないようだが、城戸さんは頷いて私の傍らを歩きだした。

はう………今日は大変になりそうです。

果たして、自分は最後まで教え子達に見つからずにはいられるか？

Side Out

斯くしてこの二組が揃った。

彼らがいなければ、また違った終わりをしていたのかもしれない。
『この事件』は……

Side 一夏

1Fフロア

喫茶店『コメット』前

何故だか怒っている筈に附いていく形で俺達は翔との待ち合わせ場所にたどり着こうとしていた。

「なあ、いい加減、機嫌を直せよ」

「……ふん」

なに怒ってんだ？

まだ機嫌が直り切っていない筈にしきりに俺は首を傾げるしかなかった。

……まずいよなこの感じ、コンビを組む上で……

何で機嫌をそこねたのか俺には検討もつかない。

とにかく、空気を変えな……ん？ そう言や……

俺は、この空気を変えたいために口を開こうとしたが、その前にある事を思い出した。

「なあ、箒」

「なんだ」

「お前、こないだ。『付き合ってくれ』って言ったよな？」

「！！！！ あ、…ああ」

俺の言葉に箒は齒切れ臭い表情で言葉を返した。

なんだ？

そんな表情をした箒に俺は、さらに突っ込んだ。

「あれって、お前が優勝したらって事だよな？」

「……だからなんだ？」

「いや、アレって『お前が単独』で優勝するってみたいな約束だったが…… やっぱりその後、俺とも戦うのか？」

「！！？ な、なにを言ってる」

俺の言葉にさらにテンバル箒。

「いやさ、あの時って個人戦だったし。結局、お前1人が優勝したらって事にも取れるだろ？ だから戦うのかなって」

俺達に優勝が出来るかは、わからないがもし優勝したらそうなる

んじゃないかと俺は、思っていた。

「あ、あれは……………お前と一緒にでも変わらん」

「えっ、そうなのか？」

「そうだ。武士に二言はない」

そう切り捨てるように口にする筈は、なぜだか顔を赤く染めている。

？ ひよっとして風邪か？

それを見た俺が、そう考えていると…………

「？」

「？ どうしたんだ筈？」

筈の視線がある一点に向けられ、不思議がった顔をする。

その視線の先を見るとそこには…………

「ようやく来たか」

着替える時間を省いてここに来たのであろうか、まだ制服姿である
翔が集合場所の喫茶店の前にいた。

その隣に、シャルルの姿が無く、代わりにどう見ても日本人ではな
い金髪の女の子がいた。

女の子と言っても自分達と同じぐらいの歳の背丈の子だ。

ウワァ…………翔のやつ、シャルルがどっか行って、待っている間にナ

ンパでもしてたのか……って？ アレッ、どっかで見たような……

俺は、翔の意外な一面に驚きながらも何故かその隣の人物に近親感を抱く。

胸の膨らみやスカート等格好は、女の子らしさを醸し出しているが、どこかしら男の子のように見えてしまう。

えつとどこでだ……

「翔、その女子……見損なつたぞ」

俺が思い出そうと頭を捻っていたら筈が、翔の隣にいる女の子を逢引きなんかで捕まえたのであるうと思ひ、異性としての嫌悪感を顕にする。

うーん………学校で女子達相手に気取ったり、手を抜かない翔が逢引きなんてするとは、思えないんだが………それに隣の子って、最近良く会っているような………てか、シャルルはどこだ？

俺があと何かヒントさえあれば答えが出そうになった時である。

翔が驚くべき答えを述べた。

「すぐにはわからないか………一夏、筈」

「お、おう」

「なんだ」

「こいつは、『シャルル』だ」

………はあ？

一瞬、俺は翔が言っている意味を理解し損ねた。

隣の篤も理解できないといった表情を浮かべている。

……翔、何を言って……

「何を言う、デュノアは男……女子に近そうな顔つきであること」

俺と同じように驚いた篤がすぐに否定の言葉を投げ掛けるが……

「シャルル、髪を」

「う、うん」

！？ シャルルの声、じゃあ、まさか

声だけで判断するのは、まずいかもしれないが声や改めて顔をまじまじと見るとシャルルの顔付きだ。

さらさら……

「これでいいかな、翔」

「ああ、それでいい」

髪を首の付け根辺りで丁寧に束ね、紐で結わうと完全にいつもシャルルの『顔』になった。

！……！？ ま、まさかシャルルは、おん……

「……まさか、デュノア……そのような趣味を」
はい？

篤の言葉に俺は、ポケットとなり篤を見た。

箒は、何かとてつもなく勘違いしているらしく顔を真っ赤にしている。

た、確かにその可能性があるが……でもなんか女装しているようには見えないぞ？

俺は、箒が考えた1つの可能性に気付いていたが、容姿を見てその可能性が低い気がしている。

そんな箒を見た翔は、呆れた様子で次の手を投じる。

「……仕方がない。 箒」

「な、なんだ！」

「ちよつと、シャルルのここ触ってみろ」

そう言いながら翔が示した箇所は、膨らみがあるところより、少し上の部分だ。

直接触れる行為ではないが、それでも大きな解釈をすれば『触る』に等しいところ。

その発言に……

「えっ！」

「なっ！」

シャルルらしい？女の子と箒が驚愕な声を上げる。

「シャルルには悪いが、こうしない限り、箒は信じられないみたい

だからな」

「だ、だが……」

続く翔の言葉にたじろくように身を引きはじめる筈。

……これで男だったらかなり気まずいぞ、筈

俺は、そう思いながらも筈を見る。

一方、問題の人物はと言うと……

「……翔のエッチ」

「……すまない。だが、手っ取り早くわからせるにはこの手が早い」

「でもさ……」

「手は、他にあるが……一番穩便なのがこれだ」

「……ツウ／＼……帰ったら許さないよ」

翔の言葉に何か思い当たる点があったのか、女の子が顔を赤くした。

「……ああ、帰ったら覚悟しておく」

「もう……かなりお仕置きしないとイケないみだいだね」

「どうだろうな？ ……そろそろ時間も勿体ない。……覚悟決めてくれ」

翔がそう口にするると女の子は、筈の前に立った。

「……うん。篠之乃さん、触って」

「……わかった」

翔と女の子のやりとりを見てか、篤は覚悟を決めて女の子に手を伸ばした。

Side Out

Side 篤

ええい、ままよ!!

私は、すでに覚悟を決めた相手に失礼がないように私は、相手の胸元に手を添えた。

すると……

……ナツ、ナニ!?

胸筋ではない、何やらやわらかさを感じる膨らみがあった。

それは、最近、自分のコンプレックスになりつつあり、止まることなく膨らみ続けている『胸』のような柔らかさそつを兼ね備えているような……

それに……

触った瞬間、シャルルの頬が赤く染まったのを見た。表情を見た刹那、ある人物への『怒り』が一気に頭の中を支配する。

「……一夏」

「？ お、おう？」

シャルルの胸元から手を離れた私は、隣を向きながらも一夏の胸ぐらをつかみ上げた。

「……どう言うことだ」

「お、おい！ い、いきなり何を！？」

一夏は、胸ぐらを掴まれた事にかなり焦った声を出すが、今の私には聞こえない。

なぜなら……

「とぼけるな！！ お前もシャルルが『女』であったことを隠していたのだろう！！」

そう、結局、行き着いた先はそこだ。

シャルルは、『女』であった。

紛れもない事実を突き付けられた私は、同時にある事を直感した。

シャルルが学園に来て、早一週間と数日、その間のISスーツなどの着替えは一夏達と一緒にであった。

その時にシャルルは、一夏達に素肌を晒していないわけ無いであろう。

つまり、一夏と翔は、女子の裸体を見ており、黙認した事となる。

そうなつてくると翔にも怒りの矛先を向けるべきかもしれないが、自分が恋い焦がれている一夏が『そんなこと』をしたのであれば、自然と彼へのみ怒りか私の中に蠢く。

「知らねえよ！ シャルルのは、今日、今、この瞬間、初めて見て知ったんだ！！ 翔は知んねえけど……」

「！？ そうなのか……と納得するわけなかるう！！」「なぜ！！！！？」

私の言葉に一夏は、悲鳴をあげるが……それすら耳を通り過ぎる。

ただ……

「この状況を百文字以内で、きつちり説明しろ！！！」

唐変木な一夏に対する怒りだけが私を突き動かす。

Side Out

Side 一夏

く、首が絞まって死ぬ……

問い詰められながら胸ぐらで首を絞められている俺は、この時、意識を失いかけていた。

シャルルが女だったなんてな……驚いたぜ……翔の奴もひでえよ黙ってんななんて……グッ！

そう頭の片隅でボンヤリと考えているとさらに首絞めが強くなった。

「か、かけ……る。 た、た……」
助けてくれ……

俺は、望みが薄くとも翔に手を伸ばした……が

「一夏」

……なんだ？

「たまには、死線をさ迷え」

！！ 翔！！！！？

「さつさと白状しないか、一夏！！！！」

完全に見捨てられた俺は、筭に揺さ振られながら誤解が解ける十分後まで死線を文字通り『さ迷った』。

Side Out

Side ????

俺は、作業の終わった配電盤の蓋を閉め、ようやく息をついた。

「……ふう」

「お疲れさまです、『先生』」

傍らにいた俺の手伝いがこの数時間、飲むことがなかった飲み物を渡してきた。

「ああ、ありがとう」

俺は、それを受け取り、中身を飲み干す。

この数時間、商業用、高圧電流用、発電用機器等へと繋がる配線を一本、一本、間違わないように探索しながら自分達の装置に使う器材へのバイパスを造り上げていたのだ。

もちろん、事を起こすまで送電が止まらないように電気が流れ続ける中だ。

「……………」

「あの……………先生」

「ん？」

俺が一息ついたのを見たのか、手伝いが俺に言葉を投げ掛けた。

「なんだ？」

「……………その俺達が……………やろうとしている事は、一種の怒りである事はわかっていきます……………ですが……………」

「……………なんだ？ 言ってみろ」

言いたい事がわかっていようと俺は、口を開くように促す。

どうせ、実行間際になって怖じけづいた……………

「『先生の目的』は、こうするしかないのですか？」なに？

俺は、手伝いの言葉に思わず表情を崩した。

そんな俺にさらに言葉を吐いてくる。

「先生の顔に覚えがありましたね、経歴を簡単ながら調べさせて頂きました」

なるほどな、そんで俺の目的を……

「先生は、今の世界と言うよりも……『弟子』に怒ってらっしゃるのでしょ？」

「ああ、そうだな」

「それに俺達を暴走させないように手を打ってらっしゃるこいつ……」

俺は、手伝いが手伝いたちに施した『仕掛け』に気付いている事に驚いた。

「……気付いていて俺を手伝うのか？」

俺は、思わず聞いてしまう。

この場限りで別れる事となる手伝いに……その『覚悟』を問う。

なぜ、気付いていながら……

「……彼女が……いえ、貴男の弟子がなぜ、『IS』を世に出して世界の形を変えてしまったのか……私には理解できません。が、今後も貴男の弟子が世界や未来を弄ぶなら、私はここで楔を打ちたい……そのためなら貴男にすべてを掛ける」

「……」

「ただ、そうなった際、貴男が逃げ出すことがないよう……私や私達の命を楔として貴男に食い込ませる。それが手伝う理由です」

つまりは、弟子を倒すまで『楽』をするなって事か……

自身に突き付けられた事を改めて理解した俺は、ただただ……

「わかった、約束しよう」

「……ありがとうございます」

言葉を返すしかなかった。

自分が選んだ道を引き返す事を許さない存在がいる。

それが俺の始まりになるかもしれない。

そう考えながら俺は、計画開始の『産声』を待つ。

すべては……奪ってしまった未来の欠けらたちへ……償いのため

第17話 ニーズヘッグ

フロンティア

1Fフロア

喫茶店『コメット』

Side 一夏

箒に首を絞められ、文字どおり死線をさまざって数分後。

翔からの支援？（砲撃）が無い中で俺は、なんとか箒の説得に成功し、命の危機から脱した。

だが、箒の目はまだまだ冷たく、下手な事を口にすれば、即『死』が待っているような気がしてならない。

あれから俺達は、店内へと入り、外が見えるガラス張り近くのテーブル席へと着く。

席へと着いた俺達……いや、俺と箒と女の子であると正体を証したシャルルの3人の間に気まずい空気が流れていた。

「……………ムウ」

「……………」

何も喋れない。

知らなかった……と言うよりもなぜ、シャルルが性別を偽ってまでもIS学園に入学してきたのかがわからないからだ。

翔は………同室の上に俺よりも早く気付いていたのか？

俺の隣に座り、今の状況に顔色一つ変えない翔を見た俺は、自然と感じ取っていた。

どうやって知り得たのかは、わからないが翔の事だ、その高い洞察力の賜物だろう。

「お待たせしました」

席に着いてから程なくして翔が席に着いてから先に頼んでいた全員の紅茶がテーブルに置かれた。

「……言いたいことも多くあるだろうが、まずは落ち着いてからだ」

紅茶が全員に行き渡ったのを確認した翔は、静かに口を開く。

「あ、ああ」

「……う、うむ」

「うん」

翔の言葉に従い、俺達は、紅茶を軽く口に含んだ。口に含んだ紅茶を飲み込み終わったところで、俺は篝の隣に座るシャルルに話し掛けた。

「……………えつと、シャルル？」

「う、うん」

「話してくれないか？　なんでこんな事に為ったのかを」

少し、言葉を選んだつもりだったが、俺が吐き出した言葉は素直な事を聴いていた。

何でシャルルが性別を偽って学園に入学したのか、それが今の俺達の引掛かりであった。

「うむ…………話の次第であるが、お主にどのような理由があれば、偽りをおかけた事を私達は少なからず動揺している」

篝も真剣な表情でシャルルに問い掛ける。

やはり同性としても、何故このような事を行ったのかが気になるのだろう。

「う、うん…………あのね。　僕が性別を偽って入ったのは社長……………」

…つまりは父親の『命令』だったんだよ」

「父親から？」

シャルルが少しばかり深刻そうな顔で俺達に語りだした。

「うん、一夏やカケルが持つISのデータ収集のためにね」
「ISのデータ収集？」

篤が言葉の意味がわからないと言う風に首を傾げる。

ただ、俺の中ではシャルルと一緒にいる機会が多かったので別の視点から話を見ていた。

「？　なんでデータ収集なんかが必要なんだ？　デュノア社の量産機生産シェアは世界第三位なんだろ？」

「デュノア社の量産機生産シェアは、世界第三位の実績がある。」

そうこないだシャルルから聞いた時には、ISの事をあまり知らない俺にとつてもすごい事であると認知していた。

が、そんな企業が何でシャルルの性別を偽らせてまで秘密裏にデータ収集をしようとしているのかが理解できなかった。

「それは……」

「企業存続と新世代型ISの開発の為だ」

シャルルが少し躊躇したのを見てか、今まで黙っていた翔が話を引き継いだ。

「企業存続？」

「新世代機の開発？」

翔が発した言葉の意味をよく理解できない俺達二人に翔は、補足を踏まえながら説明しだす。

デユノア社が陥っている経営危機、フランスのIS開発事情、そして俺や翔の特異性ケースがもたらした希少価値等の事を俺達にわかりやすいように事細かに聞かせてくれた。

「……………以上が送り込まれた理由だ」

翔は、語り終わると口を閉ざす。

知らなかった……………シャルルがそんな理由を抱えていたなんて……………
… だけど何で

俺は、話を聞いている中で疑問に思った事がある。

それは、シャルルの家庭事情に踏み込んでしまうのかもしれないが、俺達の疑問のほうに勝った。

「大体の事情はわかった。 けどよ、シャルル」

「何……………かな？」

「何で社長の息……………いや、娘さんのお前が性別を潜入することになったんだ？ 確かに顔つきが男っぽいから適任だったのかもしれないけどさ、自分の娘を危険にさらすような真似を何でしたんだ？」

「うむ、それは話を聞いて思っていた。 親が子を危険に突き出す真似など、正気の沙汰ではない。 何を考えて」

俺も同じ考えでいるらしく、俺の言葉を補うようシャルルに問い掛ける。

その言葉にシャルルの表情は、一番に曇りだす。

「どうやら一番聞くにつらい事柄らしい。」

「……ごめん、言わなくていい」

そんな表情をしたシャルルに迂闊だったと思いながら俺は、謝罪の言葉を口にする。

「やな奴だ、俺は……」

「うん……翔とも予め話し合って、全部話そうって決めていたから」

そんな俺に言葉を返しながらシャルルは、口を開こうとする。

「だが、その前に……」

「シャルル、これを」

口を閉じていた翔が制服の胸ポケットからメモ帳とボールペンを取出し、シャルルに手渡した。

「えっ？ でも翔……」

「これから話す事は、限りなくジョーカーに近い。偶然聞かれて火種を大きくされたらこちらでの対処のしようがない」

「あっ……う、うん」

えっ、ジョーカーに近いつて？

翔の言葉の意味を汲み取れない俺と篤は首を傾げた。

「面倒だとは思うが、今から話す事は口に出してはいけない、受け答えもメモ帳に書いてくれ」

そんな俺達に対しても忠告じみた言葉を翔は発する。

どう言うことだ？

シャルルだけは渡されたものの必要性が理解ができたらしく、シャルルはメモ帳とボールペンを受け取るとメモ帳に何かを印しだした。

そして、何かを書き終わるとこちらに文面を向けてきた。

優しいタッチの俺達にわかりやすいように日本語の文面がそこには書かれていた。

だが、その文面は、まったく優しいものではなかった。

【僕の母親は、デュノア社長の愛人だった。】

「……………えっ」

「……………なっ」

俺は、その文面に驚愕の声を漏らしていた。

篤もシャルルの書いた文面に釘づけになっている。

その文面から顔を上げた俺達がシャルルを見ると彼女は、頷き、いったんメモ帳を戻し、新たな文面を書いて俺達に見せてくる。

【2年前までお母さんと暮らしていたんだ。けど、お母さんが亡くなつて、それで父に引き取られた。引き取られた時の検査過程でIS適正が高かったから非公式でテストパイロットをやっていたんだ。】
なるほどな、2年前から……

俺は、シャルルの優秀さの由縁を見たいだ。

だが……次の文には、俺の中の何かが動きだした。

【でもね。父に実際に会ったのも二回ぐらい、電話の時も入れて会話は数回ぐらいかな？いつもは別邸で暮らしてたんだ。】

その文面に顔を上げ、シャルルを見ると変な話してごめんねと言いたいように乾いた愛想笑いをされた。

【それでね。デュノア社が経営危機に陥って、さつき翔が説明したように広告塔や一夏達のような『特異ケースと接触しやすい』同じ男として行けと『父』から命令されて日本に来たんだ。】
……命令、じゃあシャルルの親父さんは、シャルルの事を……

俺は、シャルルの実の父がシャルルの事をただ『手ゴマ』として扱っているのだろうと話を聞いて感じていた。

それと同時に何とも言い難い感情が騒めきだしていた。

簿も俺と同じように感情が騒めきだしているようで段々と険しい顔となってきた。

俺は、シャルルからメモ帳とボールペンを回してもらい回ってきたメモ帳にシャルルと同じようにメモ帳に文面を印す。

そして文面を書き終わるとそのままシャルルへと見せた。

【もし、俺達以外や他人にシャルルの事がバレたりしたらどうなるんだ？】

ISに関わる企業、しかもシャルルと言う名の『男』のフランス代表候補を世に送り出している中で、本当は『女の子』でしたとバレたらかなり不味いのではないか？

国家や国家から選出された代表候補と言う立場をよく理解していない俺であるが、処罰は厳しいのではと俺は思う。

それに対してシャルルは、すぐに文面を返した。

【デュノア社自体は、倒産か別の企業の傘下に。僕は、よくて牢屋に投獄かな？】

その文面に書かれた事を見た俺は、何か外れ、叫びながらテープルを叩いて立ち上がった。しまう。

「ふざけんな！！！」

喫茶店にいた他のお客さんが何事かと俺達の方を見てくる。

俺は、人目も憚らず、続け様に言葉を発した。

「親のお陰で子供は生まれるのはわかってる。だがな親が子に罪な事をやらせるだと？ ふざけてるだろこんな！！ 親が子供の生き方を選ぶ権利を邪魔していいわけないだろ！！」

「い、い、一夏？」

「落ち着け、一夏」

シャルルと筈が俺の言葉に戸惑った表情をしてみよう。

ただ、筈だけ俺を制止する言葉を投げ掛けたのは幼い頃からの俺を知っているからだろう。

俺が叫んでしまったのも、シャルルに向けてでは無い。

俺自身に対して……そして『その事』で千冬姉に負い目も感じていたからだ。

「……だが、そうしなければ生きれない奴もいる。……仕方がない事もある」
「なっ！？」

翔の真つ向からの否定に俺は、思わず驚愕の言葉を漏らした。

「だから、誰にも他人の生き方を否定する事は出来ない……と続けてやれば相手側の感情も『台詞』に入るだろ？」

「えっ？」

「はあ？」

返された続く言葉に俺と筈は、意味を汲み取れずに間が抜けた声を漏らしていたが……

「おい、そんな言い方ないだろ!!」

翔の人間らしさを切り捨てた言い方に俺は、すぐさま声を荒げて再び噛み付いていた。

彼が何をしたいか、解らないが、翔の言葉は俺が怒ろうとした事すら認めようとしている。

そんな事をすれば、シャルルが過ちを繰り返してしまうのではないか。

そう怒りが俺を支配する中、翔の雰囲気が一気に変わった。

「なら聞くが、この世に『正しい方法』があるのか？」

「えっ？」

意図も見えない問い掛けに俺は、思わず声を漏らしていた。

「問題を解決をするため、決められた時間内で遣り遂るため等々…理由はどうあれ、人によって行動するための様々な策が考案されるだろう。だがな、お前が『正しい』と思う『手』はほんの一握りにしかすぎない」

「な、何を……」

「つまりだ……お前がかかげようとする手は、正しいとも言えるが必ずしも『最良の手』として使えるわけじゃない」

俺の考えは甘いと言わんばかりに翔は睨んでくる。

その睨み付けてくる翔の瞳は、俺が体験したことのない『経験』からくる鋭さが宿っている。

「そ、そんな事……」

「……今回は、その内、最悪な方向に向わなかったのがせめてもの救いだ……とさらに続ければいい」

「はあ？」

また、睨み付けながら見当が付かない言葉を投げ掛けてくる翔に流石の俺も困惑しだす。

さっきから……何が言いたいんだ？

翔の言っている事はわかるが、話の中で何か別の趣旨も混ぜてくるから言いたい事がよく見えてこない。

「……とりあえず座り直せ、劇の台詞を考えるのもそこからいいだろ？」

俺がそれに対して考えあげていると翔が俺の左肩を強引に掴み、力強く俺を席に着かせようとする。

な、何を……つう！

あまりの力強さに俺の肩は痛みを覚え出す。

何をしよう……？

翔がそうやっている間にもシャルルの新たな文面を記し、俺に見せてくる。

【ごめん。話には続きがあるんだ、だから座って】

話に続き？

先程、話された事にどうやら続きがあるらしい。

それと同時に翔が先にシャルルの事を『知った』のに気が付いた。

ならば、俺達に話す前にすでに解決しているのでは……………だったら今までののは…………

頭の片隅で何かが噛み合った音を聞いた俺は、大人しく席へと着いた。

「…………じゃあ、劇の続きを書いていくか」

俺が席に着いたのを見た翔は、少し大きめの声でそう話すと周りからの視線を散らせた。

どうにも翔の言い方が気にはなるが、その前にシャルルの口が動いた。

「その…………一夏、驚いちゃったけど…………」

「あつ、いや…………悪い、つい熱くなっちゃった」

「大丈夫だから別にいいよ。それより、本当にどうしたの？」

「ただならない、怒りを感じた…………何かあったのか、親に対して」

シャルルと翔が問い掛けてくる。

そりゃそうだ、あんだけ喚けば誰だって不思議がる。

俺は、少し恥ずかしい気持ちにもなりながら理由を話した。

Side Out

Side 篇

デユノアの話をしている中で一夏が激怒した理由、私の中では予想が付いていた。

小学2年生の頃から親しくなっていたからではなく、門下生の1人であつた彼の姉、織村千冬と父が話していたのを盗み聞きしていた事があつたからだ。

「俺は……いや、俺と千冬姉は親に捨てられたから……」

「あつ……」

「……」

一夏の言葉がシャルルと翔を驚かせていた。

シャルルは、何かに気付いたような顔、翔は、一瞬だけ目元を変化させるだけで強く表さなかったが、静かな瞳に深いものを宿している。

「その……ごめんね」

シャルルが聞いてはいけない事を聞いたと思つたらしく一夏に謝つ

た。

それに対して一夏は、すこしばかり苦い顔をしながら口を開いた。

「べつにいいさ、俺の家族は千冬姉だけだ。今さら親に会いたくも思わないし。それにみんなもいる、淋しくはねえよ」

そう言い切る一夏の表情は、語る間にいつものようになっていった。

やっぱり、これが一夏だ。

恋愛ことにはとことん鈍い、が代わりに誰かが困ったり、弱い立場に追い込まれれば、自分の身も顧みずに助けに走る強い優しさがある。

自分が『惚れた』ところが今だに変わっていない事に私は、自然に心の中で喜んでいた。

「で、話に続きがあるんだよね？」

「そうだったな、翔から何か案を出されているのか？」

話を最後まで聞いている中で、私が考えていたのはそこであった。

自分の複雑な相談等を聞いてもらっている翔、それが同室の秘密を持った女子をほっとくとは思いがたい。

だから話の続きと言うのは、恐らく翔からの提案なのであろう。

それを聞こうとしたら……何故かシャルルが顔を赤くする。

「？ 何かあったのか？」 「んん。 ……話つて言うのは、翔が考えてくれた策なんだけど……」
「やはり、翔も考えていたか。 なら聴くが、それはどの様な策なのだ？」
「それは………」

シャルルは、何故か口淀んでいる。

そうしてしまっているため、翔が代わりに答えだした。

「俺の方では、2つ策を提示した。 1つは、IS学園の特記事項で3年間の安全は形だけだが確保する」

「あつ、そうか確かあらゆる組織、国家に帰属しない事項だったよなそれって」

「そうだ。 2つ目は……シャルルが決めることだ」

2つ目の解決策だけ、何故か深く言わない翔。

何故だろうと私が思っているとシャルルが口を開いた。

「あのね……翔が考えてくれたのは『自分のところ』に来ないかって事なんだよ」

「？」

「なっ………」

一夏は、意味が理解できなかつたらしく首を傾げているが、シャルルが頬を染めながら言った言葉の意味を理解した私は一瞬の間を置いて……

「何いいい」

小声で叫びをあげていた。

Side Out

Side 翔

篤が驚愕の声を上げる中、シャルルはさらに頬を染めてた。

……履き違えられたな

《ですが、『大体の意味』はそうなってしまいますよ。 M S シ
ヤルルも言葉を選んでくれたとは言えども

俺が少し話を拗らせた事に頭を悩めているとアストレアが、からかい口調で念話を送ってきた。

その念話に呆れながらも俺は、アストレイアに返す。

《確かに言った意味は、大体がそれに当たるが、まだ家族になるとは決まっていないだろ？

篤達が捉えた意味は若干、違うものの仮にシャルルがこちらの世界に来るとしたら子供達に独り立ちされ、寂しい盛りであるうりんデイさんの方で面倒を見る事になると予想される。

……最悪、俺が切っ掛けだ、恋愛感覚抜きで俺が面倒を見るつもりだ。

《マスター……相も変わらず冷たいですね

《なんとでも言え……彼女を縛り付けたくないだけだ。 それに……》
《それに？ 何ですかマスター》
《……俺よりも良い奴が彼女を幸せにするさ》

俺は、独り言のように念話を送った俺の心中に何かがしこりとなる。

無意識に『逃げている』事はわかっている。

ただ……この血に宿る『記憶』が拒んでいるのだ……愛しい人を……そして失う事が怖いと。

だから、自分からは誰かを心から思えないのだ。

好意を寄せられていようとも……

「ほ、本当なのか翔。 そのような事を」

篤がシャルルの言葉を聞いて、俺に問い掛けてくる。
事実でもあったので俺は、答えだした。

「ああ。 ただ、それは、あくまでも最終手段としてだ」

「最終手段？」

「シャルルが、この三年間で何も出来ずに実家に戻されるとしたらだ。 ……実の娘を道具として扱う奴を許しておけるか」

いつもの俺の姿を見ているせいか、俺の強めの言い方に一夏達が驚いた表情となっている。

「……今回、お前達を呼んだのは、訓練の事だけじゃない。 シャルルと一緒に助けて欲しいからだ」

「えっ？」

「助けるって……」

「意味がわからないぞ」

続けた言葉に一夏達だけでなくシャルルも意味がつかめないように、首を傾げていた。

シャルルにも話していなかった事を俺は付け加え、話していく。

「結局、いくら法律やら建前をかざしたところでフランス政府やデュノア社がシャルルの事を『シラ』を切るうとすれば、今すぐにも出来るはずだ。 そうなった場合、シャルルの身が危険になる」

一夏と篤が驚いた表情をしているが、シャルルだけは何かに気付いた表情をしている。

Side Out

Side シャルル

……カケル、そこまで………考えていてくれて

僕は、思ってもいなかった不意打ちに泣きそうになる。

僕自身はその事には既に気付いてカケルに隠していた………が、カケルの考えのほうが一枚上手だったらしい。

フランス政府やデュノア社が僕の存在を消すなど容易すぎる。

あえてその事を証さなかったのはカケルにもう心配を掛けたくな

ったからだ。

「……恐らく、『奴ら』が本腰を入れてシャルルを連れ戻そうとするなら俺だけじゃ、助けられない。だが、このまま手を拱いているわけにもいかない、だから1人でも……一夏、箒、お前達のような奴に助けてもらいたい。……頼む」

そう言うとカケルは、少しだけ頭を下げた。

少しばかり過保護ではないかと思う部分があるが、カケルは、自分だけで助けられないから素直に協力を求めている。

ようやく見れたカケルの弱さは人を助けたいけど、力が足りないから自分を少し責める時なのかな？

「お、おうわかった」

「ああ。そのつもりだ」

2人からそのように返されたカケルは、優しい笑みを浮かべて礼を口にした。

「……ありがとう」

前に屋上で見せたようなとびっきりの笑みだ。

その笑みにまた見とれてしまう僕と初めてその表情を見て驚く一夏達。

「なんだ？」

一夏達の表情に一瞬でいつもの表情へと戻したカケルが怪訝そうに返す。

「どうやらカケル自身が無意識に感情を表情に出していたようだ。」

「い、いや別に」

「う、うむ」

カケルに睨まれた一夏達が少し気圧されながら応えようとカケルは、少しだけ呆れた雰囲気醸して口を開いた。

「……とにかく、シャルルの件はひとまずここで中断する。次は、本題だ」

「本題？」

「話がハードだったから忘れているかもしれないが、俺がここに呼んだのは学年別トーナメントの対策について話し合うためだろ？」

「……あつ」

カケルの一言にカケルが呼び出した事を思い出した2人。

「時間も勿体ないから夕食中も考えた訓練や戦術プランを話すからそのつもりでいるよ」

「食事中に話など……」

「ならラウラ戦の時、有効な手は有るのか？」

「……ツウ」

「……ないな」

最終通告に近いカケルの言葉に2人は、反論することが出来なくなつた。

「……………じゃ、じゃあさ、食事が来るまで時間が掛かるから先に頼んじゃおうか」

僕は、そんな2人を慰めるように提案をした。

「そう……………だな」

「……………そうするか」

「うむ、そうしよう」

「じゃあ……………」

僕は、メニューから料理を選んでからウェイターを呼び、料理を頼むとすぐにトーナメントの話し合いに入った。

Side Out

フロンティア内

スーパーマーケット

『フジタケ』

休息所

Side 真耶

広いアーケード施設などにおいて、スーパーマーケット内にも時折見かける休息所。

店の作りによっては、ただ椅子や自動販売機が置かれているところもあるが、このマーケットでは簡易的な料理売店があり、15ぐらのテーブルが設置されている。

一度名前を呼ばれたのに応じる事が出来なかったので、一瞬だが声が上がってしまう私。

「な、なんですか？」

「……あなたの場合、なめ回すように見る男性や体だけを見てくる、または異性と言うのが色濃く出る人が好ましく無いようですね」

「えっ!?!」

私は、思ってもいなかった言葉……それと同時に自分が『過剰』に反応してしまう部分を言い当てられた事が驚きの声をあげさせていた。

「ど、どうして!?!」

私の感情を……

どうやって城戸さんがそれを知ったのかがわからない私は、彼に問う。

彼は、優しくその問い掛けに答えた。

「ここでの買い物です」

「買い物で？」

どんな事で判断されたのだろうか？

「このテストは、マーケットと言う様々な人が集まるところでカウンセリング対象者の反応を見るために行うのです」

「反応？」

さらに首を傾げてしまつと……

「あなたのように男性への反応が昔の経験からで『過敏』である方は、まずその男性のタイプを分類する必要があります」

「は、はあ」

「そう言った反応を見るのにこういつた場合は、適任であるのです。

例えば、少し中年代が入つた野菜売場の男性から体の一部分を見られた時の反応や若く体付きがよい男性店員に積極的に勧められたさいの俯き具合等 e t c . e t c . …… 失礼でしたが、見せてもらいました」

！！ そんなに見られていたんですか！？

私は、思わず驚愕してしまつた。

ちよつとした動きからすぐにわかつてしまつとは……これがプロなのですね

自分とは分野が違うのだが、ただ単純にすごいと私は、感じていた。

「ただ、あまりにも極端な場合では、この手を使う前に長期的な力ウンセリングを必要とします」

「……はい、極端な場合？」

極端な場合とはなんなのだろうか？

専門の例えなのかもしれないが私は、ついそう問い掛けてしまつた。

だが、彼の口から明かされた言葉は、聞くべきでなかった。

「……………極端なケースとは、心的外傷後ストレス……………いわゆるPTSDを発症された方です」
PTSD……………ですか

私は、その言葉を聞いた途端、迂闊だったと強く思ってしまう。

外傷や心から傷つけられれば、人を信じることも出来なくなるし、何より本人の心が壁となってしまう。

私も『一時的に』ではあるが、なりかけた事もあったため、その言葉だけで十分であった。

……………この時、私は、ISと言うものに関わろうとした理由である千冬さんとの出会いも思い出していた。

……………

路地裏に引き込まれ、体の至る所を触られる感触。

悲鳴すら上げられず、すべてが失われようとしたその時……………

颯爽と言うより、ただたんに邪魔であったために叩きのめした千冬さん。

その姿に憧れて私は……………

その想いとは裏腹にあの時の『感触』が体に伝わるのを感じ……………

「山田さん」

「はっ、はい！」

城戸さんの声には私は、若干夢うつつと冷たいものを抱いていたため、大きめな声で応じてしまう。

「……少し、話題を変えましょうか？」

「へっ？」

私は、間抜けな声を出しながら彼の言葉を聞いた。

「いえ、話で嫌な経験を思い出されたみたいで……」

「え……あっ」

私は、城戸さんに指摘されて、ようやく気付かない間に自分の両肘を抱いていたのに気付いた。

「あっ、あのこれは……」

「いいんですよ、その為に私がいるんです」

そんな私の様子に優しい表情で城戸さんは、応じてくれた。

「……どんな人であろうとも心まで救わなければ意味がないのですから」

「はい？」

城戸さんが小さく呟いた言葉に私は、思わず反応した。

心まで救わなければ……

呪いじみているようにそこだけ重い苦しみが滲んでいる。

彼は、昔に何か過ちを犯してしまったのであろうか？

そう想いながら彼を見るうちに何か別の感情が沸き上がる。

彼も強くない……ただ

「……さてと今日の分を行いましょうか」

「はい」

彼の言葉に促され、カウンセリングが開始された。
後に起^{のち}こる、生徒達の危機を予期しないまま……

Side Out

Side シャルル

「カケルとは、その……ど、どのような関係なのだ？」

「えっ？」

意見を交わしながらの夕食が終わり、カケルが一夏により詳しく話している間にトイレに行っていた僕と篠ノ乃さん。

その喫茶店に戻る道中で僕は、篠ノ乃さんにカケルとの関係を問われていた。

どのような関係か……篠ノ乃さんが思っているような関係だったらよかつたんだけどなあ

僕は、少しだけ残念な思いをしながらも口を開いた。

「カケルとは……篠ノ乃さんが思ってるような関係じゃないよ」

「そ、そうなのか？ カケルがあのような事を口するからてつきり

……」

「僕の方は、そんな風な関係をのぞんでいるんだけど、カケルのほうがね」

「あのカケルらしいな」

普段のカケルから容易に反応を予想が出来るのだろう。

だが、篠ノ乃さんが知らない一面を僕は知っている。

悪戯のように僕は、笑いながら告げた。

「カケルはさ、堅物なんだよ」

「堅物？」

「うん。学園でもそうだけど、カケルはね、自分からは弱いところを見せないんだ」

「そうであつたな」

「でね。それと同じようにカケルは、必要以上に自分を言わないで

……想いを寄せている他人を遠ざけようとする癖があるんだよ」

「想い人を？」

「うん」

これは、自分から遠ざかろうとするカケルの話から勝手に想像かもしれない。

カケルは、昔、本当の家族や友人、あるいは恋人を失った事がある。

カケルの仕事柄が、何かに巻き込まれてそうなったのかはわからないけど、想いを寄せられた人を失うにただならぬトラウマを抱えている、だから離れたいのではないかと考えていた。

「……そのような、相手を落とすのは至難だな、デユノア」

カケルの別の一面を見たからか、篠ノ乃さんは堅い顔で僕の想い人を評価する。

「シャルルでいいよ、篠ノ乃さん。それにお互い様だよ、そつちも唐変木な『相手』は大変だね」

そつ洒落て返すと篠ノ乃さんは、顔を赤くした。

「ほ、箒だ。……あのバカは、何でああも……まあ、昔とは余り変わらないのが救いだ」

「頑張れ」

「お互いにな」

恋する乙女たちは、こうして親交を深めていた。

Side Out

喫茶店『コメット』

Side 翔

「「ぶつ、へつくしゅん！」」

俺と一夏は、誰かに噂されたように同時にくしゃみをしていた。

「噂されたのか？」

「同時に噂されるなんて、どんな奴らだ？」

俺達は、互いに愚痴を溢しながらも再度、話し合った内容を確認した。

「基本戦術は、これくらいでいいだろう」

持ってきていたノートに書き込んだ事を示しながら俺は、問う。

「ああって、言っても半分ぐらいしかわからねえけど、いいと思うぜ。ただ箒に支援砲撃用の装備は、荷が重くねえか？」

「IS側からの補正がしやすい分やラウラのAIC対策のためだ。」

「……通常兵装の訓練も並行してやる」

「鬼だな、翔」

「何とでも言っても構わない。……あと一夏、お前も零落白夜の応用を出せるようになる」

「あんなのが出来るのか？」

「雪片のデータや構造上では可能だ、あとはお前の器用さだ」

そのあと1つ、2つ、別の事を話し終わると俺達は、トイレに行った彼女等を待つ事となった。

そんな中で、一夏が話し掛けてきた。

「しかしまあ、シャルルが女だったとは……翔、お前もなかなか悪いな」

「気付かないお前も悪い」

「……ヒドッ」

一夏が安樂的に肩を落とすのを見た俺は、あることを話します。

「一夏」

「ん？」

「お前、『ハニートラップ』って言葉を知っているか？」

「ハニートラップ？ 蜂蜜で何かを仕掛けるのか？」

一夏の直訳した言い回しに俺は、表情を堅くして意味を教える。

「直訳すればそうなるが、実際は、隠語でスパイ映画とかに見る男女の『交じわり』みたいな事だ」

「男女の……ブッ！」

一夏がようやく、意味にたどり着けたのか、恥ずかしさに顔を赤く染め抜いた。

「ちよつ、ちよつと待て、いきなりなにを……」

「旧来なら軍機密に関わる男性や兵器開発部の男性等に工作員が情報会得に使う手であったが、今は、IS関連で男性を用いたハニートラップが多い」

一夏に構わず、俺は話を進めていく。

「今回は、シャルルがまともだったからやなケースまではいかなかつたが……警戒する必要がある」

「？ 何でだ？」

その答えに俺は、一夏が約二ヶ月前までただの『一般人』であつ

た事を改めて認識させられた。

同時にISと言う世界に入ってまだ二カ月しかたっていない事を俺に感じ取らせていた。

仕方がない事か………だが、今後もその『甘さ』を持つていられるかか……

俺は、今後の為も含め、ISがもたらした社会の『闇』、そのほんの一部を話すことにした。

「……なあ、一夏」

「なんだ？」

「ISが発表されてから十年ぐらいになるが……その間に何が変わった？」「何だよ急に」

俺の問い掛けに一夏は、目を白黒させている。

「いいから答えてくれ」

「……そうだなあ、ISがスポーツになったり、女尊男卑の社会になったことか？」

一夏の回答は、あまりに簡単……いや、別世界から来て、とあるIS関連企業に潜入した俺達にとって幼稚な回答であった。

ラウラに認知していないと貶されるのがわかるような回答でもあった。

俺は、表情を変えないまま口を開いた、現実を突き付けるために

……

「そうだ、それが一般的な回答だが、まだ浅い」

「浅い？　なんでだ？」

一夏は、意味がわからないように呟く。

「ISは、確かに変えた、だがなISを使わざるおえないためにこの世界の各国政府は、女性を尊重しすぎた」

「えっ？」

「バカな政府は、女性優遇制度を押し進めたため、ISが関係ない分野で本当に一部だが能力がある男性の地位を揺らぎ、結果的に失墜させた」

「ああ、でもそれって仕方がない事じゃ……」

「そればかりじゃない。軍などでは男性パイロットよりも女性パイロットを優先的に採用するようになった……基準を昔より低くしてな。それと同時に叩き上げの女性優遇制度改正による軍内部でのモラル低下……最悪な形では今尚、国が保有する旧来の通常兵器を『遺物』扱いする女性パイロットもいるらしい」

「……それはすごいな。でもさ、ISはアラスカ条約で軍事的な利用を制限されているはずだぜ？」

確かに一夏の意見もごもつてもではあるが、企業内ではその制限を『ギリギリ』守っているだけだ。

「確かにな。制限はされている……が、専用機持ちを見ればわかるだろ、軍主体で主な開発は進められている……中には到底『スポーツ用』とは思えない機体もお前は見たはずだ。……しかもIS学園と言う『兵士養成所』まで作って置きながら未だにスポーツと称している連中の軽さにはさすがに呆れる」

「ちよっと待ってくれ、翔。お前は何が言いたいんだ？」

矢継ぎ早に俺から今まで聞かされたことがない事ばかりを口にされた一夏は、混乱するように俺に問う。

だから俺は、前置きをこの辺にして、事実だけを言葉にする。

「つまりだ、そんな男性が追いやられた社会の中でISを使える俺達の存在はどうなんだ？」

「えっ？」

「俺は『火種』だと考えている」

「『火種』？」

例え話に一夏は、段々とのまれていく。

「ああ、そうだ。特に俺が危惧しているのは、虐げられてきた男性が狂気に走らせてしまう……それが俺が使える事を知ってからの押し殺している罪悪感だ」

「男性を狂気に？ ……それは？」

「何を話しているのかケル？」

一夏が再び問い掛ける前にシャルル達が戻ってきていた。

「あっ、いや……」

「ただの世間話だ。気にしないでくれ」

一夏が口淀んだのを俺が引き継いで、適当な言い訳でそれ以上の追求を回避した。

「ふん。 てっきり好きな子の話をしているかと思った」

「こゝ、こんなところでそんなわけないだろ？」

「どつであるうな、一夏はともかく翔は、素直ではないからな」
「ほつとけ」

席に着きながら冗談を言ってくるシャルル達に笑いかければ、何も起こらなかつたのかも…だが、突然起きた地面から突き上げる衝撃に俺達は、揺さ振られた。

Side Out

Side???

フロントエア内部

中央監視室

銃声、一発が鳴る度に警備員であった人物がまた1人、1人と崩れ去っていく。

当直の3人を振り向かせないまま射ち殺したところで、中央監視室に侵入した男は、開けた扉を閉めた。

そしてこの場所では出来ない、外への『全出入口』のシャッターを降ろすようにする。

「こちらの準備は完了しました。そちらも動いてください」

『了解だぜえええ!!』

『派手にヤツテやるぜ!!』

こちらが通信を送ると完全にイカレタ仲間が叫びをあげた。

先生、この犠牲を……無駄にしないで下さい

これから起こることを予期した彼は、次の作業を行いながらもそう願うのであった。

地下1階 駐車場

「いくぜ！ お前らあああ！！」

1つのコンテナに画面と専用のコンソールが5つ用意され、それぞれに男達が張りついていた。

「「「「うおおおお！」」」」

1人の叫びに呼応するかのように男達が叫びをあげ、起動を開始した。

分乗し、駐車場の至る所に駐車された5つのトラックのコンテナ部が展開され、内部の何かが動きだす。

約2m弱の大きさを持つそれは、異様な形をしていた。

頭部にあたる部分が機械らしく角張ったパーツに覆われ、目にあたるものが一つ目の巨大なモノアイ。

さらに両腕にあたるものはなく、足もない。

代わりに腕にあたる部分は、それぞれ違うものの肩の部分からガトリングやバズーカ等の銃身が伸び、両足に当たるものは、武骨なス

ラスターユニットとなっている。

計5機のそれらは、銃口を天井へ向けて『放った』。

Side Out

Side 一夏

突き上げた衝撃に俺らは、身を硬くした。

「わ、わ、わっわぁ！」

「キヤアアア！！」

「えっああぁ！」

衝撃で揺れる店内で悲鳴と食器が割れる音が響き渡る。

俺達の席でも飲み残したカップが落ちて割れたり、こぼれた中身がノートを汚す。

「なっ、なんだ!？」

「地震か!？」

俺と篤は、突き上げたあとに連続した衝撃が続く中で、テーブルにしがみつきのながら叫んでいた。

「いや、この伝わり方は……!」

「カケル!？」

翔が何かに気付いたかなように目を見開かせていき、息を一瞬で引き締めている。

そんな翔の変化にシャルルは、息を呑んでいる。

そして、一際大きい揺れが襲った瞬間、店の前に広がる開けたエンランスの中央が爆発を起こす。

突然の爆発に店内は、パニックに陥る。

だが、その直後、その爆発が引き起こした黒煙から何かが飛び出してきた。

窓際の席であったため、俺達はその物体を見ることが出来た。

頭部がモノアイ状のカメラが中心にまとまり、胸部には矢じりのようなパーツが設置されている、両腕には銃口が見え、脚部は足といふよりもスラスタード。

「IS?」

その姿を見た誰かがそう呟く。

ISらしい特徴も見えるが、あんなIS機、俺達も見たことがない。

いつたいどこ……

「伏せろ!!!」

俺が深く考える前に翔が叫びながらテーブルを跳ね上げる。

かけ……

翔の行動の意味を理解する前に店の窓ガラスが僅かに震えだす。

それは段々と大きな震えになっていくと、原因が謎の機体の束ねられた銃口が回り出したのであったのに俺は、ようやく気が付いた。気付いた瞬間、跳ね上げたテーブルの影に隠れるように翔が俺を抱え、シャルルが箒を抱え、同じタイミングで引きずるように転がり込む。

まさに一瞬の判断であった。

刹那、店内が爆音と悲鳴に包まれる。

「やめろおおお!!」

今まで聞いたことがない翔の叫びが聞こえる。

何故だかは、わからなかった。

何だろうと首を動かした瞬間、一際、大きい音がしてテーブルが押しやられて俺にぶつかり、意識を消失させていた。

Side Out

Side 翔

数秒間の銃弾の掃射を耐えきり、『ISモドキ』のガトリングのモーター音が収まるのを聞いた俺は、とっさにシールドを張ったとはいえ、ボロボロになったテーブル隅から敵の姿をのぞき見る。

用がすんだかのようにスラスタを蒸かして飛び去っていく。

完全に飛び去ったのを見た俺は、同じようにテーブルの影に隠れたシャルル達を揺すり起こす。

「大丈夫か。一夏、箒、シャルル」

「……ん？ ああ……… いったい何が」

「う、う、うむ」

「大丈夫……… ツウ！」

起き上がったシャルルがまわりを確認した瞬間、口を手で覆った。

「どうした……… な、何なんだよこれ！」

「一夏？……… ！！！」

シャルルに続き、一夏達がまわりを確認した瞬間、息を呑んだ。

銃弾の掃射が終わった店内で彼らの目の前に広がったのは…… 『戦場』であった。

「ああああああ！！！」

「わ、私の腕がああ亜！！！」

「誰か、誰か！！！」

「息子が息をしていません！ 誰か助けてください！」

「ああ、あああ」

店内の至る所が破壊尽くされ、怪我人や血塗れ人間がいくつも床に転がっている。

血塗れの人間のうち、いくつかがまったく動かない。

つまりは……

クツ！

『嗅ぎ慣れた』血の匂いが感覚を凍り付かせ、何も感じさせない。

それを無理矢理、振り払うとテーブルの前に回る。

そこには、黒いスーツ姿の血塗れ男とスタンダードな制服を着たやや小柄の男性が倒れていた。

黒いスーツ姿の男は、胸部を集中して受けてしまったため、手遅れだった。

一瞬だけ、礼を告げ悔やみを行うとまだ間に合う男へと近づき、怪我の具合を見た。

あの時……

テーブルに隠れた俺は、テーブルの前に躍り出る人影を捉えていた。

薄々、特異ケースである一夏の護衛で監視をしていたのを感じていた人物達だ。

「やめろおおおお！！！」

止めるまもなく、彼らは、銃弾に射たれていく。

《アストレイア！

《了解。 シールド出力サポート！！

シールドの一部を間に合わないとかわかっていながら彼らの前方へ展開して保護をしていたのだ。

やや小柄の男を引き起こすと彼は、脇腹だけ怪我をおっただけで無事であった。

どうやら傍らに転がっている鞆で幾らかは受けとめたらしい。

「……………あ、あなたは？」

「話さないでいい、あなたの護衛対象のダチだ」

「ああそうか……………たく、なさけねえや俺は、雪乃に叱られそうだな。グウ！」

止血もかねて、脱がせた制服を使って傷口をキツく縛ると呻き声をあげる。

「恋人の名を言えればいいさ……………なるべくなら応援を呼んでもらえるとありがたいが」

「無線機に直撃してて使いもんにならねえよ……………シールドらは……………俺と出た奴は？」

「……………逝ってしまった」

「……………クソツタレ！」

仲間の死に男性が喚く。

「とにかく、店の裏方になんとかあんたを運ぶ、そこで休みながら使える手を考えてくれ……俺よりもあんたの方が場慣れしているはずだ」

「ああ」

俺は、一夏達も無理矢理動かして、護衛を裏方に運び込む。

運び終わり、再び外を見た俺達は、同じ機体を見る。

「か、翔。アレは一体？」

一夏が震えながらそれを指差した。

「『ニーズヘッグ』」

「ニーズ……ヘッグ？」

こんな光景に精神をむしばまれたのであろう、俺の肩にもたれながら言葉を聞いたシャルルが、弱々しい声で応じた。

「ニーズヘッグ、一般的にISモドキにつけられた総称だ」

「IS……モドキだと」

筈がよるけながらも聞く。

「ああ、ISの技術を使っているにも関わらず、コアを用いない機体群。……ニーズヘッグには、嘲笑う暴虐者の意味があるが……この名をつけた人物は、北欧神話の竜の名からとっている……『世界の反逆』としてな……」

血と煤で汚れながらも俺は、ニーズヘッグ……殺戮者の姿を

刻み付けた。

『穢滅対象』として、あの時のような怒れる目で……

非IS兵器『ニースヘッグ』設定（8月25日追加）（前書き）

第17話の投稿にともない、新規の作者虚空のオリジナル設定機、IS世界独自兵器『ニースヘッグ』についての設定を投稿いたします。

非IS兵器『ニーズヘッグ』設定（8月25日追加）

ニーズヘッグ

ISの技術を応用した新世代型兵器群、通称『ISモドキ』の事を翔の父が改めて付けた総称。

ニーズヘッグには、『嘲笑う殺戮者』の意味もあるが、翔の父は、北欧神話において神々の最終戦争ラグナロク後も生き残り、世界樹の根を貪り続けている竜の名から名付けている。

（世界樹ユグドラシルは、進化の流れを示すものでもあるため、ニーズヘッグをISの進化へあだなすものとして例えている）

単純にISの技術を利用、もしくは応用した兵器群の事でもあるが、人型、非人型、有人、無人等多岐に渡る兵器群に成長しつつある。

主な特徴のみを述べるなら以下のものがあげられる。

1 ISの技術の内、1つ、もしくは複数の技術を使用しての建造、機能を有している点。

2 動力源にISコアが関わっておらず、動力エネルギーにバッテリー、電力受信、また独自のエネルギーが使用されている点。

3 ISのように女性にしか扱えない点がない、さらには男性にも扱える、無人化が用意に可能である。

（ニーズヘッグの語源でもある古代ノルド語で『怒りに燃えてうずくまる者』の意もあるため、虐げられた者が元凶にあると翔達は、意味を兼ねている）

それらの点からISに及ばない部分があるが、安定性がある兵器が、機能などにもよるが、IS開発以上のコストがかかる場合もある。

現在、魔科学技術を導入した有人ニーズヘッグを翔の父親達は製作中。

また、謎の組織が対IS戦闘に特化した機体を開発中との噂もある。

UK 01E ログス

(名称は、理論等の意)

UKとは、Unknownの略で、翔の所属企業『イザナギ』で付けられた仮の型式。 実際は不明。

分類 半砲台型無人機

構造

2メートル弱の大きさで両腕に武装、下半身と背部に飛行用スラスター装着。

モノアイ方式のカメラは、望遠性に優れ、砲撃用にも強い。

本機は、PICによる浮遊を機能的に保有。

スラスター方式は、三次元稼働スラスターとスリットスラスターを装備し、操作者によってはIS以上の機動性を実現が可能。

動力エネルギーは、外部からの無線送電方式で送電。（動力関連で型式の最後に付けられた『E』がそれを示している）

武装

両肩部のアタッチメント部よりオプション方式での換装が可能、その装備種はガトリング、グレネード等、多岐にわたる。

また、共通の装備として胸部に対IS兵装である相手ISの装甲に絡めて高電流を流し、ISのパイロットと電装系にダメージを与える、エレクトリックワイヤーを装備。

両腕ガトリングタイプ、グレネードタイプ等計5機がフロンティアテロ事件に投入された。

非ISS兵器『ニースヘッグ』設定（8月25日追加）（後書き）

今後も、異なる機体を出していきたいと思っています。

よろしくお願いいたします。

第18話 碎ける翼

大型シヨッピングモール

フロンティア

スーパーマーケット

『フジタケ』

休息所

Side 一夜

突き上げた衝撃が収まったところで、私と山田さんは、身構えていた体勢を解いた。

「大丈夫でしたか、山田さん」

「えっ、ええ。 それにしても何が」

声をかけながらも私は、状況確認を進める。

まわりを見渡すと自分達がいる休息所では、数種類のドリンクの液体が床にぶちまけられてしまい、交じりあって変な色の液体を作り出していた。

その他は、軽食がグチャグチャに散乱しているだけで人自体は大丈夫かと声を掛け合っているため特には人的被害は無さそうだった。

食料品のエリアからは、物が落ちた等とボヤキが聞こえてくる。

まわりの安全を確認したところで私は、再び山田さんに向き直った。

「この辺は、安全なようですね」
「そうみたいです」

その言葉を返しあっている私達の表情は、次に何かあった場合、すぐにでも行動へと移せるよう、気を引き締めたものになっていた。

「これからどう……」

「えっ、何でシャッターが降りてるの？」

山田さんがこれからの行動を話そうとしたその時、私達の方にそんな声が聞こえてきた。

声が出た方を向くとマーケットと雑貨等のモールエリアを繋ぐ、出入口の防火壁も兼ねた分厚いシャッターが閉店時間でもないのに閉じられていた。

「えっ、えっ？ 機械の誤作動ですか？」

それを見た山田さんがそう呟くが、それだけで変化は収まらなかった。

「どうなってんだよ！！ まだ閉店でも何でもねえだろ！！」

「お、落ち着いてくださいお客さま」

「落ち着いていられっか！！ 何で外にも出られないんだよ！！」

外に直接繋がる出入口も同じような事になっているらしく、その付近からも客と店員が言い争う声が聞こえてくる。

一体何が？

私は、もう一度、状況を整理するため、辺りに目を配らせていると先程まで施設案内などのインフォメーションを流していた休息所の片隅に設置された大型モニターが何かを映し出されている事に気が付いた。

そこには……

「……なっ」

「城戸さん？」

山田さんの呟きが聞こえるが、私は、映像に釘づけになっていた。

映像の中で謎の兵器が飛び、逃げ惑う人々、店舗内部に向け、転び後退りする者、許しを懇願する者等に両腕に武装から命を奪う『固まり』が放たれ、数瞬後には肉片や血が飛び散った。

「えっ、ええ？」

「何、映画？」

まわりの人々は、困惑したような顔でそれを見ているが、私だけは、『臨戦体勢』に移行していた。

流れている映像は、このフロンティア内の各所に設置された防犯カメラからの映像をただ無秩序に流している。

なら考えられる事は1つだけ……

さらに言えば断続的に響いてくる音は、段々とこちら側に近づいてきていた。

そして……

『な、何で閉まってんだよ!! だ、誰か助けてくれ!!』

誰かがシャッターをモール側から叩く。

『ここを開けて!!』

『早くしてええ!!』

それらは、次第に数が多くなってくる。

「あ、開けてやるぞ!!」

「待ってる!!」

こちら側でもシャッターを人力で開けてやるため、数人の男達が一斉に駆け寄る。

が……

「下がれ!!」

「城戸さん!？」

私は、ある音を聞き分けたた、瞬間、集まっていた男達に叫ぶ。

同時に自分の患者である山田さんを抱き寄せて、彼女を庇う形で背を向く。

その警告の叫びも虚しいものに終わる。

『あ、ヒチヤアアア!!』

『イタカアアア!!……』

シャッターの前にいた人物達が射ち殺されたらしく、悲鳴が上がった。

それだけで被害は、収まらずに……

「ぎゃああああ」

「がああああああ」

「いたああだかだああ」

間近で発射された弾丸たちがシャッターという壁すら無視した威力を持った幾つかの弾丸がシャッターを貫通。

貫通した弾丸が集まった男達を傷つけ、力なく倒れさせる。

「ヒッ！」

私の腕の中にいた山田さんが小さな悲鳴をあげる。

私がある時できたのは、山田さんを抱き締め続ける事だけだった。

弾丸の掃射が終わりをつげたのを音で認識した私は、ゆっくりとわずかに見ていた背後を向いた。

被害は、数人の男達が撃たれた。

怪我の程度は不明。

「……山田さん、応急処置の仕方は？」

「あ、ああああ、あ」

私の呼び掛けに山田さんの答えが返ってこない。

パニック症状の前触れに近い声が漏れ出ていた。

それを防ぐには……

「山田さん!!」

「……はっ、はい!!」

大きな声で呼び掛けてこちらに引き戻す。

「あなたは、学園の教師ですよね!!」

「は、はっ、はっ、はい!!」

「そして元国家代表候補でしたね!!」

「はい!!」

「ならやるべき事は!!」

「怪我人の応急処置!!」

「そうです!!」

呼び掛けに大声で応じつつもお互いに行動へと移った。

自分は、違うものの山田さんの身分やこう言った受け答えは、代表候補時代に受けた軍事訓練に近い訓練の賜物。たまもの

それらは、仕事柄、立場上等様々な理由が考えられるが体に染み付いている事が多く、このような状況に対応しやすいのだ。

「大丈夫ですか？ 誰か、手伝って下さい！！」

手近な相手の怪我の具合を見ながらも自分の背広を裂いていく。

それと同時に人を呼んで怪我人を安全なところへと運んでいく。

裂いた背広の布を傷口に押し当て、直接圧迫による止血を行う。

意識があるのを確認すると、それを患部に押し当てるように指示を下して次に、あるいは意識がない相手に対してはすぐ様、その場にいる人間に簡単な介抱の仕方を教え、次に……それを繰り返した。そして……

最後の人物に対して、腕への骨折が見られたため、食料品店から持ってくるように指示を出していた段ボールで添え木をしてから腕を乱雑に布で吊り、処置を終わらせた。

「これで、一時的には固定されます。あとは救助が来るまで」

「あ、ありがとうございます」

「いいえ。……山田さん、そちらは？」

処置を終え、少し離れた場所で別の男性の処置をしていた山田さんに声をかけた。

「こちらは大丈夫です。出血の量が少なかったのが幸いでした」

スカートや上着の裾が血で汚れているものの応急処置を終えた山田さん自体は、被害を少なくできた事に喜んでいる。

「そうですか、あとは外部への……」
「アッ！」

山田さんが、何かを思い出したかのように呟くと顔が青ざめていく。

「山田さん？」

「……！！」

私が止める間もなく、シャッターへと駆け寄った山田さんは、シャッターを叩きだした。

「山田さん！？ 誰か知り合いがとり残されてるのですか！？」

そのような行動に移る理由は、映像か何かで恐らく学園の生徒か同僚の教員を見たのだろう。

そう確信しつつも山田さんの行動を止めさせる。

何人だ……

数が少ないなら『仲間』達を呼び、静かな形で救出ができる。

そう考えながらも待つと……

「わ、私の生徒が……織村一夏君と篠ノ乃篝さんが、たぶんまだ中に居るんです！！」

「なっ！？」

名前を出された瞬間、冷たいものが背中を伝うのを感じた。

織村と篠ノ乃、その名はこちらにとっては、キーパーソンであり、『危険な名』でもある。

……どうして彼らが……!!

「だとすれば、櫻井達も!!」

「えっ!?!」

私は同僚であり、『部隊長達』の息子である彼の姿を瞬時に思い浮べる。

Side Out

フロントエア内

1F

喫茶店『コメット』

Side 一夏

俺は、今、喚き散らしたい気を噛み殺しながらも怪我人を店の裏方に運んでいつていた。

俺1人だけの行動ではなく、俺が怖気付くのを翔が強く踏み倒したからだ。

「一夏、手を貸せ!!」

「あ、ああ」

翔が肩を掴んで歩かせている男性の反対側に肩をかし、引き摺るように裏方に運んでいく。

側頭部と右足から流血を伴う怪我、意識はない。

中学の時に習った怪我人の介抱手順を1つずつ確認しつつも運び終えると直ちに応急処置を開始した。

ハンカチやらティッシュ、ペーパータオルで傷口からの流血を止めながら、傷口に近い止血点を押さえ、止血。

流血が収まったところで長い袖やテーブルクロス、とにかく面積が広い布を裂いて作った包帯でガーゼ代わりに使っているものと一緒に傷口を覆って固定してやる。

それに加え、右足を固定するため、棒状に折れたテーブルの木片を添え木代わりに巻き付ける。

処置を終えたところで俺は、一息ついた。

「……次は」

俺がそう問うのも、もう何人運んだのかすらわからないほど、他人の血が至る所にこびり付いているからだ。

「これで……全員だ。『生き残り』はな」

俺より冷静に場を見ていた制服の上着を脱いでインナー姿で処置を

やっていた翔が壁に身を預けながら口にした。

彼の方もかなり血がこびり付いている。

「……そうか」

周りを改めて見ながら俺は、言葉を返していた。

従業員の休息所も兼ねた裏側は、机や小さな物置が全部とっばらわれ、怪我人と軽傷の人が所狭しにいる。

その合間でシャルルや篤、それに3人の人が怪我人の様子や処置をし直していた。

襲ってきた相手を見てから俺達は、行動した。

だが、俺は、己の力が社会の歪みのせいで使えない事に歯痒さを……本当に『初めて』知った。

（30分前）

あいつらが、こんな事を！！

未だ、虐殺を繰り返していると思われる機関砲の音を聞きながら俺は、自分の力である白式を展開しようと右手の待機状態であるガンレットをつき……出せなかった。

何故ならば翔がその手を掴んでいたからだ。

「なんのつもりだよ、翔」

「使うな、今は」

「『使うな？』 使わなかったらアイツらを止められないじゃねえかよ！」

なんのつもりかは、わからないが今の翔の考えに従う事ができなかった。

このまま見過ごせば、救える命すら救えない。

確かに俺と学園での使用のためにリミッターがかけられた白式は、アイツらを落とす事ができないかもしれない。

ならシャルルや翔と協同して戦えばいいだけだ。

シャルルもすぐにでもISの展開ができるようにリヴァイヴの待機状態であるロザリオに手を掛けていた。

翔の制止を振り切ろうとした、その時……

「グッ！」

「えっ……」

間抜けな声を盛らした時には、俺はすでに天と地が逆さになっていた。

そして、尻餅を着かされたような体勢で痛みと共に床へと叩きつけられていた。

「ガハア」

叩きつけられた痛みで俺は、息を洩らす。

息を洩らした瞬間、俺は翔に『片腕』だけで投げ飛ばされた事によ
うやく気が付いた。

「一夏!?!」

「か、カケルなにを?」

その光景を見た篤達が驚くが、今の翔には聞こえなかった。

「いいか、一夏。俺達のように男でISを使えるって事は、この
社会のバカみたいない政策の中ではより『弱い弱者』から疎まれる存
在なんだ」

「なに…を…ツウ!」

肩が外れるかもしれない方向に掴まれた腕を動かされた俺は、苦痛
を洩らした。

そんな中でも翔は、話を進めていく。

「つまりだ。俺達のようなISを使える『男』は、人に希望も与
えた、だがその反面、『何でお前が、何で俺じゃない、アイツばか
りに』……多くの『絶望』も人々に与えている」

「わ、わかんねえよ。そんなりく…」

「一夏!?!」

「…?!?!?」

話が見えない俺は無理矢理でも抜け出そうと口を開いていたが、翔
の強烈な口調に気圧されて動きを止めてしまう。

そして、翔が言葉を続ける。

「……俺がただ人殺しを見殺すと思うか？」

「翔？ ……イツウウ!？」

「カケル、止して！」

「一夏の腕が折れる!!！」

無意識に力を込めているのか、翔の力のかけ方が恐ろしい事になっている。

その事に気付いた篤達が慌てて止めに入ろうとする。

いったい何が彼をこのように押し進めるのか？

「だがな、『存在』は時に思いがけない犠牲を誘発させる……お前は、背負えるのか？ その犠牲の対価を」

「えっ?」

今まで見せた事のない哀しげな目で翔は、俺を見ている。

犠牲の対価？

俺は、その目に何も言えなくなる。

「俺達が今のまま戦っても、無闇に犠牲を生む……それをお前は背負えるのか？」

「……だけだよ」

「……俺のスターダストは修復中で手元には無い……そんな中で俺は、お前だけに背負わせたくはない。……今はただ、身近にいる怪我人を救えるだけ救う……それしか出来ないんだ」

翔の唇の端から血が流れだす。

唇を強く噛み締めている、手も白くなるほど握られていた……それを見たのと同時に翔が俺以上に激しい怒りを抑えている事にようやく気が付いた。

「シャルルもその姿で下手に介入すれば、ISからデュノアの事でもややこしい事になる」

「……でも！」

「……頼む」

本当に苦しい表情で翔は決断を下す。

それは、力の在り方に1つの答えを見いだしたからこそ出来る、重い決断である。この時の俺は、思った。

そんな翔に俺達は、怒りが冷め、怪我人の処置に移ったのだ。

それから怪我人の処置を店内で呼び掛けて、出て来てくれた非番で居合わせた1人の看護婦さんや数人の人で行い今に至る。

もしあの時、俺が出ていれば

「……」

「……一夏」

その声に横を振り向くと翔がいつの間にか隣にいた。

助けるだけ助けた俺は、もう見過ごすのにも耐えきれなくなり、翔に今の思いをぶつけた。

「翔……俺は……いまからでもいい、たとえ遅くても……」
戦いたい

……あの時に誓った、千冬姉や篤……いや、俺に関わる仲間や人をこの『力』で守りたい。

その誓いは、俺が自身に課した誓い……だから俺は……！！

そんな俺の思いを汲み取ったのか、翔は俺の耳元に口を近付けて言葉を紡ぐ。

「わかっている……だから一夏、俺が……」

「一夏、カケル、ちよつと来て！！」

怪我人の処置を続けていたシャルルが俺と翔の名を呼ぶ。

その声に俺達は、慌てて駆け寄った。

「な、なんだ！？」

「どうした？」

「この人が」

シャルルが看護婦さんと篤が診ている怪我人に視線を移した。

意識が無いようではあるが、呼吸が喘ぎ出しているように苦しそうな呼吸をしている。

さらには……

「脈拍喪失！？ 不味いわ、心室細動よ……！！」

「えっ!？」

「まさか、テーブルか何かの破片で胸部を!？」

その怪我人の近くにいた篤達が発症した症状名に驚きを隠せなかった。

Side Out

Side ????

やっかいな事になった

その症状の名を自然と聞いた俺、如月修史は、脇腹の傷が痛む中、急いでシヨツピングモール内の見取り図を思い出して、『ある器材』の場所を割り出した。

心室細動とは、簡単に言ってしまうえば血液を送り出す心臓と言うポンプがきちんと機能せずに肉体を命の危機にさらされている状態なのだ。

この症状の原因は、心臓病等によって起こる場合もあるが、今回のように胸部に何かが当たった場合で不整脈を引き起こす事で起こる。このまま放置してしまえば、心臓が正常に働かないまま命を落としてしまう。

それを解決するには……

「AEDは?」

近年、公共施設等で見かけるようになったAED（自動体外除細動器）等の器材で心臓の働きを戻す必要がある。

「どこかにあるはずだ」

「けど、どこに？」

IS学園の生徒達が話し合っている。

俺は、予め入手していたこの見取り図から最寄りのAEDがある場所に検討をつけた。

だが、ここで口にすればこの混乱の中でもまともに動ける自分の護衛対象……彼らが出向かなければならなくなる。

俺の所属する『アイギス』は、表では正式な民間護衛会社だが、裏では非公式の護衛を請け負っている。

今回の護衛は織村一夏とその同伴者たちである。

まさかこんなことになるとは……数年前を思い出させていた。

モール全体の状況も見るとにもAEDの回収は必要なのかもしれない……だが、このまま行けば織村一夏が……

俺が対応策に決め手を欠いていると同じ生徒である櫻井翔が行動に移っていた。

「なら俺が時間を稼ぐ」

「えっ」

「どつする気だ？」

仲間達から彼にその手段を問う。

すると彼は、今まで脱いでいた制服の上着を着て、店内から回収した少し大きめのバッグから……あるう事が自分も使った事がある黒いウィッグ（髪の毛の長い鬘）を付けた。

「この格好で奴らを引き付ける『わ』。その間に筭達はAEDを探『して』」

最後に服装を女性らしく見せる（とは言え、ボタンの配置から完全には無理だが）ために整えると彼は、口調まで女の言葉遣いで織村達に言う。

その姿に一瞬、驚愕する一夏達であったが……

「困って……ちょっと!!」

「まだ、外の様子が判らないのに危険すぎるよ!!」「死ぬ気か!？」

櫻井が提案した案の危険性を察したのか織村達の表情が凍り付く。

一瞬だけ、櫻井の表情に陰りが見せた……しかし、すぐに表情が見えなくなる。

「状況把握も兼ねて『よ』。……状況を可能なかぎり外に伝える為にも『ね』」

「けど……」

金髪の少女がなおも食い下がるが、櫻井はその少女の頭を優しく撫でてやった。

「心配するな、さっき言ったように奴らを刺激するような真似はしない。軽くオチヨクルだけだ」

「オチヨクルって……」

「……それじゃ、行って来る」

「あっ！」

「翔!？」

それだけすと呼び止めの言葉も聞かずに彼は、裏方から出てしまふ。

ただ、出入口の傍らを陣取っていた俺には、何らかの紙切れを不自然に落として行った。

? なんだ?

織村達からは、彼が付けたウィッグが影となって見えなかったのだから俺だけがそれに気付く形になった。

それを手で引き寄せ、文面を見ると……目を見張った。

そこには……

『織村、篠ノ乃、金髪の少女に最短距離、頼みます。 我、敵調査。』

b y S . K 『』

S・Kとは、櫻井翔の略だろう。

無茶だ！

俺は、彼がやるうとしていている事がかなり身に危険が付き纏う事に気付く。

さらに言えば、彼は俺がこのフロントエリア内部の構造を頭にたたき込んでいるのにも気付いていた……いや、自然と護衛という立場を理解してここから一番近いAEDの場所を織村達に指示するように注文も付けてきている。

たく、あのガキ！！

飛び出して行った奴の注文と行動の粗さに苛立って紙を握り潰していた。

『こんな無茶』で死なせてたまるか！！

苛立ちながらも自分が恋人にさせた『思い』を金髪の少女に与えなため、そして彼からの頼みを実行するために俺は、口を開く。

「……AEDならこの近くのエレベーターホールにあったはずだ」
「えっ？」

Side Out

店内から通りに出た俺は、瓦礫や恐らく人であった肉塊が散乱する中を走り抜けていた。

クッ！

想像よりもモール内部状況は酷い。

モール内の店舗は、走り抜けながら見たものだけでもガトリングの掃射、あるいは破砕タイプのグレネードを射たれて爆発した形跡が生々しく残っている。

店舗内、外でも呻きや助けようとする人の動きが見られる。

そのような光景を見ても何も感じない……人の命が奪われる中で……血の匂いに昔の感覚が少しずつ蘇っていくのを感じながら俺は、走り続けた。

走り続けていると……

「また来るぞ！！」

別のエントランスエリアに出たところで誰かの叫びが『ニーズヘッグ』の襲来を警告する。

その瞬間、人々は店舗内に逃げ入ったり、その場から逃げ出す。

俺は迷わず、その相手を見るため、逃げ出さずに前へと進む。

前へと進み、進行方向を見ると人々が何かを追われながらこちらに逃げてくる。

その人々の真上には2機の二ズヘッグの姿がある。

一機は先ほど見た両腕がガトリングタイプ、もう一機は大口径の筒……グレネードを両腕に付けたタイプだ。

グレネードタイプの二ズヘッグが逃げる人々の進路を塞ぎ、その両腕の武装を放つ。

「戻れ！！」

俺の警告は遅かった。

グレネードの爆発が人々を吹き飛ばし、肉片へと変える。

さらに生き残りを潰すためか、グレネードタイプと挟み込むように人々の背後に回っていたガトリングタイプの二ズヘッグがガトリングを掃射する。

回りだす甲高いモーター音は、戦車すら鉄くずに変える対地爆撃機に取り付けられた30mmガトリング砲を俺に連想させる。

細かく肉が碎ける音、悲鳴や絶命……あらゆる音が辺りに響く。

それと同時に銃弾が爆発の煙を裂き、床に銃痕を刻みながらこちらに向かってきた。

俺は、遣り切れない思いを抱きながら脇に避ける。

俺が一瞬前にいた箇所に銃痕が縦一列に刻まれた。

脇に体を向き直し、後ろを振り返らずに走りだす。

その瞬間、俺の背後で爆発が起きる。

爆風に体が『浮かされた』瞬間、頭を抱え、体を丸くする。

《前方障害物あり、注意！》

前から吹き飛ばされる俺は、アストレイアからの警告に俺は飛翔魔法の応用で頭から突っ込む姿勢を爆風で姿勢が安定しないように装いながらも制御して背中へ、ついで微妙に速度を殺させる。

さらに駄目押しとばかりに背中と何らかの障害物が当たる直前に自分の背中を中心に肉体強化系の魔法を使用、ぶち当たった瞬間のダメージを少しでも減らそうとする。

そして……

「グフウ！」

《マスター！！》

ある程度は、ダメージを減らしたものの衝撃や叩きつけられた痛みは半端なものではなく、一瞬、意識が飛び掛けた。

叩きつけられて、床にずり落ちたところで俺は、大きい咳を吐く。

「ガッハ……ごほ」

《無事ですか、マスター？》

アストレイアからの呼び掛けに俺は、息を整えて答える。

《ああ、背中が痛むが問題ない》

《……それはよかったです》

《あと少しリミッターが高かったらOutletだったかな》

愚痴を交えて返すと俺は、障害物に手を掛けた。

先日からの魔力出力のリミッター増加が今になって痛手となっていた。

少ない魔力での魔法発動は、エンジンが咳き込んでいるようなもので、制御がかなりシビアである。

一応、『向こう』での訓練で少ない魔力出力中での発動を行った事があるが、発動の持続時間は酷いものだった。

今回は、アストレイアの制御サポートでなんとか耐えたものの二度

目はキツイ。

《アストレイア、とう……いや部隊長達との連絡は？

障害物……エスカレーター縁に手を掛け、階段へと入りながらもこんな『状況下』での許可は下りないと思うが、部隊長への出力リミッターの解除要請をなるべくアストレイアに呼び掛けた。

《現在、このエリアでの一般電話回線がオーバーフロー、限界なため部隊長以下のメンバーとの通信困難。恐らくは、この事態を外部に伝えようとする電話などが殺到しているのでしょう

《なら本社との専用チャンネルは？

《使えますが魔力関連の話を出さないのは無理です。それに……あなたの声での音声認識IDチェックをする暇があり……マスター！

接近する熱源2！

！！

非常信号か何かで止まったエスカレーターに飛び乗ったところで俺は一段飛ばすように駆け上った。

その直後、横合いからの銃弾の掃射がエスカレーターを破壊しながら俺を追い掛けてくる。

階段を登りきり、二階フロアにたどり着いた俺は、急いでその場から走りだす。

2階フロアの構造は、一般的なショッピングモールと同じで別のエリアへの通路以外、1階から吹き抜け構造をとっている。

背後からスラスタが放つ空気を震わす音、それが細かな吹かしの音とともに俺を追い掛けてくる。

〈警告、後方より1機追尾
標的を俺にしたか

その頭の片隅で思った瞬間、後ろから不気味なモーターが鳴り響く。

ツウ！

直線に走っていたのをサイドステップを交えて走る。

その瞬間、銃弾が俺の脇を掠め、銃痕が幾重にも床に壁に刻まれる。

マズい

真後ろからこのまま受け続けて続けなければいずれは挽肉にされる。

判断を冷静に下し、雑貨エリアへの曲がり角を曲がる。

そのまま走り、やや広い通路出でると……

〈警告、前方に1機！！

その警告に前方を見ると、銃身の下になぜか巨大なサスペンションが設けられたタイプのニーズヘッグが無理矢理突っ込んだのか所々擦り付けながら踊り出していた。

あの銃口……マズイ！

砲の形状から発射される弾丸の種類に気付いた俺は、さらに足を早め、逆に立ちふさがる二ーズヘッグに向かっていく。

《ソニック・ムーブ

さらに母さんと『兄さん』直伝の高速魔法を効果が薄いながら使用、さらに増速する。

ちょうど目の前に来たところで二ーズヘッグの銃口から弾が炸裂、弾が散弾となって広がりながら襲い掛かってくる。

属に言うショットガンが一発、一発の鉄球をバラマキながら俺を穴だらけにするために向かってくる。

俺は、散弾が広がり面を形成する前に二ーズヘッグの跨らをスライディングして通り過ぎる。

後ろに出たところで腕を使い、まるで新体操をやっているかのようばくちゆうで体勢を立たせ、直ぐ様着地して再び走りだす。

背後から振り返った1機と最初から追撃してきていた1機がまた俺を追う。

どうやら俺……と言うよりか俺の姿と『着ている』ものにただならぬ恨みを抱えているらしい。

《これで異なるタイプのを3機確認。 何機投入してきた、ここを襲っている奴らは!?

《不明ですが、限りがよくて5機じゃないですか？

ピンチを幾度も切り抜けつつも俺とアストレイアは、逃げながら収集した事を念話で話し合っていた。

「このまま逃げても体力がもた……アレだ!!」

1回、ニーズヘッグの追撃を払おうと模索したところで、すぐ近くの消火器と正面のアウトドア用品店に在るものに目を付ける。

俺は、すぐに実行するため、消火器をそのまま掴み上げてニーズヘッグへと投げた。か

ニーズヘッグ達は、条件反か射なのか消火器を撃ち抜いて爆発させ、こちらの意図通り、内部の消火剤が煙幕のようにしてしまう。

続けて、これだ!!

アウトドア用品店の入り口辺りに置いてあったガスコンロの『ボンベ』をあるだけ煙幕内に投げ込む。

付け加えるなら煙幕の中で火器をあるうことか乱射している中にある。

数秒もたたないうちにそのうちの数発がボンベに当たり爆炎を作り出す。

Side Out

地下駐車場

Side 襲撃犯

「ウワアアア！」

俺達にくれた対IS兵器『ロゴス』のカメラが捉えた映像が火の手で一杯になり、俺の右隣でガトリング仕様の2号機をあやっていたオッサンが悲鳴をか上げた。

「うつせえよ、オッサン！！」

「落ち着け、ただのガス爆発だ」

俺ともう1人、場慣れした男がパニくるオッサンを宥める。

「ああ」

「ちい、逃げられた！！」

オッサンと同じくIS学園の制服を着た奴を追っ掛けていたシヨットガン仕様の4号機を操縦する男が喚く。

「赤外線センサーは？」

「ボンベの爆発のせいで熱が大量にあって無理だ」

「せっかくのチャンスに何やってんだよ、ハゲ」

「なんだと！」

俺様の卑しい口調に4号機担当の男がキレかかる。

こんな馬のあわない連中と一緒にいるのは、ISと言う『クソナ存在のせいだ。』

俺は、数年前までごく普通の生活を送っていた。

彼女もいて、このままいいかなと思った途端、俺は奈落へと落ちた。

彼女がIS関連の道に進み、会えない日々が続いた……そこまですらよかったものの、彼女は自分の部屋に寄り付かなくなったり、別の『男』の匂いを醸し出しはじめていた。

それに対して問い詰めて喧嘩となり、俺は彼女を殴ってしまったのだ。

それが堕ちた理由。

その数日後、見知らぬ連中に連れていかれ、我が社の『優秀な個体に傷を付けたとボコられた拳げ句、サツに突き出された。』

サツの方では運がなかったなと詰^なられて、数日間の投獄になった。

そして数日間のムシヨ暮しのあとに職場に俺の居場所はなくなっていた。

俺がいない間に社内規律の改正、ようは出来る女によって俺の椅子を取られたのだ。

ISが……俺に関わりのなかったISが俺を終わらせたのだ。

……だからこんな世界、終わらせてやる！！
俺を貶めた阿呆らしい『兵器』ばかりを優遇しやがる奴らをぶっつぶして！！

俺と同じようにリストラされたり、軍から席を追われた者、さらにはISのせいで夢を打ち壊された者が集まった。

それが俺達だ。

襲撃中、IS学園の制服を着た奴を見た時には俺達の思いは、奴をズタボロにして無様な姿を世界に曝す……それだけでうめつくされた。

「さつさと探せよオッサン！！」

「見つけたして挽肉にしてやる！！」

「その方を探すのもいいですが、みなさん」

「あああん？」

IS学園のクソ生徒を探そうとしたところで中央制御室で扉と監視カメラを制御している仲間からの連絡が入る。

「何だよ急に？」

『外部より、軍暗号通信を傍受。』奴』が投入されたみたいですよ

奴……！！

『奴』と言つ言葉に俺達の空気は変わった。

奴……それは、俺達を狂わしたもの……！！

「先生！！」

『わかつてるって、送電出力を最大にする。以後は、送電の関係上、通信が出来なくなるが、思い存分暴れてやれ』

先生もああ言った、なら俺達は……

「『I S』を……クソ豚を潰す！！」

俺達の怒りは、それだけになる。

それを『何者』が見ているとは知らず。

Side Out

トラックのコンテナ、その上部の一角に何かが突き刺さっていた。

鉤爪のような形をしたそれは、コンテナ内部にその刃を僅かに食い込ませている。

その刃の紋様らしきものが、薄く輝いてコンテナ内部の彼らを見ていた。

その刃の持ち主にもそれを見せていた。

2人の少女と少年に……

Side 翔

俺は、物陰から辺りをうかがって何もいない事を確認するとようや

く一息ついた。

爆発の直後、俺は直ぐ様走り去りながらもアウトドア用品店の隣にあった模型屋のカウンターに身を潜める事に成功していた。

店内は無人で、中は逃げる時に落下したと思われる模型や塗料のビンが散乱している。

中には父さんが好きな人型のメカも落下している。

《身体は大丈夫ですか、マスター？》

そう考えながらも息を落ち着かせているとアストレイアが俺の状態を問う。

《大丈夫だ。運が良いことに煤やら砂ぼこりで汚れただけだ》

あとは道中の床に蓄まった血が跳ねたのがウィッグや制服を赤黒く染めているだけだ。

自分だけでこれだけ追い詰められた。

もし一夏達がついてきていたら……それだけでも背筋に冷たいものが一瞬流れてしまう。

とにかく、外部との連絡を……

《着信、カズヤ副隊長からです》

「何？」

この後のことを考えていると天からの恵みか、部隊内で最強に近い人物からの連絡が入った。

カズヤさんは、自分が属している企業イザナギでカウンセラーを行って、さらにはエリー達と同じ潜入部隊の人間だ。

「繋げ、あとどこにいるか特定急いでくれ」

《了解》

アストレイアを通話状態にし、俺はカズヤさんとの電話に入った。

『櫻井、無事か?』

「ええ、なんとか……こっちは」

『知っている、ニーズヘッグどもが暴れているのだろ?』

「どうしてそれを?」

どこかで見ているのか?

俺が思考を働かせていると電話口から別の声が流れだす。

『櫻井君!!! あなたは無事ですか!?!? 織村君達は!!!?』

「山田先生?」

生徒の身を案じている山田先生の声が電話口から一緒になって流れだす。

どうして山田先生まで……

なんで山田先生まで電話口にいるのかとすぐに結び付けられなかった。

するとカズヤさんから応じてくれた。

『カウンセリングで『ここ』の施設を利用していた。それと修復を終えたスターダストの搬送時間変更理由も聞いていたからな』

「そうでしたか」

エリーには感謝しなければと片隅で思った。

『そちらの状況は映像で流れている』

「映像？」

カウンセリングの件との結び付きでカズヤさん達がこのフロントエリアにいる理由を理解した俺は、話の中で出た別の言葉に疑問を投げかける。

『ああ、恐らくフロントエリア内の監視カメラの映像を流している』

「そうですか……なら外へのシャッターが締まっていたのは……」

『中央制御室での制御だろう』

監視カメラとシャッターの制御をその要である中央制御室が抑えられている。

だとすればかなり用意周到な襲撃犯らしい。

「それなら彼らの目的は……」

『そ、それよりも櫻井君、あなた達は無事なんですか！？』

山田先生が生徒の身を案じて電話口に割り込んでくる。

山田先生らしく、そしてだから信用できる先生だ。

「ええまあ、一夏達は別のところに隠れていますが無事です」
『よ、よかった……』

そう山田先生が応じてから電話口の方でたぶん、山田先生がヘタリこむのを音で聞いた。

生徒の安否で思い詰めていたのだろう。

『櫻井、動くなと言うのはもはや無駄だと思うが……お前が得た二
ーズヘッグの情報を聴かせてくれ』
「……………了解^ヤ」

口調からお前がどんな無茶をしたか、わかっていると云わんばかりだ。

それに少しばかり『あとで怒られる』など思いながら自分が攻撃を受けた二ーズヘッグの事を話した。

二ーズヘッグの形状は半砲台型。

PICによる能力、背部と両脚部にスラスターユニット。

武装は、両腕のアタッチメント方式で選択が可能、さらにはぬ胸部に何らかの突起兵装。

あとは……

「発送電可能な施設がこの近くにありますか？」

『ああ、あるが……今回のニーズヘッグは』

「はい、送電方式のエネルギー供給みたいです」

『ふむ、なら動きは？』

操り方による違いは、プロと素人^{アマチュア}では歴然の違いが出てくる。

力を手に入れ、暴れるような動きならまるわかりだ。

「すべての動きを見ていないので、推測の領域ですが、素人が中心ですね」

『そうか……こちらも映像から考えるに少なくとも1人は手練れと見る……油断するな』

「わかっています。そのためにもリミッターの解放許可を」

『わかった、すぐに……ガビッツ……』

リミッター解放許可の話に移ったところで通信が乱れ切れてしまう。

「カズヤさん？ どうしました？ もしもし!!？」

《通信障害です。一般回線及び本社への通信オフライン》

アストレイアが直ぐに切れた理由を告げる。

クソ!! 電波攪乱か

《いいえ、マスター。このエリア内の電波強度上昇、携帯用周波数を大きく上回り通信が不可能です》

……何だと、まさか送電出力を

携帯電話などの機器は、電波と言うものを発している。

それらは目に見えるものではないため、何が遮る要素のかわからない人もいるであろう。

簡単に要素のみをあげるとふたつほど要素をあげることができる。

1つは、障害物によって電波が阻害される、言わば、トンネルの中に入ったなら電話が繋がらなくなるのと同じである。

2つ目は、電波機器同士の干渉。

たとえばラジオでも別のチャンネルのラジオ番組が一緒に入ってしまったことがあると思うが、それを意図的に行い通信を阻害するのがジャミングである。

また意図しなくとも機器の稼働によって強力な電波を発生させ、通信を阻害してしまうことがある。

今回の場合、後者が原因であろうと俺は、考えていた。

「アストレイア、通信の復旧を頼む。 こっちは念話でのコンタクトをとる」

《了解》

一体、何の目的で……………

アストレイアに指示を下しながら思考を巡らせていると店の外、何処からか窓を突き破る音が聞こえた。

！！ 何がモール内に入ったのか？

……まさか

俺は、この被害規模から投入されたものが何かを容易に考えついた。そして裏付けられるかのようにカズヤさんからの念話が入る。

《櫻井

《カズヤさん、どこの所属機が

《軍の『IS』機だ、どうやら近くの空域を飛行していた軍のテストチームが即時対応の命を受けたりしい

カズヤさんの方で映像が流れているのだろう、所属や企業側からテストを任されるテストチームの部隊章の刻印からやはり投入された『IS』の所属を口にしていた。

同時にそれが襲撃犯側を刺激しかねない事であることに 冷たいものが流れ出す。

《危険です

《わかっている、私が制御室を押さえる。 ISの方は任せ……

《『待つて下さい』

突然、別の誰かからの念話が入り込んだ。

！？ 誰だ？

《魔力パターン、識別………合致パターンなし》

声もそうであるが、アストレイアが報告するように仲間が発するよ
うな魔力の発し方でもない。

だとすれば……

《責様は……誰だ》

カズヤさんが、謎の『魔導師』へ敵意を向ける。

彼の正体は………一体

s i d e o u t

s i d e シャルル

カケル……

僕は、瓦礫や肉片がある中で彼の姿を探していた。

「いたか!？」

「こちらにはいない!!」

一緒に来た一夏と篝も探すが、彼の姿が見つからない。

カケル………無事でいて

僕は、手に握りしめた紙切れを握りしめながらカケルの無事な姿を探す。

………

カケルが出て行った後、僕は修史と言う男性の言葉でAEDを捜し当て、喫茶店に戻っていた。

「AED、ありました!!」

「ありがとう!!　そこに置いておいて!!」

「ハイ!!」

看護婦さんの指示通りに置くと僕は下がった。

受け取ったAEDの中身を開き、すぐさま処置に懸かる看護婦さん。

「……大丈夫だよな」

その光景を見た一夏が不安そうに見つめる。

「大丈夫だ、時間的にもまだ無事だ」

修史と言う日本政府に雇われたらしい護衛さんがそう口にした。

知らぬ間に護衛がつけられた事に一夏は、おどろいた風だったが今は、落ち着いている。

日本政府も織村一夏という特異ケースを失いたくない事がここからでも垣間見ることができる。

「……………翔は、無事であろうか」

と、そんな中で篤がポツリと囁として出て行った翔の事を口にする。

「カケルは……大丈夫だよ。きっと……」

カケルがなにも考えずに飛び出すはずはない、その時の僕は、不安が頭を過りつつもそう思っていた。

……カケルは、自分の命が失われるような賭けに出ていることを……修史さんから知らされた。

「……………それはどうだろうか」

「？ 何ですか？」

「……………あいつからこんなものを渡された」

修史さんから渡された紙切れを僕らが見た瞬間、僕らは喫茶店を飛び出してカケルを探しに出ていた。

カケル……………どうして君は

探しながらも僕は、カケルの新たな一面を見つけていた。

それは……………血を…命を奪う『穢れ』を知っていることだ

どんな理由があるかは知らない、もしかしたら組織での仕事で知ってしまったのであろうか？

僕や一夏たちが知らない命の奪い合い……………それをカケルは知っているから僕らを遠ざけるのだらう。

……

そうであつても死なないで

僕は自然と願っていた。

僕らは、カケルを探しながら奥まで来るとかなり上の階にある天窓が破れ、何かがモール内に突入してきた。

side out

side 一夏

突入してきたのは、ISのようだ。

機体全体の印象は、箒などが使っている打鉄にはいるが、スカートアーマーが流線形のものに、さらには両肩のアーマーも印象が違い、胸部や背部にも何かが取り付けられている。

打鉄の改良型か？

俺がそう思った瞬間、頭上をニーズヘッグが飛び去った。

side out

side ISパイロット

・・・なんてひどい

企業イザナギにて考案された第二世代の性能向上プロジェクト『アマテラスの輝き』構想に基づき製作された『打鉄壱式』を纏った私、

あおいしかなで
葵氏奏はモール内に広がる口を覆いたくなくなった。

IS学園を卒業して約2年ちよつと、軍のテストチームに配属された私は新型機や新装備のテストを日々繰り返し、面白みがある毎日を刻んでいた。

今度の休みはどうしようかなと今日のテストが終わった時、軍の上層部より暴動発生連絡を受けたのである。

そして駆けつけてみればどうだ、人々が傷つき無残に殺されているではないか!!!

私は、目を瞑りたい中でも逃げだしたら駄目よと自分を罵る。

ここで逃げたら学園で学んだことが無駄となり、そして人々を救うことができないではないか!!!

「絶対に……………」

まずは、近づいてくる謎の機体にロックを掛ける。

「助けるんだから!!!」

ロックと同時にライフルを放つ。

謎の機体は、スラスターをふかして回避する。

それを私は、追撃に入る。

ライフルを放つことに応戦の火器が謎の機体から放たれるが、回避しながら攻撃を続けていく。

だが、こちらが圧倒的に不利であった。

モール内という高度が取れない中で私は、思った風に速度を出すことができない。

さらには、不用意な攻撃は、被害を広げてしまう。

ちい！

『警告、6時方向より敵機急速接近』

！！！！

ライフルを左手にやり、腰部にマウントされていた刀型の実体剣を背後に振るう。

その瞬間、背後から迫ってきていた謎の機体は、跳ねるように回避する。

かわされた！！！！

愚痴りながらも刀を腰部アタッチメントへと戻し、右手にマシンガンを呼び出して戦闘機動を継続する。

各スラスターを順当よく吹かし、なるべく自分が天上か地面に発砲できるように機動を織り交ぜる。

だが、応戦していくうちに謎の機体の数が増えていく。

一機、また一機と・・・計5機が私を取り囲んだ。

「くっ！！！！」

一対多数戦を体験したことがないわけではなかったが、私は応戦していくうちに自分が追いつめられていることに気づいていた。

奴らは、立ち代り動き回り、私をかく乱、さらに攻撃がしづらいように背後に何らかのわざわざ人が背後にいる場面をと時折作り出している。

このままじゃ・・・

いったん、距離を置こうとしたその時・・・奴らの胸部から放たれた何かが、私の機体に絡みついた。

何！？

絡みついたものを見ると大きな矢じりがついた太いワイヤーが腕や足、胴体に絡みついた。

いつ、いつたい何を……………

逃げる！！！！

えっ？

誰かからのプライベートチャンネルが響く中・・・私は、機体ごと『高電圧』にされされた。

それは、何故かISのシールド機能を『機能させず』に……………

「あああああああああ！！！！！！！！ あいWきあああ
！！！！！！」

私の体を焼いた。

警告音で、ISの電装類のいくつかが壊れていくのを知ったが、今の私にはその情報を意識する事ができなかった。

ISスーツのおかげで直に私の体を焼く事はなかったが……ワイヤーが引き戻られた時には、落下感とともに私の意識を奪い去っていた。

ここにISという名の兵器の最強神話に深々と『牙』をさされてしまった。

第18話 砕ける翼（後書き）

今回の話、所々で他作品のキャラを参上させました。

特に魔導師関連は、第十六話で名を二人明かしており、今後のスト

ーリー

に関わるのでお楽しみを！！！！

嘘予告？『迫る ユーアー・デステイニー』（前書き）

虚空「どもつ、更新がドンガメの虚空です!!」

一夏「久々だな、虚空さん」

虚空「ああ……だが、本編更新でないのが読者への裏切りだな

……ごめんなさい」

ラウラ「何があったのだ？」

虚空「リアルでの環境変化、さらには携帯を変えた

……とどめは新ネタ探しも兼ねた気になったものを

あらさがしと武装面の試作中」

箒「なるほど……ならこの格好はなんだ!!!」

箒が言う通りにそれぞれの恰好がいつもの制服姿ではなかった。

一夏がUCのバ ー ジ（私服Ver）

箒がMHのア ル ー の着ぐるみ

セシリアがTOAのティア

鈴は、アイドルのような恰好

シャルは、淡い黄色のプラグスーツのようなもの

ちなみにラウラは、ファンの皆様の予想通り

蒼いボディースーツである。

（わからない人は、中の人を参照に）

鈴「何でこんな恰好させてんのよ!!」

虚空「ハロウィン関連でだ、本当なら本文もそんな風にしたかったけど

感がいい人なら本文で仮装しているように見えるだろ？」

楯無「あらあら、で私たちの恰好は？」

翔「……」

翔と楯無は、ソレスタの制服。

虚空「翔たちの恰好は、楯無さんの候補さんからです
……では、幻想で描いた物語をお楽しみを」

嘘予告？』迫る ユーアー・デステイニー』

孤独のかけらの中、かすかに君がいたよ

どこかの地下

うずくまる機械仕掛けのマシン達を見る独りの人物がつぶやく。

「……………アイツは……………束は、ずっと待っていた。 自分の否を認めないまま、過去の傷を抱きながら」

そのつぶやきとは裏腹に瞳には、苦しみを垣間見る。

だけど君の横顔は、なんだか切なく笑う

海上

スクランブル発進した戦闘機群を落としながらISS学園に向かう無人ISS部隊。

そして、いつの間にか君の姿は夢の中に消えてゆく

「……………束、お前の目的は」

「各ISS、警戒態勢のままスタンバイ」

遠い記憶になりかけたその瞬間、君とまた会った

「各部隊、教師ISS機の指示を受けて下さい」

山田先生の指示の下、出撃した学園ISS機部隊が、無人機迎撃に向

かう。

IS学園

でも、今の私はもう二度と隣にならんじゃいけない

「一夏、これでお前の呪縛は……………」

たった1機、先の戦闘で行方不明となっていた箒が、紅椿が進化したものと思われるISを纏いIS学園を攻撃する。

進化した紅椿の背中から放たれた光が拡散し、辺りを破壊していく。学園の校舎、食堂、アリーナ、そして宿舍が、一夏の部屋が光の熱と爆発で破壊されていく。

何かを無くす事でその人物が救われるかのよう……………

そんなところまで来てしまったんだよ

『し、篠ノ乃さんが！？』

「何！？」

「箒さん！？」

所々で火災が発生するIS学園。

こんなにも冷たくて、優しさも思い出せない中

燃えゆくIS学園を眼下に一夏は、箒と対峙する。

「何でこんな事を……俺達の居場所を!!」

「……私は、姉さんに……取り返しのつかない過ちを犯させた。

……幼かった私の言葉で」

私の暗闇にある心は、あの頃に戻ろうと言霊を口にするよ

唾競り合いに負け、校舎に叩きつけられたら一夏は、追い打ちをかけ、振り下ろされる箒の一撃を防ぐ。

それを私は、胸に閉じ込めて戦い続けるよ、ある誓いのために

《下僕よ、これ以上、受けに回れば終わりよぞ!!!!

「わかつてる、わかつている、ディア!!」

《ならなぜ、攻めに転じない!!

《そつだよ、一夏!!

白式の中にいる、娘達が一夏を叱責し、一夏に攻めさせようとする。

「止める、箒……こんな事を続けてたらお前を!!」

「初めから覚悟はある」

「何でだよ……何で俺とお前が戦わなきゃいけないんだよ!!」

両腕に力を掛け、箒を弾き返すが、刀から光刃が、背中 of 砲門から大出力の砲撃が一夏に向かい放たれる。

だけれども……

「まずっ！！」

「一夏君！！」

「一夏！！」

それらの攻撃は、駆けつけた仲間達によって防がれた。

「……私は、姉さんを狂わせた。その狂いを作ったのは、私だ。……そして、愛しているお前も苦しみの中に引きずり込んだ……だからもう私にはこうするしかないんだ！！！！！」

箒の叫びに呼応するかのように新たに上空から無人機達が現れる。

私は、あり得ないと感じながらあなただけを……

応戦する仲間達。

「どうして」

「彼女は、囚われているんだ。自分の中に作ってしまった呪縛に」
「その呪縛は、知らぬ間に大きくなっちまったんだよ……痛みの中で」

「そんなんで、一夏を……箒！！」

「思い出せ、君が……君であるために悩んだことを！！」

叫び、強く前へと出て、翔は、箒とぶつかり合う。

戦闘の光が煌めく中、一夏は、よろよろと立ち上がった。

「俺は、箒を……助けてい」

想って、助け出せてくれる事を

「……『俺』が呪縛から断ち切ってやんなきゃなんないんだ……！！
だから……白式、『リインフォース』……！！」

《我は、主と共に……》

祈っているよ

「俺を……俺に助けさせてくれ、箒を……！！」

一夏の叫びと共に白式が光に包まれ、新たな姿を現す。

罪人と自らを称する自身が恋いこがれた少女を救うために一夏は、
飛ぶ、すべてをかけて……

To Be Continued……?

嘘予告？』迫る ユーアー・デステイニー』（後書き）

一夏「ちよつとまって！……！」

箒「私と一夏を戦わせる気か！……！」

虚空「やだな、嘘つこ予告だつて……あれを元にした」

シャル「だよね」

虚空「でも、かなり先のネタとして織り込んでる部分もあるから注意してね」

一同「……えっ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378o/>

IS インフィニット・ストラトス 輝きの翼 ~科学と魔術が交差する刻~

2011年11月15日23時12分発行